

大宰府政庁周辺官衙跡XII

— 藏司地区 平地部編 1 —

2020

九州歴史資料館



藏司地区平地部全景（南西から）



(1) 第54次調査区全景（東から）



(2) 第60次調査区築地SA1410（東から）



(1) 第54次調査区築地SA1410瓦出土状況（北から）



(2) 掘立柱建物SB1560A柱根（東から）



(1) 第60次調査区唐三彩陶枕出土状況（北から）



(2) 藏司地区平地部出土木簡

序

福岡県教育委員会では、大宰府史跡の発掘調査について昭和43年の第1次調査から現在まで、計画的に実施してまいりました。平成30年度には発掘調査開始から50年の節目を迎え、合計250次にも及ぶ調査によって、大宰府史跡の様相が少しずつ明らかになってきました。

九州歴史資料館では、平成14年3月に大宰府政庁跡の正式報告書を刊行して以来、これまでの発掘調査成果の正式報告を順次進めています。平成21年度からは、大宰府政府の周囲に広がる周辺官衙域の発掘調査成果を整理し、報告書としてまとめる作業を進めてきました。本書ではその一環として、昭和45年から数次にわたって発掘調査を実施し、大宰府史跡で初めて木簡が出土したことで学術的にも知られた蔵司地区平地部の正式報告を行います。

本館では平成21年度以降、蔵司地区丘陵部の発掘調査を計画的に実施しています。計画調査の成果が、本書に掲載した蔵司地区の構造把握に、ひいては大宰府史跡の解明に大きく寄与することを願ってやみません。

大宰府史跡の調査研究に関しては、大宰府史跡調査研究指導委員会をはじめ、文化庁・地元の教育委員会や関係各位から、多大の御指導と御協力をいただいております。ここに記して、深く感謝申し上げます。

令和2年3月31日

九州歴史資料館
館長 杉光 誠

例　　言

- 1 本書は、昭和45年度（1970）から福岡県が国庫補助を受け、福岡県教育委員会及び九州歴史資料館が発掘調査を実施した、大宰府政庁周辺官衙跡・蔵司地区平地部の正式報告書であり、大宰府政庁周辺官衙跡発掘調査報告書の第12集にあたる。
- 2 本書には、大宰府政庁周辺官衙跡の解明及び整備にかかる資料を得ることを目的として発掘調査を実施した、大宰府史跡第4次・54次・60次・65-1次・65-2次調査の成果を掲載した。
- 3 発掘調査は、大宰府史跡調査研究指導委員会の指導のもとで計画的に実施した。検出遺構及び出土遺物については、各指導委員の指導・助言を得た。
- 4 本書掲載の写真は、当館元参事石丸洋、及び各調査・報告担当者が撮影した。
- 5 金属製品・木製品の保存処理作業は、当館元参事横田義章、及び加藤和哉・小林啓が行った。
- 6 出土遺物の整理・復元・図化・浄書は、調査・報告担当者の他、中田千枝子・桑野暢子・松島加代子・深町幸子・江上佳子が行った。
- 7 出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。
- 8 目次の英訳は、佐々木蘭貞に依頼した。
- 9 本書の執筆分担は以下のとおりである。

第Ⅰ章	吉田 東明
第Ⅱ章	吉田 東明
第Ⅲ章 (1) (2) (3)	小田 和利
(4) (7)	大庭 孝夫
(5) (6)	岡寺 良
第Ⅳ章 (1)	岡寺 良
(2)	小田 和利 吉田 東明
(3) (4)	大庭 孝夫
(5) (6)	吉村 靖徳
(7) - 1)	酒井 芳司
(7) - 2) 3) 4)	小田 和利
(8) - 1) 2)	小田 和利
(8) - 3) 5)	大庭 孝夫
(8) - 4)	吉田 東明

- 10 編集は吉田が行った。

目 次

	頁
第Ⅰ章 緒 言.....	1
(1) 特別史跡大宰府跡	1
(2) 大宰府政府周辺官衙跡	3
(3) 調査の経過	4
(4) 調査組織	8
第Ⅱ章 調査の概要.....	11
(1) 調査の概要	11
(2) 基本層序	15
第Ⅲ章 検出遺構.....	21
(1) 建物	21
(2) 築地	26
(3) 檻	36
(4) 溝	36
(5) 井戸	47
(6) 土坑	49
(7) その他の遺構	58
第Ⅳ章 出土遺物.....	67
(1) 瓦塼類	67
(2) 土器・陶磁器類	119
(3) 木製品	203
(4) 金属製品	211
(5) 土製品	214
(6) 石器・石製品	216
(7) 文字関連資料	218
(8) 生産関連遺物	239
英文目次.....	261

Tab. 目次

	頁
Tab.1 蔵司地区平地部調査次数一覧	3
Tab.2 大宰府史跡調査研究指導委員会委員一覧	9
Tab.3 軒丸瓦出土点数一覧	67
Tab.4 出土軒丸瓦分類一覧	68 ~ 71
Tab.5 軒平瓦出土点数一覧	79
Tab.6 出土軒平瓦分類一覧	80 ~ 83
Tab.7 文字瓦出土点数一覧	98
Tab.8 丸瓦計測一覧	106
Tab.9 平瓦計測一覧	111

Fig. 目次

	頁
Fig.1 大宰府史跡指定地域図（1/100,000）	2
Fig.2 大宰府政府周辺官衙跡調査地（1/6,000）	3
Fig.3 大宰府政府周辺小字図（1/7,500）	4
Fig.4 大宰府政府跡及び周辺官衙跡検出遺構配置図（1/3,000）	折込
Fig.5 第4次調査区（1/800）	11
Fig.6 大宰府政府跡及び周辺官衙跡地区割図（1/7,500）	11
Fig.7 藏司地区平地部調査地域図（1/1,000）	12
Fig.8 第54次調査区（1/600）	13
Fig.9 第60次調査区（1/600）	13
Fig.10 第65-1次調査区（1/600）	14
Fig.11 第65-2次調査区（1/600）	14
Fig.12 藏司地区平地部基本土層図作成箇所（1/1,500）	15
Fig.13 調査区基本土層図①（1/60）	16
Fig.14 調査区基本土層図②（1/60）	17
Fig.15 調査区基本土層図③（1/60）	18
Fig.16 調査区基本土層図④（1/60）	19
Fig.17 碇石建物SB1500 実測図（1/80）	22
Fig.18 掘立柱建物SB1560A、礎石建物SB1560B・4690 実測図（1/60）	折込
Fig.19 碇石建物SB1565A・B、柵SA1580 実測図（1/80）	折込
Fig.20 掘立柱建物SB1570 実測図（1/80）	24
Fig.21 掘立柱建物SB1575A・B 実測図（1/80）	25
Fig.22 築地SA100 実測図（1/100）	27
Fig.23 築地SA1400 土層図（1/60）	28
Fig.24 暗渠SX1385・1390 実測図（1/60）	29
Fig.25 築地SA1410A・B 土層図（1/60）	30
Fig.26 築地SA1410 瓦出土状況実測図（1/60）	31
Fig.27 築地SA1410、階段SX1520 実測図（1/60）	32
Fig.28 築地SA1410、柵SA1553・1519、柱列SA1514 実測図（1/100）	折込
Fig.29 築地SA1400、暗渠SX1515 実測図（1/60）	34
Fig.30 溝SD098A・B 実測図（1/60）	37
Fig.31 溝SD099 実測図（1/60）	38
Fig.32 溝SD1395A・B、SD1401 土層図（1/60）	39
Fig.33 溝SD1402、敷粗朶SX1406 実測図（1/40）	40
Fig.34 溝SD1403 実測図（1/100）	41
Fig.35 溝SD1502・1504 実測図（1/60）	42
Fig.36 溝・流路SD1503・1505・1507～1509・1513・1514・1552 土層図（1/60）	43

Fig.37	溝 SD1555A・B 土層図 (1/60)	44
Fig.38	溝 SD1598・1599・1601・1602・1606・1607, 落ち込み SX1561, 炭・焼土層 SX1556 実測図 (1/80)	45
Fig.39	井戸実測図 (1/20・1/40)	48
Fig.40	土坑実測図① (1/40)	50
Fig.41	土坑実測図② (1/40・1/60)	51
Fig.42	土坑実測図③ (1/40)	52
Fig.43	土坑実測図④ (1/40)	53
Fig.44	土坑実測図⑤ (1/40・1/60)	54
Fig.45	土坑実測図⑥ (1/60)	55
Fig.46	土坑実測図⑦ (1/40)	56
Fig.47	木樁 SX1404 実測図 (1/40)	58
Fig.48	木樁 SX1404 土層図 (1/80)	59
Fig.49	石組遺構 SX1397 実測図 (1/80)	60
Fig.50	石組遺構 SX1409 実測図 (1/100)	61
Fig.51	護岸状遺構 SX1501 実測図 (1/40)	62
Fig.52	敷粗朶 SX1406 実測図 (1/40)	63
Fig.53	落ち込み SX1394・1396 実測図 (1/80)	64
Fig.54	落ち込み SX1572, ピット SX1579 実測図 (1/120)	65
Fig.55	出土軒丸瓦 拓影① (1/4)	73
Fig.56	出土軒丸瓦 拓影② (1/4)	75
Fig.57	出土軒丸瓦 拓影③ (1/4)	77
Fig.58	出土軒平瓦 拓影① (1/4)	85
Fig.59	出土軒平瓦 拓影・実測図② (1/4)	87
Fig.60	鬼瓦 実測図① (1/4)	90
Fig.61	鬼瓦 実測図② (1/4)	91
Fig.62	無文博・熨斗瓦 拓影・実測図 (1/4)	92
Fig.63	面戸瓦 拓影・実測図① (1/4)	94
Fig.64	面戸瓦 拓影・実測図② (1/4)	95
Fig.65	面戸瓦 拓影・実測図③ (1/4)	96
Fig.66	出土文字瓦 型式拓影① (1/4)	99
Fig.67	出土文字瓦 型式拓影② (1/4)	100
Fig.68	出土文字瓦 型式拓影③ (1/4)・線刻文字瓦 拓影 (1/2)	103
Fig.69	新型式等文字瓦 拓影 (1/2)	104
Fig.70	丸瓦 拓影・実測図① (1/6)	107
Fig.71	丸瓦 拓影・実測図② (1/6)	108
Fig.72	丸瓦 拓影・実測図③ (1/6)	109
Fig.73	平瓦 拓影・実測図① (1/6)	113

Fig.74	平瓦 拓影・実測図② (1/6)	114
Fig.75	平瓦 拓影・実測図③ (1/6)	115
Fig.76	平瓦 拓影・実測図④ (1/6)	116
Fig.77	平瓦 拓影・実測図⑤ (1/6)	117
Fig.78	平瓦 拓影・実測図⑥ (1/6)	118
Fig.79	建物出土土器実測図① (1/3)	120
Fig.80	建物出土土器実測図② (1/3)	121
Fig.81	築地出土土器実測図 (1/3)	123
Fig.82	区画溝出土土器実測図 (1/3)	124
Fig.83	溝出土土器実測図① (1/3)	125
Fig.84	溝出土土器実測図② (1/3)	127
Fig.85	溝出土土器実測図③ (1/3)	128
Fig.86	溝出土土器実測図④ (1/3)	129
Fig.87	溝出土土器実測図⑤ (1/3)	131
Fig.88	溝出土土器実測図⑥ (1/4)	132
Fig.89	溝出土土器実測図⑦ (1/3)	133
Fig.90	溝出土土器実測図⑧ (1/3)	134
Fig.91	溝出土土器実測図⑨ (1/3)	135
Fig.92	井戸出土土器実測図① (1/3)	138
Fig.93	井戸出土土器実測図② (1/3)	139
Fig.94	井戸出土土器実測図③ (1/3)	140
Fig.95	土坑出土土器実測図① (1/3)	141
Fig.96	土坑出土土器実測図② (1/3)	142
Fig.97	土坑出土土器実測図③ (1/3)	143
Fig.98	護岸状遺構出土土器実測図 (1/3)	146
Fig.99	落ち込み出土土器実測図 (1/3)	147
Fig.100	流路出土土器実測図① (1/3)	149
Fig.101	流路出土土器実測図② (1/3)	150
Fig.102	瓦溜出土土器実測図① (1/3)	152
Fig.103	瓦溜出土土器実測図② (1/3)	153
Fig.104	瓦溜出土土器実測図③ (1/3)	155
Fig.105	瓦溜出土土器実測図④ (1/3)	156
Fig.106	瓦溜出土土器実測図⑤ (1/3)	158
Fig.107	炭・焼土層出土土器実測図 (1/3)	159
Fig.108	ピット出土土器実測図 (1/3)	160
Fig.109	包含層等出土土器実測図① (1/6, 1/3)	162
Fig.110	包含層等出土土器実測図② (1/3)	163
Fig.111	包含層等出土土器実測図③ (1/3)	165

Fig.112	包含層等出土土器実測図④ (1/3)	166
Fig.113	包含層等出土土器実測図⑤ (1/3)	168
Fig.114	包含層等出土土器実測図⑥ (1/3)	169
Fig.115	包含層等出土土器実測図⑦ (1/3)	171
Fig.116	包含層等出土土器実測図⑧ (1/3)	172
Fig.117	包含層等出土土器実測図⑨ (1/3)	174
Fig.118	包含層等出土土器実測図⑩ (1/3)	175
Fig.119	包含層等出土土器実測図⑪ (1/3)	177
Fig.120	包含層等出土土器実測図⑫ (1/3)	178
Fig.121	包含層等出土土器実測図⑬ (1/3)	180
Fig.122	包含層等出土土器実測図⑭ (1/3)	181
Fig.123	包含層等出土土器実測図⑮ (1/3)	183
Fig.124	包含層等出土土器実測図⑯ (1/3)	184
Fig.125	包含層等出土土器実測図⑰ (1/3)	186
Fig.126	包含層等出土土器実測図⑱ (1/3)	187
Fig.127	包含層等出土土器実測図⑲ (1/3)	189
Fig.128	包含層等出土土器実測図⑳ (1/3)	190
Fig.129	包含層等出土土器実測図㉑ (1/3)	192
Fig.130	包含層等出土土器実測図㉒ (1/3)	193
Fig.131	包含層等出土土器実測図㉓ (1/3・1/4)	195
Fig.132	包含層等出土土器実測図㉔ (1/3・1/4)	196
Fig.133	包含層等出土土器実測図㉕ (1/3)	198
Fig.134	包含層等出土土器実測図㉖ (1/3)	200
Fig.135	包含層等出土土器実測図㉗ (1/3)	202
Fig.136	木製品実測図① (容器・食膳具) (1/3)	204
Fig.137	木製品実測図② (農工具・奢侈品) (1/3)	206
Fig.138	木製品実測図③ (農工具・履物・祭祀具・用途不明品・その他木製品) (1/3・1/6・1/15)	208
Fig.139	木製品実測図④ (木柱) (1/10)	209
Fig.140	金属製品実測図① (1/2)	212
Fig.141	金属製品実測図② (1/2)	213
Fig.142	土製品実測図 (1/2・1/3)	215
Fig.143	石製品実測図 (1/2・2/3)	217
Fig.144	木筒実測図 (1/2)	219
Fig.145	墨書き土器実測図① (1/3)	225
Fig.146	墨書き土器実測図② (1/3)	226
Fig.147	刻書き・籠書き土器実測図 (1/3)	227
Fig.148	定形硯実測図 (1/3)	229

Fig.149	転用硯実測図① (1/3)	231
Fig.150	転用硯実測図② (1/3)	232
Fig.151	転用硯実測図③ (1/3)	233
Fig.152	転用硯実測図④ (1/3)	234
Fig.153	転用硯実測図⑤ (1/3)	235
Fig.154	転用硯実測図⑥ (1/3)	236
Fig.155	転用硯実測図⑦ (1/3)	237
Fig.156	製塙土器分類図 (1/6)	239
Fig.157	製塙土器実測図 (1/3)	240
Fig.158	漆付着土器分類図 (1/6)	241
Fig.159	漆付着土器実測図① (1/3)	242
Fig.160	漆付着土器実測図② (1/3)	243
Fig.161	漆付着土器実測図③ (1/3)	245
Fig.162	漆付着土器実測図④ (1/3・1/6)	246
Fig.163	鍛治・鋳造関連遺物実測図① (1/2・1/3)	248
Fig.164	鍛治・鋳造関連遺物実測図② (1/2・1/3)	249
Fig.165	鍛治・鋳造関連遺物実測図③ (1/2)	251
Fig.166	鍛治・鋳造関連遺物実測図④ (1/2)	253
Fig.167	鍛治・鋳造関連遺物実測図⑤ (1/2)	254
Fig.168	鍛治・鋳造関連遺物実測図⑥ (1/2)	257
Fig.169	白色物付着土器実測図 (1/3)	259
Fig.170	壁土状土製品実測図 (1/3)	260

付図目次

- 付図 1 蔵司地区平地部遺構配置図① (第4次調査区) (1/300)
 付図 2 蔵司地区平地部遺構配置図② (第54次、60次、65-1次、65-2次調査区) (1/300)

PL. 目次

- 巻頭 PL. 1 蔵司地区平地部全景 (南西から)
 巷頭 PL. 2 - (1) 第54次調査区全景 (東から)
 (2) 第60次調査区築地 SA1410 (東から)
 巷頭 PL. 3 - (1) 第54次調査区築地 SA1410 瓦出土状況 (北から)
 (2) 挖立柱建物 SB1560A 柱根 (東から)
 巷頭 PL. 4 - (1) 第60次調査区唐三彩陶枕出土状況 (北から)
 (2) 蔵司地区平地部出土木簡

凡 例

- 1 本書に掲載の遺構実測図は、国土調査法第II座標系をもとに基準点を設け作成している。
- 2 蔵司地区丘陵部の歴史的経緯、及び平成21年度以降に実施している蔵司地区丘陵部の調査方針については、九州歴史資料館『大宰府史跡発掘調査報告書VII 平成22・23年度』に詳しい。
- 3 本書掲載の図のうち、Fig.4については、太宰府市教育委員会発行の報告書（太宰府市教育委員会1989『大宰府条坊跡V』）の掲載図から転載し、改変利用した。掲載にあたっては、同市教育委員会の許可を得た。
- 4 遺構番号の頭に付した記号は、以下の遺構を示す。
SA：柵、SB：門・建物、SD：溝、SE：井戸、SH：広場、SI：竪穴住居（竪穴建物）、SK：土坑、SX：その他の遺構
- 5 掲載図面中、土器の断面を黒塗りにしたものは須恵器であることを示す。
- 6 土師器・陶磁器・瓦等の報告においては、以下の文献の型式分類・名称等に準じている。
 - ・土師器：九州歴史資料館1981『大宰府史跡 昭和55年度発掘調査概報』
 - ・黒色土器：田中 琢1967『古代・中世における手工業生産の発達』『日本の考古学』IV（4）巻内
 - ・古代瓦：
 - ①九州歴史資料館2000『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』を基本とし、それ以降、以下のような追加・修正を行っており、これらに準拠する。
 - ②九州歴史資料館2007『附1 大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』の追加資料について（『觀世音寺 - 遺物編2-J』）
 - 軒丸瓦：020Ab・207・287・293 型式の追加・208Ca 型式の修正
 - 軒平瓦：500・566・664・688Ba 型式の追加
 - 文字瓦：916 型式→916A・916B、919 型式→919A・919Bへの細分設定
915C・915F・922・924 型式の追加
 - ③九州歴史資料館2009『水城跡一下巻一』
 - 軒丸瓦：107 型式の追加
 - ④九州歴史資料館2011『大宰府政府周辺官衙跡II一日吉地区一』
 - 文字瓦：906G 型式の追加・新種（未読型式）1～3の暫定追加
 - ⑤九州歴史資料館2013『大宰府政府周辺官衙跡IV一不丁地区遺物編1-1』
 - 文字瓦：909 型式→909Aa・909Ab・909B、910 型式→910A・B、
918B 型式→918Ba・Bb の細分設定・915G 型式の追加、新種4の暫定追加
 - ⑥九州歴史資料館2014『附「大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧」の追加修正』（『大宰府史跡発掘調査報告書VII 平成24・25年度』）
 - 軒平瓦：560G・560H 型式の追加、560Ba'→560G' 型式への修正追加
 - ⑦下原幸裕2017『鴻臚館I式軒瓦の再検討』（『九州歴史資料館研究論集』42）
 - 軒丸瓦：223a・223b 型式→223Aa・223Ab・223B 型式の細分設定
 - 軒平瓦：635C 型式の635B 型式への編入（635C 型式の削除）
- 7 本書に関連する既刊報告書は以下のとおりである。
 - 福岡県教育委員会 1970『大宰府史跡 昭和44年度発掘調査の概要』
 - 福岡県教育委員会 1970『大宰府史跡 第4次発掘調査概要』
 - 福岡県教育委員会 1971『大宰府史跡 昭和45年度発掘調査の概要』
 - 福岡県文化財調査報告書第47集
 - 九州歴史資料館 1979『九州歴史資料館年報 昭和53年度』
 - 九州歴史資料館 1979『大宰府史跡 昭和53年度発掘調査概報』
 - 九州歴史資料館 1980『九州歴史資料館年報 昭和54年度』
 - 九州歴史資料館 1980『大宰府史跡 昭和54年度発掘調査概報』
 - 九州歴史資料館 2012『大宰府史跡発掘調査報告書VII 平成22・23年度』

第一章 緒 言

(1) 特別史跡大宰府跡

万葉集卷三には、万葉歌人柿本人麻呂により「大君の遠乃朝廷とあり通ふ 島門を見れば神代し思ほゆ」と詠まれた大宰府は、古代律令国家において西海道諸国島に対する内政監視の府として君臨し、さらに海辺防備及び中国大陆・朝鮮半島との外交・交易の拠点としても重要な役割を担った。また、『続日本紀』神護景雲三年（769）十月甲辰条には、「此府人物殷繁、天下之一都会也」と自称した如く碁盤目の街割りが施行され、平城京・平安京に次ぐ規模を誇る最大の地方官衙であった。しかし、大宰府には平城京・平安京にはない特質として、水城大堤・小水城・大野城・基跡城等の土壘及び古代山城からなる堅固な防御施設によって護られた城郭都市という性格をもっていた。その大宰府の中核となる遺跡が、太宰府市域の北側に位置し、都府楼跡とも称される大宰府政府跡（以下、政府跡）である。政府正殿跡の基壇上には、三重の円形柱座を有する精美な礎石が整然と並んでおり、かつての榮華を今に伝えている。

「天下の
一大都會」

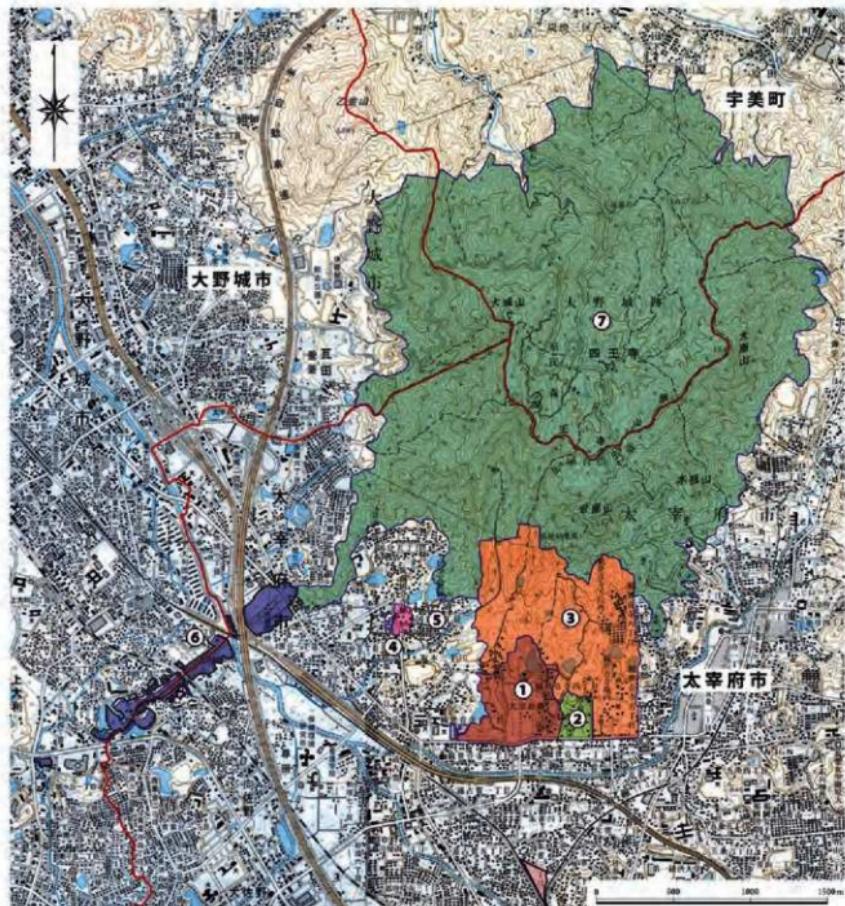
現在、政府跡のすぐ南側を県道筑紫野太宰府線が東西方向に走るが、県道以北は国指定特別史跡大宰府跡として面積約 29.9ha の土地が保存され、政府跡は史跡公園として整備・活用されている。公園の周囲には梅・桜の木が植樹されており、開花の時期ともなると大勢の花見客が訪れ、桜の名所として賑わう。また政府跡の背後には、天智天皇 4 年（665）に築城された朝鮮式山城の一つである大野城跡を擁する四王寺山が望め、四王寺山より派生した東側の月山及び西側の歲司の丘陵があたかも政府跡を抱くかのごとく南へと延びる。このように、政府跡周辺には樹木が生い茂り、緑豊かな風光明媚の様相を呈する。一方、県道以南に目を転じると、あたり一面には個人住宅、アパート等の住宅地が広がり、県道によって史跡指定地と住宅街とのエリアが画されている。

政府跡の発掘調査は、昭和 43 年 10 月 19 日、政府中門跡の調査を嚆矢とする。調査の結果、大宰府史跡
の発掘Ⅰ期（7世紀後半）・Ⅱ期（8世紀前半～10世紀中頃）・Ⅲ期（10世紀後半～11世紀後半）にわたる遺構が確認され、Ⅲ期の建物は天慶 4 年（941）、藤原純友の乱で焼失したⅡ期の建物を 10 世紀後半に再建したものであることなど、重要な事実が明らかとなった。

昭和 47 年に九州歴史資料館が発足して以降は、当館が大宰府史跡の発掘調査を担当し、出土品の展示・保管を行うとともに、九歴講座・九歴論集、現地説明会等により調査研究成果を公開し、当館が小都市に移転した後も大宰府史跡に関する調査研究、情報発信を行っている。

また、政府跡前面の県道以南から御笠川にかけての地区は、今までこそ大宰府に関連する官衙が広がることが判明したが、土地区画整理事業が始まつた昭和 54 年頃はそのようなことは誰も予想しなかった。大宰府史跡 17 次調査で礎石建物が発見されたのを初めとして、32 次調査では掘立柱建物 2 棟が発見され、その後も官衙と呼ぶに相応しい大規模な建物群や柵、境界溝などが続々と確認された。特に南北溝 SD2340 からは天平 6 年（734）・同 8 年（736）の紀年銘を有する木簡、紫草に関する木簡等が出土し、鎌山猛が想定した県道を南限とする方 2 町の府域が県道以南にも広がっていることが明らかとなった。現在では、政府跡前面域の建物群は、東から日吉地区官衙、政府前面広場を挟んで不丁地区官衙、大楠地区官衙、広丸地区官衙と小字の名称で区分しており、それに則って官衙域の正式報告書を刊行している。

大宰府政府
周辺官衙跡



凡 例	① 特別史跡 大宰府跡	④ 史跡 筑前国分寺跡
	② 史跡 大宰府学校院跡	⑤ 史跡 国分瓦窯跡
	③ 史跡 観世音寺境内 および子院跡	⑥ 特別史跡 水城跡
		⑦ 特別史跡 大野城跡

市町界 : Red line

Fig.1 大宰府史跡指定地域図 (1/100,000)

(2) 大宰府政府周辺官衙跡

大宰府政府周辺官衙跡（以下、「政府周辺官衙跡」）とは、大宰府政府を中心とし、その周囲に広がる官衙跡の総称のことと指す。その範囲は、政府域及び推定客館跡を除いた特別史跡「大宰府跡」をはじめ、政府前面を東西に走る県道と御笠川に挟まれた「政府前面地区」、さらには現在随時追加指定を進めている来木地区など未指定地区も含んでいる。現在、これらの官衙跡については調査成果に基づいて地区分けを行い、周辺の小字名等（Fig.3）を用いて、政府前面広場地区、不丁地区、日吉地区、大楠地区、広丸地区、藏司地区、来木地区、政府後背地区、月山・月山東地区の計9地区に分割している（Fig.4）。

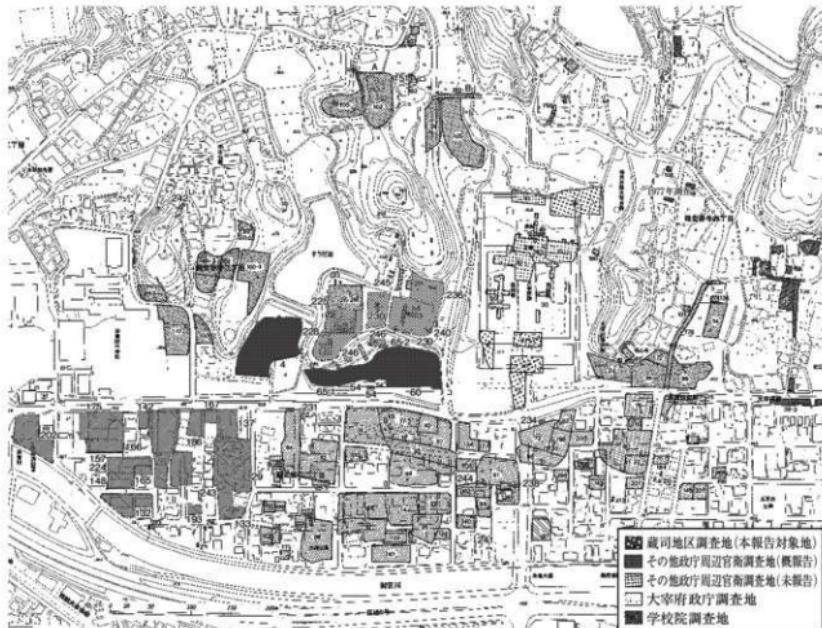
当館では平成21年度以降、これまでに政府前面広場地区、日吉地区、不丁地区、大楠地区、広丸地区について正式報告を行ってきた。本報告書では藏司地区平地部の正式報告を行う。これらは大宰府周辺官衙跡の正式報告書の12冊目にあたる。今回報告するのは、大宰府史跡第4次、54次、60次、65-1次、65-2次の計5箇所である。

大宰府政府
周辺官衙跡

今回の報告
次 数

Tab.1 藏司地区平地部調査次数一覧

No.	次数	地区略号	面積(m ²)	調査期間	地番	報告書
1	4	6ATL	600	700220 ~ 700530	筑紫郡太宰府町(現、太宰府市) 大字親世音寺字藏司 443 ~ 445番地	概 S. 45
2	54	6AYT-A	1135	771129 ~ 780513	筑紫郡太宰府町(現、太宰府市) 大字親世音寺字藏司 489 ~ 490番地	概 S. 53
3	60	6AYT-A	2000	781102 ~ 790726	筑紫郡太宰府町(現、太宰府市) 大字親世音寺字藏司 489番地	概 S. 54
4	65-1	6AYT-A	680	790605 ~ 790927	筑紫郡太宰府町(現、太宰府市) 大字親世音寺字藏司 489番地	概 S. 54
5	65-2	6ATT-A	920	790926 ~ 791222	筑紫郡太宰府町(現、太宰府市) 大字親世音寺字藏司 489番地	概 S. 54



(3) 調査の経過

今回報告

今回、藏司地区平地部として報告する範囲は、大宰府政府の西側に広がる小字「藏司」の一部であり、およそ東西160m、南北220mの範囲にわたる。この範囲の中には「藏司丘陵」と呼ばれる南北に延びる丘陵部と、その南側に広がる平地部、丘陵西側にある「すうだ池（西浦池）」等が含まれる。

小字名「藏司」の範囲には南北に延びる丘陵があり、丘陵上に多数の礎石が存在することは古くから知られていた。文政3年（1820）に描かれた「文政三庚辰年三月觀世音寺村之内旧跡礎石改之図」には、藏司の丘陵上に133個の礎石が記されている。

藏司丘陵の
礫石

大正3年（1914）には中山平次郎が「大宰府藏司の遺物」（『考古学雑誌』5-4）で藏司丘陵の踏査と採取遺物を報告され、学術的見地から光が当てられた。その後大正10年3月には政厅跡とともに「大宰府跡」として国の史蹟に指定され、保護が図られることになった。昭和8年11月、別荘建築工事に伴い発見された、3間×9間の礎石建物SB5000の存在が著名である（註1）。

大宰府史跡の発掘調査は、福岡県教育委員会が国庫補助を受けて昭和43年11月28日か

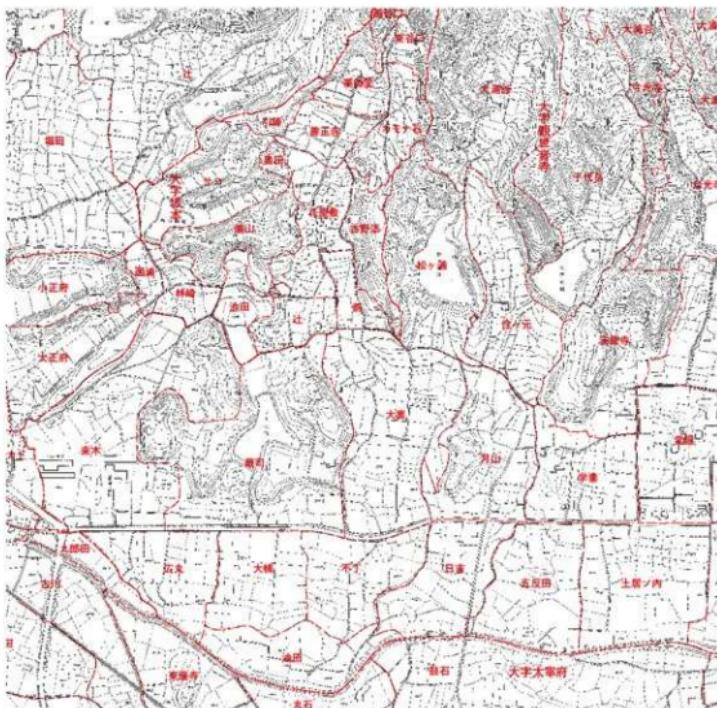


Fig. 3 木曾府政庄園認小字図 (1/7,500)



Fig.4 大宰府政府及び周辺官衙跡検出遺構配置図 (1/3,000)

ら継続的に行っており、第4次調査はその3年目に実施された。この年は、同年9月21日に多年の懸案であった拡張地区的史跡指定の告示が行われた、一つの画期というべき年である。

第4次調査

第4次調査区は、政庁中軸線から西約300mの地点で、「蔵司址」と古くから認知されていた蔵司丘陵部と、西方の来木の二つの舌状台地に挟まれた地域、約4,500m²が対象とされた。実際に調査が行われたのは約600m²である。大宰府史跡の分類記号に基づく遺跡略号は「6AYL」で、調査時には「蔵司西地区」と呼称されていた。

調査地域の東半部は、調査前は水田として利用されていた低湿地であり、その北側には灌漑用の西浦池がある。本来の自然地形は北方の坂本集落から台地の間をぬって南下する流路があったと想定される。これに対して、調査地域の西半部は来木の台地に続く段状な水田で、東半部の水田との比高差2mを測り、比較的高燥の地である。

昭和45年(1970)1月、この地域を宅地造成する申請が出された。当時ここは史跡指定地ではなかったが、特別史跡指定地に隣接する土地であり、遺構の存在が十分に考えられ、かつ自然景観を保護する観点からも保存することが望ましいところから、業者の協力を得て同年2月から発掘調査を行うことになった。

調査は東側の二つのトレンチのうち、まず南側のトレンチ(STr)から掘削が開始された。3月2日には南側のトレンチの掘削が完了し、3月4日から北側のトレンチ(NTr)掘削が開始された。北側トレンチでは調査開始から間もない3月7日朝、大宰府で初めてとなる木簡が出土した。3月10日以降は順次西側のトレンチ掘削へと調査の手が広げられた。

当初は南北方向に東トレンチ、西トレンチ(W1Tr)、西2トレンチ(W2Tr)と併行して3本のトレンチ掘削が行われたが、3月20日には東トレンチで黒色の高まりが確認され、3月24日以降、西トレンチを中心に東西へと拡張するトレンチ(E3Tr)が掘削され、西トレンチ北端の疊群の延長や、南端の高まりの延長の確認が試みられた。4月以降の調査の結果、この黒色の高まりは築地であることが確認され、その範囲と構造把握に主眼が置かれることになった。4月28日には築地の南北端の確認が行われた。築地南端は立ち上がりの部分できれいに剥離して検出されることや、築地の幅は13尺(3.9m)であることも判明した。

5月12日には北トレンチ、南トレンチを除いて写真撮影が行われ、5月13日には発掘調査区の全景写真撮影と、鏡山猛教授(大宰府発掘調査指導委員会副委員長)によるアドバルーン空中写真撮影が行われた。北トレンチは木簡出土地点を中心にその後も掘削が続けられ、5月16日には1点、18日に3点、26日に1点、27日に2点の木簡が出土した。

5月後半は雨天が続いたため掘削作業を断念する日が続き、また北トレンチでは湧水に悩まされたようである。5月29日に木簡出土地点付近(北トレンチ西半部)の写真撮影、その後実測を実施し、5月30日に発掘調査を終了した。

第54次調査

第54次調査は、觀世音寺地区区画整理事業との関連で、蔵司の前面との遺構の関係を解明するため実施されることとなり、蔵司丘陵の前面約1,135m²の発掘調査が行われた。

調査地は南北方向に上下二つの大きな段が形成されていた。そのため調査の主点は上段に置かれることになった。下段については、昭和46年度に実施された第14次調査で検出された

大溝SD320が北方にどのように延びていくのか、適宜トレンチ調査が行われる事とされた。

11月25日から草刈りが開始され、表土掘削開始が11月29日である。12月3日から西半部の遺構検出作業が行われ、12月8日には水田床土である黄褐色土下層から石組暗渠や瓦溜りが検出された。これ以降、作業は黄褐色土の下層にある灰色土層の除去作業と、その下層の堆積状況や遺構確認作業が続けられた。

1月27日から南側の地形傾斜面の掘削作業が行われ、下層にある溝状遺構の検出作業が実施された。2月27日から調査区全体の清掃、3月1日に写真撮影が行われた。3月7日から実測、4月3日から北東部の整地層下層確認のための掘削作業が行われた。4月6日に南西端の瓦溜りの取り上げ作業、4月26日には西側の下層確認のためのトレンチ掘削作業、5月11日に実測作業完了し、5月13日に全ての作業を完了した。

第60次調査

第60次調査は、第54次調査からの継続調査として、第54次調査区の東側に接した地域、約2,000m²の発掘調査が行われた。この調査では、第54次調査で検出された東西方向の2条の築地が東側地域にどのように延びていくのかを主たる目的とし、あわせて蔵司前面地域に配されたであろう建物群の検出を目的として調査が開始された。

11月2日から表土掘削開始、12月1日には床土まで掘削が終了し、北東端から床土下層に堆積する灰色土層の掘削が行われた。12月中旬から金光寺跡の発掘調査のため一時中断したが、1月30日午後から作業が再開された。調査区西側の茶灰色土、灰色土の除去作業が進められたが南側は灰色土がかなり厚く堆積することが予想されたため、2月14日にはサブトレンチを掘削して堆積状況を確認し、さらに灰色土の除去作業が行われた。3月16日には調査区東側にて灰色土の下層に堆積する灰色砂質土層の掘削を行い、小溝の存在や炭層、土器・瓦類の集中箇所が確認された。

4月以降は調査区中央付近から遺構検出及び個々の遺構掘削作業が順次進められ、4月28日からは築地遺構確認のため調査区東南端部の拡張が行われた。5月18日から調査区の清掃を行い、5月24日に写真撮影を実施、6月5日から実測作業を進めた。7月以降は遺構や整地層の断ち割り、礎石掘り方の掘削作業を実施、7月7日には北西端の下層遺構確認作業にて暗灰色粘土層中から多量の瓦とともに唐三彩陶枕片が出土した。7月14日に北西端の下層遺構写真撮影を行い、7月26日に全ての作業を完了した。

第65-1次調査

第65次調査は調査地域が2箇所に分かれたため、第65-1次調査区、第65-2次調査区と区分して呼称された。

第65-1次調査区は第54次調査の西側に接した地域で、蔵司の台地が南へ張り出しているために前面地域の南北幅がもっとも狭くなる。この調査では、第54次調査で検出された築地SA1400の南側部分にあたるため、第60次調査で検出された築地SA1410が西側へどのように延びるか、その確認が主たる目的とされた。

表土及び床土の掘削は6月5日から開始された。床土を除去した段階で、中央の南端や西半部北端は花崗岩バイラン土の面が露出することが確認された。7月20日には調査区南側で黄褐色土からなる築地の積土や、築地の北側では多量の瓦が確認された。瓦の出土状態から、

築地上に葺かれた瓦がそのまま倒壊した状態を留めているものと思われた。

8月9日までは築地付近の瓦の検出が作業の中心だったが、8月10日以降は築地以外の遺構削除が進められた。8月28日に瓦堆積状態の写真撮影、8月29日以降は北側に延びる東西溝の掘削作業が進められた。9月4日には築地付近の瓦を取り上げ、築地に付隨する溝の検出作業が行われた。9月12・17日に写真撮影、18日から実測が開始され、実測終了後の22日から調査区東側にて下層の掘削作業が開始された。下層では主として炭層、黄灰色土層から遺物が出土することが確認された。9月27日に全ての作業が完了した。

第65-2次調査

第65-2次調査
調査の経過

第65-2次調査は第54・60次調査の北側に接した地域、約860m²が対象とされた。この調査に先立って実施された第54・60・65-1次調査では築地・礎石建物等が検出されたが、後世の削平が著しくわずかにその痕跡を残すのみであった。第65-2次調査地は既調査地より一段高くなってしまい、遺構の遺存状態も良好であろうと予測されたため、築地の内部施設の確認が主たる目的とされた。

調査開始後から表土・床土の掘削作業を行い、10月5日には礎石建物SB1565の一部が検出された。10月8日には調査区西側で多量の瓦の出土が確認されたが、下層遺構確認のため瓦層は順次除去された。10月16日にはSB1560が検出され、同日中に保土穴や鋳型も確認された。10月21日にはSB1570の柱穴配置やSE1573が確認された。10月31日にSE1558の掘削がほぼ完了、またこの日以降、SB1560の断ち割りも進められた。

11月2日以降は調査区東側に広く堆積する灰褐色土SX1572の除去作業が進められ、下層からSK1577やSK1578が検出された。11月19日には写真撮影のための清掃が行われ、11月21日に写真撮影が行われた。翌22日から実測作業が進められ、12月3日から実測が完了した箇所のセクションベルト除去等の調査が進められた。12月4日にはSX1561付近の下層掘削が行われ、顕著な遺構は見られないことが確認された。

12月7日以降、SB1560の掘立柱建物柱穴の精査及び詳細な検討が行われ、径40cmの柱根や抜き穴らしき痕跡が確認された。12月12日にSB1560の柱穴断面写真撮影を実施、併行してSE1558・1559の断ち割りと写真撮影、実測が実施された。12月15日にはSB1570の写真撮影と保土穴の切り取り作業、17日にはSB1560の2箇所で遺存していた柱根の取り上げ作業を実施し、この二つの柱穴についてはさらに断面精査と実測作業を進めた。12月22日には全ての作業が完了した。

なお、この第65-2次調査をもって昭和45年度から始まった蔵司地区平地部の一連の調査を完了した。

(3) 調査組織

九州歴史資料館は、大宰府史跡の計画調査・研究、住宅改築等に先立つ緊急確認調査、歴史資料の収集・保管・調査研究、展示及び整備等を所管する機関として、昭和47年4月に筑紫郡太宰府町（現太宰府市）大字石坂に設置された施設である。設置以後、大宰府史跡の発掘調査については同館調査課が主にその任にあたってきた。

平成20年度の組織改編により、調査課のほか学芸一・二課が学芸調査室として統合され、その下に学芸班・調査班が置かれた。これより以後、大宰府史跡の発掘調査は学芸調査室調査班が担うこととなった。

平成22年7月には、それまで太宰府の地にあった九州歴史資料館が小郡に移転し、同年11月21日に新施設が開館した。直後の平成23年度春の組織改編により、九州歴史資料館は総務室・学芸調査室・文化財調査室の3室構成となった。平成20年度より大宰府史跡の発掘調査を担当してきた学芸調査室調査班は、学芸調査室調査研究班として再編され、引き続き大宰府史跡の発掘調査を担うこととなった。

平成27年度春の組織改編では、大宰府史跡の発掘調査を担う調査研究班が県内の各種開発に先立つ緊急発掘調査を担当してきた文化財調査室に異動し、文化財調査室調査研究班として引き続き大宰府史跡の発掘調査を担うこととなり、現在に至っている。

大宰府史跡の発掘調査及び報告書刊行にあたっては、九州歴史資料館の発足時より、諸問機関として「大宰府史跡発掘調査指導委員会」を組織し、5カ年を一区切りとする調査計画、年度ごとの事業計画を策定して委員会に諮りつつ事業を進めてきた。昭和59年にはそれまで10名の委員で構成されてきた諸問委員会を15名体制とし、名称を「大宰府史跡調査研究指導委員会」と改称した。現在、歴史学4名、考古学5名、造園学3名、都市工学1名、建築史学1名、土木工学1名の計15名の委員により組織された上記委員会による指導助言を受け、大宰府史跡の発掘調査・報告書作成等の事業を行っている。

大宰府史跡の発掘調査については、九州歴史資料館発足前の昭和43年に始まった第1次調査から令和元年度までの51年間の間に、計246次の調査を蓄積してきた。その間、発掘調査を担当した職員も多く、すでに退職し、あるいは鬼籍に入った職員もいる。

平成11年度まで、大宰府史跡の発掘調査成果については、地区ごとにある程度成果がまとまるまで正報告の刊行を延期し、年度ごとに調査成果を概要報告という形で公開してきた。しかし調査が始まると長期がたつと、調査を担当する職員の出入りが多くなり、過去に調査に携わった職員の多くは職務を外れ、現在では発掘調査に全く携わっていない職員が正式報告書の作成を行うという体制が常態化してきた。本冊もこのような環境の中で作成しているため、もちろん当時の記録ができる限り読み解いて遺漏のないように努めているが、報告内容については記録・記述の不備や不十分、あるいは成果に対する誤解なども存在する可能性がある。

平成12年度からは、原則として調査の行われた翌々年度までに、従来のような概要報告ではなく、調査の成果を逐次的に網羅した正報告を刊行することとしている。

Tab.2 大宰府史跡調査研究指導委員会委員一覧

(在任年順、◎は委員長経験者を表す)

氏名	分野	職(在任時)	在任期間
◎竹内 理三	国 史	早稲田大学教授	S43～S58
鏡山 猛	考 古	九州大学教授	S43～S46
浅野 清	建 築	大坂市立大学教授	S43～S62
井上 辰雄	国 史	熊本大学教授	S43～S58
井上 光貞	国 史	東京大学教授	S43～S56
太田 静六	建 築	九州大学教授	S43～S58
◎岡崎 敬	考 古	九州大学助教授	S43～H2
岸 俊男	国 史	京都大学教授	S43～S61
坂本 太郎	国 史	國學院大學教授	S43～S55
坪井 清足	考 古	奈良国立文化財研究所 平城宮跡発掘調査部長	S43～H7
◎小田富士雄	考 古	九州大学助手	S43～
◎平野 邦雄	国 史	東京女子大学教授	S59～H7
狩野 久	国 史	奈良国立文化財研究所 飛鳥藤原宮跡発掘調査部長	S59～H30
◎笹山 晴生	国 史	東京大学助教授	S59～H22
澤村 仁	建 築	九州芸術工科大学教授	S59～H24
杉本 正美	造 園	九州芸術工科大学教授	S59～
中村 一	造 園	京都大学教授	S59～H19
◎横山 浩一	考 古	九州大学教授	S59～H11
渡辺 定夫	都市工学	東京大学教授	S59～
八木 充	国 史	山口大学教授	S63～H30
川添 昭二	国 史	九州大学教授	S63～H17
鈴木 嘉吉	建 築	奈良国立文化財研究所所長	S63～H28
西谷 正	考 古	九州大学教授	H4～H19
佐藤 信	国 史	東京大学教授	H6～
坂上 康俊	国 史	九州大学教授	H8～
田中 琢	考 古	奈良国立文化財研究所所長	H8～H10
町田 章	考 古	奈良国立文化財研究所所長	H11～H16
山中 章	考 古	三重大学教授	H12～
田辺 征夫	考 古	独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所所長	H17～H22
林 重徳	土木工学	佐賀大学教授	H18～H29
石松 好雄	考 古	元九州歴史資料館副館長	H20～H23
尼崎 博正	造 園	京都造型藝術大学教授	H20～
松村 恵司	考 古	独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所所長	H23～
森 公章	国 史	東洋大学教授	H23～
高橋 章	考 古	求普提歷史資料館長	H24～H26
箱崎 和久	建 築	独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所	H25～
増渕 徹	国 史	京都橘大学教授	R1～
龟田 修一	考 古	岡山理科大学教授	R1～
伊東 龍一	建 築	熊本大学大学院教授	R1～
包清 博之	造 園	九州大学大学院芸術工学研究院教授	R1～
末次 大輔	土木工学	宮崎大学教授	R1～

太宰府政庁周辺官衙跡 藏司地区平地部調査関係者

昭和 45 年度（第 4 次調査）

福岡県教育委員会

総括	教育長	吉久 勝美
	文化課長	杉原 信彦
	文化課長補佐	岩下 光弘・渡辺 正氣
庶務	庶務係長	赤司 岩雄
	庶務係主事	小川 浩一郎
調査	調査員	藤井 功・横田 義章・亀井 明徳
	調査補助員	横田賢次郎・森田 勉・山本 輝雄・江上 幹幸・倉住 靖彦

昭和 53・54 年度（第 54・60・65-1・65-2 次調査）

九州歴史資料館

総務	館長	鏡山 猛
	副館長	久保園達男
	参事	渡辺 正氣
庶務	総務課長	柴田 実
	事務主査	座親 雅子
	事務職員	和田 健作・秦 十五郎・徳満 正文・坂井 正敏
調査	調査課長心得	石松 好雄
	技術職員	倉住 靖彦・高倉 洋彰・横田賢次郎・森田 勉・高橋 章

令和元年度（整理・報告書作成）

九州歴史資料館

総務	館長	杉光 誠
	副館長	安永 千里
庶務	総務室長	中村 満喜子
	総務班長	畠山 智
	総務室	林田 朋子・古賀 知香・具志堅 靖知
報告	学芸調査室長	小田 和利
	文化財調査室長	吉村 靖徳
	同室長補佐	伊崎 俊秋
	調査研究班長	吉田 東明
	同技術主査	岡寺 良・大庭孝夫

保存処理

学芸調査室	
保存管理班長	加藤和歲
同技術主査	小林 啓

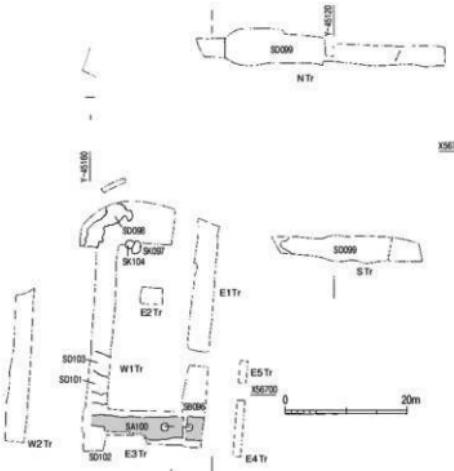
発掘調査、報告書作成にあたり、太宰府市教育委員会文化財課諸氏には有益なご教示を賜った。記して感謝したい。

第Ⅱ章 調査の概要

(1) 調査の概要

大宰府政府周辺官衙跡の蔵司地区平地部は、大宰府史跡の分類記号に基づく遺跡略号では「GAYL」「GAYT-A」である。この地区では、昭和45年の第4次調査を皮切りとして、昭和53年度の第54次調査、昭和54年度の第60・65-1・65-2次調査と、これまでに計5地点にわたる調査を実施してきた。

1) 第4次調査(Fig.5, PL.3)



第4次調査
の概要

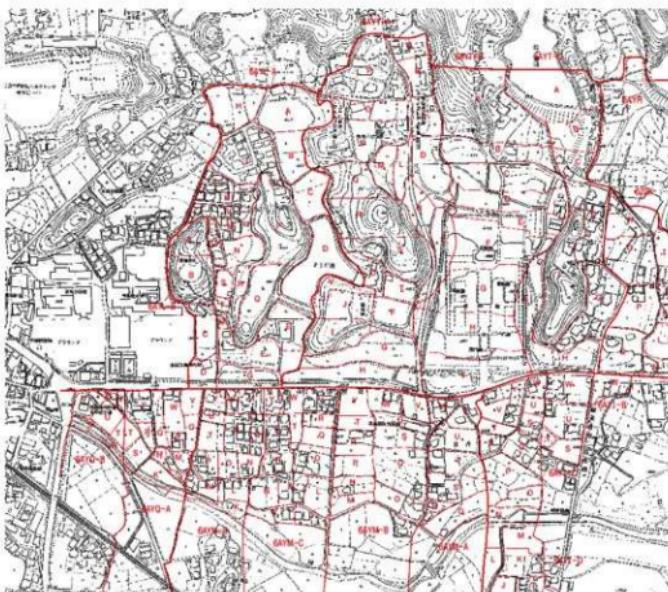


Fig.6 大宰府政庁跡及び周辺官衙跡地区割図 (1/7,500)

調査期間：1970年2月20日～5月
30日

地番：筑紫郡太宰府町（現、太宰府市、以下同）大字觀世音寺字藏司
443～445番地

調査面積：600m²

概要：調査地は政府中央軸線から西約300mの地点で、藏司丘陵部と、西方の米木の二つの舌状台地に挟まれた地域である。調査時には「藏司西地区」と呼称されていた。大宰府史跡の分類記号に基づく遺跡略号は「GAYL」である。調査の目的は、政庁地域西限の確認と木製品の発見とされた。

調査によって検出された主な遺構は、東西方向の築地SA100及び付随する溝SD101とSD102、SA100上に位置する門状の建物SB096の他、溝3条と土坑2基である。南北溝SD099からは木簡9点が出土した。

なお、確認された築地に関して、東側延長と西側延長が以後の課題となつた。特に、第1次調査で検出された政庁南門に接続する築地の位置との関係が大きな問題とされた。

2) 第54次調査 (Fig.8, PL.8 ～10)

調査期間：1977年11月29日～
1978年5月13日

地番：大字觀世音寺字藏司 489・
490番地

調査面積：1,135m²

概要：調査地は南北方向に上下二つの大きな段が形成されており、調査の主点は上段に置かれることとなつた。下段については、昭和46年度に実施された第14次調査で検出された

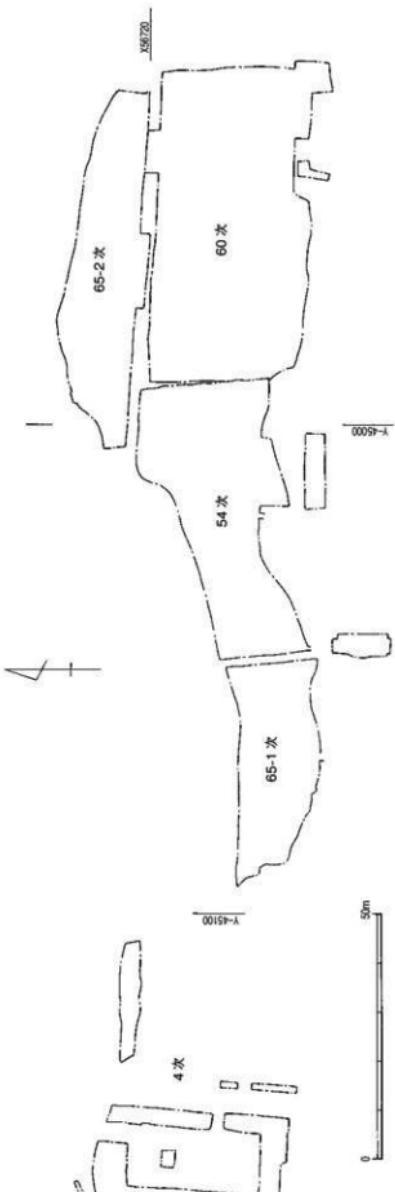


Fig.7 藏司地区(平地部調査地)地図 (1/1,000)

大溝SD320が北方にどのように伸びていくのか適宜トレント調査が行われる事とされた。

調査によって検出された主な遺構は、東西築地SA1400とSA1410、SA1400に付随する北側溝SD1405及び石組暗渠SX1385とSX1390の他、溝6条、瓦組井戸1基、土坑9基、石組2基、落ち込み2基である。一部整地層下層の調査も実施し、溝1条、木樋1基の他しがらみ状の敷粗朧SX1406を確認した。

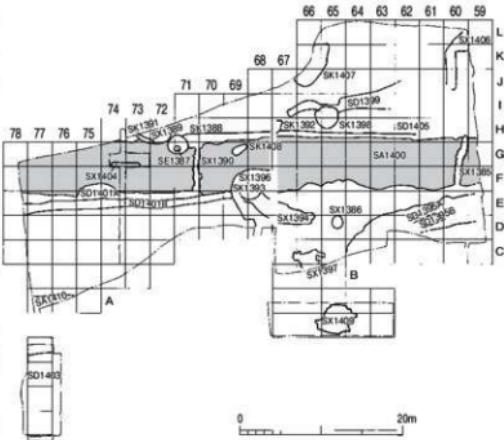


Fig.8 第54次調査区(1/600)

3) 第60次調査 (Fig.9, PL.15・16)

調査期間：1978年11月2日～1979年7月26日

第60次調査
の概要

地番：大字觀音寺字藏司 489 番地

調查面積：2,000m²

概要: 第60次調査は第54次調査からの継続調査として、第54次調査区の東側に接した地域が対象とされた。第54次調査で検出された東西方向の2条の築地が東側地域にどのように延びていくのかを主たる目的とし、あわせて蔵司前面地域に配されたであろう建物群の検出が目的とされた。

調査によって検出された主な遺構は、礎石建物SB1500 1棟、東西築地SA1410、築地SA1400 の石組暗渠SX1515、SA1410 の階段SX1520の他、溝6条、自然流路4条、土坑4基、瓦溜り1基、護岸1基、落ち込み1基である。整地層下層の調査では植物層が確認された。

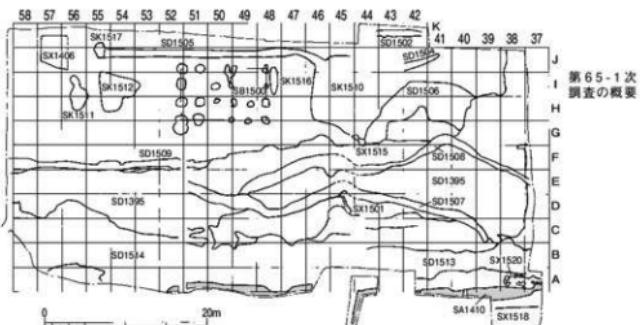


Fig.9 第60次調查区(1/600)

概要: 第65-1次調査は、この場所が第54次調査で検出された築地SA1400の南側部分にあたるため、第60次調査で検出された築地SA1410が西側へどのように延びるか、その確認が主たる目的とされた。

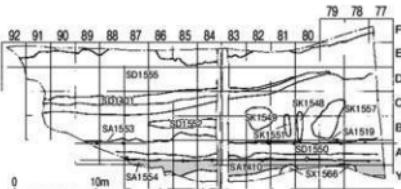


Fig.10 第65-1次調查区 (1/600)

5) 第65-2次調查 (Fig.11, PL.24・25)

第65-2次
調査の概要

調查期間：1979年9月20日～12月22日

地 番：大字觀世音寺字藏司 489 番地

調查面積：920m²

概 要:第65-2次調査は第54・60次調査の北側に接した地域、約860m²が対象とされた。先立って実施された第54・60・65-1次調査では築地・礎石建物等が検出されたが、後世の削平が著しく、わずかにその痕跡を残すのみであった。第65-2次調査地域は既調査地より一段高くなっている、遺構の遺存状態も良好であろうと予測されたため、築地の内部施設の確認が主たる目的とされた。

調査によって検出された主な遺構は、建物 7 棟（建て替えを含む）、柵 1 条、区画溝 2 条、雨落溝 1 条、溝 8 条、井戸 3 基、土坑 9 基、瓦溜り 1 基、落ち込み 2 基、炭・焼土層 1 基、保土穴 2 基、ピット 1 基である。

なお、この第65-2次調査をもって昭和45年度から始まった蔵司地区平地部の一連の調査が完了した。

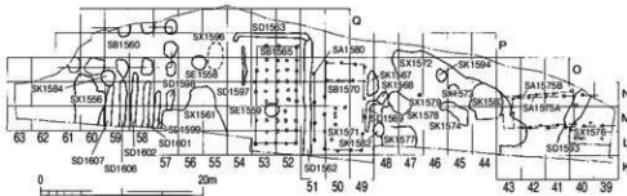


Fig.11 第65-2次調査区 (1/600)

(2) 基本層序 (Fig.12 ~ 16)

藏司地区平地部は四王寺山より派生する丘陵の裾部にあたり、基盤層は花崗岩の風化した黃褐色粘質土である。この基盤層の上位にしばしば整地層が形成され、古代・中世の遺構面はこの整地層上面に形成される。

4次調査区

Fig.13-1 は NTr の層位模式図である。耕作土下には青灰色粘質土、その下層には薄い砂層を挟んで部分的に砂質粘土層が堆積する。最下層は腐植土層である。

4次調査区
の基本層序

Fig.13-2 は W3Tr 北壁の土層図である。耕作土下に灰褐色の花崗岩バイラン土が堆積し、部分的にこれを切る形で淡褐色花崗岩バイラン土や淡茶色粘土が堆積している。灰褐色花崗岩バイラン土の下層には茶色細砂、その下層に地山層とよく似た褐色花崗岩バイラン土が堆積している。さらにその下層には灰色粘土、淡茶色細砂が堆積し、地山は褐色花崗岩バイラン土となる。

Fig.13-3 は W2Tr 西壁の土層図である。第5・6層の茶灰色粘質土は瓦を多く含んだ層である。第6層の下層は茶褐色の砂層が薄く堆積し、その下層には遺物を含まない第15層暗灰色粘土や遺物を含んだ第16層茶褐色細砂質土が堆積する。單一層による遺構面を形成してはいないが、この第15・16層上面が遺構面とされた。

54次調査区

Fig.13-4 は昭和53年度発掘調査概報に掲載された調査区東壁の層位模式図である。築地 SA1400 は第2層黄褐色土除去後の段階で既に確認されている。第3層灰色土の下層は調査区 54次調査区
の基本層序
域の位置によって堆積が異なる。

Fig.13-5 は調査区中央の層位模式図である。SA1400 の南側には灰色土の堆積、北側は黄褐色土の下に黄白色粘土、茶褐色土、明黄色土の順に堆積が見られる。

Fig.13-6 も昭和53年度概報に掲載された調査区西壁の層位模式図である。SA1400 と SA1410 の間にある灰色土を除くと茶色土と瓦層に達する。その下層は茶褐色砂質土であり、SA1410 はこの上面に積土を行って構築されている。明茶色粘土と積土の間に腐植土があり、さらに下には自然木を含む黒褐色の有機質土となる。

Fig.14-7 は SX1409 が検出されたトレンチの南壁土層図である。茶色砂の下層には第7層灰青褐色土が堆積しており、その下層の上面が遺構面となる。

Fig.14-8 は SD1403 が検出されたトレンチの西壁土層図である。北寄りの位置では第8層

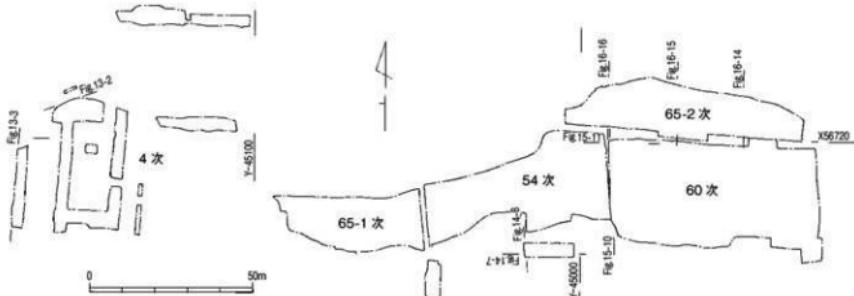


Fig.12 藏司地区平地部基本土層図作成箇所 (1/1,500)

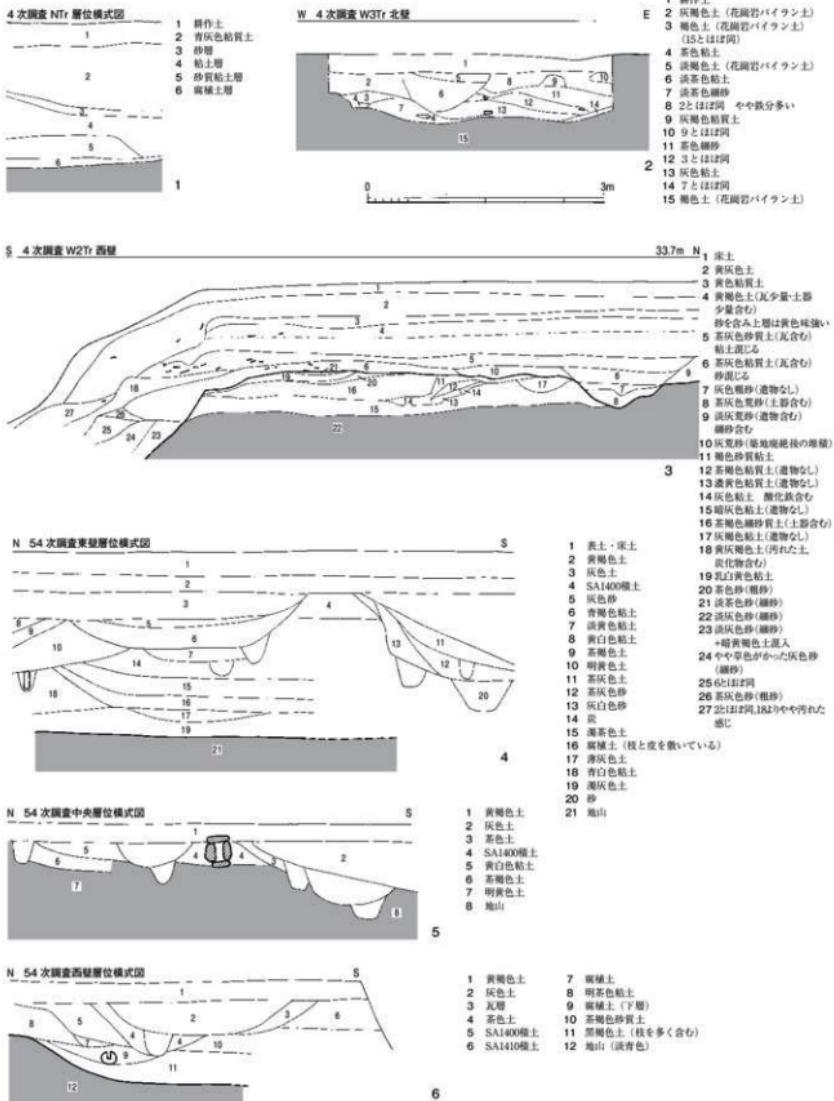
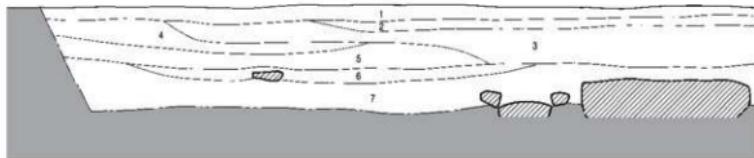


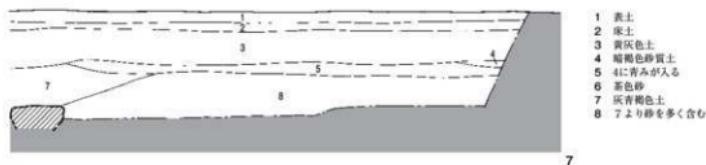
Fig.13 調査区基本土層図① (1/60)

E 54次調査 H地区南壁

32.2m

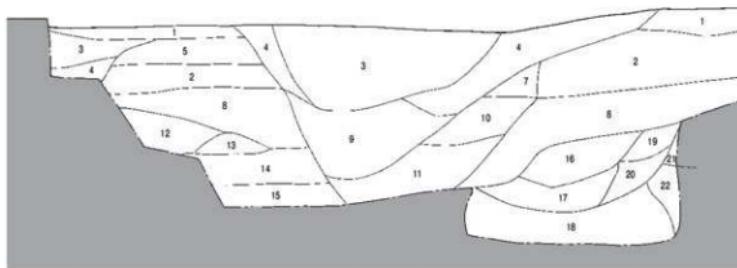


32.2m W

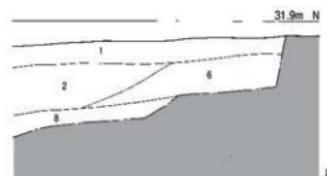


S 54次調査 H地区西壁

31.9m



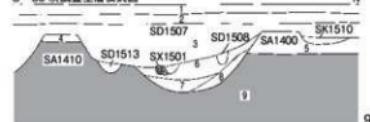
31.9m N



- 1 表土
- 2 黄灰色土
- 3 黄灰色土 (粘土ブロック含む)
- 4 深灰色土
- 5 深灰色土
- 6 短褐色土
- 7 5より粘質
- 8 黑灰色砂質土
- 9 黑灰色粘土
- 10 9に砂が混じる
- 11 灰褐色砂

S 60次調査 土層模式図

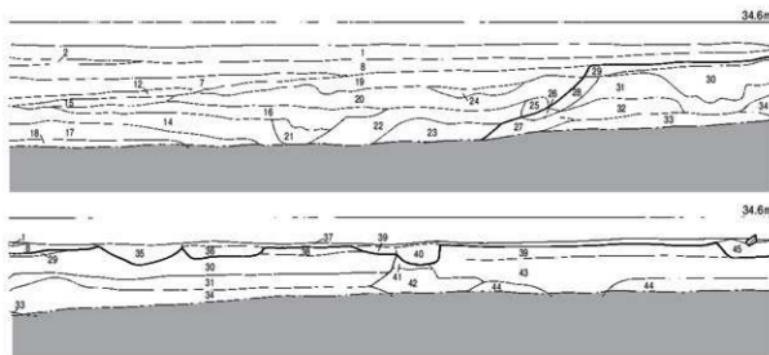
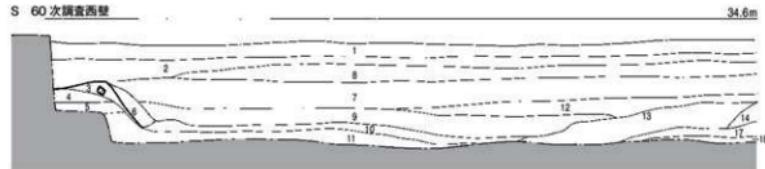
N



- | | |
|------------|---------|
| 1 表土 | 6 灰色砂質土 |
| 2 底土 | 7 黄灰色土 |
| 3 灰色土 | 8 黄灰色砂 |
| 4 SA1410種土 | 9 灰層 |
| 5 SA1400種土 | |

0 3m

Fig.14 調査区基本土層図② (1/60)





- | | |
|----------------|-------------------|
| 28 黄色地主 (黄色地脚) | 11 青色地主 |
| 29 绿色地主 | 12 紫灰色地主 |
| 31 沙色地主 | 13 棕褐色地主 (风化带含金带) |
| 32 黄色地主 (黄色地脚) | 14 13.2 与中绿色地脚带 |
| 33 绿色地主 | |

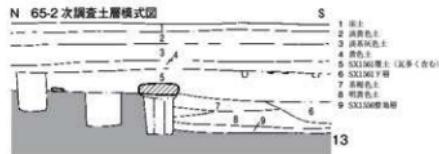
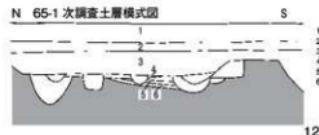
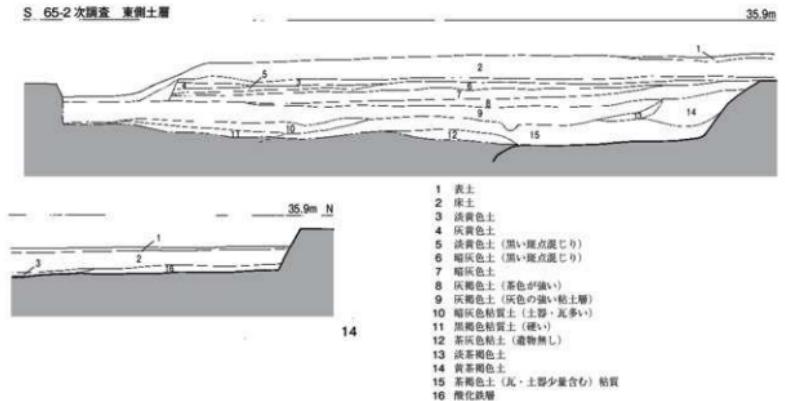
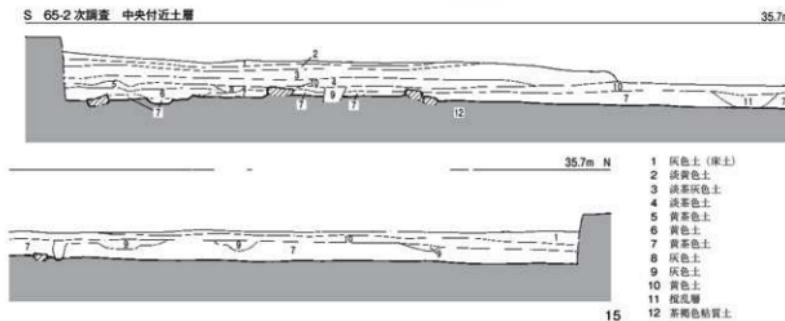


Fig.15 調査区基本土層図③ (1/60)

S 65-2 次調査 東側土層



S 65-2 次調査 中央付近土層



S 65-2 次調査 西側土層

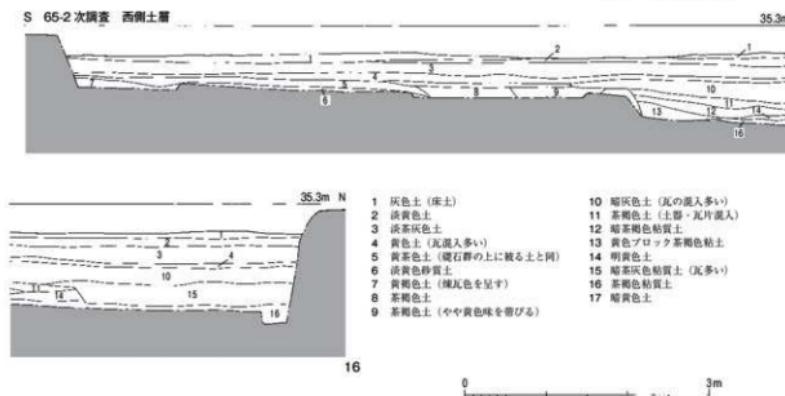


Fig.16 調査区基本土層図④ (1/60)

黒灰色砂質土の下層に青灰色土、最下層には粗砂層の厚い堆積が見られる。

60次調査区

60次調査区 の基本層序

Fig.14-9は昭和54年度発掘調査概報に掲載された60次調査土層模式図である。灰色土層の下層から築地SA1400・SA1410等の遺構が検出された。南半域では灰色土層の下層に第6層灰色砂質土が確認され、この灰色砂質土層を切って溝SD1507・1508・1513が流れている。灰色砂質土層を除去すると灰色砂質土層（下層）の上面に、北から南へ投棄されたような状態で炭層が発見された。また灰色砂質土層（下層）上にはSX1501が構築されていた。調査区西北隅の下層確認グリッドでは、暗灰色粘土層の下から黄色粘土層があらわれた。この黄色粘土層は東に向かって薄くなり、褐色系の粘質土層に接続する。この褐色土系の下位に炭層及び腐植土層が形成されており、この両者からまとまって土器や木製品が出土した。

Fig.15-10は第60次調査区西壁の土層図である。3・4層は遺物を含まない築地積土層、土層中央付近の第35・36・40・45層は礎石建物の掘方層である。

Fig.15-11は第60次調査区下層トレーナー北壁の土層図である。第8層の暗灰色粘土には炭化物を多く含み、第9層は第8層よりも炭化物の混入が多い。

65-1次調査区

65-1次調査区 の基本層序

Fig.15-12は昭和54年度概報に掲載された65-1次調査区土層模式図である。灰茶色土層は最終遺構面全体を覆う層で、これを除去するとSA1410BやSD1401等各遺構が検出された。またSA1410Bの北側では屋根から自然に落下したような状態で多量の瓦が堆積していた。この瓦堆積層及び茶灰色土層を取り除くとSA1410AやSD1550A等が検出された。西半部の一部を掘り下げたところ、炭化物を多量に含む層及び腐植土層が検出され、古墳時代の土器が多量に発見された。

65-2次調査区

65-2次調査区 の基本層序

Fig.15-13はやはり昭和54年度概報に掲載された65-2次調査区土層模式図である。黄色土層は最終の遺構面全体を覆う層で、これを除去するとSB1570やSB1575A・B等が検出された。SB1570、SE1559、SX1571は瓦を多量に含んだSX1561以降に構築されたものであることも確認された。茶褐色土層、明黄色土層はSB1560の整地層であり、その下にSX1556炭層がある。

Fig.16-14は65-2次調査区東側の南北セクションベルトによる土層図である。第10層暗灰色粘質土は土器や瓦を多く含んだ層である。第15層茶褐色土も土器や瓦を少量含む。第15・16層下層は花崗岩バイラン土等からなる地山層である。

Fig.16-15は65-2次調査区中央付近の土層図である。第7層黄茶色土中から建物の礎石が検出された。礎石建物の遺構面は第4層下層の茶褐色粘質土上面である。

Fig.16-16は65-2次調査区西側の土層図である。黄色土には瓦が多く含まれる。調査区南半では瓦が多量に出土しており、瓦は暗灰色土、茶褐色土、暗茶灰色粘質土に特に多く認められた。

第III章 検出遺構

(1) 建物

蔵司地区平地部では、4・54・60・65-1・65-2次の5次に及ぶ調査を実施している。建物は、60・65-2次調査において大小6棟程を確認したにすぎない。建物の分布は、60次調査区北側中央部から65-2次調査区にかけて集中している。他の官衙地区と比較して検出した建物数が少ないと点は、蔵司丘陵裾部の狭い範囲という地形・面積的制約による。なお、建物に随伴する遺構は、ここで触れる。

SB096 (Fig.22, PL.5)

4次調査の築地SA100の東側上面で検出した門遺構で、柱掘方2個を確認した。掘方は築地と平行して中央にあり、柱間は3.4mを測る。西側の掘方は楕円形を呈し、長軸1.44m、短軸1.1m、深さ0.7mを測り、径26cmの柱痕を確認した。東側の掘方は隅丸長方形を呈し、長軸2.3m、短軸1.05m、深さ0.6mを測り、長軸を東西方向に取る。両者の掘方土層を観察すると、掘込みが確認でき、建て替えを行ったことが窺われる。性格としては、築地の途中に設けられた簡易な構造の門であったと考えられる。

SB1500 (Fig.17, PL.16・17)

60次調査区の北側中央に位置し、東西溝SD1505とは0.8mの間隔を置いて平行関係にある。築地SA1400廃絶後に築造された東西棟の礎石総柱建物である。建物の遺存状態は極めて悪く、礎石の殆どが抜き取られ、掘方と根石の一部を留めるにすぎない。建物規模は、桁行5間(10.5m)、梁行3間(6.3m)で、柱間は2.1m(7尺)等間である。礎石掘方は、遺存状態が良好なもので長軸1.45m、短軸1.0mの隅丸方形を呈する。根石には長さ25~30cm大の角礫を用いており、掘方埋土中に粘土を入れていた掘方もあった。なお、南西隅柱の礎石は、横の坑に落とし込んでいた。この礎石は長軸1.2m、短軸0.7m程の大きさで、柱座は作り出していない。建物の方位は座標北を示す。

SB1560A・B (Fig.18, PL.25~28)

65-2次調査区の西端部に位置する東西棟の建物で、掘立柱建物(SB1560A)から礎石建物(SB1560B)へと改築されている。SB1560Aは梁行2間(5.2m)、桁行4間以上(11.8m)で、西側梁行は整地土の中に潜る。柱掘方は隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈し、長軸1.96m、短軸1.25m、深さ1.1m程を測る。柱間は桁行が2.95m(10尺)等間、梁行は2.6m等間である。北東隅と南西端の柱掘方には柱根が遺存するが、他は抜き取られていた。柱根は径45cm前後のもので、90cm程の長さで遺存する。西南端の柱根下部には、15cm×23cmの筏孔を穿っている。掘方下部及び埋土中には、瓦片や拳大の角礫を入れているものもみられた。梁行方位は、東に1°振っている。

SB1560Bは、SB1560Aの柱を抜き取り、同位置に建て替えた礎石建物である。遺存状態は極めて悪く根石の一部を留めるにすぎず、規模等詳細は不明。なお、SB1560Aの柱抜き取り穴埋土中には多量の瓦を含んでおり、沈下防止策として瓦を投棄したものとみられる。

なお、当該建物の上段に当たる蔵司F地区209次調査では、礎石建物SB4690を検出しているが、SB1560B根石との比高差が90cmもあることから両者は別建物とみなせ、掘立柱建物

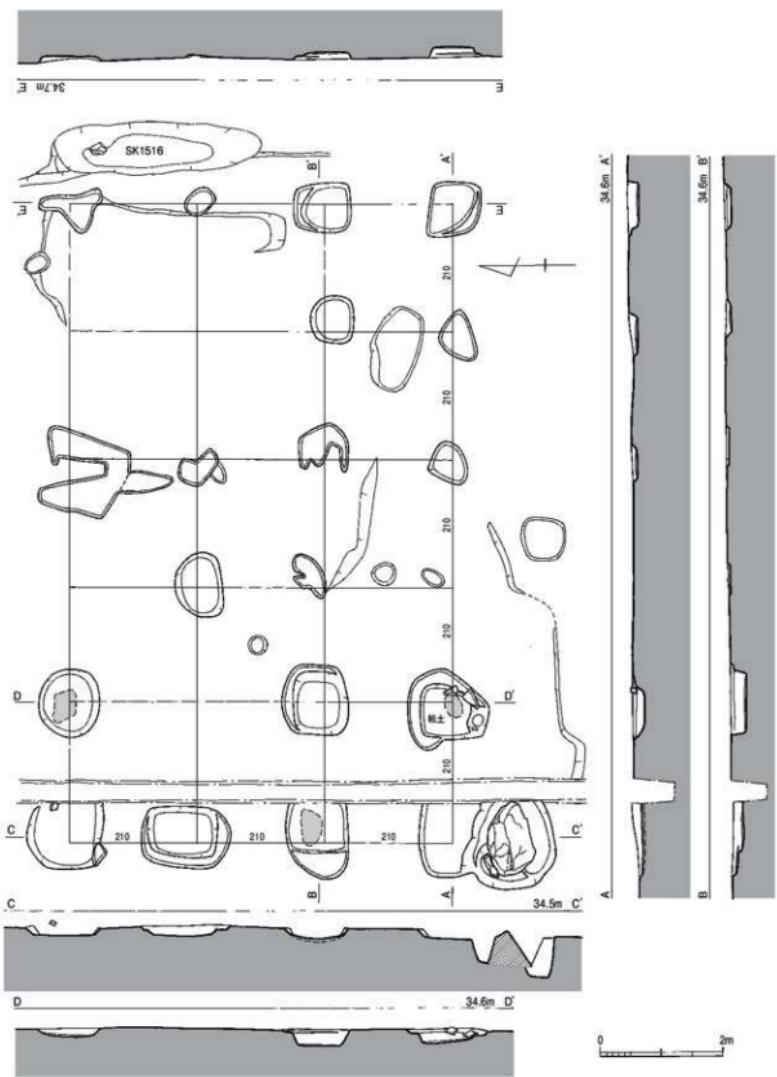
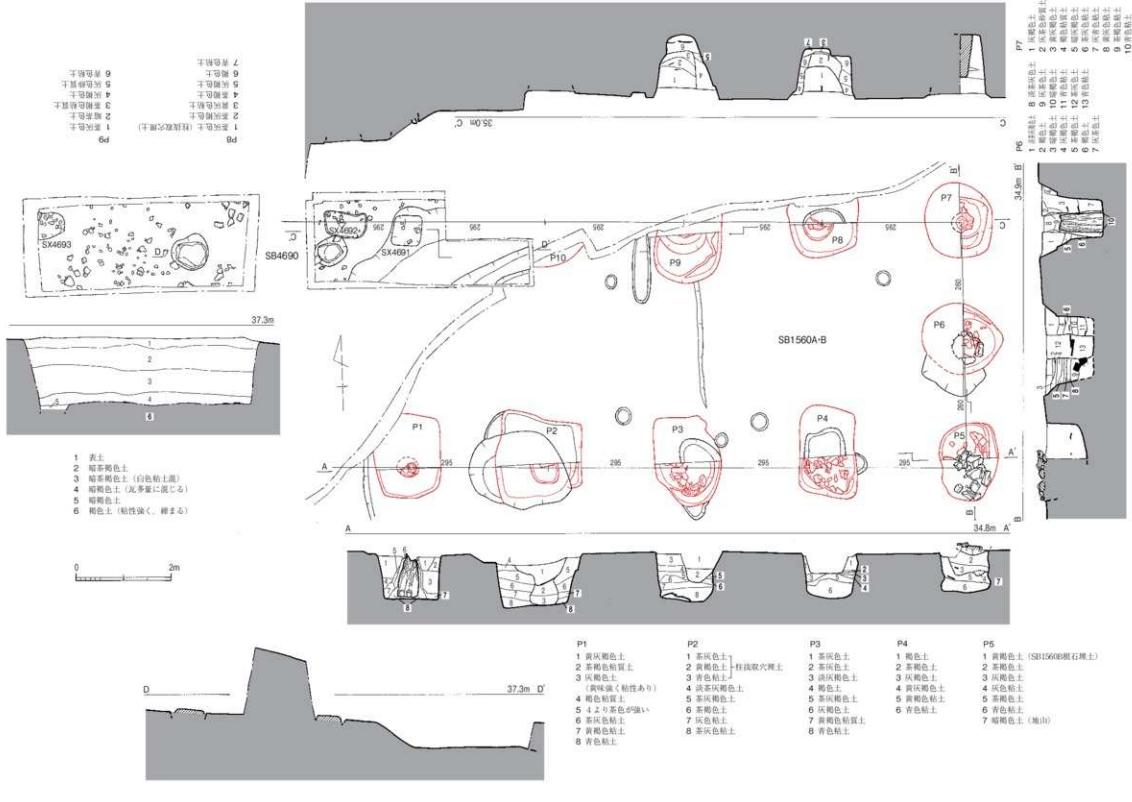


Fig.17 建石建物 SB1500 実測図 (1/80)



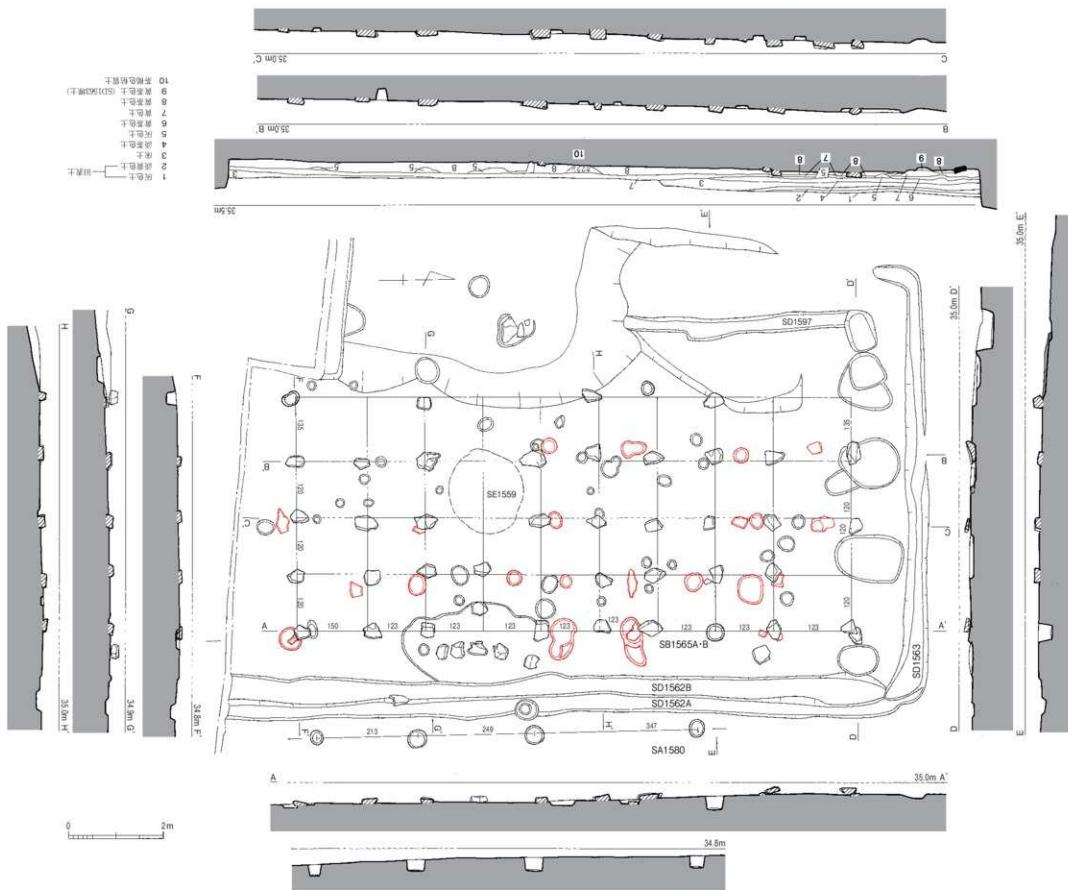


Fig.19 碧石建物SB1565A-B、柵SA1580実測図 (1/80)

SB1560A → 础石建物 SB1560B → 础石建物 SB4690 の変遷が窺える。現在、当該地では 246 次として調査を行っているため、今後刊行予定の蔵司地区丘陵部の成果報告書において改めて検討を加えたい。

SB1565A・B (Fig.19, PL28・29)

65-2 次調査区の中央に位置する南北棟の基礎建物で、井戸 SE1559、落ち込み S1561 に切られる。古期建物を A、新規建物を B とした。SB1565A の遺存状態は極めて悪く、基礎 6 個程と掘方 12 個程を確認したにすぎず、SB1565A の基礎は SB1565B への建て替えの際に転用された可能性が考えられる。なお、建物規模は B 建物と同じ桁行 9 間、梁行 4 間の総柱建物と仮定すると、断面 C-C'箇所には原位置を留める基礎があることから、桁行は 11.6 m 程を測る。基礎は長さ 50cm 前後、幅 30cm 前後の不整形な割石を使用している。

SB1565B は、SB1565A より 0.5 m 北側にずらして建て替えている。桁行 9 間 (11.76 m)、梁行 4 間 (4.95 m) の総柱建物で、桁側の柱間は 1.23 m の等間を基調とするが、北側 1 間分は 1.65 m、南側 1 間分は 1.5 m とやや長くなる。梁行の柱間も同じく西側 1 間分が 1.35 m とやや長く、他は 1.2 m 等間である。基礎は長さ 30 ~ 50cm、幅 20 ~ 30cm 程の方形割石を用いている。基礎のレベルは北側から南側に下がっており、約 10cm の比高差がある。また、当建物基礎の方が SB1565A 基礎よりも 10cm 程高い。桁行方位は、東に 1° 振っている。

なお、東側桁行の南東隅柱から北に 3 ~ 4 間分行った箇所には、桁行基礎列と 50cm の間隔を置いて扁平な石が南北に 4 個並べられている。同じく、北東隅柱から南に 2 間分の箇所にも扁平な石が 1 個遺存し、これらは当該建物に関わる施設一出入り口の階段かとみられる。西側に関しては、SX1561 による破壊のため対をなすかは確認できなかった。また、建物を囲繞するように北側に東西溝 SD1563、東側に南北溝 SD1562AB、西側に南北溝 SD1597 が存在する。これらの溝は、建物と軸を描いて存在することから建物の雨落溝、或いは排水のための溝と考えられる。

出入口施設

SD1562A・B (Fig.19, PL28・29)

SD1563 に接続する南北溝で、新旧 2 時期があり、深い方を SD1562A、浅い方を SD1562B とした。SD1562A は SB1565B 東側桁行とは 1.5 m の間隔を有し、最大幅 0.46 m、深さ 0.2 m で、長さ 14.35 m 分を確認したが、南端は調査区外に延びる。SD1562B は SB1565B 東側桁行とは 1.0 m の間隔を有し、最大幅 0.68 m、深さ 0.1 m で、長さ 13.9 m 分を確認したが、SD1562A 同様、南端は調査区外に延びる。

SD1563 (Fig.19, PL28・29)

SB1565B の北側梁行基礎列から 1.2 m 北側に位置する東西溝で、U 形をなす。東西長 9.26 m、中央幅 0.5 m で、深さは 8cm と浅い。両端部は 0.7 m 程の長さで終わっている。溝の深さが極めて浅いことから、区画溝とするよりは雨落溝或いは排水溝と考えた方が良い。なお、当該溝の西先端部から SB1565B 西側桁行基礎列までは 2.4 m の間隔があることから、建物の西側に 2.4 m × 15 m 程の空間を有することになる。

建物の西側
に空間をもつ

SD1597 (Fig.19, PL28・29)

SB1565B の西側桁行から 1.4 m 西側に位置する南北溝で、南半部は落ち込み SX1561 に切られるため長さ 4.8 m の遺存である。幅 0.42 m で、深さは 2cm と極めて浅い。こうしてみると、

SD1562A が最も深いものの、建物と溝とのセット関係は明らかではない。

SB1570 (Fig.20, PL.29)

65-2 次調査区の中央部で、SB1565AB の 3.5 m 東側に位置する。桁行 5 間 (10.55 m)、梁行 3 間 (4.67 m) の掘立柱建物で、北側 1 間分に間仕切りを設けている。柱掘方は 0.3 ~ 0.4 m の円形を呈し、深さは 0.4 m 前後を測る。柱間は桁側が 1.83 ~ 2.22 m、梁側が 1.18 ~ 1.86 m とばらつきがみられる。西桁行方位は東に 1° 30' 振っている。

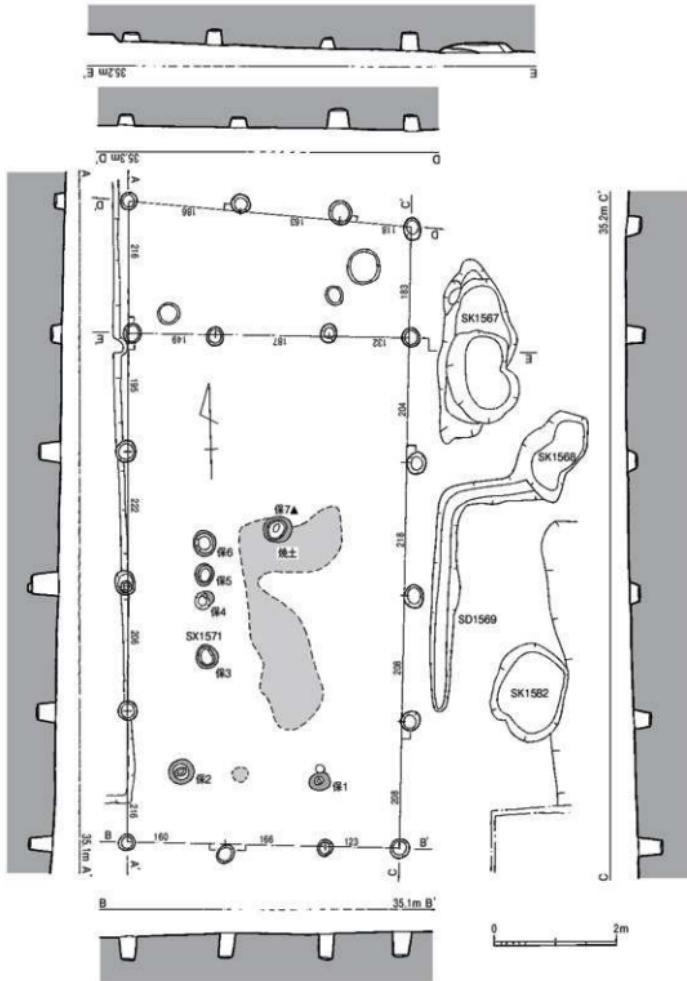


Fig.20 掘立柱建物 SB1570 実測図 (1/80)

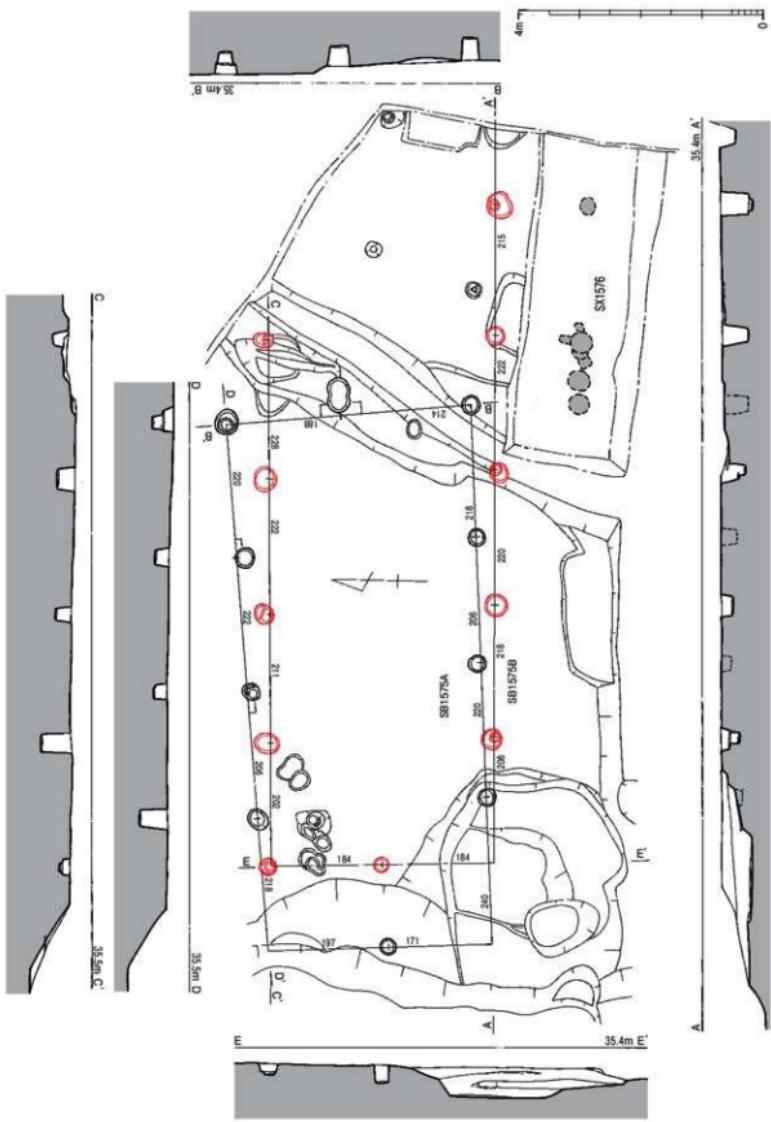


Fig.2.1 挖立柱建物 SB1575A・B 美術館 (1/80)

鋳造工房 なお、建物内部の南半部には、保土穴（SX1571）7基が逆コ字形に並んでおり、床面には焼土が広がっていた。また、建物東側の土坑SK1567・1568及びL字形溝SD1569埋土中には炭が多量に詰まり、鋳型・坩堝・錫羽口・銅滓が出土していることから当該建物は鋳造工房の覆屋と考えられ、SK1567・1568、SD1569は鋳造に伴う廃棄施設とみられる。

SX1571 (Fig.20, PL29・31)

保土穴群 SB1570内部で7基確認した保土穴である。遺存状態が良好なものは径30cm、深さ16cm程の幅鉢状をなし、壁面は厚さ1cm前後で堅く焼けており、その上面も幅10cm程の範囲で焼けて赤化している。埋土中には銅滓・炭が入っていた。なお、保土穴7（▲印）は、切り取って保存処置を施した後、九州歴史資料館第4展示室の床下展示資料として公開に供している。

SB1575A・B (Fig.21, PL24)

65-2次調査区の東端部に位置する。重複して東西棟の掘立柱建物2棟を検出したが、柱穴同士の切り合いはなく、前後関係は明らかではない。ともにSD1593とは重複関係にある。SB1575Aは桁行5間以上（10.8m）、梁行2間（4.0m）規模で、東側は調査区外に延びる。柱掘方は径0.3～0.4mの円形を呈し、深さは0.2～0.5m程の遺存状態であり、2段に掘り込む柱穴もみられる。柱間は桁側が2.02～2.28m、梁側は1.84mの間隔を有する。東梁行方位は西に2°30'振っている。

SB1575BはSB1575Aのやや北側に重複して位置する。また、土坑SK1583とは切り合い関係にある。なお、「大宰府史跡昭和54年度発掘調査概報」では、「ほぼ同じ位置に同じ規模で建て替えが行われている」としていたが、概報でSB1575Bの柱穴として拾っていたビット（△印）は、他の柱穴の深さが25～50cmであるのに比して5cmと浅く、柱間も若干短いこと、東延長線上に柱穴が存在しないことなどから、今回は桁行4間（8.84m）、梁行2間（4.02m）規模の建物として報告する。

柱掘方は径0.26～0.3mの円形を呈し、深さは0.2～0.4m程を測る。柱間は桁側が2.06～2.4m、梁側は1.88～2.14mの間隔を有する。東梁行方位は西に7°振っている。柱穴からの出土遺物はなかった。また、SB1575Aの南側と東端部には、保土穴状の焼土面（SX1576）が存在する。

SX1576 (Fig.21, PL24)

SB1575Aの南側1.2mで4基、東端部で2基確認した保土穴状の焼土面である。径30cm程の範囲で焼けているが、削平により遺存状態は悪い。SB1575Aに関連する遺構の可能性がある。

(2) 築地

築地は蔵司官衙を特徴付ける遺構の一つであり、4次調査で1条（SA100）、54・60・65-1次調査で2条（SA1400・1410）を検出した。なお、4次調査地は蔵司丘陵と西側の来木丘陵に挟まれた地域であり、調査地の東半部はかつて水田となっていた低湿地で、大宰府史跡で最初となる木簡が出土している。一方、調査地の西半部は来木丘陵の裾部に当たり、東半部の水田とは約2mの比高差をもつ。従って、本来ならば4次調査地の西半部は来木地区に含めるべきであるが、便宜上、蔵司地区として報告する。

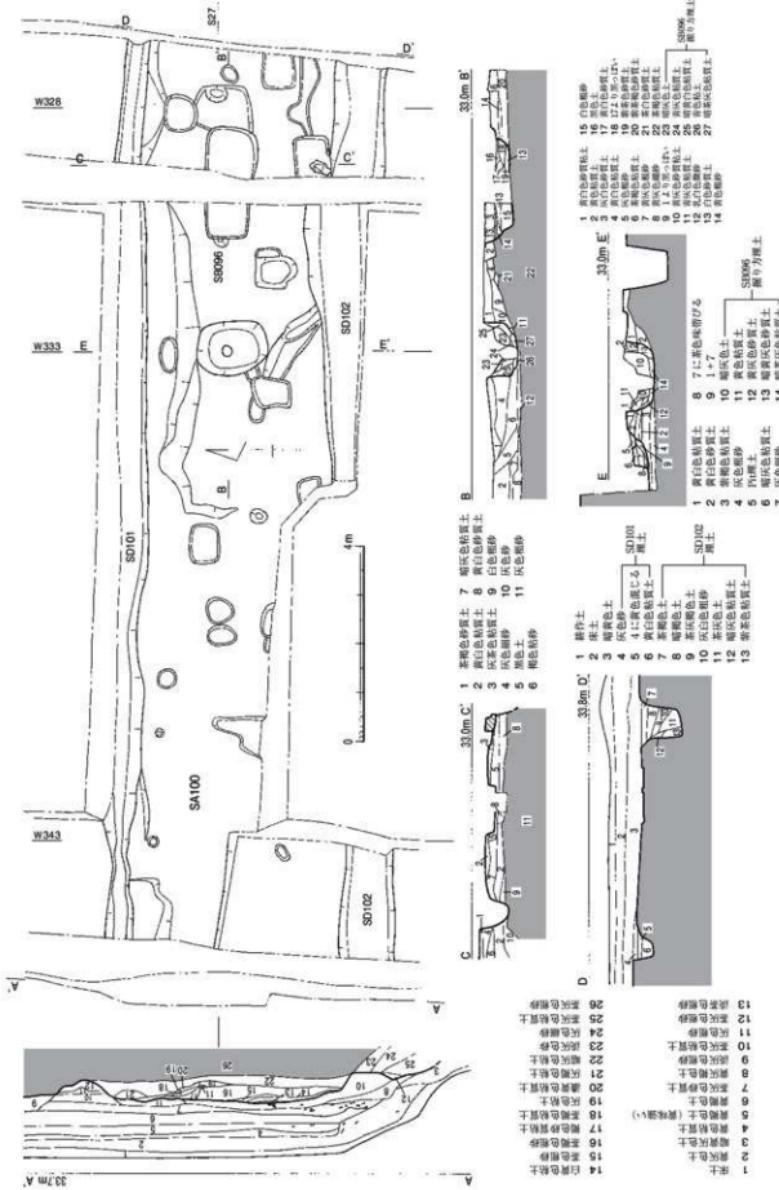


Fig.22 地带 SA100 地质图 (1/100)

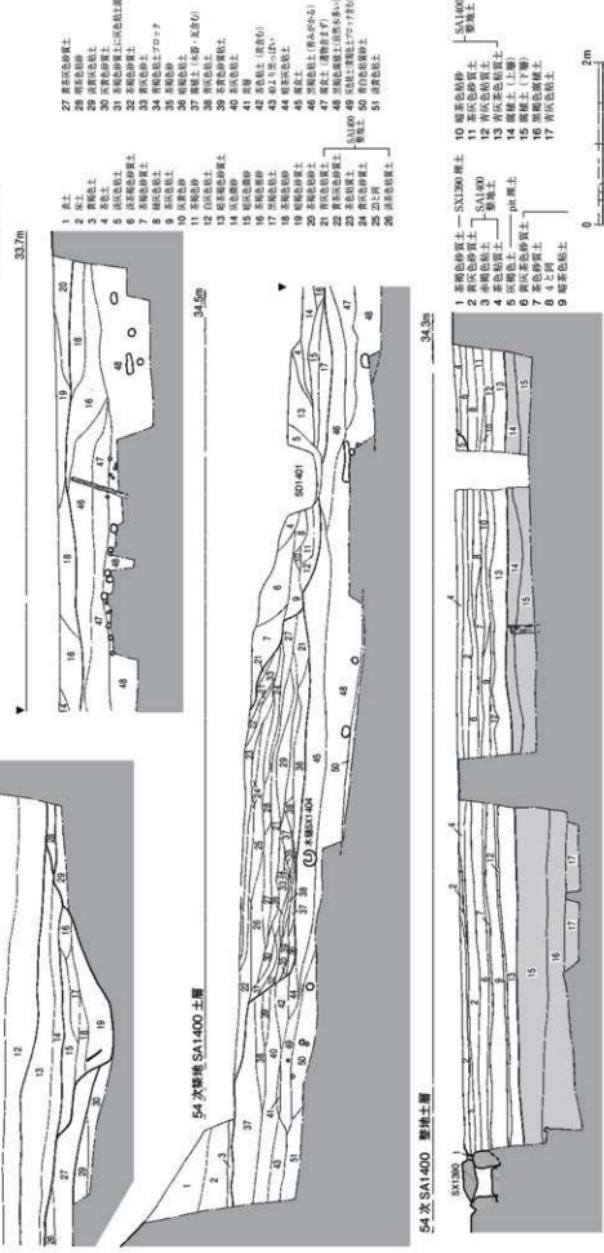
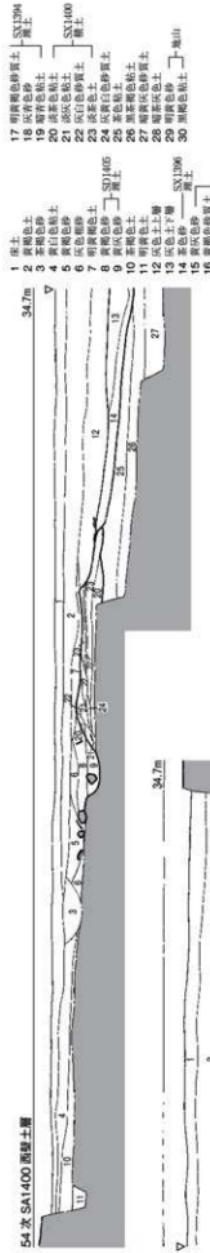
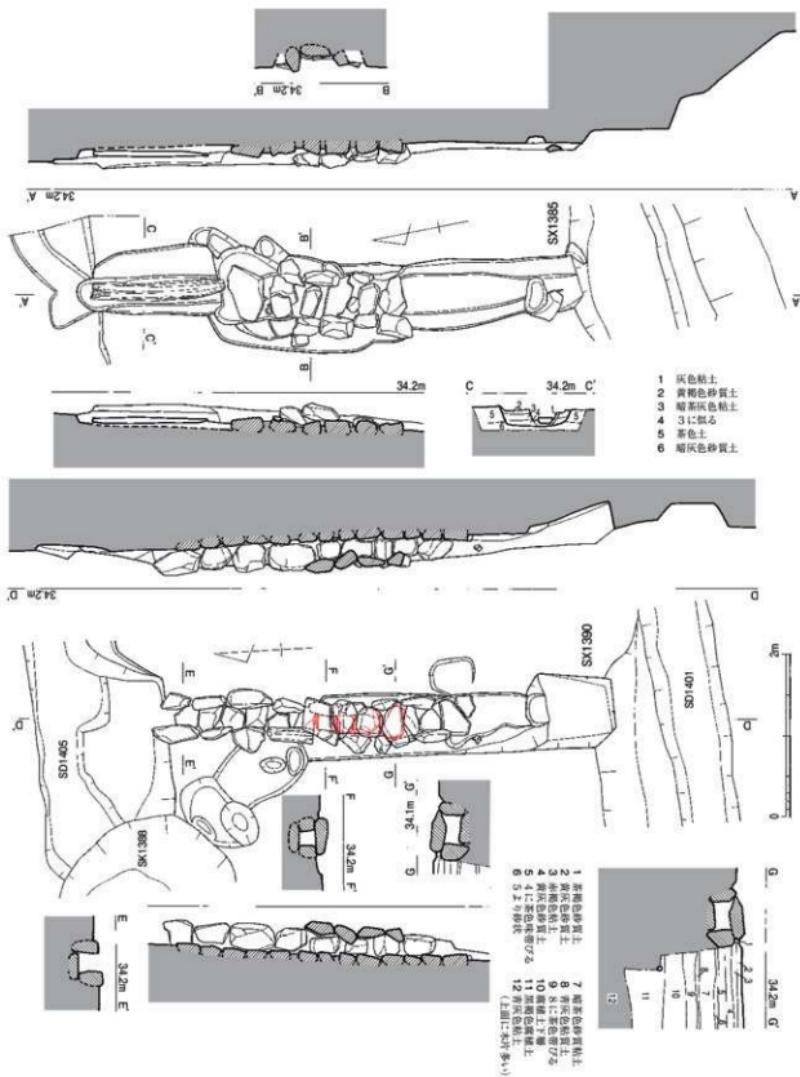
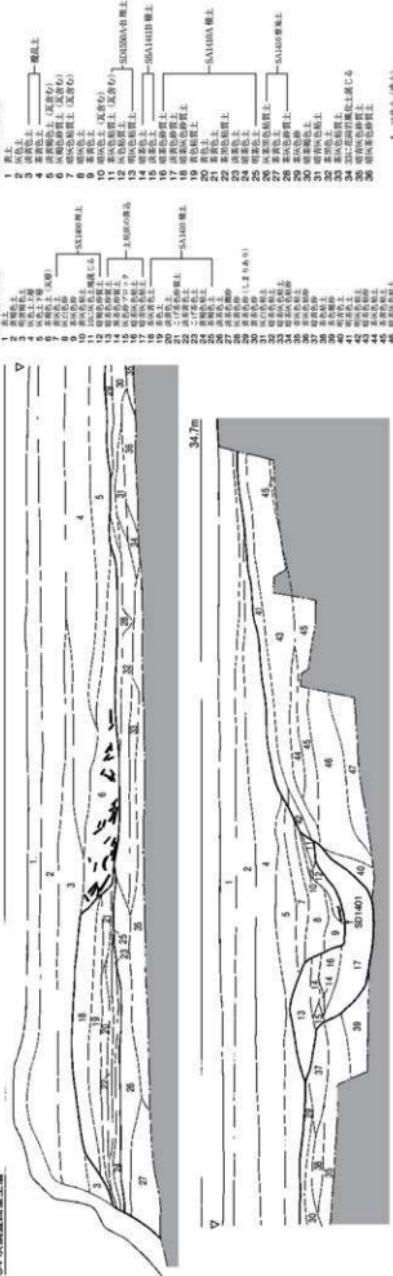


Fig.23 奥地 SA1400 土层图 (1/60)

Fig.24 晴果 SX1385・1390実測図 (1/60)



34 汽車行駛上場



65 次調查中央部土層

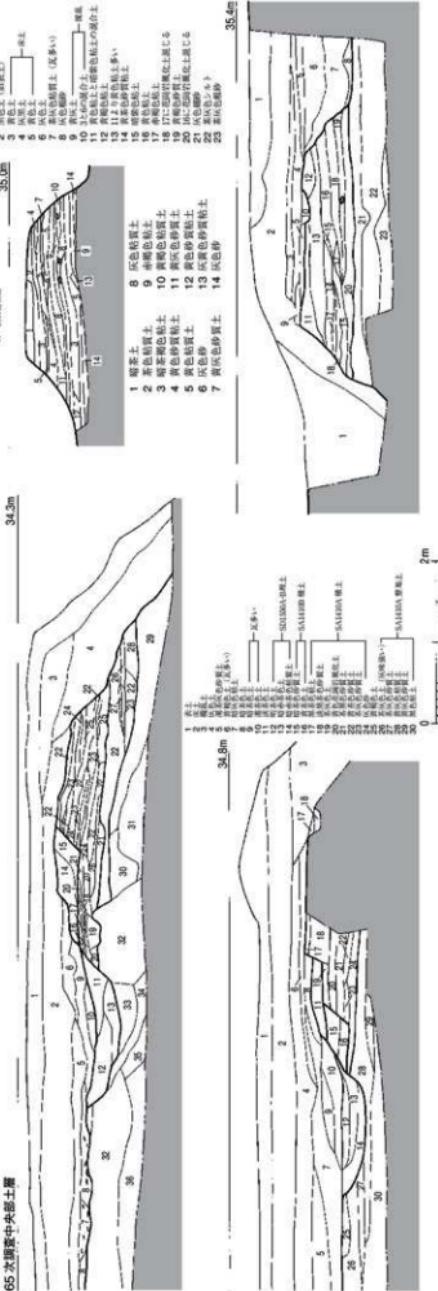


Fig.25 墓地 SA1410A・B 土解図 (1/60)

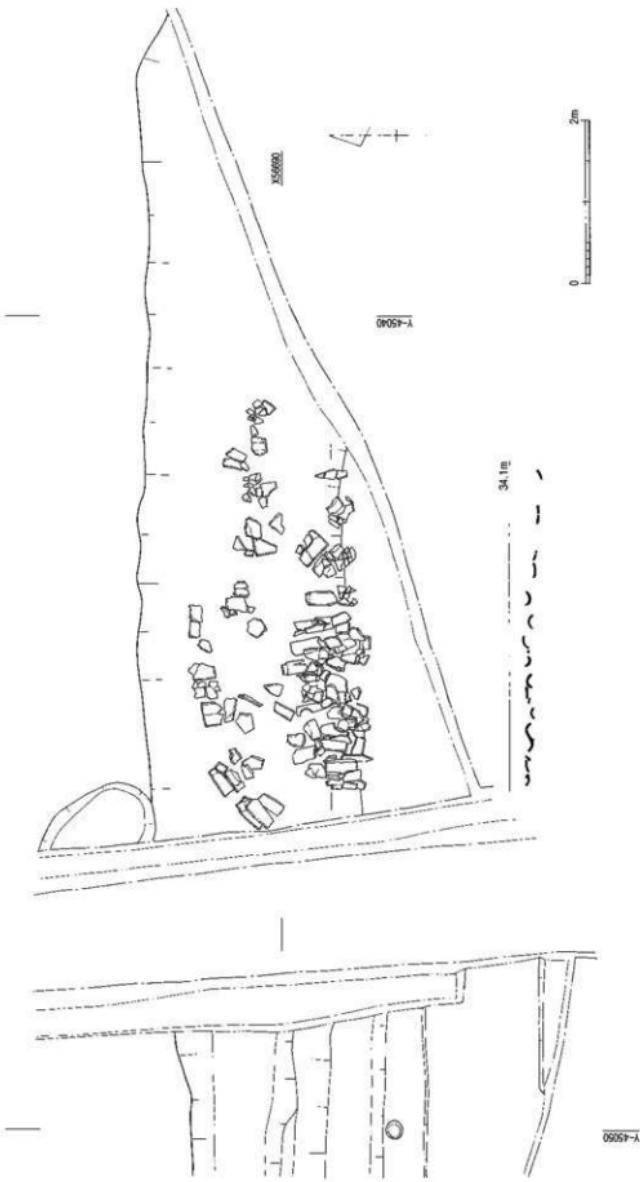


Fig.26 瓷地 S.11110 瓦出土状况实测图 (1/60)

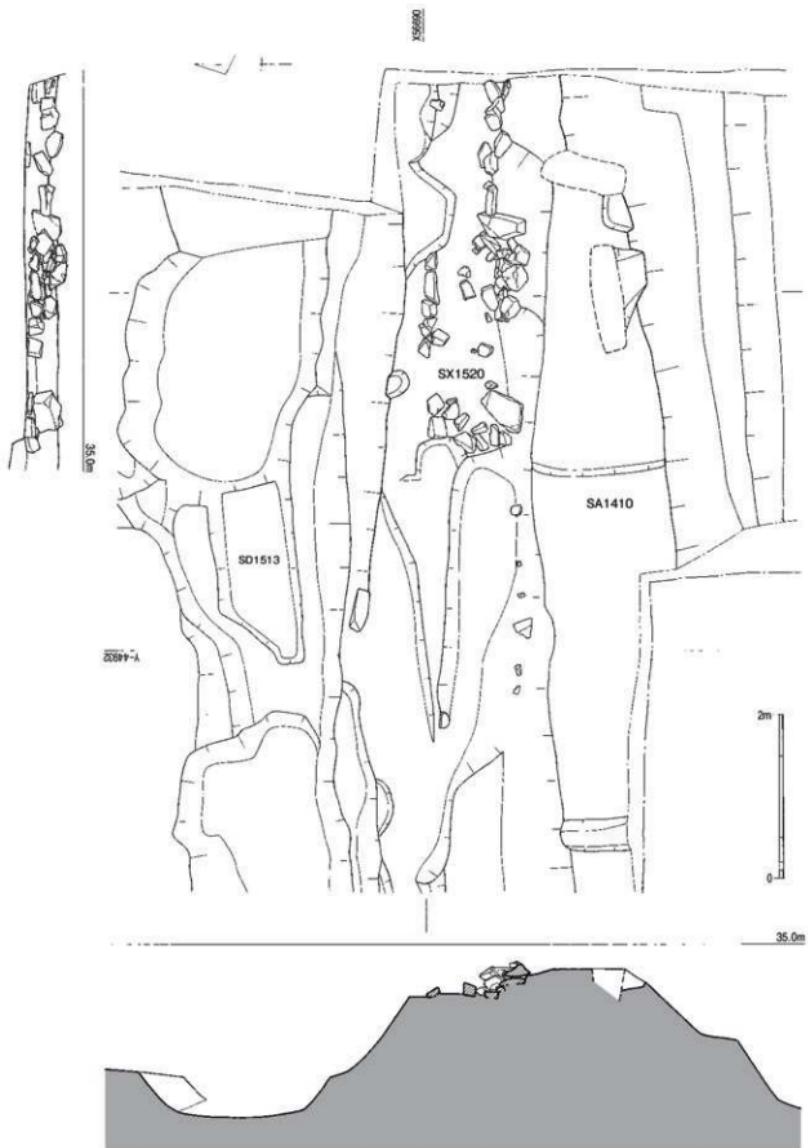


Fig.27 築地 SA1410、階段 SX1520 実測図 (1/60)



Fig.28 荘地SA1410, 横SA1553・1519, 柱列SA1514実測図 (1/100)

SA100 (Fig.22, PL.4・5)

4次調査のE 3・4Tr及びW 1・2Trで検出した東西方向の築地で、検出長は約39mを測るが、東西両端部の様相は明らかではない。特に、東端部は水田面との比高差が約2mもあり、水田下部は自然流路となっており、築地本体と自然流路との関係は定かではない。築地は基底部幅3.86～4.24mを測り、積土自体の高さは東側が0.5m、西側は0.8mで、南側に傾斜する地山（灰黄褐色粘質土）の上に構築している。

積土は基底部に暗灰色粘土を置き、茶褐色砂質土、黄色粘質土を盛っているが、版築技法によるものではなく、雑な土盛りによる。築地上面上には厚さ20cm程の茶灰砂質土が堆積し、埋土中には瓦片が含まれるが、瓦葺の築地ではなかったとみられる。また、南側上面には一辺0.6m程の穴が6個程存在するものの対をなしておらず、寄柱穴とは考え難い。なお、築地に沿って南北両側に排水溝SD101・102が並走する。

積土は雑な
土盛り

SD101 (Fig.22, PL.4・5)

築地SA100北側溝で、上面幅0.44～0.56m、深さ0.64mを測り、断面はU字形をなす。素掘りの溝で、石積による護岸は施していない。E 4Tr西壁での堆積状況は、下部から茶褐色砂・暗灰色粘質土・茶色粗砂で、自然埋没を示す。埋土中からの瓦の出土はなかった。

SD102 (Fig.22, PL.4・5)

築地SA100南側溝で、上面幅1.06～1.12m、深さ0.9mを測り、断面は逆台形をなす。SD101同様、素掘りの溝で、石積による護岸は施していない。W 1Tr西壁側では茶灰粘質土が堆積していた。埋土中から瓦の出土はなかった。

SA1400 (Fig.23・付図2, PL.9・21)

54・60・65-1次調査区において検出した東西方向の築地で、長さ120m余りを検出したが、基壇は著しい削平を受け、東半部はSD1395の流れにより破壊され、遺存状態は必ずしも良好ではない。築地下位には腐植土があり、その上に1.5m程の整地を施した後に構築しており、基底部幅は暗渠SX1390付近で幅5.2mを測る。調査区中央(Fig.23)では、0.4m程の積土が確認でき、淡茶色粘土・黒斑淡茶色土・灰白砂質土を5～10cmの厚さで積んでいる。なお、基底部には排水のための暗渠SX1515・1385・1390を埋設していた。また、築地の北縁には雨落溝SD1405が並走する。

基底部に唯
渠を埋設

SX1385 (Fig.24, PL.11)

54次調査区の東端部に位置し、暗渠SX1515との間隔は45mを測る。確認したSA1400の範囲内においては、中央部に埋設されている。掘方は長さ6.24m、幅0.9mを測る。取水口となる北側は木樋を用い、南側は石組となるが、吐水口となる南半部には石材を留めていない。木樋部分は底板1枚が残るのみで、長さ166cm、幅23cm、厚さ8cmの板材を使用している。石組箇所は長さ2.15m、内法0.4mを測る。側壁は東側が3個、西側が4個で、敷石は6個留めるが、蓋石は遺存していない。石材は花崗岩で、側壁の高さ20cm、幅20～30cm程の石を使用している。暗渠の底面は南側に緩やかに傾斜しており、主軸方位は東に11°振っている。

取水口には
木樋を使用

SX1390 (Fig.24, PL.12)

54次調査区の西側に位置する石組暗渠で、遺存状態は良好である。SX1385とは33mの間

隔で埋設されている。取水口の北側は築地北側溝 SD1405 に接続し、吐水口は SD1555 に接続する。石組は長さ 4.9 m、内法幅 0.35 m、内法高 0.2 m を測り、東壁 8 個、西壁 9 個、敷石 13 個、蓋石 4 個が遺存する。石材は花崗岩で、側壁には長さ 40 ~ 60 cm、幅 20 cm 前後の敷石より大きめの石を使用していた。なお、暗渠の掘方ではなく、築地の積土作業の過程で構築している。暗渠の底面は南側に緩やかに傾斜しており、主軸方位は東に 3° 30' 振っている。

SX1515 (Fig.29, PL.18)

石組暗渠 60 次調査区の東端から 20 m 西側に位置し、SA1400 の東側に埋設されている。SD1395 の流れにより破壊を受け、遺存状態は極めて悪く、北端の取水部を留めるにすぎない。残存長 1.1 m、内法 0.4 m を測り、北西側の石数個は動いている。石組は東壁が 2 個、西壁が 3 個で、敷石は 2 個留めるが、蓋石は遺存していなかった。石材は花崗岩で、側壁の高さは 40 ~ 50 cm、幅 30 cm 程の石を使用している。なお、暗渠の掘方ではなく、築地の積土作業の過程で構築している。

SD1405 (Fig.23・付図 2, PL.8・9)

54 次調査区の中央を東西方向に走る SA1400 に伴う北側雨落溝で、長さ 28 m 分を確認した。井戸 SE1387 に切られる。上面幅 0.6 ~ 0.8 m、深さ 0.1 m の浅い溝で、西端部は暗渠 SX1390 の 2 m 西側で終わっており、東側から流れてきた雨水を SX1390 に導いている。埋

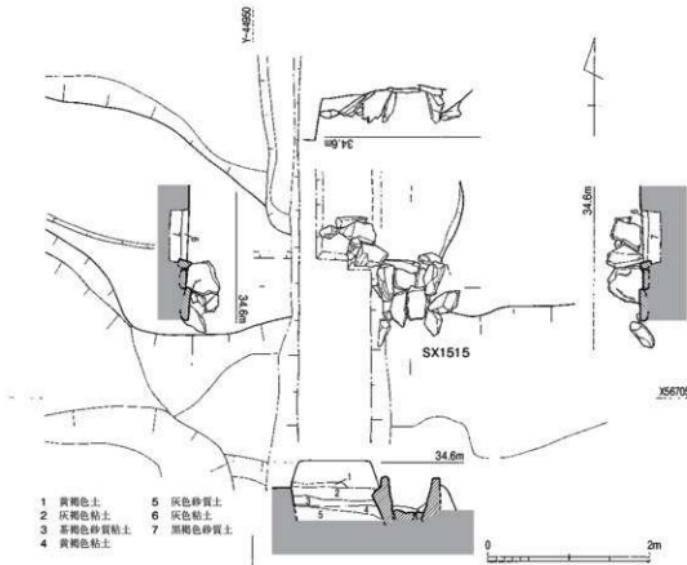


Fig.29 築地 SA1400、暗渠 SX1515 実測図 (1/60)

土は黄灰砂であった。

SA1410A・B (Fig.25～28, PL.10・17・21～23)

SA1400の12m程南側に平行して築造された築地で、65-1次調査区で西端部を、60次調査区において東端部を確認し、全体として長さ160m余りを検出した。調査区の南端は掘削を受けて段落ちとなっており、遺存状態は良好ではないが、東端部(Fig.25 土層A-A')での上面幅1.6m、基底部幅3.0m、高さ0.75mで、中央部での基底部幅は4.2mを測る。SA1400同様、築地下層には炭化物層・腐植土層があり、その上に構築している。当築地は、断割り調査により、3時期の変遷(SA1410Aa→SA1400Ab→SA1400B)があることが判した。なお、当築地に付随する施設としては、階段SX1520、門建物SX1566、足場穴SX1554、雨落溝SD1550ABがある。

SA1410Aaは当初の築地で、基壇の犬走が上下2段になる特異な構造をなす。下段の犬走は幅0.6m、高さ0.3m、上段の犬走は幅0.5mで、総幅は1.4mとなる。積土は黒茶色粘質土と淡茶色土との互層により、東壁側においては茶灰色土・黄色花崗岩風化土も積んでいた。

SA1410Abは、2段の犬走の下段を黄茶色土と暗茶色砂質土で埋め、上段犬走と高さを揃えた時期のもので、上面幅1.0mを測る。この段階で平坦面上に柱穴列SX1554を設けている。この最終段階においては、屋根から縄目叩きの瓦が滑り落ちたような状態で、犬走の肩部からSD1550Ab底面にかけて堆積していた。

SA1410Bは、SA1410Aaの屋根崩壊後に犬走上に淡茶色土を厚さ15cm程盛り、犬走を嵩上げしたもので、上面幅は0.9mを測る。この築地は自然崩壊したとみられ、54次調査区の西端部においては、築地の北側に2.2m×5.3mの範囲で多量の瓦が水平に堆積していた。下部の瓦は丸瓦と平瓦が組み合わさった状態で出土しており、屋根に葺かれた瓦がそのまま落下したことを示している。なお、瓦層の下位は築地の積土となっており、基壇化粧は施していなかった。

屋根瓦がそのまま落下

SX1520 (Fig.27, PL.18)

SA1410Bに伴う階段で、60次調査区の東端部で検出した。遺存状態は悪く、1段目を残す程度である。石列幅2.3m、基壇化粧からの出が0.7mを測ることから2段ないし3段の階段が想定される。東端部の基壇化粧は約3mが遺存し、長さ30～40cmの花崗岩を横方向に並べていた。なお、階段が存在することから、この箇所に門遺構が想定されるが、築地本体が大きく破壊を受け、門に関わる遺構は検出できなかった。

SA1554 (Fig.28, PL.8・9・21)

65-1次調査区から54次調査区の西端部にかけて検出した柱穴列で、長さ30mにおいて8個の柱穴を確認した。柱穴は径0.3～0.4mの円形を呈し、深さ0.1～0.2mを測り、2.7～4.0mの間隔を有する。底部に礎盤は施していない。SA1410Ab期の犬走上に設けられており、屋根等改修時の足場穴とみられる。

SX1566 (Fig.28, PL.21・23)

65-1次調査区南東部で検出した掘方2個で、SA1410上面中央に位置する。南側が未調査区であり、詳細は不明。右側の掘方は、一辺1.7mで、2段に掘り込まれ、深さ0.5mを測る。左側の掘方は円形を呈し、長軸2.1mで、2段に掘り込まれ、深さ0.6mを測る。両者の間隔

は7mを測り、門遺構になるか。

SD1550A・B (Fig.28, PL.23)

築地SA1410に伴う北側溝で、65-1次調査区から54次調査区の西端部にかけて長さ47m余りを確認した。東側延長部に当たる60次調査においては、自然流路SD1513・1514となつており、全体の長さは不詳。溝幅は東端部で上場1.95m、下場0.8m、深さ0.25m、西端部での上端1.3m、下端0.75m、深さ0.24mを測る。溝底の高低差は殆どなく、ほぼ水平である。なお、当溝はSA1410同様変遷しており、65-1次調査区東端土層ではSD1550Aaが最も幅が広く1.48mを測り、埋土は暗赤茶色粘質土。SD1550Abは幅1.2mで、下層に暗赤茶色土、上層に暗茶色土が堆積していた。

(3) 構

SA1519 (Fig.28, PL.23)

65-1次調査区の南端で、SD1550と並走してその北側に位置する。長さ15.19mを測り、4個の柱穴を確認した。柱穴は径0.2m前後の円形を呈し、深さ0.1～0.2mで、柱間は2.45～2.47m(8尺)を測る。方位は東西方向から北に1°振っている。

SA1553 (Fig.28, PL.23)

SA1519のすぐ南側に位置する東西方向の柵で、雨落溝SD1550と重複関係にある。SD1550と並走し、調査区の全域で柱穴を確認した。柱穴は径0.2～0.3mの円形を呈し、深さ0.1～0.2mで、柱間は2.83～3.28mとばらつきがみられるが、10尺を基調とする。なお、柱穴内には小石や瓦片が入っており、礎盤としたものであろう。

小石や瓦片
を礎盤とする

SA1580 (Fig.19, PL.28・29)

SB1560BとSB1570の中間にあり、南北溝SD1562Aの0.4m東側に位置する。柱穴4個からなる南北方向の柵で、長さ8.1mを確認したが、南側に延びるかは不明。柱間は北側から3.47m、2.49m、2.13mで、主軸方位は西に30'振っている。

(4) 溝

1) 溝

SD098A (Fig.30, PL.5・6)

SD098A・Bは、4次調査区E2Tr西側で検出した。西側丘陵の裾部に沿うように北東～南西に流下する溝である。概報では、「西北隅溝」として報告されている。SD098は新旧二時期確認されており、新しい溝をSD098B、古い溝をSD098Aとして報告する。なお、いずれも地山に切り込んで掘削されている。

古い溝であるSD098Aは、新しい溝であるSD098Bに重複するため、大きく削平を受け、幅0.5～1mと規模は小さい。深さは最大0.22mを測る。

SD098B (Fig.30, PL.5・6)

SD098Aを切る新しい溝であるSD098Bは、調査区内では長さ8m程度検出したにとどまるが、北側は西側丘陵裾部に沿いながら、北側の谷奥部まで延び、南側は概報で記されるようにSD103に流れ込むとみられる。

幅は中央部～南側にかけては 1.5 ～ 2 m 程度であるが、北端は 3 m 程度と広がり、深さは北側で 8 cm、中央部の最も深い部分で 0.2 m、南側で 0.1 m 程度を測る。溝床面には大量の礫状の小石及び繩目瓦片が敷かれたような状態で広がり、また径 0.3 ～ 0.4 m の花崗岩の自然石が 壁・瓦を数く 10 個存在する。

また SD098B と同一遺構面上で、溝に切り込む柱穴 11 基を検出したが、いずれも主軸及び柱間等がバラバラで、対応関係は不明である。

SD099 (Fig31, PL.7)

4 次調査区 N 及び STr で検出した、長さ 38 m 以上を測る南北溝である。概報では「南北溝」として報告されている。東西を丘陵に挟まれたこの場所は元々谷地形であり、その谷中央部のやや西側に沿って検出したのが、当溝である。溝の規模は幅 26 m、深さ 2 m 以上で、時代が下ると西側から東側へ溝自体が移動するとされる。



Fig.30 溝 SD098A・B 実測図 (1/60)

本箇9点出土 当溝では、NTrの5層（概報では第IV層）から大宰府史跡で初出土となる本箇9点が出土した。5層は厚さ0.2～0.4mの植物性の腐植土層で、西側で厚く、東側に行くに従い薄くなり、溝西上端から西に約10.6m付近でなくなる。この5層の形成にあたっては、概報では当溝がNTr付近で屈曲するため、西側にかたよって5層が形成されたと推測する。ということは、5層から出土した本箇を含む遺物は、大型礎石建物SB5000が存在する蔵司丘陵部よりもより上流にあたる谷部両岸の丘陵等からの流れ込みである可能性があり、7世紀末～8世紀初頭と想定されるSB5000下層掘立柱建物群に伴うとは言い切れない。また木箇は溝の西岸から5mの範囲で点在するようにして出土した。

腐敗土層は流れ込みかさらに5層上面の4層では径10cm程度の杭列としがらみを検出し、杭列は3層で被覆されていることから、この杭列は4層の時期に機能したが、3層が堆積することで機能しなくなつたとみられる。

NTrで屈曲 加えて腐植土層（5層）の下層にあたる6層は完掘していないが、主に弥生土器から構成され、溝西上端から4m東では6層は検出されていない。このように5・6層の段階では、流路はほぼ重複しており、NTr付近で屈曲する形態であったため、遺物が集中して堆積したとみられる。NTrの南32mの地点に設定したSTrでも、当溝を検出したが、幅18m程度と狭くなるとみられ、NTrで検出した腐植土層である5層は検出できなかった。

SD103（付図1, PL.4）

4次調査区のW1トレンチ中央部で検出した東西溝である。概報では、「W1Trの中央付近に位置する東西溝」として報告されている。トレンチ内では長さ2.35m分検出したいたどり、全体的な規模は不明である。幅3.2m、深さ0.235mで、溝底は南東方向に傾斜し、概報でも記されるように最終的にはSD099に流れ込むとみられる。

SD1395A (Fig.32, PL.11)

54次調査区の南東、60次調査区の南西で検出した南北方向に流下する溝で、SD1509を切る。SD1395Aが古く、SD1395Aが埋没した後に重複する位置に掘削された小規模な溝が

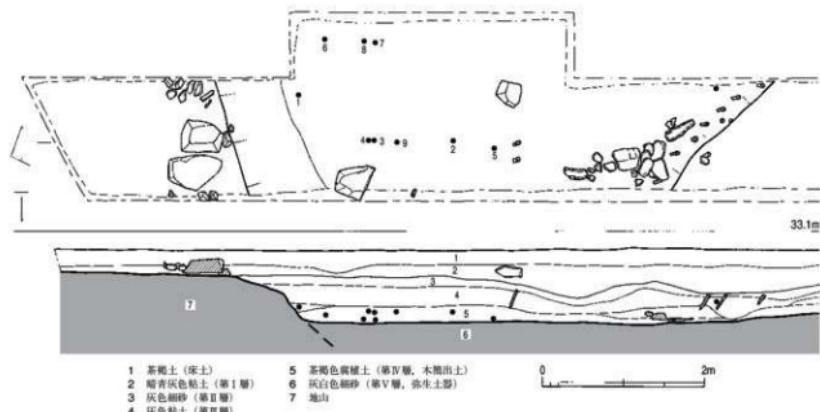


Fig.31 溝SD099実測図(1/60)

SD1395B である。いずれも整地層に切り込んで掘削されている。

古い溝である SD1395A は、長さ 26.5 m 以上、幅 3.0 m 程度、深さ 1.0 m 程度の規模である。

埋土は比較的汚れの少ない砂が互層状に堆積することから、洪水など比較的短期間の埋没による可能性が高い。

SD1395B (Fig.32, PL.11)

54 次調査区のみで検出した溝で、長さ 7.5 m 以上、幅 2.3 m、深さ 0.7 m の規模である。

SD1395A と同様、類似する砂が埋土であることから、比較的短期間の埋没による可能性がある。

SD1399 (付図 2, PL.10)

54 次調査区北東で検出した。長さ 13.5 m 以上、幅は西側は 0.7 m 程度で、東端は 3.0 m 程度と広がる平面形態である。上面で検出した溝であり時期的に新しいものとみられる。

SD1401A (Fig.32, PL.9・23)

SD1401 は 54 次及び 60 次調査区北寄りで検出した SA1400 の南側を並行に走る東西溝で、東端は SX1396、中央部を SD1555AB に切られる。SD1401A は古く、SD1401B は SD1401A を切る新しい溝である。

SD1401A は SD1401B と全体的に重複しており、65-1 次調査区の一部で北側の壁を若干検出しているのみであるが、54 次調査区では北側の壁はほぼ検出できている。一方、65-1 次調

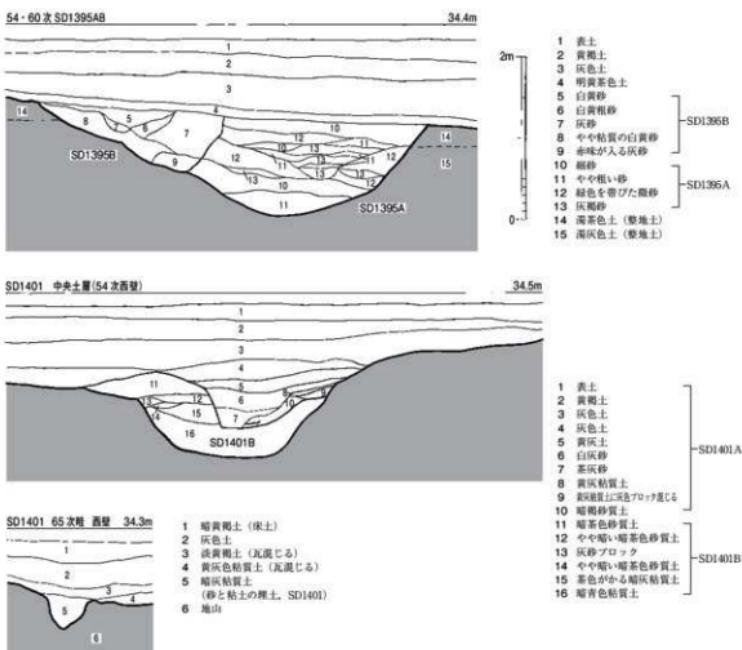


Fig.32 溝 SD1395A・B, SD1401 土層図 (1/60)

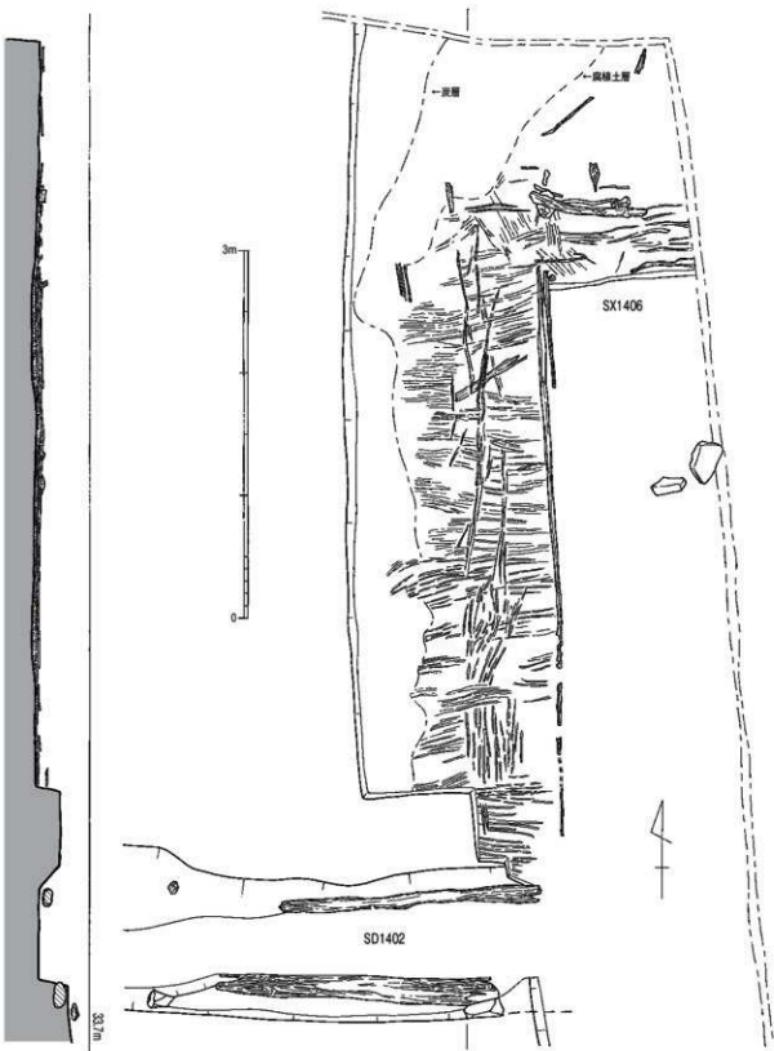


Fig.33 溝SD1402, 敷粗塗SX1406 実測図 (1/40)

査区では一部 SD1555AB と切り合うが、若干南に湾曲する。

54 次調査区では幅は 1.0 ~ 1.5 m、深さは最大 0.4 m と東側が深く、東側に流下した溝と思われるが、65-1 次調査区では幅 0.6 m、深さ 0.4 m を測り、溝底は西に傾斜するため、東西で流下する方向が異なる。調査当初は築地 SA1400 の雨落溝とも考えられたが、築地の積土が当溝まで及んでいないことが土層で観察できることから、直接の関係はないと判断される。

SD1401B (Fig.32, PL.9・23)

SD1401A と全体的に重複する溝で、当溝の方が新しいと判断される。溝の規模は長さ 69 m 以上、幅 1.2 m 前後を測る。深さは 54 次東端で 0.25 m、54 次西端で 0.39 m、65-1 次東端で 0.46 m、65-1 次西端で 0.48 m と全体的に西側に向かって流下する。埋土は粘質土と砂質土が互層状に堆積する。

SD1402 (Fig.33, PL.12)

54 次調査区北東で検出した下層遺構にあたると思われる東西溝で、SD1399 に切られ、敷粗柴 SX1406 を切る。同じく下層遺構である敷粗柴 SX1406 上の整地層を切り込んで溝を掘削していることから、一体的に機能していないとみられる。溝自体は長さ 10.7 m 検出し、東

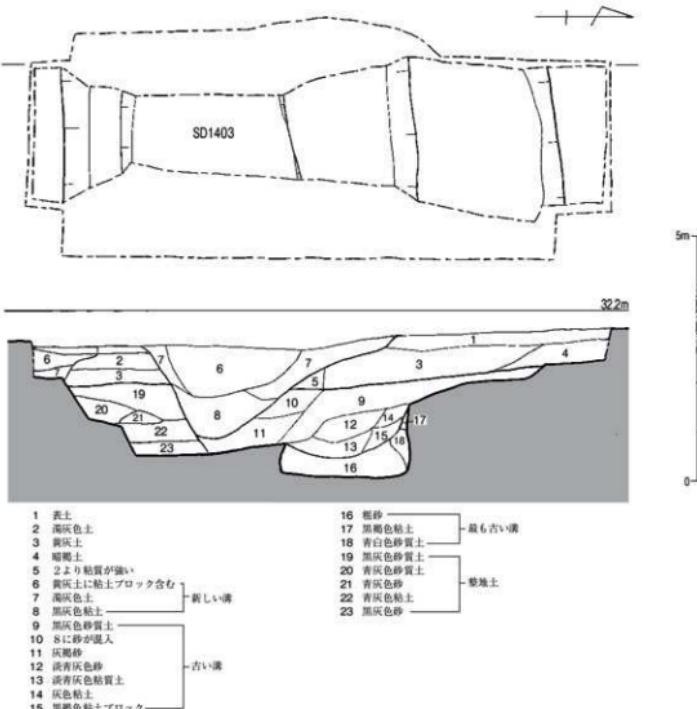


Fig.34 溝 SD1403 実測図 (1/100)

端から 7.9 m より西は北壁しか検出できていない。なお、概報でも記されているように両端ともさらに延びると思われる。幅は 1.2 m 程度、溝底は西に傾斜する。

溝東端では、溝底両端に、北は長さ 2.1 m、幅 0.1 m、南は長さ 2.3 m、幅 0.18 m の丸太材を両壁に接するように平行して設置していた。丸太材を止める杭はないことから、護岸用ないしは暗渠のどちらになるかは断定できないが、敷粗朶上に存在することから、軟質地盤のために設置された溝の壁を保護する護岸用の機能を持つと想定される。

SD1403 (Fig.34, PL.13)

築地 SA1410 南の 2 m ほど下がった段上に設定された南北トレンチで検出した東西溝である。

最上層の溝（6～8 層）は表土を切り込んでおり、かつ近代以降の陶器・ガラス片を含んでいることから最近まで機能していたとみられる。また土層から少なくとも 3 回の掘り直しと、北→南へと移動している様相も確認できた。溝の規模は最も新しい溝上面で幅 5.2 m、深さ 1.9 m、次の段階の溝で幅 3 m 以上、深さ 2 m 程度、最も古い溝で幅 2.6 m 以上、深さ 2.9 m を測る。

SD1502 (Fig.35, PL.15)

60 次調査区北東で検出した東西溝である。溝両端を搅乱により切られ、調査区内では長さ 5.5 m を検出したに止まる。幅 0.7 m 前後、深さ 0.1 m 程度で、溝底の傾斜はほぼ平らである。

SD1503 (Fig.36, PL.15)

60 次調査区北東で検出した東西溝で、ちょうど SD1502 と SD1504 に挟まれた場所に位置する。溝東側は側溝掘削のため、土層断面で検出したのみであるが、溝西側では深い掘り込みが残存する。溝幅は 0.5 m、深さは 0.47 m を測る。

SD1504 (Fig.35, PL.15)

60 次調査区北東で検出した北東一南西溝である。溝の規模は、長さ 4.6 m、幅と深さは西

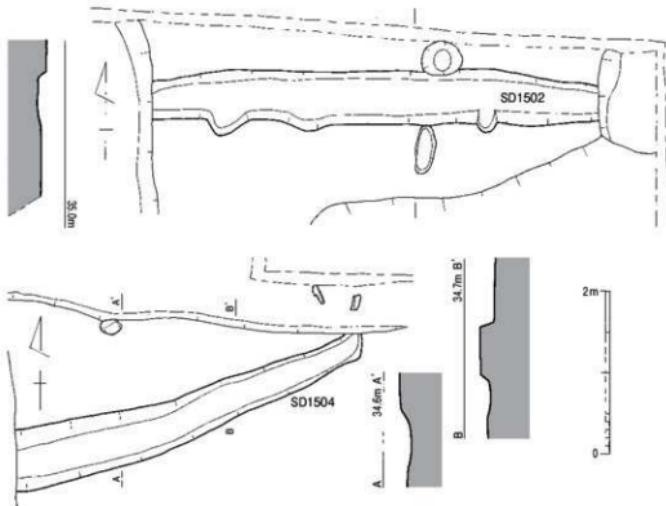


Fig.35 溝 SD1502・1504 実測図 (1/60)

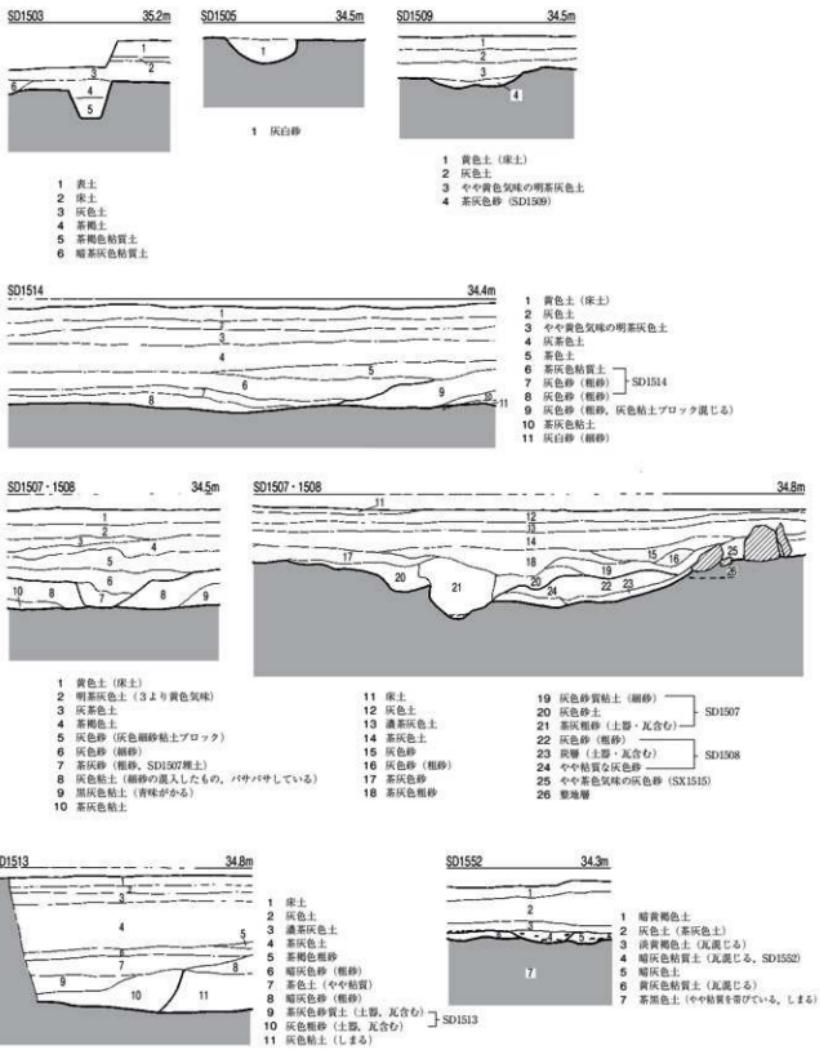


Fig.36 溝・流路 SD1503・1505・1507～1509・1513・1514・1552 土解図 (1/60)

端で幅 0.8 m, 深さ 0.11 m, 東端で幅 0.3 m, 深さ 0.07 m 程度を測る。溝底は南西に向かって傾斜する。

SD1505 (Fig.36, PL.15・16)

60 次調査区北側で検出した東西溝で、東を瓦溜 SK1510, 西を SK1571 に切られる。なお SD1504 とは一連の溝となる可能性がある。長さ 27.8 m 以上、幅 0.8 m 前後、深さは東端で 0.15 m 程度、中央部で 0.2 m 程度、西端で 0.24 m 程度と、溝底は西に向かって緩やかに傾斜する。埋土の色は灰白砂である。

SD1509 (Fig.36, PL.15)

60 次調査区西侧中央を流れる東西溝で、SD1395AB に切られる。長さ 25 m 以上、幅 0.8 m 前後、深さは 0.3 m 前後。溝底は西側に向かって緩やかに傾斜する。埋土は茶灰砂である。

流路状の大溝 SD1514 (Fig.28・36, PL.15)

60 次調査区南西で検出した流路状の大溝で、南西方向に向かって流下する。当溝底には多くのテラスや掘り込みがみられることから、古代以降北東—南西方向に存在した複数の溝が最終的に一つの溝となったとみられる。

溝の規模は、調査区内では長さ 20 m、最大幅 8.0 m、深さ最大 0.9 m を測る。なお、土層図 (Fig.36) は溝中央～北側を掲載している。

SD1552 (Fig.36, PL.21・23)

65-1 次調査区中央で検出した東西溝である。溝西側は削平されているものの、長さ 8.3 m、幅 1.0 m、深さ 0.2 m 前後を検出した。埋土は暗灰色粘質土で、多量の繩目瓦を含んでいた。

SD1555A (Fig.37, PL.21・23)

65-1 次調査区北側で検出した東西の大溝で、SD1401 を切る。溝の土層では 4 回程度を単

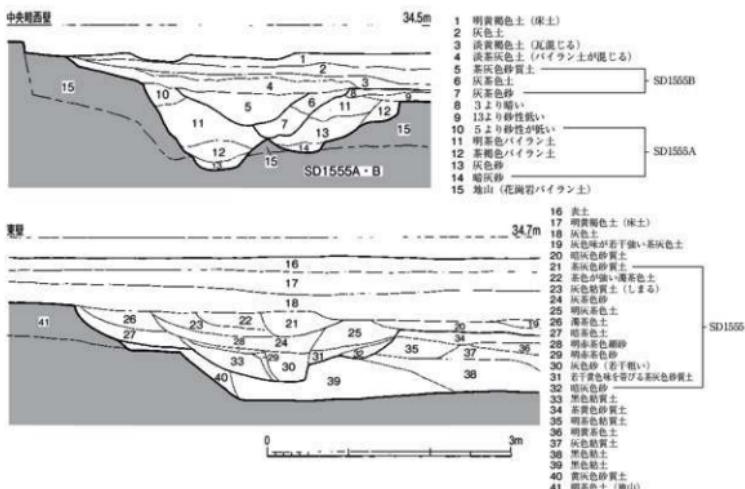


Fig.37 溝 SD1555A・B 土層図 (1/60)

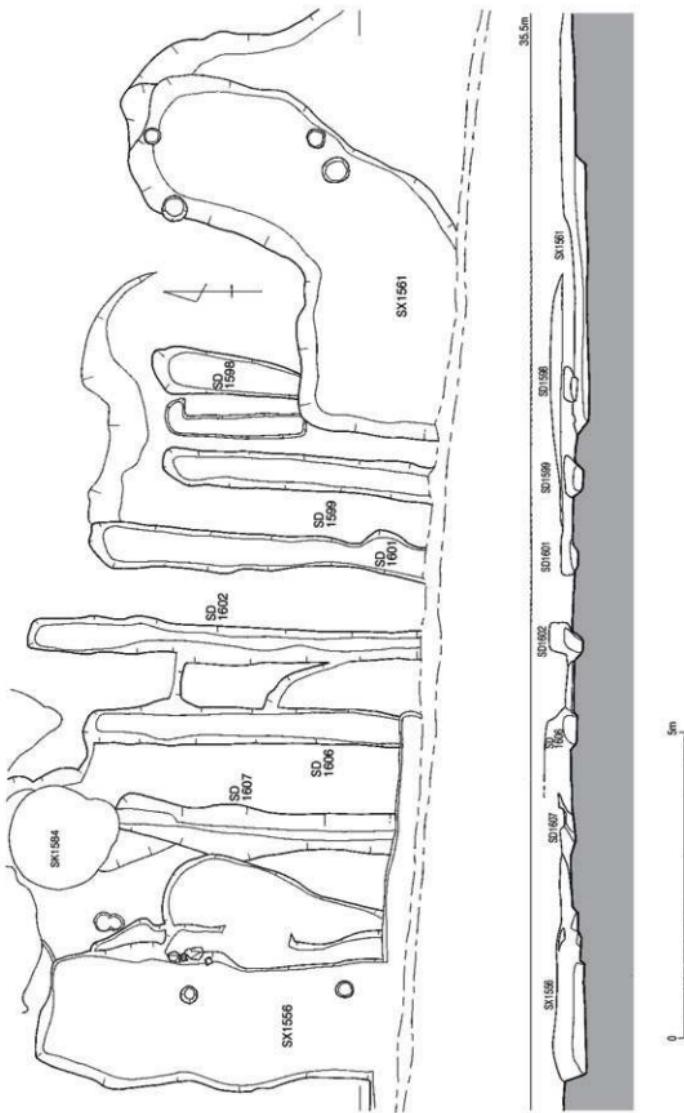


Fig.38 满 SD1598·1599·1601·1602·1606·1607, 斜方砾层 SX1561, 砂·壤土层 SX1556 突起带 (1/80)

位とする溝の堆積が認められるが、調査で平面的に確認したのは新旧二時期であり、古い溝をSD1555A、新しい溝をSD1555Bとして報告する。

SD1555Aは65次調査区の北側全体で検出し、一部は54次調査区まで延びていた可能性がある。長さ43.5m以上、最大幅3.1m、深さ1.0mを測り、溝底は西から東に傾斜している。溝底の13・14層以外はバイラン土系の堆積であることから、北側の台地部分から流入した土の可能性が高い。

SD1555B (Fig.37, PL.21・23)

SD1555A埋没後、重複する位置に掘られた溝で、土層では少なくとも2回の堆積が認められる。幅は2.15m、深さは0.6mの規模である。埋土は砂及び砂質土であることから、自然に埋没したとみられる。

SD1569 (Fig.20, PL.29)

65-2次調査区で検出したL字状溝で、SK1568に切られる。溝の規模は長さ全長5.3m、幅0.4m、深さ0.08m程度で、溝底は北→東に傾斜する。

SD1593 (Fig.21・付図2, PL.24)

65-2次調査区東端で検出した南北溝で、SB1575ABに切られる。溝の規模は、長さ7m以上、幅0.6～0.9m前後、深さは0.16～0.22m程度で、溝底は北に傾斜する。

SD1598 (Fig.38, PL.24)

65-2次調査区南西で検出したSD1598・1599・1601・1602・1606・1607は、いずれも南北溝で、主軸もおおよそ一致する。類例から、近世以降の畑の耕作溝の可能性が高い。

SD1598は、65-2次調査区南西で検出した南北溝で、落ち込みSX1561に切られる。長さ2.5m以上、幅は北側に向かって広がり、深さは最大0.17mを測る。埋土は黄色粘土である。

SD1599 (Fig.38, PL.24)

65-2次調査区南西で検出した南北溝である。長さ2.45m以上、幅0.6m程度、深さは0.12m前後を測るが、溝底は南に傾斜する。埋土は黄色粘土である。

SD1601 (Fig.38, PL.24)

65-2次調査区南西で検出した南北溝である。長さ5.55m以上、幅0.6m程度、深さは削平される南側は0.03m程度と浅いが、北側は0.14m前後を測る。溝底は南に傾斜する。埋土は黄色粘土である。

SD1602 (Fig.38, PL.24)

65-2次調査区南西で検出した南北溝である。長さ6.5m以上、幅0.6m前後、深さは0.15m前後を測る。溝底は南に傾斜する。

SD1606 (Fig.38, PL.24)

65-2次調査区南西で検出した南北溝である。長さ5.15m以上、幅0.6m前後、深さは0.1m前後を測る。溝底は南に傾斜する。

SD1607 (Fig.38, PL.24)

65-2次調査区南西で検出した南北溝で、SK1584・SX1556に切られる。長さ4.1m以上、幅0.7m前後、深さは0.1m前後を測る。溝底は南に傾斜する。

2) 流路

SD1506 (付図2, PL.15)

60次調査区北東で検出した北東から南方向に流下する流路である。造構上面で検出したことから、時期的に新しいとみられる。溝の規模は長さ14.5m以上、最大幅4.5mを測る。埋土は砂層から構成される。

SD1507 (Fig.36, PL.15)

60次調査区東中央で検出した東から西へ流下する流路で、SD1508を切る。溝中央部でダム的な性格を有するとされる護岸状造構SX1501が存在し、SD1507内にも護岸状造構SX1501を構成していたとみられる跡が存在することから、SX1501北端は少なくとも当溝まで存在したとみられる。またSX1501東西では当流路の流れが変化する。規模は、長さ37.5m、幅1.3m程度、深さは平均0.4m前後を測る。埋土は粗砂から構成される。

SD1508 (Fig.36, PL.15)

60次調査区東側中央で検出した、東から西に流下する流路で、SD1507に切られる。SD1507とは基本的に流れが一致するため、一連の流路となる可能性が高い。規模は、長さ35.5m、幅は東側では0.5m程度と細いが、西側は幅1.5mと幅広くなる。深さは中央部は最大0.6m程度と深いが、平均0.1m程度と浅い。埋土は砂層から構成される。

SD1513 (Fig.36, PL.15)

60次調査区南東で検出した、東から西に流下する流路である。築地SA1410と並行する。規模は、長さ13.5m以上、幅2.5m、深さ0.7m前後を測る。埋土には土器、瓦が多く混じる。

(5) 井戸

SE1387 (Fig.39, PL.13)

54次調査区西側で検出した。土坑SK1388に切り込む形で構築される。掘方は隅丸方形を呈し、径約0.8mと考えられる。底部には残存する高さ約10cmの曲物を据えており、その外側は平直で丁寧に補強するように立て掛けられている。瓦の残り具合からみると、曲物の高さは30cmほどが想定される。

SE1558 (Fig.39, PL.30)

65-2次調査区西側、SB1560のすぐ東側で検出した。径1.7m、深さ2.0mの円形掘方の内部に、横棒と曲物を組み合わせた井戸枠を据えている。枠の上部は厚さ1cmの薄い板を1~2枚合わせて横に使用し、縦横60cmのものを使用する。隅の接合は合欠き、隅柱はなく、隅部の枠の内外に瓦を立てて補強する。下部構造は、径約60cm、高さ約30cm、厚さ0.6cmの小型の曲物を中心据える。

SE1559 (Fig.39, PL.30)

65-2次調査区中央のSB1565Bを切った形で検出した。径1.2m、深さ2.0mの円形掘方の内部には、下部に曲物と曲物の底板を使用した枠が残される。曲物は厚さ1cm前後、高さ約30cmのもので、1/4が欠損し、その欠けた部分には曲物の底板を立てて補う。枠の内側に接するように3本の杭を打ち、内側へ倒れるのを防ぐものである。

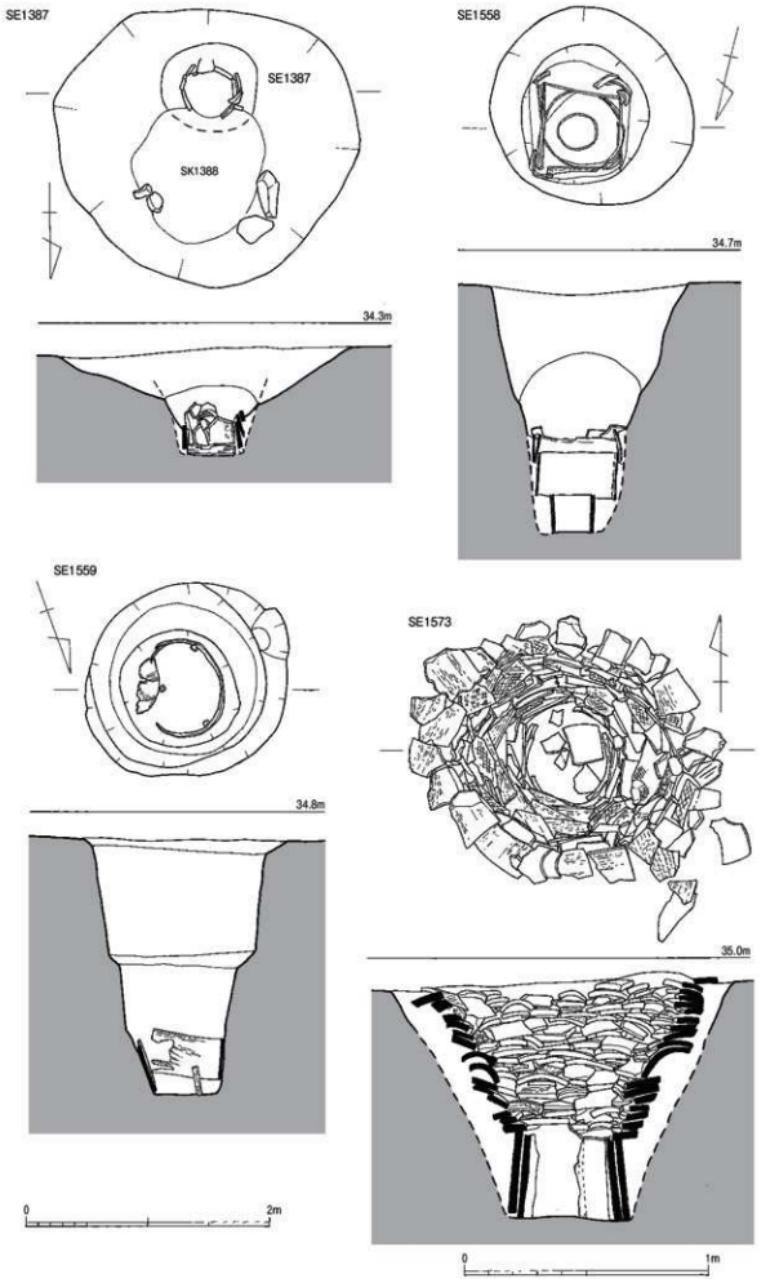


Fig.39 井戸実測図 (1/20・1/40)

SE1573 (Fig.39, PL.31)

65-2 次調査区東側, SB1575 の西側で検出した。円形の掘方で丸瓦, 平瓦, 軒平瓦を平らに並べ, すり鉢状に積み重ねる。上部の径は 0.9m, 下端部の径は 0.4m, 深さは 1.0m の小型のものである。すり鉢状の掘方の下部には, 長さ約 35cm の完形の平瓦を径 0.4m の円周に二重に立て並べる。概報段階では, 形状の特異性から井戸様の不明遺構としていたが, 今回は井戸とみて報告する。黄色土層の下層から切り込んで構築される。

(6) 土坑

SK097・104 (Fig.40, PL.7)

4 次調査区 W 3 Tr 中央で検出した。東側の SK097 が SK104 を切っている。SK097 は長軸約 2.1 m, 短軸約 1.3 m 以上で, 茶褐色砂層の埋土で中央部に径約 0.7m, 深さ約 0.15m の方形の穴が掘られ, 中に石と須恵器の壺が倒立して出土した。SK104 は一辺約 1.2 m, 深さ約 0.15 m のややいびつな方形で, 茶褐色砂質土に粘土ブロックが混じる埋土である。

SK1386 (Fig.40, PL.11)

54 次調査区東南側で検出した。地山に掘り込んでおり, 径約 1.6 m, 深さ約 0.8 m の円形の穴の内部に石組みを構築する。石組みの高さは約 0.7m で, 内側に径 0.3 m の空間を作り出す。下部には石を欠くが, 中から瓦と共に木片が出土しており, 内側に木組みを用いた井戸であった可能性も考えられる。

SK1388 (Fig.39, PL.13)

54 次調査区の北西部で検出した。径 2.3 ~ 2.5 m, 深さ約 0.8m で平面円形のすり鉢状の断面を呈する。茶色土層から切り込んでいるが, SE1387 に切られている。中からは多数の石と共に瓦が投げ込まれていた。瓦の廃棄土坑とみられる。

SK1389・1391 (Fig.40, PL.9)

54 次調査区 SK1388 の西隣で検出した。双方は接しており, 共に明茶色粘土から掘り込まれた不整円形の土坑で, SK1391 が 1389 を切っており, その前後関係が窺われる。双方合わせた長軸は 4.5 m, 短軸は 1.4 m 以上, 深さは 0.5 m である。

SK1392 (Fig.41, PL.10)

54 次調査区中央部北よりで検出した。深さ約 0.2 m の不整円形の土坑で, 整地土に掘り込まれる。中からは石・土器・瓦が多く出土した。SA1400 や SD1405 と重複しており, それらを切っている。

SK1393 (Fig.40)

54 次調査区中央部南寄りで検出した。SX1394 を切り, SX1396 の下層にあたる。完掘していないため, 長軸 2.5 m 以上, 短軸は 1.4m 以上と寸法は不明確だが, 深さ 0.6 m の梢円形を呈するものと思われる。

SK1398 (Fig.41, PL.10)

54 次調査区の SK1392 の東側で検出した。不整円形で, 長軸 3.0 m, 短軸 2.6 m で, 深さは 0.1 m, 0.2 m, 0.35 m と 3 段になる。双方の切り合いなどは不明である。SD1399 を切っている。

SK1407 (Fig.41, PL.8)

井戸様遺構

石組み遺構

瓦廃棄土坑

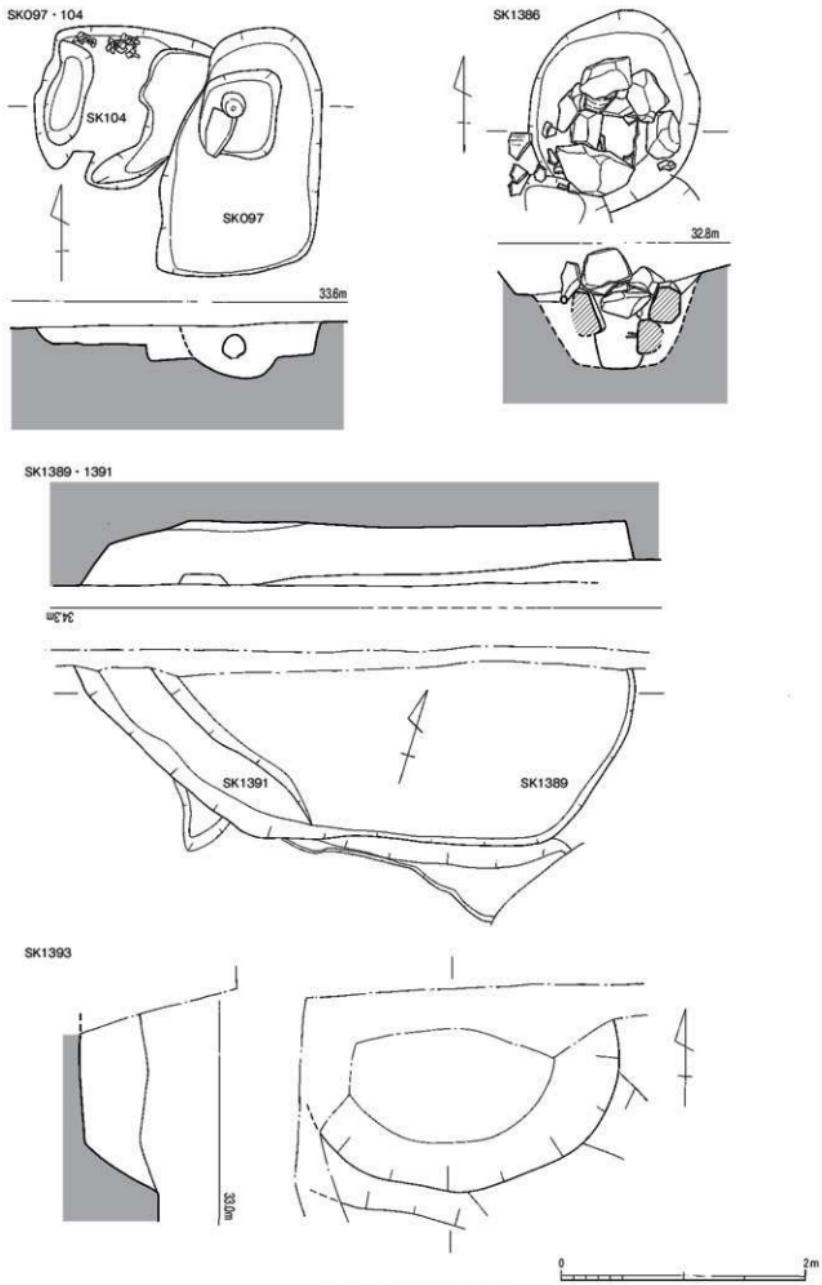


Fig.40 土坑実測図① (1/40)

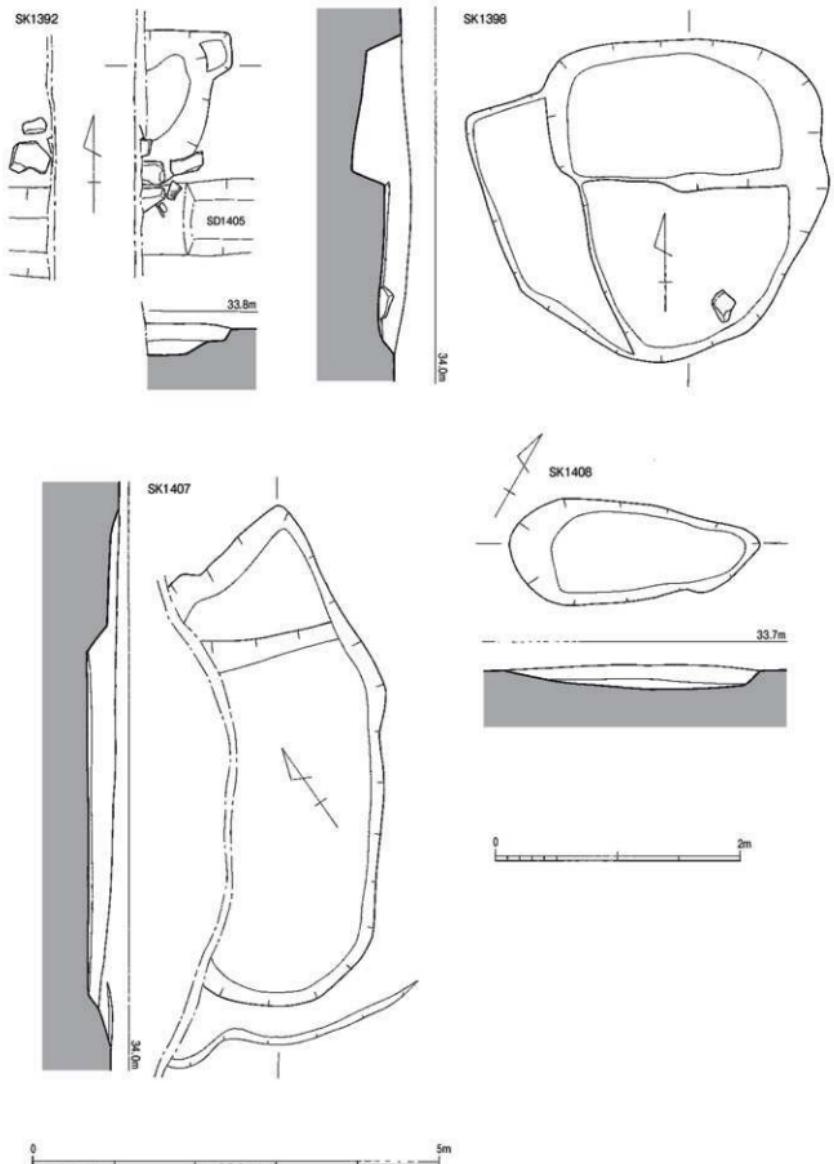
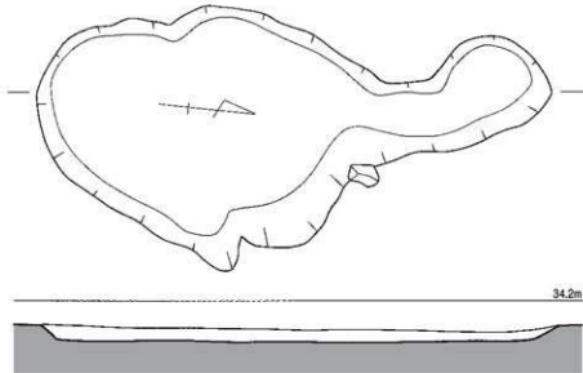


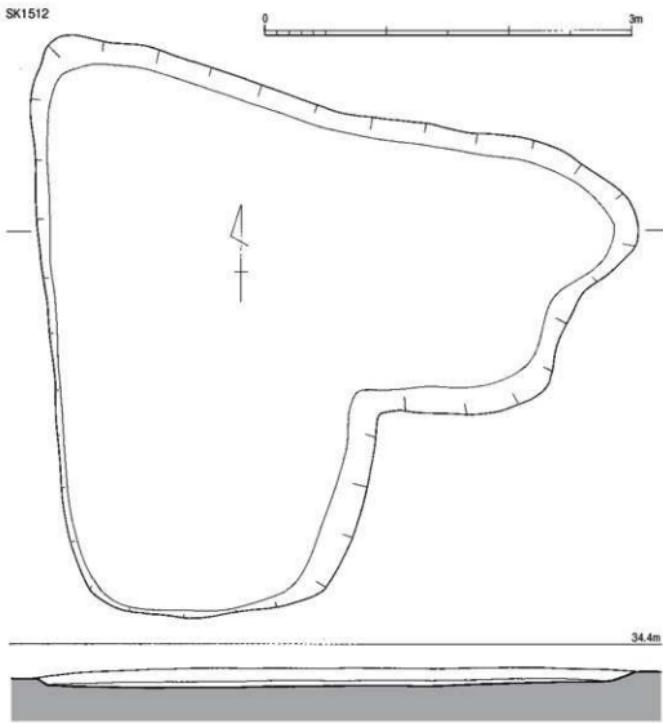
Fig.41 土坑実測図③ (1/40・1/60)

SK1511



34.2m

SK1512



3m

34.4m

Fig.42 土坑实测图③ (1/40)

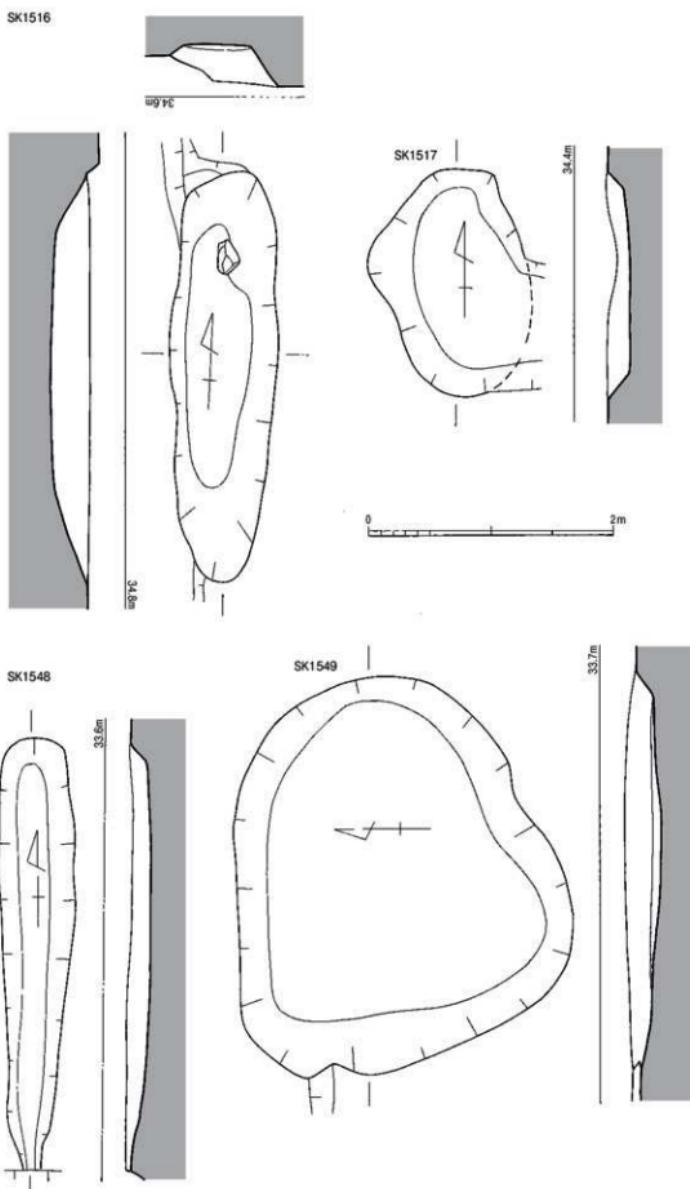


Fig.43 土坑実測図④ (1/40)

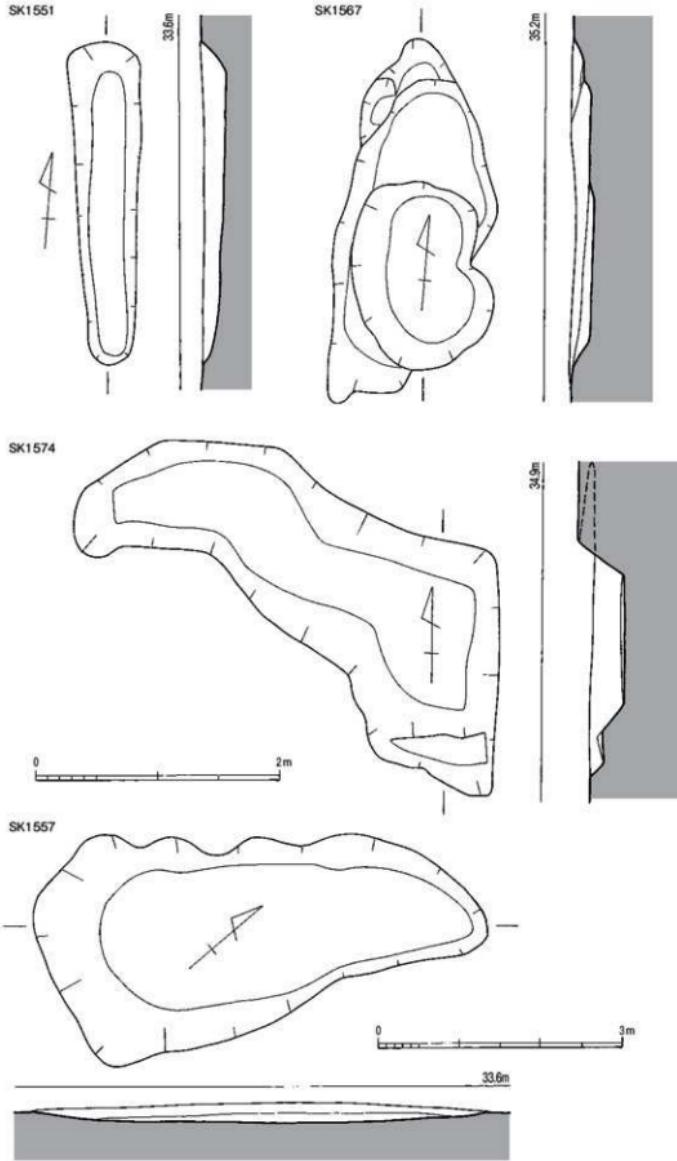


Fig.44 土坑实测图⑤ (1/40 - 1/60)

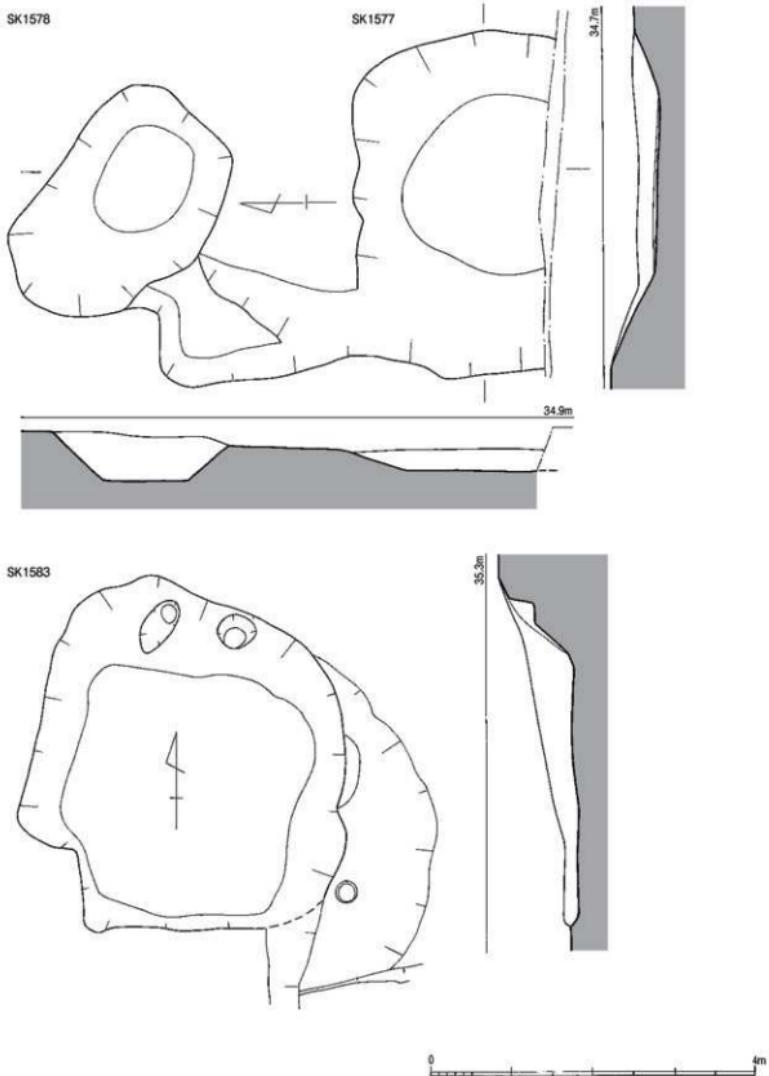


Fig.45 土坑実測図⑥ (1/60)

54次調査区の中央部北端で検出した。長軸6.1m、短軸2.0m以上の細長い平面形で、深さは0.1m、0.25mと2段になる。北西側は調査区外のため、その形状は不明である。

SK1408 (Fig.41)

54次調査区中央部で検出した。SA1400と重複するが、SA1400を切る。長軸2.0m、短軸0.8mの楕円形を呈し、深さは0.2mである。

SK1511 (Fig.42, PL.15)

60次調査区北西隅で検出した。長軸4.2m、短軸2.2mの不整円形の土坑で、深さは約0.2mである。出土遺物はない。

SK1512 (Fig.42, PL.15)

60次調査区SK1511の東に隣接して検出した。不整なL字形の平面形を呈し、東西約4.7m、南北約5.0mで、深さは約0.2mと浅い。出土遺物はない。

SK1516 (Fig.17・43)

60次調査区中央部北よりで検出した。南北方向に長い溝状の土坑で、長軸約3.4m、短軸約0.9m、深さは0.3mである。

SK1517 (Fig.43, PL.15)

60次調査区北西隅で検出した。東西溝SD1505の西端と接続する形で検出したが、溝を切っ

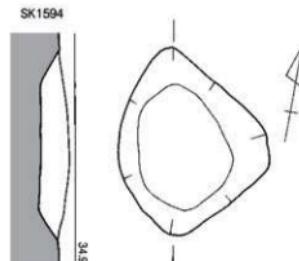
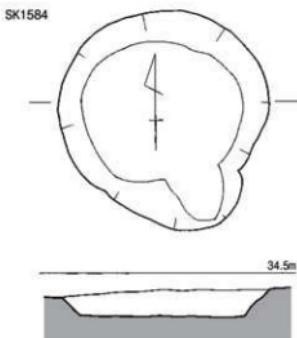
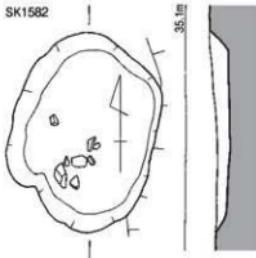
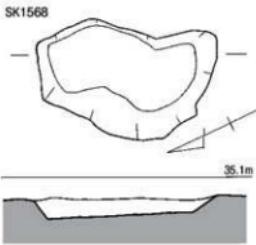


Fig.46 土坑実測図⑦ (1/40)

ている。長軸 1.9 m, 短軸 1.3 m, 深さ 0.1 ~ 0.2 m の楕円形を呈する。

SK1548 (Fig.43, PL.21)

65-1 次調査区東部中央で検出した。南北方向に細長い溝状の土坑で、長軸 3.5 m, 短軸 0.65 m, 深さは 0.15 m である。南端は SD1550 と重複するが前後関係は不明。

SK1549 (Fig.43, PL.23)

65-1 次調査区東部中央で検出した。長軸約 3.4 m, 短軸約 2.8 m, 深さ 0.3 m の不整円形の土坑である。

SK1551 (Fig.44, PL.21)

65-1 次調査区東部中央で検出した。南北方向に細長い溝状を呈し、長軸 2.65 m, 短軸 0.6 m, 深さ 0.2 m の土坑である。当遺構の東 1.5 m 地点にはほぼ並行する形で SK1548 を検出しており、一対の遺構として認識できる可能性も考えられる。

SK1557 (Fig.44, PL.21)

65-1 次調査区東部中央やや東よりで検出した。長軸約 5.6 m, 短軸約 2.8 m, 深さ約 0.25 m の不整な楕円形を呈する土坑である。規模の大きさに比べて浅いため、土坑というより落ち込みという印象を受ける。

SK1567 (Fig.20・44)

65-2 次調査区中央部で検出した。長軸約 2.7 m, 短軸約 1.2 m の不整円形の土坑だが、深さは 0.05 ~ 0.15 m と複数段になっており、複数の遺構の切り合いが想定されるが、そのような切り合いは確認されていない。

SK1568 (Fig.20・46)

SK1567 の南東隣で SD1569 と重複する形で検出した。長軸 1.5 m, 短軸 0.9 m, 深さ 0.1 ~ 0.15 m の不整な楕円形の土坑である。出土遺物はない。

SK1574 (Fig.44)

65-2 次調査区東よりで検出した。長軸約 4.0 m, 短軸約 1.6 m, 深さ約 0.4 m のいびつな形状の土坑である。SX1572 と重複する。

SK1577・1578 (Fig.45)

65-2 次調査区中央部東よりで検出した。南側に SK1577, 北側に SK1578 が並び、SK1577 の長軸約 4.0 m, 短軸約 2.7 m, 深さは 0.4 m, SK1578 の長軸約 5.7 m, 短軸約 3.1 m, 深さは 0.7 m の共に不整形土坑である。SX1572 と重複する。

SK1582 (Fig.20・46)

65-2 次調査区の SK1577 のすぐ西側で検出した。長軸約 1.8 m, 短軸約 1.2 m, 深さ約 0.15 m の楕円形の土坑で、中から瓦などが出土した。SK1577 と重複する。

SK1583 (Fig.45)

65-2 次調査区の東側で検出した。長軸約 5.9 m, 短軸約 4.8 m, 深さ 0.1 ~ 1.25 m の不整形の大きな土坑である。SX1572 と重複する。

SK1584 (Fig.46, PL.25)

65-2 次調査区西側、SB1560 のすぐ南側で検出した。直径約 1.7 m, 深さ約 0.25 m の円形土坑である。出土遺物はなく、SD1607 と重複する。

SK1594 (Fig.46)

65-2 次調査区東部で検出した。長軸 1.5 m, 短軸 1.2 m, 深さ 0.2 m の不整形な土坑である。SX1572 と重複する。

(7) その他の遺構

1) 木樋

SX1404 (Fig.47・48, PL.14)

54 次調査区西側北寄りを掘り下げた際に確認した下層遺構である。SX1404 周辺の地盤補強のために行われたとみられる腐植土層は主に上下 2 層あり、その範囲は長さ 17 m, 幅 5 m 検出している。木樋 SX1404 は樹皮及び草葉を基本的に東西方向に面的に敷き詰め、その上に細かい自然木を南北方向に置いた下層の腐植土層上面に設置されている。

一本造の
木

木樋は長さ 3.46 m, 径 0.2 m の丸太材の上面に凹形の溝を掘っており、東端から 14 cm のところで溝は止まり、径 6 cm の穴で上面に至る。溝を塞いだ木蓋は一部残存し、木樋自体は、東端両側に径 9 cm の杭が打たれ、固定されている。また木樋は西側が 6 cm ほど高く設置されていることも、溝の形態と一致している。後に動いている形跡はみられず、原位置を保っていると考えられる。

導水施設か
り込み等は調査区内では未検出である。おそらく導水施設とみられるが、どのような機能や目的を持った施設かは不明である。

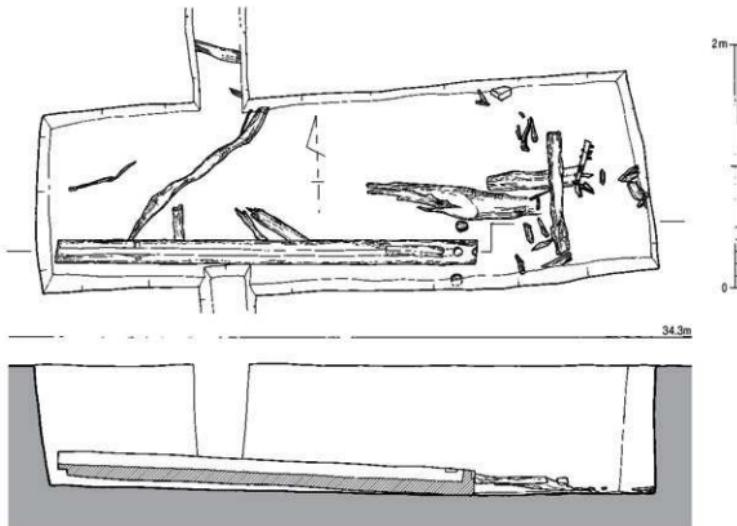


Fig.47 木樋 SX1404 実測図 (1/40)

2) 石組遺構

SX1397 (Fig.49, PL.11)

54次調査区中央南端で検出した円形状を呈する落ち込み内に構築された石組遺構である。SK1386・SK1394・SD1395ABに切られる。東西12m以上、南北6.5m以上の落ち込み南側に花崗岩の自然石による最大2段程度の石組が長さ7m前後みられるが、SD1395ABからの流水により破壊され、詳しい構造は不明である。

SX1409 (Fig.50, PL.14)

54次調査区の築地SA1410南の比高差2mほどの下がった段上で、藏司地区官衙庁周辺官衙の不丁地区官衙と大楠地区官衙を画する境界溝であるSD320の北延長線上に設定されたトレンチで検出した石組遺構である。なお、SD320の関連する溝は確認できなかった。

SD1395ABからつながると思定される溝の出口に、1m近い石を含む人頭大の大きさを中心とする花崗岩の自然石が幅7mの範囲に集石されていた。おそらく溝の水位を調整するための施設の痕跡とみられるが、流水による破壊が顕著なため、詳しい構造は不明である。

3) 護岸状遺構

SX1501 (Fig.51, PL.19)

60次調査区中央やや東寄りで検出した。自然流路であるSD1507に対して直交するよ

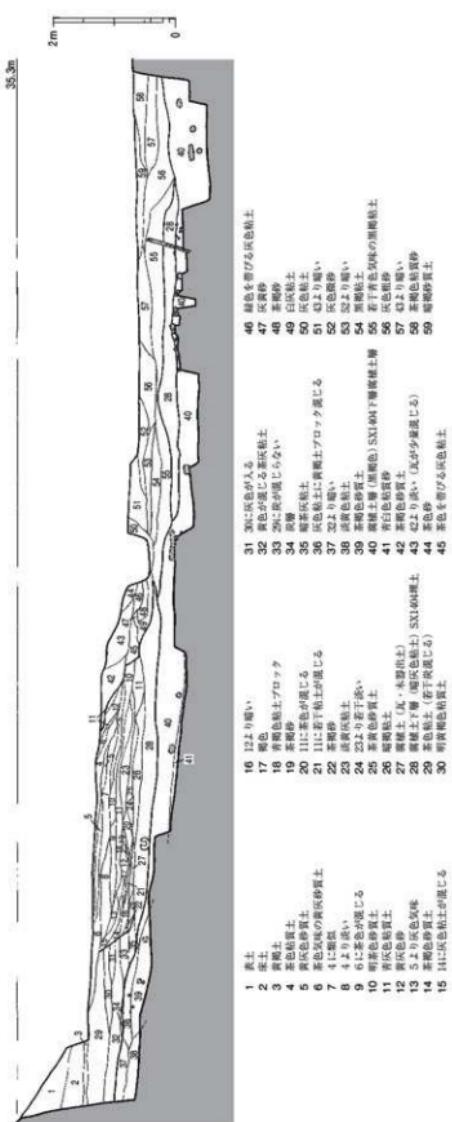


Fig.48 木曽 SX1404 土壁跡 (1/80)

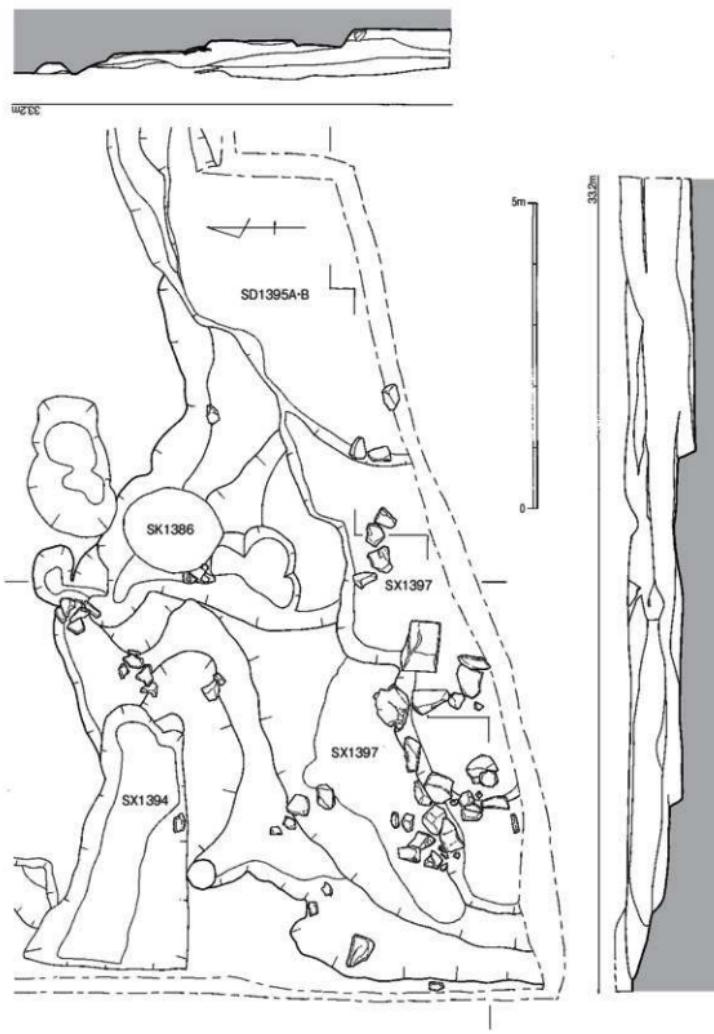


Fig.49 石組遺構 SX1397 実測図 (1/80)

うに造られた護岸状遺構とみられる。なお、54次調査区南側はSD1507・SD1508・SD1513・SD1514・SD1395AB等の東西方の溝及び流路が存在し、古代以降複数の流路が形成されていたと想定される。

SX1501は、この流路の最終堆積である灰色砂質土の下層から灰色砂質土にもたせかけるように造られており、古代以降の構造物であると考えられる。なお、機能としてはSD1507の水位を調節するための構造物であったと想定される。

SD1507内にいくつかの花崗岩がみられるため、SD1507までは北に延びていたのは確実であるが、その北のSD1508付近まで延びていたかどうかは不明である。東西方向の流路全体の水位を調整するという機能を考慮すると、SD1508まで延びていた可能性がある。なお、規模は残りの良い南側で基本的に花崗岩の自然石を積み上げることにより、高さ0.9m、幅2.3m以上を測る。

4) 瓦溜

SX1596(付図2)

65-2次調査区中央北側、SB1565ABとSB1560AB間で検出した。掘り込み状のものは確認できなかったが、遺構面上に南北約4m、東西約3mの範囲で多量の瓦が堆積する。

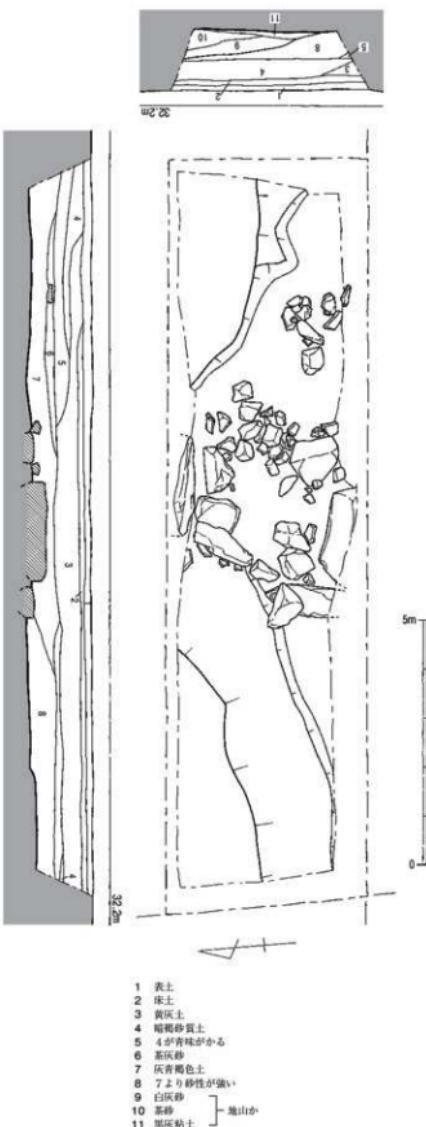


Fig.50 石組遺構 SX1409 実測図 (1/100)

5) 落ち込み

SX1394 (Fig.49・53, PL.11)

54次調査区中央南で検出した溝状の落ち込みで、SK1393, SX1396に切られる。長さ9.2m以上、幅最大2.5m、深さ最大0.6mを測る。床面は地形とは逆の北西と傾斜することから、溝とはしなかった。埋土から付札状木製品2点が出土した(Fig.138-27・28)。

SX1396 (Fig.53)

54次調査区中央南で検出した大型の不整形の落ち込みで、SA1400・SK1393・SD1401・SX1394を切る。南北幅9m以上、深さ0.6m前後を測る。

SX1518 (付図2)

60次調査区南東隅、築地SA1410で検出した。ほとんどが調査区外であり、全容は不明であるが、深さ1.2mと深い。

SX1561 (Fig.38, PL.24)

65-2次調査区南西隅で検出した。平面形は逆L字を呈する不整形の土坑状の落ち込みで、SD1598を切る。規模は東西4.65m、南北5.4m以上、深さ0.2～0.3mを測る。床面は南西側に傾斜し、小ピットが2基存在する。埋土には多量の瓦が混じっていた。

SX1556 (Fig.38, PL.24)

65-2次調査区南西隅で検出したもので、SB1565Aに切られ、SD1607を切る。このSX1556は現状で南北5.65m以上、東西3.9m、深さ0.3m程度の規模である。

焼土と炭が厚く堆積
当遺構上層には瓦が多く堆積しており、それを除去すると焼土と炭が厚く堆積する状況を確認できた。炭層自体は北側のSB1565A付近まで広がっており、SB1565Aはこの炭層を切つ

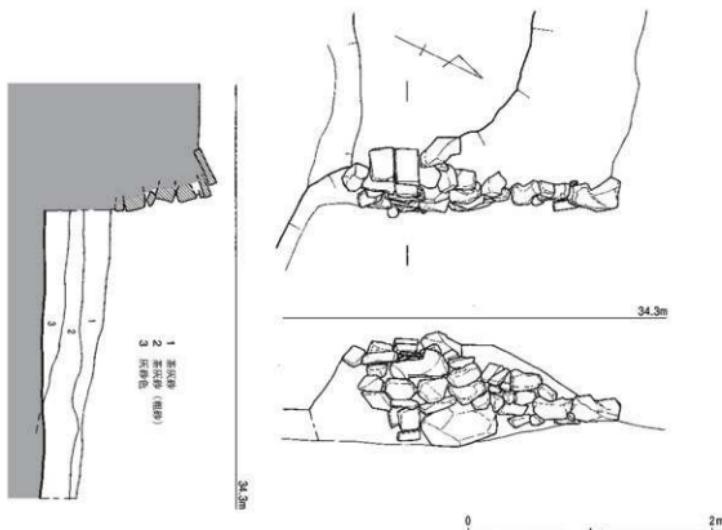


Fig.51 護岸状遺構 SX1501 実測図 (1/40)

て造られている。埋土からは縦羽口が出土しており、当遺構内では工房関連遺構は確認できなかったものの、炭層の広がり具合から、当遺構北側を中心とする場所に工房関連遺構が存在する可能性が高い。床面にはピット2基存在し、南に傾斜する。また東には低いテラスが存在する。

SX1572 (Fig.54, PL.24)

65-2次調査区東で検出した、大型で不整形の落ち込みである。SE1573に切られ、SK1577・SK1578・SK1582・SK1583にも切られると考えられる。SK1574・SK1594は当落ち込み床面上で検出しているため、切り合い関係は不明確である。

規模は、東西14.3m、南北11.7m以上、深さは最大0.5m前後となり、床面はほぼ平らであるが、南に若干傾斜する。埋土は灰褐色土である。

6) 敷粗朶

SX1406 (Fig.33・52, PL.14・20)

54次調査区北東及び60次調査区北西の上層の遺構面・整地層である黄色粘土層の直下、炭層と腐植土層上面に構築されており、現状で東西幅11.5mを測る。54次調査区側はSD1402

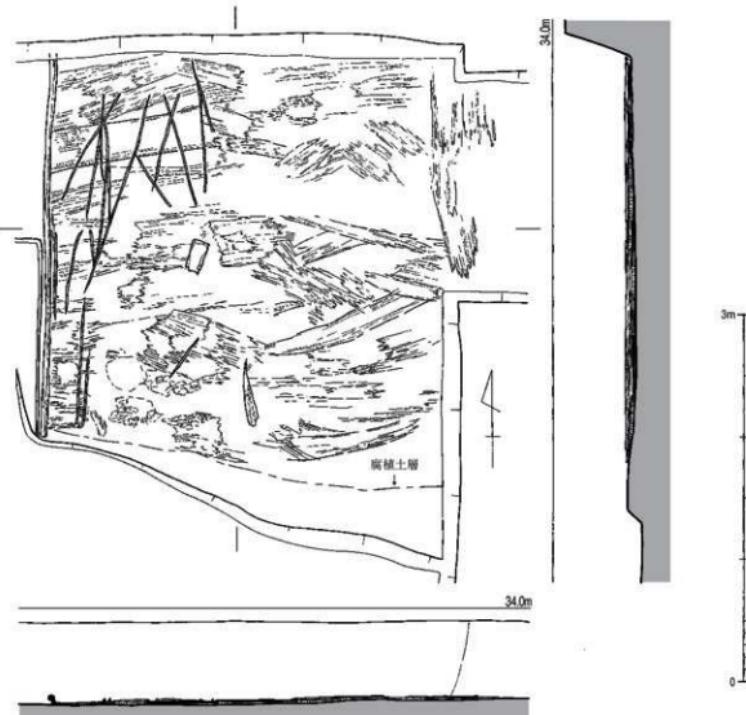


Fig.52 敷粗朶 SX1406 実測図 (1/40)

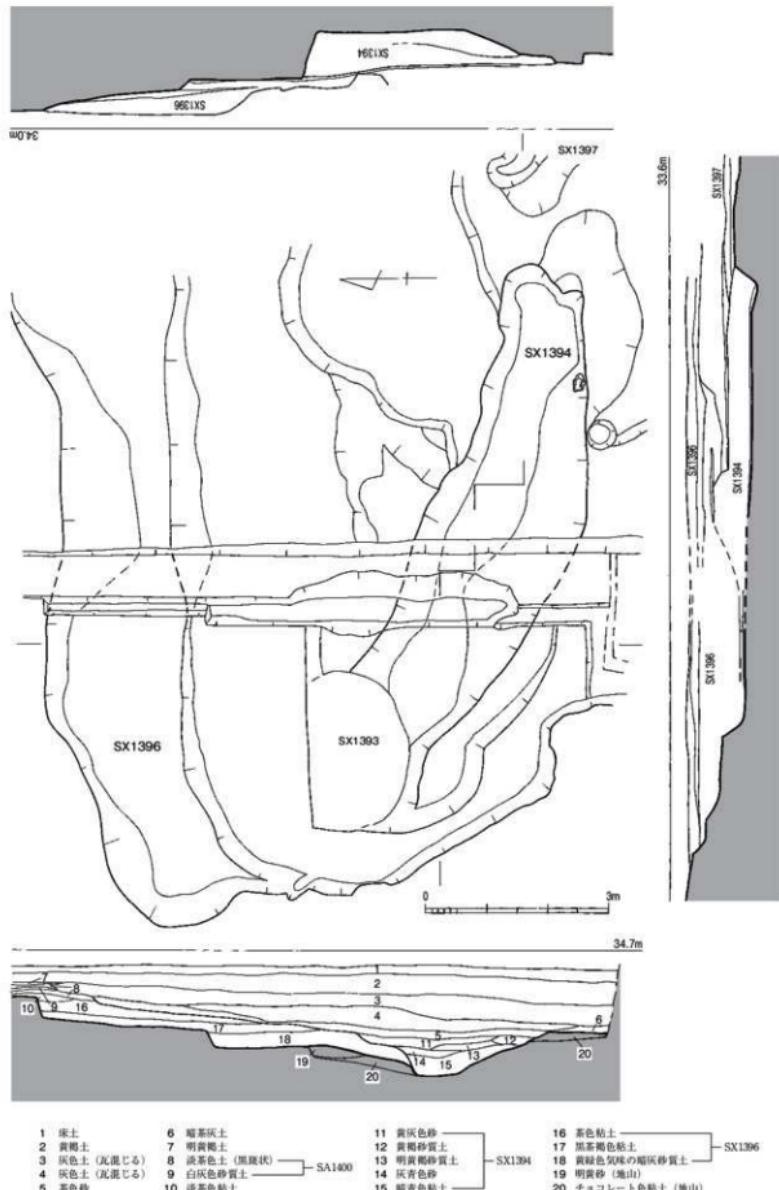


Fig.53 落ち込み SX1394・1396 実測図 (1/80)

により切られる。なお、木樁 SX1404 でも腐植土層を南北 17 m、東西 5 m の範囲で検出していることから、54・60 次調査区では地盤が弱い箇所に敷粗朧を施して整地したと考えられる。

54 次調査区の SX1406 は 1~2 本の細い未加工の丸太材が約 4.7 m にわたって南北方向に置かれ、一部を細杭で固定している状態であった。丸太材の北端には直角に東に折れる別の丸太材が接しており、約 1.5 m で調査区外に延びている。南端は SD1402 に切られる。丸太材の西・北側には一面に 1 m 前後の幅で木皮ないしは草様の植物纖維がまんべんなく敷きつめられ、それを縫うように細い未加工の木の枝が配されていた。植物層の下には黒色の灰層が認められた。

60 次調査区では方位を若干東に振って、細い自然木を置き、その東側に木皮ないし草葉状

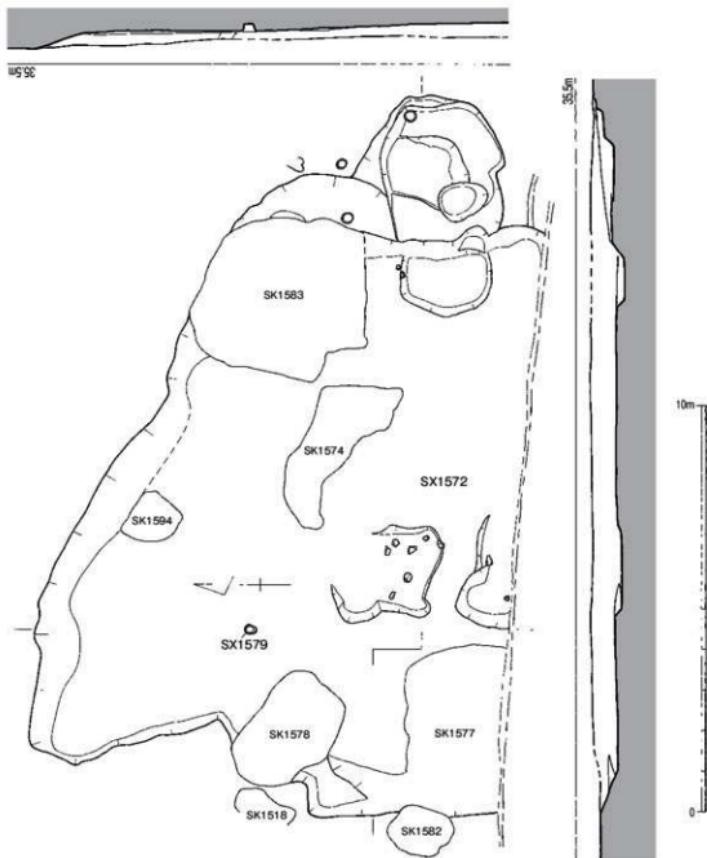


Fig.54 落ち込み SX1572、ビット SX1579 実測図 (1/120)

の植物を敷きつめ、この間に細枝を縫うように配していた。

第 54 次調査の結果と照合すると、両側部分の自然木は西に振り、東側部分は東へ若干振っていることから北側が広く、南側は狭くなる。南端を欠失しているが、残存部南北長 4.9 m、北端部の東西幅約 6.85 m の「コ」字状を呈するものとなる。

なお概報刊行当時の所見としては、湿地帯の上に直接配されていることから湿気抜きとも考えられたが、規則正しく配され、また南側部分に何の造作も認められないことから、別の性格を有したもの可能性も想定されていた。

同様の遺構は、蔵司前面の政府前面広場地区 81・86 次の SX2324 及び 136-2 次の SX3938 がある。これらは、谷筋を埋め立てる際の地盤補強のための所作であることが確認されており、本遺構と同様、腐植土層、樹皮・草葉を敷く敷粗染、整地層からなる。以上のことから、本遺構も地盤補強のための遺構とみられる。

生産関連遺物
は下層に伴う なお、炭層・腐植土層からは、轆羽口、埴堀等工房関係の遺物や漆付着土器や漆が付着した木製の箒などがまとまって多数発見されている。

7) ピット

SX1579 (Fig.54)

鋳型が出土 65-2 次調査区東の落ち込み SX1572 上面で検出した、小ピットである。径 20cm、深さは 9 cm であるが、埋土から鋳型が出土した。

第IV章 出土遺物

Tab.3 軒丸瓦出土点数一覧

(1) 瓦磚類

1) 軒先瓦

①軒丸瓦 (Fig.55 ~ 57, Tab.3
・4, PL.32・33)

大宰府史跡において、出土
軒丸瓦（古瓦）の型式は、現
在 60 型式 95 種類（番号が付
されているものに限定）に分類
されている（文献は凡例参照）。
蔵司地区平地部では、そのう
ち 27 型式 41 種類 424 点が出
土している。大宰府政府周辺官
衙の各地区の中でも、不丁地区
では 597 点出土しており、そ
れに次ぐ数の多さとなっている
が、不丁地区が 23 型式 38 種
類であるのに対し、当地区では
型式数、種類数ともにそれを上
回っており、当地区における出
土数や種類の多さを物語ってい
るし、不丁地区出土の瓦でも、
その多くは SD320 や SD2340
のような条坊を区画する南北溝
から出土しており、本来当地区
で使用されていたものが、南側
のそれら南北溝に埋没した可能
性も考えられ、そうなると、当
地区における瓦使用数はかなり
の数に上ったものではないかと
考えられる。

以下、型式ごとに報告する。
000型式：瓦当面文様が無文
のもの。60 次から 1 点出土し
ており (Fig.55-1), 大宰府史
跡の他の地区でも、類例はこれ
以外には確認されていない。瓦

型式番号	4次	54次	60次	65-1次	65-2次	計	百分比 (%)
000			1			1	0.24
030			1			1	0.24
058a			1			1	0.24
066			1			1	0.24
077	A	B			1	1	0.24
			1	1	5	1.18	2.59
					5	5	
082A			1			1	0.24
108		1	2		9	12	2.83
124			2			2	0.47
132		2	3			5	1.18
133			3			3	0.71
143	a	1	7			8	1.89
	b	2	2		2	6	1.42
	c	1			1	2	0.47
144			1			1	0.24
145	b		2			2	0.47
	a			1		1	0.24
	Ba		1			1	0.24
170	Bb	1			1	2	0.47
	Bc				1	1	0.24
	C	1				1	0.24
186		2				2	0.47
197	Ae		1			1	0.24
208	Ba		5			5	1.18
	Ca		2			2	0.47
	223	1	1	12		14	3.30
223	Aa	2	9	20		2	7.78
	Ab		2	4	1	4	11
	B	4	4	2	3	13	3.07
224	L			3		3	0.71
	a	3	6		1	10	2.36
	b		6		6	12	2.83
225		3	19		7	29	6.84
275	275				2	2	0.47
	B	1	11	14	11	37	8.73
	276		1	6	1	13	21
278			1				0.24
285B	1	1			1	3	0.71
290	290	3	10	1	8	22	5.66
	A				1	1	0.47
	Aa	24	12	3	15	54	12.74
	Ab		3			2	5
	B	1	5	7	1	8	22
291		3	4	1	3	11	2.59
324B			1			1	0.24
不明		4	22	3	13	42	9.91
合計	7	91	189	17	120	424	100.00

27 型式
41 種類

瓦当が無文

Tab.4 出土軒丸瓦分類一覧 (1)

(単位:mm)

	型式番号	直径	内区					外区広	外区				全長	外縁形態
			中房径	蓮子	弁区徑	弁幅	弁数		内縁幅	内縁文様	外縁幅	外縁高		
000		163以上	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
			116	42	1+7+12	116	43	T6	-	-	-	-	-	直立縁 (上平頭)
030														
			162	31	-	116	34	T8	23	10	S28	13	3	-
058a														
			163	50	1+7	121	26	T12	21	10	S36	11	8	-
066														
			164	65	1+8	132	7~14	T20	16	-	-	16	11	-
077A														
			156	60	1+8	128	13	T18	14	-	-	13	10	-
077B														
			148	47	17	118	21	T14	15	-	-	15	11	連珠文
082A														
			162	52	1+6	92	8	T21	35	21	S24	14	18	-
108														
			150	51	1+4	122	32	T9	14	10	S19	4	8	-
124														
			162	54	1+4	136	32	T8	13	13	S32	-	-	-
132														

(T : 単弁, S : 珠文)

Tab.4 出土軒丸瓦分類一覧 (2)

	型式番号	直径	内区					外区広	外区				全長	外縁形態
			中房径	蓮子	弁区径	弁幅	弁数		内縁幅	内縁文様	外縁幅	外縁高		
133		157	53	1+4	123	23	T12	17	12	S31	5	5	-	-
143a		162	52	1+8	102	15	T19	30	18	S21	12	11	-	-
143b		167	50	1+8	107	13	T22	30	16	S21	14	16	-	-
143c		162	47	1+8	102	12	-	30	19	S21	11	8	-	-
144b		160	44	1+6	106	17	T16	27	20	S23	7	6	-	-
145b		169	50	1+6	123	22	T14	23	15	S25	8	3	-	-
170Ba		175	58	1+5	137	25	T14	19	10	S24	9	5	-	-
170Bb		178	59	1+5	138	23	T14	20	10	S24	10	6	-	-
170Bc		180	60	1+5	146	26	T14	17	11	S24	6	3	-	-
170C		-	-	-	-	-	T5以上	19	10	S12以上	9	6	-	傾斜縁

Tab.4 出土軒丸瓦分類一覧 (3)

	型式番号	直径	内区					外区広	外区				外縁形態
			中房径	蓮子	弁区径	弁幅	弁数		内縁幅	内縁文様	外縁幅	外縁高	
186		149	41	1	113	32	T6	18	12	S12	6	-	-
197Ac		-	44	4	-	29	T8 二重弁	19	19	S26 珠文 間に 間レ ンズ 状文	-	-	-
208Ba		165	58	1+4	123	30	F10	21	14	S17	7	5	-
208Ca		152	64	1+4	112	38	F7	20	16	S13	4	1	-
223Aa		163	51	1+4+8	111	28	F8	26	13	S24	13	5	-
223Ab		170	58	1+4+8	116	30	F8	27	15	S24	12	4	-
223B		56	1+4+8		26	F8			S24			-	-
223L		195	65	1+4+8	135	34	F8	30	18	S21	12	8	-
224a		164	53	1+4+8	112	29	F8	26	15	S32	11	7	-
224b		168	57	1+4+8	112	-	F8	28	15	S32	13	-	-

(F : 複弁)

Tab.4 出土軒丸瓦分類一覧 (4)

	型式番号	直径	内区					外区広	外区				外縁形態	
			中房径	蓮子	弁区径	弁幅	弁数		内縁幅	内縁文様	外縁幅	外縁高		
225		162	56	1+4+8	104	29	F9	29	16	S22	13	13	-	- 傾斜縁
275B		187	65	1+5+9	127	37	F8	30	14	S32	16	11	RV32	- 傾斜縁
276		186	68	1+4+8	130	28	F8	28	13	S34	15	16	RV28	- 傾斜縁
278		157	50	1+5	119	33	F6	19	11	S30	8	2	LV	- 傾斜縁
285B		138	53	1+4+8	94	22	F8	22	9	S32	13	-	RV32	- 平坦縁
290Aa		180	67	1+6+12	122	36	F8	29	14	S38	15	21	RV30	- 傾斜縁
290Ab		190	64	1+6+10	122	26	F8?	34	14	S38	20	18	RV30	- 傾斜縁
290B		191	72	1+6+10	121	32	F8	35	13	S36	22	17	RV32	- 傾斜縁
291		156	55	1+8	101	31	F8	28	13	S26	15	11	RV24	- 傾斜縁
324B		138	60	1+6	120	26	F8	9	9	S23?	-	-	-	-

(RV: 亂起綱文, LV: 線綱文)

当は瓦范を使用せずに作られており、丸瓦の剥離痕が認められる。

030型式：単弁六弁で、素弁のシノギ弁である。一段高くなった中房の中には、20個の蓮子が施される。外区は上半部のみ素文縁で、外縁は別作りの丸瓦により形成される。60次から1点出土するのみであるが、政府の他、月山東地区や日吉地区での出土も見られる。

058型式：単弁八弁で、素弁のかえり弁で、中房は蓮子を持たない半球形を呈する。外区内縁の珠文の形態の違いなどでaとbに分類され、当地区では外区の内縁と外縁との間に圓線を設けるaが60次から1点出土している(Fig.55-2)。珠文や外縁圓線等に変更が加えられたb型式の出土は確認されない。a型式は政府での出土が確認される。

066型式：単弁十二弁で、素弁に突出表現が施される。中房には8個の蓮子、外区内縁に勾玉のような尾のついた珠文が巡る特徴的な文様を持つ。60次から1点出土した。政府や不丁地区の他、觀世音寺や国分寺などの寺院での出土も見られる。

077型式：大きさも配置も不規則な単弁で、20弁で、凹弁状のものが混じるAと、瓦当径が少しこれなくなり、18弁となるBの2種類に細分される。Aは60次を除く全調査区から計5点、Bも65-2次から5点出土し、当地区全体の2.59%の出土比率を占める。当型式は政府と周辺官衙で出土が顕著だが、觀世音寺金堂でも出土している。

082型式：単弁14あるいは16弁で、外縁上に連珠文が巡るAと16弁で外縁が素文のBの2種類に分類されるが、当地区ではAが60次から出土するのみである。Aが政府から出土する以外は、A・Bともに鴻臚館で出土が確認されるのみである。

108型式：内区には大きいが不揃いな単弁を21弁巡らせ、外区内縁の珠文も間隔も不統一である(Fig.55-3-4)。当地区では12点出土が見られ、全体の2.83%の出土率を占める。単弁数は異なるが、当型式に類縁性を持つ型式としては、水域跡出土の107型式がある。そして、珠文に他には認められない範傷などが生じているものの、文様の他、胎土や焼成具合もほぼ同じで、108型式と同範と考えられる破片が60次から1点出土している(Fig.57-51)。しかし、外縁には鋸歯文にもみえる文様が施されているように見える。もし鋸歯文だとすると、範の彫り直し後の製作によるもの可能性が高く、108型式を細分する必要性も生じてくる。ただし、鋸歯文は摩滅が激しく、また不揃いにも見え、自然な剥離等により鋸歯文として見えて可能性も否定できない。そのため、今回は不明型式として紹介するにとどめ、型式分類の是非は今後、新たな個体の発見に委ねたい。

124型式：単弁九弁で、素弁で凹弁が施される。60次で2点確認されるのみである。政府の他、水域跡での出土が確認される。

132型式：単弁八弁で、重弁の凹弁を施すが、1弁のみ素弁。外区には32個の珠文が巡る。54次から2点、60次から3点の出土が見られるが、60次出土の2点は瓦当面文様がほぼ完全に近い状態で残存する(Fig.55-5-6)。6の丸瓦部凸面には、「賀茂」銘の叩打痕(903A型式)が確認される。政府、周辺官衙の他、觀世音寺、国分寺、鴻臚館など、広く出土例が確認される。

133型式：単弁十二弁で、重弁の凹弁を施す。中房に5個の蓮子を置き、外区に31個の珠文を巡らせ、132型式との文様構成の類縁性が感じられる。60次から3点出土する。政府および周辺官衙の他、條坊地区でも出土している。

143型式：範傷の進行や瓦範の彫り直し等でa～cの3種類に分類される。当地区では、单

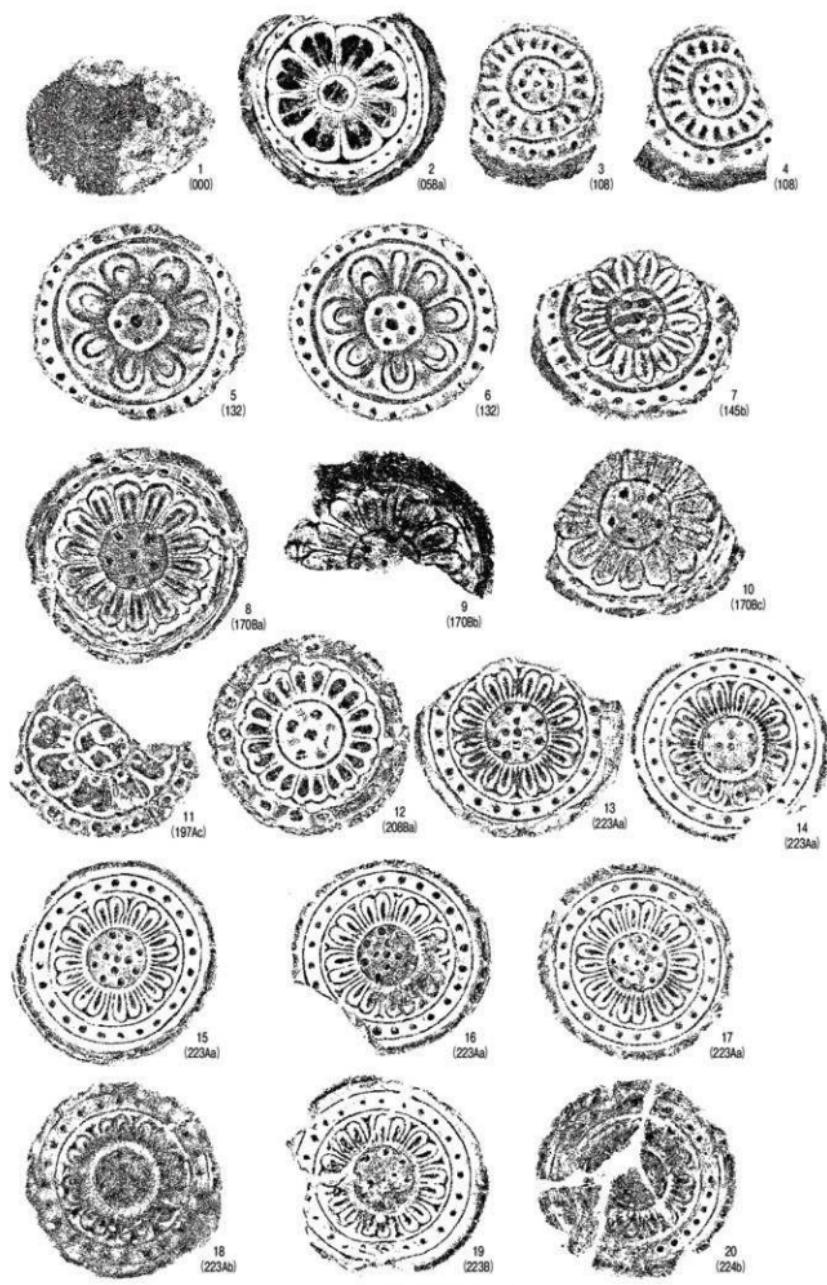


Fig.55 出土軒丸瓦拓影① (1/4)

弁 19 弁で範傷の少ない a が 8 点、彫り直されて 22 弁となって 4 弁に子葉が見られない b が 6 点、範傷がさらに進行した c が 2 点出土する。全体の 3.77% を占め、8 世紀後半の大宰府の代表的な瓦型式である。

144 型式：單弁十六弁で、重弁の菊花状弁を呈する。範傷の進行により 2 種に細分される。当地区では 60 次から範傷の進行した B が 2 点、細分不能のものが 1 点出土する。政庁および周辺官衙で出土が見られる。

145 型式：範傷や範の彫り直しにより 2 種類に分類される。当地区では b が 60 次と 65-2 次から各 1 点 (Fig.55-7)、細分不能のものが、65-1 次から 1 点出土する。政庁では 37 点、不丁地区でも 23 点の出土から比べると、当地区の出土数は非常に少ない点数といえる。觀世音寺や水城の他、朝倉市の堂ヶ尾庵寺からも出土しており、広範な広がりが見られる。

170 型式：文様構成により A～C の 3 分類され、B は範傷の進行や彫り直しによりさらに 4 段階に細分される。Ba は 60 次から 1 点しか出土していないが、非常に残存状態が良い (Fig.55-8)。Bb も 2 点出土しているが、範傷は進行し、外縁は平坦にケズリ調整がなされる (Fig.55-9)。8 と 9 を比較すると、瓦当裏面の調整が、8 (Ba 型式) は丁寧なナデ調整であるのに対し、9 (Bb 型式) は非常に強いユビナデで凹凸が生じてしまつており、整形の粗雑化が窺われるが、65-2 次出土の Bc 型式 (Fig.55-10) の瓦当裏面を見ると、丁寧なナデ調整となっており、概ねは言えないようである。不丁地区では Bc 型式に瓦当裏面と丸瓦部との接合部に朱の付着が確認されているが、当地区の資料にはそれは確認されない。C はこれまで不丁地区の 1 点しか確認されていなかったが、当地区の 54 次において 1 点確認された。外区と内区の蓮弁の先端部のみの残欠であり、また間弁が 2 箇所も確認できるが、蓮弁の先端が尖って外区界線に接する特徴などから当該型式と考えられる。

186 型式：單弁六弁で、重弁の弁端部が湾入する。外区には不規則に 12 個の珠文が配置される。54 次から 2 点出土する。政庁では 54 点も出土しているが、他の地区では松倉瓦窯でしか確認されていない。

197 型式：單弁八弁の三重弁を基本構成とし、A～C に大きく三分される。当型式のほとんどは觀世音寺か太宰府天満宮でしか出土していないが、当地区では 60 次で Ac が 1 点出土している (Fig.55-11)。Ac は、範の彫り直しにより三重弁が二重弁となり蓮子が花文と結合して消失、向かい合う一組が結合する。外区珠文間の凸レンズ状文もわずかに残るばかりである。

208 型式：複弁で中房に 5 個の蓮子を配する。A～C に大きく三分され、B は 3 つに、C は 2 つに細分される。当地区では全て 60 次から、複弁の Ba が 5 点 (Fig.55-12)、單弁連弁のように文様が退化した Ca が 2 点出土する。なお、Ca の文様構成は『觀世音寺一遺物編 1・2』において修正されており、本報告ではそれを反映している。

223 型式：いわゆる鶴臘館 1 式軒丸瓦である。従来は、範傷の進行、範の摩耗によって a と b の 2 つに細分される通常型式に加え、同文だが明らかに範が大きなしに分類されていたが、近年、通常型式に 2 つの瓦範のものが混じっていることが明らかとなり（文献は凡例参照）。

A と B に細分されたため、ここでもその分類に従う。A はこれまでの通常型式であり、範の摩耗によって a (Fig.55-13～17) と b (Fig.55-18) の 2 つに細分される。当地区では Aa が 33 点、Ab が 11 点と非常に多く出土している。新たに設定された B (Fig.55-19) は A に酷似するが、

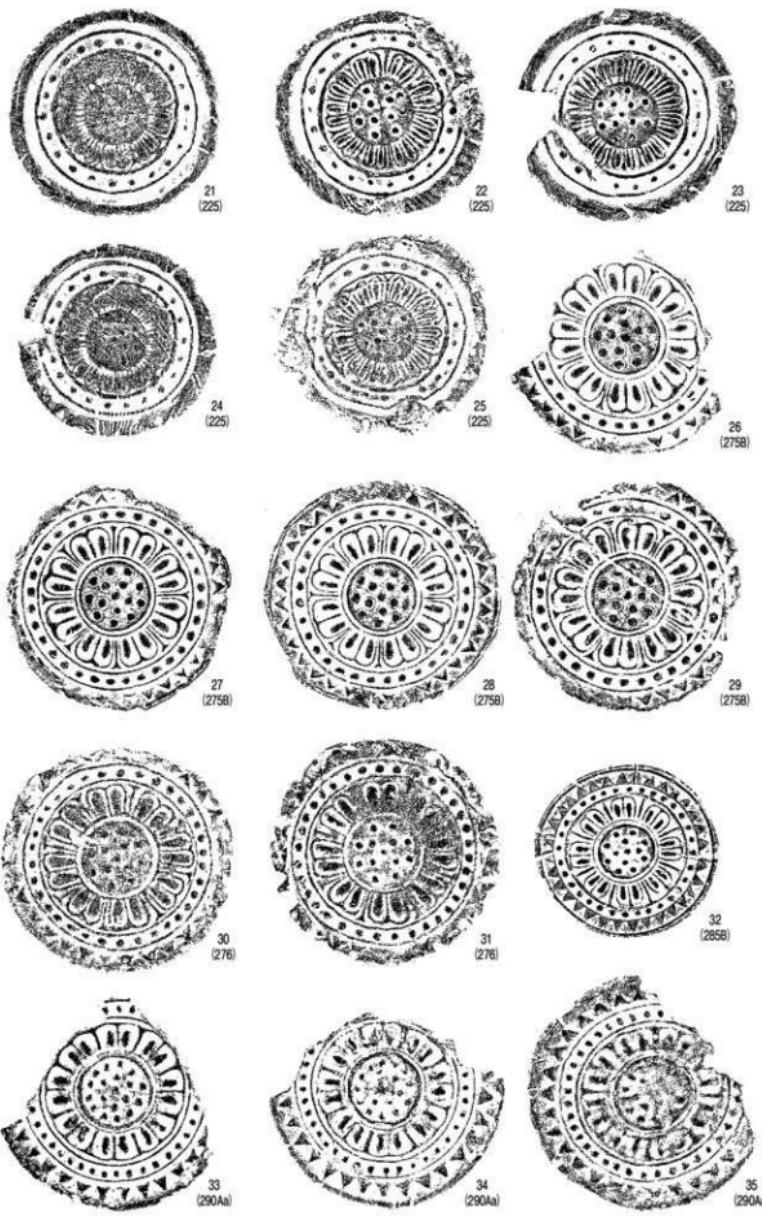


Fig.56 出土軒丸瓦拓影② (1/4)

各部位の寸法が A とわずかに異なっていることに加え、丸瓦部の接合を頼りにして瓦当面を正位置に置いた際の蓮子の向きが A と 90°傾いていることや、外縁が A が傾斜縁であるのに対し、B が直立縁であること、さらには珠文の粒が A の方がやや大きめであることなどの特徴から、見分けることが可能であることが指摘されている。もちろん A と瓦筋が異なるため、A で見られるような範傷の進行や筋の摩耗は認められない。当地区では B は 13 点出土している。L は 3 点にとどまる。よって、A が 44 点、B が 13 点、L が 3 点、細分不能が 14 点で、合計 74 点にも上り、当地区全体の 14.39% にも上り、後述する 290 型式に次ぐ多さとなっている。政庁では A が大半で、B は A の補助的な型式とも考えられており（凡例参照）、当地区でも A > B の傾向は同じである。

224型式：瓦当文様は 223 型式に近いが、外縁の珠文が 32 個と非常に多い。筋の摩耗の進行度合いによって、a と b に二分される。当地区では、a が 10 点、b が 12 点出土しているが、筋の摩耗度合いは漸移的であり、明瞭に区分するのは困難である。図示した b (Fig.55-20) は、掘立柱建物 SB1560A の掘方から出土しており建物の年代を推測するうえで重要である。

225型式：223・224 と同じ鴻臚館式系統の文様構成であるが、先端の尖った複弁が特徴的である (Fig.56-21 ~ 25)。21 は内区が摩耗しているようにも見えるが、焼成後の摩滅と考えられる。また、22・24・25 には、瓦当面に、粘土を瓦筋に押圧した後、焼成までの間に付いたとみられる一見糸切痕かとも思われる圧痕が特徴的に残されているが、痕跡に切り合い関係がみられ、明らかに瓦筋押圧前の糸切り痕跡ではない。24・25 には外縁部に棒状の躍んだ圧痕が、24 は 1箇所、25 は 2箇所も見られる。不丁地区出土事例にも、同じような圧痕が確認されており、当型式に限って、瓦筋押圧後の焼成前に、乾燥等のためか、瓦当面を下にして圧痕が残るような製作方法を探っていた可能性が考えられる。

275型式：いわゆる老司式軒丸瓦で、A と B の 2種に細分され、A は觀世音寺創建瓦である老司Ⅰ式軒丸瓦、B は鴻臚館式と並び、大宰府政府Ⅱ期の主要瓦の老司Ⅱ式軒丸瓦である。当地区では B が 37 点、細分不能が 2 点出土しているが、A は政庁・官衙地区では日吉地区の 1 点のみであるので、A は無い可能性が高い。B は瓦当裏面及び丸瓦部凸面にカキメ調整がみられ、瓦当裏面周縁部にわずかな高さの突帯を残すのが特徴的であり、Fig.56-26 ~ 28 にはその特徴が認められるが、29 はすべてナデあるいはケズりで調整がなされており、他のものと異なっている。当地区全体出土数 39 点で、全体出土率の 9.2% を占め、当地区的主要型式となってはいるが、B とセットとなる軒平瓦 560 型式は、123 点出土していて全体出土率の 33.41% にも及び、不均衡が生じている。後述するように 290 型式のセットとしても、560 型式は用いられていたものと考えられる。

276型式：いわゆる老司式系統のものであるが、全体的に平板で立体感に欠け、蓮子の数なども減少している。当地区では、21 点出土している。主として、政庁や水城跡、水城瓦窯で出土し、少数ではあるが、觀世音寺からも出土事例がある。Fig.56-31 は瓦当面がほぼ完形のもので、60 次黄灰色土層から出土したものである。

285型式：いわゆる老司式系統のものであるが、外区外縁が一段高く、平坦縁であることが特徴的である。他の老司式系統のものと同じくらいの径の A と、それより一回り小型の B の 2種に細分される。当地区では小型の B が 3 点出土し、Fig.56-32 は瓦当面がほぼ完形のもので、

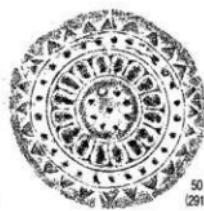
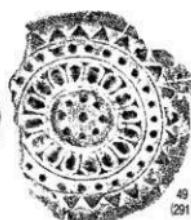
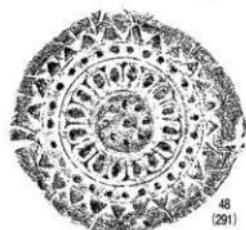
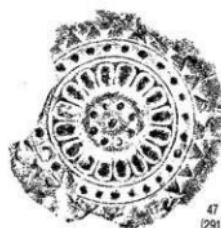
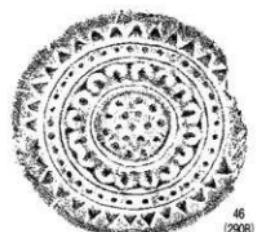
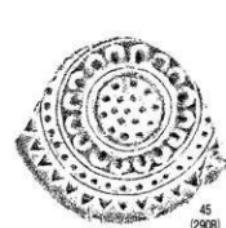
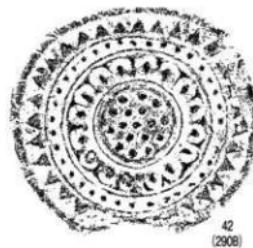
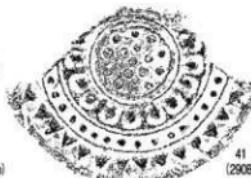
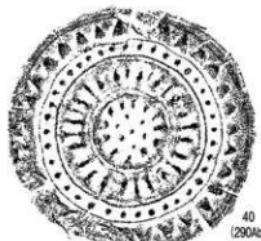
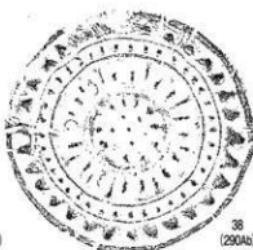
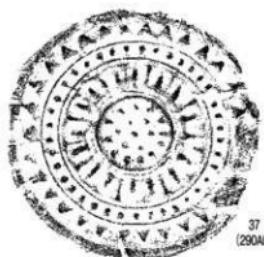
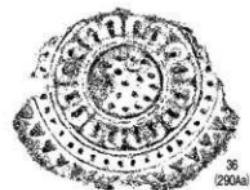


Fig.57 出土軒丸瓦拓影③ (1/4)

54次の炭層から出土している。

290型式：範の種類によりAとBの2種に分類され、さらにAは範の摩耗度合いにより2種に細分される。共に内区の幅が狭くなつて、蓮弁が短く、鋸歯文の外縁は高い。Aの複弁が細長く角ばつているに対し、Bの蓮弁はさらに短くなつて丸みを帯びる。当地区ではAaが54点、Abが5点、Bが22点、Aで細分不能が2点、A・Bの細分不能が22点で、全部で105点にも上り、当地区では最大の出土数となり、全体出土率の24.76%、実に1/4近くを占めている。既に指摘されているように、当型式は、軒平瓦560型式とセットとして使用されるものであり、275型式とあわせた当型式の点数は144点で、560型式の出土点数123点に近似し、そのセット関係を不整合なく理解することができる。また、このように出土点数が多いため、瓦当面の残存状態が良いものが非常に多く、主だったものを掲載した(Aa(33~36)、Ab(37~40)、B(41~46))。また、当型式は、いわゆる老司式系統の軒丸瓦に多く見られるように、瓦当裏面周縁部に突帯状の高まりが形成されるのが特徴的であるが、Bの中にはそれがいまいなもののが一部にあり、特にFig.57-41・43には、突帯すらも認められず、瓦当裏面全体にナデやケズリを施している。当型式は大宰府史跡において広く出土が確認されている。

291型式：文様構成は290型式に類似するが、径が小さく、中房の蓮子も9個と少ない。当型式もまた、他の老司式系統に同じく、瓦当裏面周縁部に突帯状の高まりが形成されるが、瓦当面が完形近く残されたもの(Fig.57-47~50)の中では、47にのみその特徴が観察され、残りのものは、突帯状の高まりは不明瞭である。当地区では、11点見られ、全体出土率の2.59%を占める。官衙地区の他、般若寺、三宅庵寺、杉塚庵寺、鴻臚館での出土事例が確認される。

324型式：複弁で凹円表現がなされるもので、ハート形の形状の蓮弁を有する。瓦範の違いから2種に分類される。当地区では、60次からBが1点出土している。1+6個の蓮子が残る中房の部分を中心とした残欠である。Bは政庁でのみ出土が確認されている。

②軒平瓦 (Fig.58~59, Tab.5~6, PL.34~36)

大宰府史跡において、出土軒平瓦(古瓦)の型式は、現在63型式103種類(番号が付されているものに限定)に分類されている(文献は凡例参照)。藏司地区平地部では、そのうち29型式41種類367点が出土している。軒丸瓦の出土数に比べると、若干少ないものの、型式の種類についてはほぼ同じとなっている。大宰府政府周辺官衙の各地区の中でも、不丁地区では711点出土しており、それに次ぐ数の多さとなっているが、不丁地区が19型式29種類であるのに対し、当地区では型式数、種類数ともにそれを上回っており、当地区における出土数や種類の多さを物語っているし、不丁地区出土の瓦の多くが、本来藏司地区平地部に葺かれていたもの可能性があることは前述したとおりである。

510型式：完形品がまだ見出されていないが、内区に不揃いな斜格子文とその間に珠文を一つずつ配し、上下とも外区に珠文を複数配する。段頸で凸面に繩目が施される。当地区では、3点出土する。政庁と不丁地区に事例が確認される。

515型式：内区の文様構成が二重斜格子にそれを横断するように波線を一本入れるもので、5型式6種類に細分される。当地区では、Aa型式が60次から1点出土する。Aaには、これまで平瓦部に賀茂瓦鉢(903C型式)や前鉢(906E型式)が打刻される事例が確認されている。

554型式：右から左へ流れる偏行唐草文で、唐草は6回半回転する。下外区および両脇区に

は、大きめの粒の珠文が巡る。

4次調査で1点出土するのみである。政府、觀世音寺、松倉瓦窯で事例が確認される。

560型式:いわゆる「老司式」の軒平瓦である。かつてはA・B・E・Fの4型式9種に細分されていたが、2014年に新たに2種類の瓦範が存在することが判明（凡例参照）、GとHが新たに加わり、現在は6型式11種とされている。A型式は老司1式で、いわゆる觀世音寺創建瓦として製作されたものとみられ、觀世音寺の他は、AbとAa'が国分寺に見られるのを除き、政府や周辺官衙では一切確認されていない。それに対し、B・F・G・Hは政府や周辺官衙における主要な瓦型式となっている。特に、Bの出土点数は多く、当地区でもBだけでも92点、それ以外の560型式を合わせると、123点となり、当地区出土率の33.51%と、他の型式を抜きんでており、政府II期造営に関わる主要型式であることを示している。B型式は範傷の進行度合いによって、a～cに三分され、当地区でもすべて確認されている（Fig.58-1～11）。Fは完形が見出されていないが、唐草文が右端を除き、5転するものと考えられ、BやG・Hとは明らかに唐草の伸び方が異なっており、その違いは見出しやすい。そ

Tab.5 軒平瓦出土点数一覧

型式番号	4次	54次	60次	65-1次	65-2次	計	百分比 (%)
510			2		1	3	0.82
515Aa			1			1	0.27
554	1					1	0.27
560		2	1		4	7	1.91
B	1	18	15	1	5	40	10.90
Ba		2	2	2	3	9	2.45
Ba-Bb			4		1	5	1.36
Bb		1				1	0.27
Bb-Bc	2	4	8	2	4	20	5.45
Bc		6	3	3	5	17	4.63
F			3			3	0.82
G	1	1	3			5	1.36
H	2	4	7		3	16	4.36
561			1			1	0.27
564			2	1	5	8	2.18
575A			6			6	1.63
576		1	2			3	0.82
581			1			1	0.27
600A			6		9	15	4.09
601A			2			2	0.54
602		1				1	0.27
604			1			1	0.27
625			4			4	1.09
635	1		2			3	0.82
A		5	4	1		10	2.72
B		14	40	2	1	57	15.53
642	B		1	5		1	1.91
648				1	1	2	0.54
653			2			2	0.54
656			4			4	1.09
657		2	2	1		5	1.36
a			20	2	21	43	11.72
b			4		5	9	2.45
662Ba			1			1	0.27
674			1			1	0.27
675			1			1	0.27
676			1			1	0.27
685	A		2			2	0.54
B			1			1	0.27
Aa		1	3	4	1	9	2.45
Aa'		1				1	0.27
688	A-B		1			1	0.27
C			4		1	5	1.36
691	Aa		1	7	2	10	2.72
Bb			2			2	0.54
700		1				1	0.27
704A						1	0.27
未番号型式		2				2	0.54
不明		2	5		9	16	4.36
合計	8	71	185	20	83	367	100.00

老司軒平瓦

560Gと
Hが新たに
加わる

Tab.6 出土軒平瓦分類一覧 (1)

(単位はmm)

型式番号		瓦当面											全長	類形態			
		上弦幅	弧深	下弦幅	厚さ	内区厚さ	内区文様	上外区厚さ	上外区文様	下外区厚さ	下外区文様	脇区幅	脇区文様	外縁の高さ			
510			-	-	-	34	25	一重 斜格子	6	S	3	S	-	-	-	-	段顎
515Aa			260	50	296	58	28	二重 斜格子	14	S20	16	RV19	右12 左-	S2	9	-	曲線 顎状
554			-	-	-	47	31	HK	13	-	3	△ S16	右25 左20	S	-	-	
560Ba			-	-	336	59	26	HK	17	S25	16	△ RV31	右17 左15	RV 左4 右4	1	375	段顎
560Bb			326	82	330	54	26	HK	14	S25	14	△ RV31	右25 左20	RV 左4 右4	2	-	段顎
560Bc			-	-	-	52	27	HK	12	S25	13	△ RV31	右16 左14	RV 左4 右4	-	-	段顎
560F			-	-	-	58	24	HK	14	S21?	14	△ RV21?	右19 左19	RV 左4 右4	-	-	段顎
560G			-	-	-	55	21	HK	12	S25	13	△ RV31	右11 左14	RV 左4 右4	2	-	段顎
560H			328	86	322	48	24	HK	12	S25	12	△ RV31	右13 左12	RV 左4 右4	2	-	段顎
561			-	-	-	58	28	HK	14	S26	18	RV25	-	-	2	337	横斜 顎

(△: 脇区と下外区の合計。HK: 偏行唐草文)

Tab.6 出土軒平瓦分類一覧 (2)

型式番号		瓦当面												全長	輪形態	
		上弦幅	弧深	下弦幅	厚さ	内区厚さ	内区文様	上外区厚さ	上外区文様	下外区厚さ	下外区文様	脇区幅	脇区文様	外縁の高さ		
564			-	-	-	54	26	HK	9	S10 以上	19	RV12 以上	-	-	4	- 段顎
575A			252	49	264	55	28	HK	14	S14	13	RV20	-	RV 左3 右2	1	- 曲線 顎状
576			280	33	278	58	27	HK	16	S16	15	△ RV29	右29 左8	LV	3	- 曲線 顎状
581			-	-	282	48	23	HK	11	☆S19 以上	14	LV16 以上	右13 左-	S	2	- 曲線 顎状
600A			283	56	294	53	27	HK	14	S24	12	内向 RV29	右8 左8	-	-	- 段顎
601A			-	-	-	64	32	HK	18	下 S40?	14	S	右16	S	6	- 曲線 顎状
602			-	-	-	51	26	HK	13	S19	12	△ RV37?	右28	RV	2	- 段顎 状
604			-	-	-	58	22	HK	17	S12 以上	19	△ LV12 以上	-	LV	-	- 曲線 顎状
625			253	35	271	57	23	KK 擬き	19	○ S34	15	S	右22 左17	S	6	- 曲線 顎状
635A			232	49	261	43	20	KK	9	GS15	14	RV27 右端 内向 RV1	-	-	2	- 段顎

(○ : 脇区と上下外区の合計, ☆ : 脇区と上外区の合計, KK : 均整唐草文)

Tab.6 出土軒平瓦分類一覧 (3)

型式番号		瓦当面												全長	類形態	
		上弦幅	弧深	下弦幅	厚さ	内区厚さ	内区文様	上外区厚さ	上外区文様	下外区厚さ	下外区文様	脇区幅	脇区文様	外縁の高さ		
635B		232	49	261	43	20	KK	9	GS15	14	RV27 右端 内向 RV1	-	-	2	-	段顎
642B		253	41	243	52	26	KK	11	○ S39	15	S	右10 左19	S	3	-	段顎
648		-	-	-	-	-	KK	-	S	-	S	-	-	-	-	段顎
653		275	45	275	62	31	KK	14	☆ S24	17	RV17 右15 左15	S	-	-	-	曲線 顎状
656		255	35	258	49	32	KK	10	☆ S21 以上	7	LV15 右13 左12	S	-	-	-	段顎
657a		-	-	-	51	26	KK	13	☆ S17 以上	12	LV21	-	S	-	-	段顎
657b		-	-	-	54	27	KK	14	☆ S17 以上	13	RV21	-	S	1	-	段顎
662Ba		-	-	-	52	24	KK	20	○S	8	S	右14 左13	S	2	-	段顎
674		-	-	-	-	-	KK	-	-	11	RV11 以上	-	-	-	-	段顎
675		-	-	-	50	30	KK	10	☆ S10 以上	10	RV10 以上 (一部 凹RV)	右9	S	-	-	曲線 顎状

(GS : 菱葉形の珠文)

Tab.6 出土軒平瓦分類一覧 (4)

型式番号	瓦当面													全長	輪形態
	上弦幅	弧深	下弦幅	厚さ	内区厚さ	内区文様	上外区厚さ	上外区文様	下外区厚さ	下外区文様	脇区幅	脇区文様	外縁の高さ		
676		-	-	54	31	KK	14	S16	9	△LV22 左10	LV	1	-	曲線 額状	
685A		278	37	288	55	34	KK	8	内向 LV10	13	△S16 左14	S	2	-	曲線 額状
685B		297	47	275	61	41	不均衡 K	-	-	20	△S18 右16 左19	S	-	-	曲線 額状
688Aa		-	44	261	51	25	KK	20	S21	6	S20	-	-	2	344 段額
688Aa'		-	-	273	43	26	KK	15	S21	-	-	-	-	1	- 段額
688C		-	-	-	48	30	KK	15	S11 以上	3	S16 左20 右S23	3	-	-	段額
691Aa		253	39	254	54	24	HK	15	S17	15	△RV24 左16	RV	2	-	曲線 額状
691Bb		-	-	-	51	25	並列 K	14	S	12	△LV 左11	LV	-	-	曲線 額状
700		-	-	-	60	-	变形 K	-	-	-	-	-	-	-	段額
704A		-	-	-	46	24	变形 K	13	S8 以上	9	内向 RV12 以上	-	-	-	段額
未番号 型式		-	-	-	-	31	HK	13	☆ S7 以上	10	RV 左12	S	-	-	曲線 額状 か

の一方で、G・Hは、新たに見出されたもので、GはBに比べると、内区の唐草文のうち、右から数えて2単位目と4単位目の左子葉が、主茎に対して並行して流れることや、7単位目の右子葉が、主茎との間隔が狭いという特徴を持つ(Fig.58-13～15)。また、Ba'は瓦当外区外界線周縁に輪郭が付されているが、これはGの範を使用しており、Ba'はG'に改められている。そして、Hは1・3・5・6・7単位目の子葉がBに比べて、長短が生じるという特徴を持つ(Fig.58-16～18)。詳細は凡例の文献(九州歴史資料館2014)参照)。もちろん、Bで生じている範傷の進行は、GやHでは発生しない。当地区ではFは3点、Gは5点、Hは16点、細分不能が7点であることを見ると、Bの使用が圧倒的に多く、それ以外はあくまでも補助的な生産形態であったことが推察される。

561型式: 大きくゆったりと流れる老司系の偏行唐草文で、560型式に比して弧深が極端に深い。当地区では60次から1点出土している。不丁地区でも出土している。

564型式: 偏行唐草文で上外区に珠文、下外区に珠文を配するが、完形は見出されていないが、当地区では8点出土しており、中には、これまで型式の指標となっている拓影よりも、さらに右側部が残存している例(Fig.59-21・22)もあり、右端部までの文様構成が判明、脇区が存在しないことも分かった。また、左半部とみられる残欠も出土しているが(Fig.59-19・20)、既存のものとの文様のつながりが判然とせず、またそうであったとしても、本例は左端部が残存してはおらず、本当に当型式のものは断定できないが、珠文や唐草の粗雑などは双方非常に類似しており、同型式の可能性を指摘できよう。案ではあるが19・20を含まない復元図(復元案1)と19・20を含めた復元図(復元案2)を提示する(Fig.59右上)。復元図に従うと、内区の唐草文は8転以上し、上外区の珠文も16個以上、下外区の鋸歯文も18個以上あることになる。平瓦部凸面には縄目が施されている。当地区以外では政庁でのみ確認されている。

575型式: 偏行唐草文で、AとBの2種に細分されているが、文様構成の相違点がかなりあって、同型式にすることに疑義も提示されている型式である(九州歴史資料館2007『觀世音寺一遺物編1—1』)。当地区では、60次からAが6点出土。Aは上外区に珠文、脇区および下外区に鋸歯文が施されている。Aは当地区以外では政庁、日吉地区、觀世音寺で確認されている。

576型式: 内区が9転もする短い波長の偏行唐草文で、子葉の先端が粒状になる文様構成をとる。両脇区及び下外区が内向する線鋸歯文となるのが特徴である。当地区からは3点出土するが、54次土坑SK1388出土のものは、瓦当面がほぼ完形である(Fig.59-23)。平瓦部凸面には、幾種類かの斜格子文の叩打痕が見られる事例が知られる。政庁および周辺官衙や觀世音寺で出土事例がある。

581型式: 潟巻のような偏行唐草文を内区に持ち、上外区及び両脇区に珠文、下外区が内向する鋸歯文の文様構成をとる。60次で小片が1点出土しており、型式認定は非常に微妙ではあるが、珠文や内向鋸歯文が確認されるため、当型式である可能性は非常に高い。政庁と国分寺でのみ確認されている。

600型式: 右行する偏行鋸歯文で、上外区は珠文、下外区は鋸歯文の文様構成をとる。AとBの2種に細分され、当地区ではAが15点出土し当地区全体出土率の4.09%を占める。Aの下外区は内向する鋸歯文で、65-2次からは比較的の残存状態の良い資料が出土し(Fig.59-24・25)、頸部や平瓦部凸面には、縄目が施される。Aは大宰府史跡や鴻臚館など広く分布する。

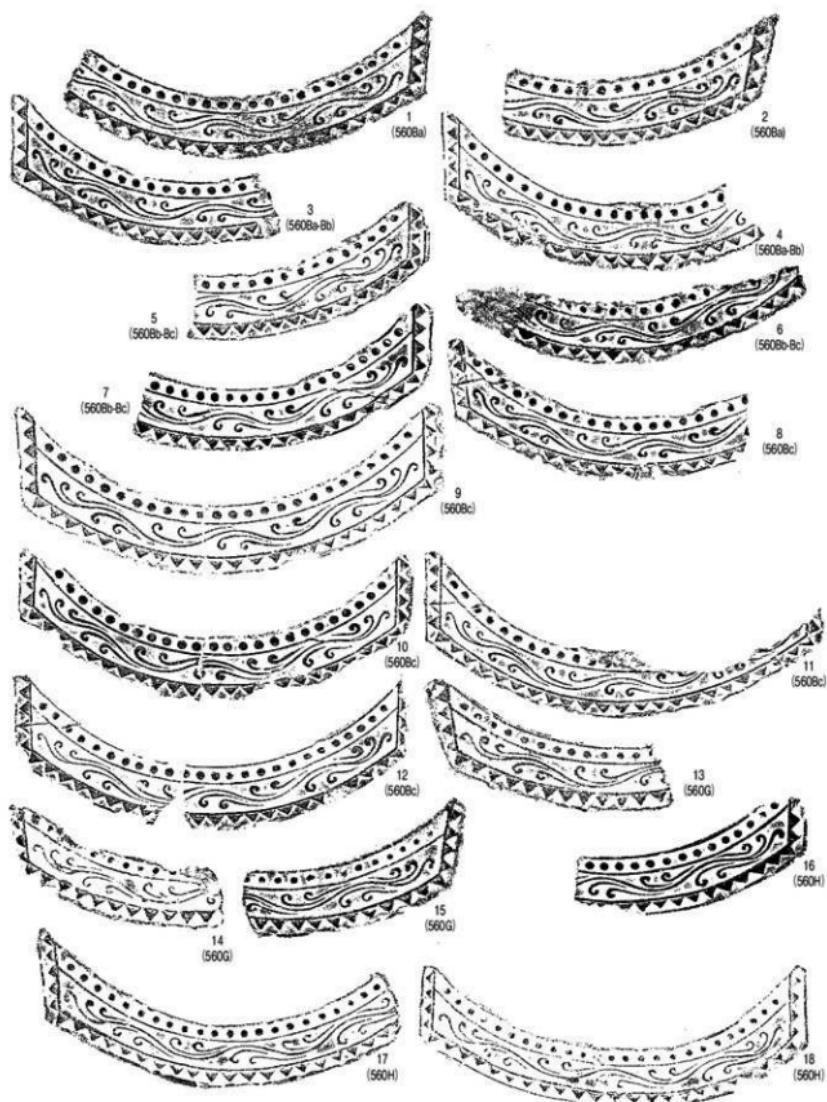


Fig.58 出土軒平瓦拓影① (1/4)

601型式：右行する偏行唐草文で唐草は一連ではなく、複数本の子葉状に表現がなされる。AとBの2種に細分され、当地区では60次から2点出土しており、Aは上下外区および両脇区には珠文が巡る特徴を有する。Aは大宰府史跡や条坊の他、飯塚市大分庵寺でも確認される。

602型式：右行する偏行唐草文で、主茎から渦巻状の子葉が派生する。外区や脇区には珠文や鋸歯文が見られる。当地区では54次から1点出土するのみである。政庁、觀世音寺、条坊内で確認されている。

604型式：右行する偏行唐草文で、子葉状の唐草が連続して主茎を形成する。上外区には珠文、下外区には内向する線鋸歯文が確認される。完形の事例は見出されていない。当地区では60次から1点出土し、下外区と内区の一部の残欠である。政庁以外では初めての確認例となる。

625型式：一見均整唐草文に見えるが、中心飾りを有しない「均整唐草文もどき」である。外区および脇区には珠文を巡らせる。当地区では60次から4点出土する。政庁、不丁地区、条坊内で確認される。平瓦部凸面に「佐瓦」銘の叩打痕(902G型式)を残すものが見出される。

635型式：いわゆる「鴻臚館式」軒平瓦である。かつて当型式は範の細部な違いによりA～Cに三分されていたが、2017年に細部にわたる検討の結果、B・C型式は同一の範によるものであって、統一すべきものとされた（文献は凡例参照）。そのため、現在はAとBの2種に細分されるものとして分類した（Fig.59-26・27）。AとBとの差は非常に僅差であり、中心飾の左右の大きさがBの方が非対称であったり、唐草文の右第一単位および第三単位がBの方が大きいために、下外区の鋸歯文との位置関係がずれている、右第一単位下に範傷がAのみに生じているなどの差異が指摘されている（詳細は凡例掲載の文献（下原2017）を参照いただきたい）。当地区ではAが10点、Bが57点、細分不能が3点で、圧倒的にBが多いことが分かる。政庁ではAが8点、旧B・旧C（現B）が36点、細分不能が586点で、細分不能が多いのは気にはなるものの、A < Bの傾向は当地区と同じである。凸面叩打痕は、平行叩き、斜格子叩き、格子叩きが、模様の大小含め6種類あることが指摘されており、Bの方が種類が多いが、AとBの有為的な差はあまり見られないことも指摘されている。

642型式：中心飾がハート形の鴻臚館系の均整唐草文であるが、唐草は左右4転する。左右に長く上外区のみ有するAと、周囲に珠文帯が巡るBの2つに細分されているが、当地区ではBだけが7点出土している。うち瓦当面の残存状況が良い一例（Fig.59-28）は凸面に斜め方向の線がランダムに入れられる叩打痕が、大半がスリ消されながらも残されており、当型式の標準となっていた。しかし、今回新たに確認した60次出土の一例（Fig.59-29）は、瓦当左側部を明瞭に残す破片で、瓦当部の左端部の文様が明瞭に判明したが、凸面には「□井」銘の叩打痕を有しており、「平井」銘の901I型式（laかlbかは不明）にあたるものと考えられ、瓦当文様と凸面叩打痕の新たな組み合わせが判明した。また、凸面には赤色顔料の付着も確認される。一方で、上外区のさらに上部に余白があって、ケズリ調整がなされている。Bは政庁、周辺官衙、条坊内で確認される。

648型式：均整唐草文だが、外区との区別がなく、唐草文の上下に連珠文が巡る。当地区では2点出土しているが、他には周辺官衙や觀世音寺、太宰府市辻遺跡で確認されている。

653型式：均整唐草文で、中心飾りがハートに梢円が付されたような文様で、左右に長く尾を引く唐草が流れる。上外区と両脇区に珠文、下外区に鋸歯文が施される。平瓦部凸面に「平

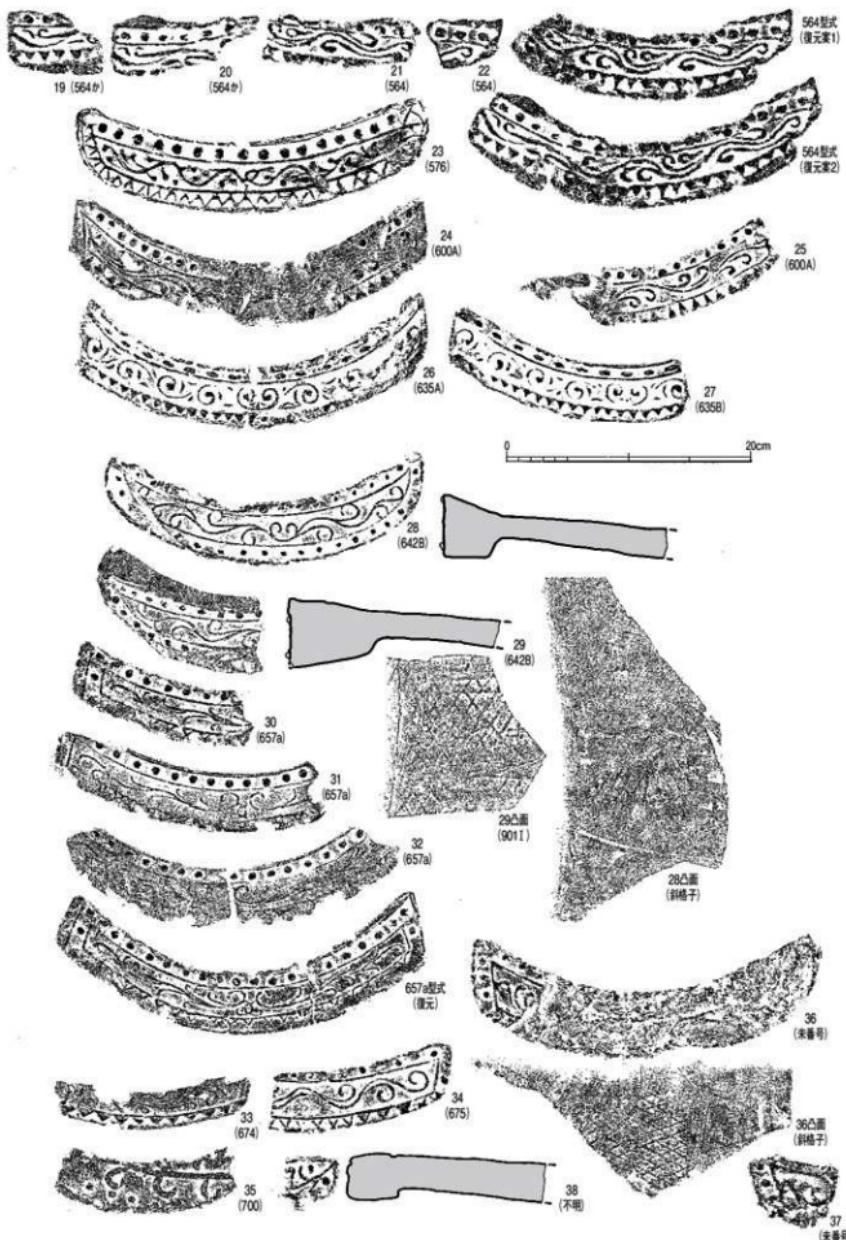


Fig.59 出土軒平瓦拓影・実測図③ (1/4)

井瓦」銘 (901B 型式) の叩打痕が見られる事例がある。当地区では 60 次で 2 点出土している。政庁、不丁地区、水城、杉塚廃寺などで事例が確認される。

656型式：四葉のような形状の中心飾を持ち、2 本の唐草が並行して渦を巻いて反転する。上外区と両脇区には珠文、下外区には内向する線鋸歯文が施される。当地区では 60 次で 4 点確認される。政庁、周辺官衙、水城などに事例が見られる。平瓦部凸面に縦線の混じった斜格子文の叩打痕が確認される事例がある。

657型式：X 字形のような中心飾りを有し、非常に細い唐草が長く展開する。上外区と両脇区は珠文が巡るが、下外区が線鋸歯文の a と (Fig.59-30 ~ 32)，その範を彫り直して鋸歯文とした b の 2 種に細分される。b はさらに右半部に a にはない範傷を有する。当地区では a が 43 点、b が 9 点、細分不能が 5 点出土し、合計 57 点で、当地区全体出土率の 15.57% を占め、560・635 型式に次ぐ多さとなっている。30 の凸面には繩目が残される。なお、a については今回の個体確認により、従来不明であった左側の瓦当文様が合成により明らかにすることことができたため、復元拓影を掲載している (Fig.59-657a 型式 (復元))。

662型式：木の葉状の中心飾を持つ均整唐草文で、内区を埋め尽くすように子葉が配されているのが特徴で、一段高い外区と脇区に珠文が巡る。範の違いから A と B の 2 種に細分され、範の彫り直し等からそれぞれ a・b に細分され、4 種類に分類されている。当地区では、60 次から 1 点出土するのみで、右側部の小片であるが、文様構成から Ba とみられる。Ba は政庁と不丁地区のみで確認されている。

674型式：均整唐草文で、細い唐草文に下外区には鋸歯文が見られる。60 次瓦溜から出土した本例 (Fig.59-33) 以外他に出土事例はなく、全体の文様構成は不明である。差し込まれた平瓦部分から剥離しており、頸部分のみが残存している。頸部凸面には、繩目が施される。

675型式：均整唐草文で、上外区と右脇区には珠文、下外区には鋸歯文だが、一部は団んだ鋸歯文となっている。当型式も、60 次の灰色砂質土から出土した本例 (Fig.59-34) 以外他に出土事例はなく、全体の文様構成は不明である。平瓦部凸面には、斜格子の叩打痕が認められる。

676型式：中心飾は定かではないが、左右に 3 転する均整唐草文で、上外区に珠文、両脇区と下外区には線鋸歯文が施される。頸形態は、段頸から曲線頸に変化する過程の形態である。当地区では 60 次から左端部の小片 1 点のみ出土。政庁と觀世音寺で事例が確認されている。

685型式：中心飾のない均整唐草文で、あまり屈曲のない長い尾が左右に伸びている。上外区は線鋸歯文、両脇区と下外区には珠文が巡る。範の違いから A と B に分類されるが、当地区では全て 60 次から A が 2 点、B が 1 点出土している。平瓦部凸面には A、B 共に斜格子文が施されるが、B には「佐」銘 (902C 型式) の叩打痕が見られるものもある。当型式は、A が政庁、松倉瓦窯、B が政庁、国分寺、条坊内に事例が見られる。

688型式：中心飾を持たず、左右から内向する均整唐草文で、上下外区に珠文が巡る。範の違いから A ~ C に分かれ、さらに範傷の進行や施文後の切り落とし加工などから、Aa, Aa', Ba, Ba', Bb, C の 5 種類に分類される (Ba' は 2007 年に追加されている)。当地区では、Aa が 9 点、Aa の下外区を切り落とした Aa' が 1 点、A もしくは B のいずれかにあたるもののが 1 点、唐草文が太いのが特徴的な C が 5 点出土しており、合計 16 点で全体出土率の 4.10% を占めている。他地区では、A が政庁、周辺官衙、觀世音寺、水城、国分寺、B が政庁、不丁地区、

1 点しか
ない事例

1 点しか
ない事例

Cが政序、周辺官衙、水域に事例が確認されている。

691型式：並列する唐草文を内区に3単位配し、上外区に珠文、両脇区と下外区には鋸歯文を配するやや特異な文様構成をとる。範の違いにより2種類、さらに範の摩滅や彫り直しによってAはa～cの3種、Bはa・bの2種に分かれる。当地区ではAaが10点、Bbが2点出土する。他地区では、Aaが政序、周辺官衙、觀世音寺、国分寺、杉塚庵寺、Bbは政序に事例が確認される。

700型式：植物模様の原形が失われたような変形唐草文で、中心線に鉤状文がつく。内区と外区の区別はなく、唐草の上下に珠文が巡らされる。段頭の凸面には繩目が残る事例が確認される。これまで政序でしか確認されていなかったが、54次石組 SXI1397 出土事例が確認され(Fig.59-35)、さらに文様構成が明らかとなった。

704型式：波線が2本並行に流れる変形唐草文で、上外区に珠文、下外区に内向鋸歯文を巡らせる。範の違いから2種類に細分されるが、当地区ではAが65-2次瓦層から1点出土する。他地区では、政序や般若寺に事例が見られる。

未番号型式：今回新たに確認されたもので(Fig.59-36・37)、36の瓦当全体は残存するが、剥離や摩滅により瓦当文様は左端しか残存していない。内区には、右から左へ流れる唐草文があり、3本の子葉が確認され、右側の2本は右向き、左の1本は左向きとなっている。上外区と左脇区には珠文、下外区には鋸歯文が巡らされ、既知型式に当てはまらない文様構成となっている。36の平瓦部凸面には斜格子文の叩打痕が残される。54次 SD1395Aと54次表土から2点出土した。本来であれば、型式番号を新たに付与すべきであろうが、文様構成の全体が未だ明らかとなっていないため、今回は番号付与を見合せ、その存在のみを報告する。

不明型式：今回再確認する中で、不明型式とされる中に、これまでには見られなかった文様を持つものが1点確認された(Fig.59-38)。瓦当面右端部の破片で、右上隅から中央にかけて唐草が伸び、主茎から子葉が互い違いに派生しているように見える。また内区と外区の区別はなく、唐草に接するように珠文が2点ほど確認できる。周縁部には区画線が入れられるが、その外側には区画は設けられない。断面形態は段頭で、頸部凸面と平瓦部凸面には、繩目文が施されている。新たな型式であっても番号を振るだけの情報もなく、また700型式などのような類似する既知型式の未知の文様部分である可能性もあるため、ここではとりあえず不明型式として報告し、今後の新たな発見に委ねることとしたい。

2) 道具瓦類

道具瓦類は、当地区では鬼瓦、埴、熨斗瓦、面戸瓦が出土している。以下、順次報告する。

① 鬼瓦 (Fig.60・61, PL.36・37)

当地区での鬼瓦の出土は、古代の大宰府式鬼瓦と中近世の鬼瓦等がある。1～8はいわゆる「大宰府式鬼瓦」である。1・2は残欠だが、大型のもので、A I類 I式 Aのものである。1は表面が摩滅などで完全に損耗してしまっているが、左目から上部の破片である。裏側には繩目の叩打痕が明瞭に残る。赤褐色の胎土。60次出土で、出土層位不明。2は左頸周辺の破片で、頸の下の鰐の表現が残る。60次黄灰土層出土。3～5はII式に分類される小型のもの。外区の珠文がI式に比べて小さいのが特徴的である。3は左眉から上部の破片で、額の力こぶ表現や毛髪表現が如実に残る。60次瓦溜出土。4は頭部と左脚部を除き、大きく残存する。

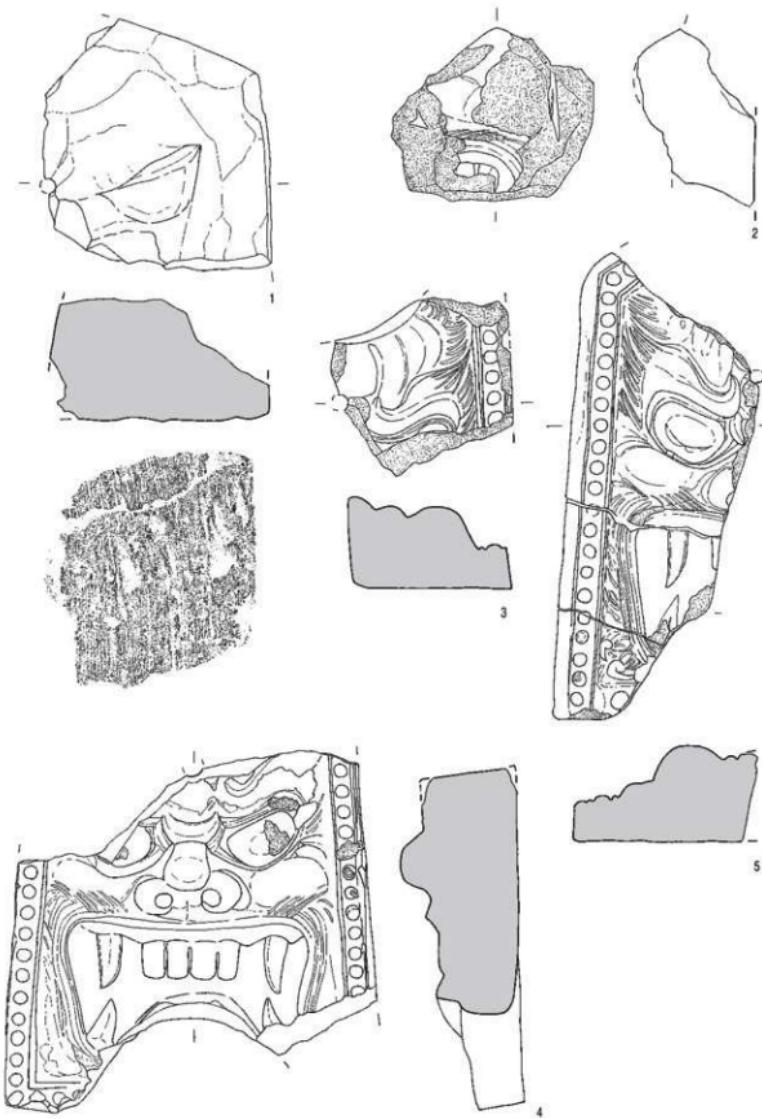


Fig. 60 鬼瓦实测图① (1/4)

4本の歯の表現や鼻孔を開けている様子を表現していることなど、II式の特徴を兼ね備えている。65-2次灰茶色土層出土。5は左半分がほぼ残存する。左右外区の珠文は、これまで15個以上残存しているのが最大数として確認されていたが、本事例は、現状で珠文23個を数えるが、他の事例から類推すると、額部にあと2個はあったものと考えられる。4と共に脚部が残存する事例は不丁地区に幾つかあるのみで、全形を想定するうえで非常に重要な事例といえよう。5は65-2次掘立柱建物SB1560Aの柱穴から出土（掘方か抜き穴かは不明）。6～8はI式Bに分類されるもので、これもI式Aよりは小型である。いずれも右脚部が残存するが、6が目まで残存するほかは、いずれも小片である。不丁地区の出土事例などから、本来上歯は4本表現されているはずであるが、いずれも失われている。その一方で、溝の彫られた上牙と下牙は残る。6～8はいずれも60次黄灰土出土。9・10は中近世の鬼瓦。9は鼻、両目の一部ずつ、額の力瘤が残存し、全体が黒く焼される。一見大宰府式かとも思われるが、大宰府式にはない造形のため、中近世のものとみてよいであろう。60次床土出土。10は額から鼻の上部にかけての残欠で、黒灰色に焼される。65-1次溝SD1555A出土。11は表面が黒褐色に焼され、左側部が一段高くなっている。赤色顔料が付着する。内湾する部分や目釘孔とも考えられる部分も見られるが、直線状の線刻画2本ほど確認されるほかは、際立った表現はなされない。鬼瓦か否か種類不明の瓦であるが、とりあえずここで報告しておきたい。中近世のものと考え

不明瓦

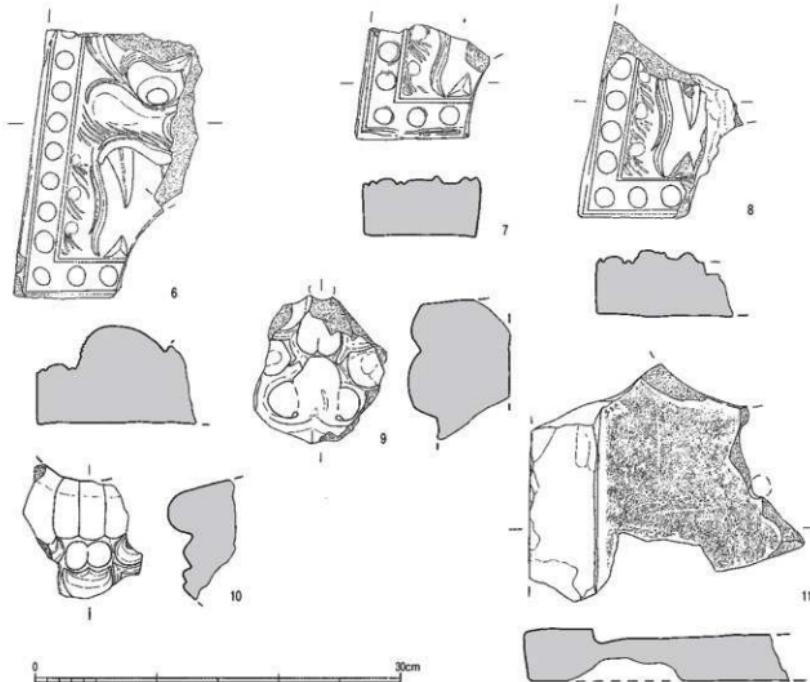


Fig.61 鬼瓦実測図② (1/4)

られる。60次灰色土出土。なお、当地区では報告したものの他に、大宰府式鬼瓦の小片が4点出土しているが、小片のため、今回は割愛した。

② 塚 (Fig.62, PL.37)

当地区では文様塚の出土はほぼ見られないが、多くの無文の塚が出土している。ここでは残存状況の良い2点を報告する。1は長方形のほぼ完形に近いもので、長辺28.5cm、短辺17.5cm、厚さ7.4cm。破面に焼成前に生じた空隙か孔が見られるが、人為的に開けられたものか、成形時に生じたものは不明である。1のサイズのものが多く出土している印象を受ける。60次溝SD1401出土。2は1よりは薄いもので、長辺17.2cm、残存する短辺10.9cm、

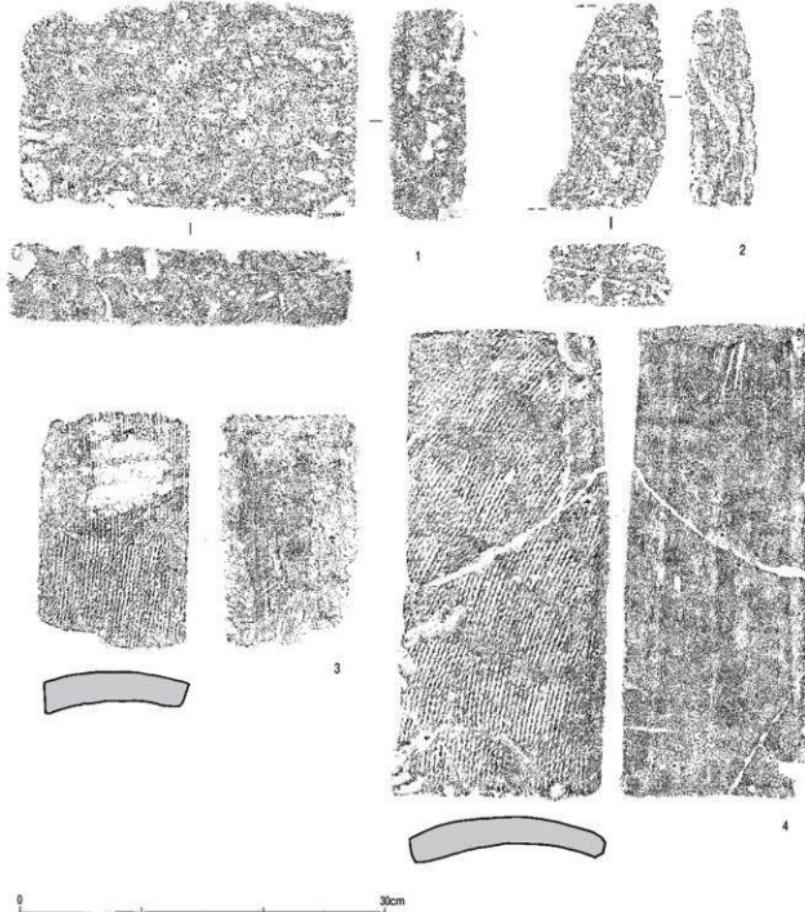


Fig.62 無文塚・斐斗瓦拓影・実測図 (1/4)

厚さ 5.7cm で、厚さ以外は 1 の平面形と同規模の可能性もある。表面にはケズリ調整の痕跡が確認できる。54 次溝 SD1395A 出土。

③ 瓦斗瓦 (Fig.62, PL.38)

建物の棟に積み上げる瓦斗瓦は、棟の規模に応じて必要となる瓦の幅が移り変わるために、一般的な平瓦を必要に応じて縦に打ち欠くことで代用することができる。そのため、本来平瓦であったものが瓦斗瓦として転用されたものもたくさんあったであろう。しかしながら、平瓦は自然の作用によって、縦にまっすぐ瓦斗瓦のように割れてしまうものが多いため、その鑑別をすることは非常に難しい。今回は焼成時に瓦斗瓦として作られたものの報告をする。当地区では 2 点しか瓦斗瓦は確認されていない。共に凸面に縄目、凹面に布目と模骨痕を残すもので、3 は幅 12.0cm で 4 枚分割によって作られたもの、4 は長さ 39.0cm、幅 16.0cm で 3 枚分割によって作られたものである。3 は 65-1 次暗灰色粘土層出土、4 は 65-1 次基壇北側出土。

④ 面戸瓦 (Fig.63 ~ 65, PL.38・39)

棟の瓦斗瓦の下部に平瓦との間に生じた空隙を埋めるために葺かれる面戸瓦は、大宰府では蟹面戸瓦が一般的である。焼成前に面戸瓦として成形・焼成された面戸瓦は、大宰府史跡の各地区では少なく、政庁では 50 点あまりが出土している。また、不丁地区でも小破片含めて 11 点、觀世音寺でも 3 点、水城でも 9 点に過ぎない。しかしながら、当地区では 50 点もの出土を見ており、良好に残存するものが多く出土しており、政庁周辺官衙の中では、最も多い出土数の地区となるものとみられる。ここでは、出土したもののうち、残存率が高い 20 点、そして丸瓦を打ち欠いて面戸瓦として使用した可能性もあるもの 3 点を報告する。

面戸瓦の出土点数
は多い

1 ~ 20 が丸瓦を原体として焼成前に製作されたいわゆる蟹面戸瓦である。報告を割愛したものも含め、面戸瓦と認識できたものは全てこれに属する。凸面に縄目をそのまま残すものと、縄目をスリ消しているものが確認できるが、それ以外に格子などの叩打痕を残すものは報告を割愛したものも含めて見られない。政庁報告書などでは、面戸瓦に大小 2 種類あることが報告されているが、2 ~ 5・8・16 は他のものと比べると一回り大きく、大型の部類になる可能性がある。また、4・7・8・10・12・13 は鴻臚館式軒瓦に見るように黒色に焼される一方で、1 ~ 3・5・9・11・16・17・19・20 は灰色あるいは灰白色に焼き上げ、中には硬質のものもある。14・15 は白色の焼成、6 は鉄錆が付着しているため不明である。

21 ~ 23 は焼成前に成形された面戸瓦ではなく、丸瓦を焼成後に打ち欠いて面戸瓦にしたものと思われる。面戸瓦特有の丸瓦にはない部分に生じるケズリによる切り落としが、これらの資料では全て破面によって形成されているため、丸瓦が偶然割れた結果、このような形状となっている可能性も否定できない。しかしながら、瓦斗瓦などとは異なり、面戸瓦の複雑な曲線形が作り出されたかのような形状となっていて、自然にこのような形状に割れることは非常に可能性が低いと考えられるため、面戸瓦にするために丸瓦を打ち欠いて製作したものと考えたい。いずれも片方の端部が丸瓦の端部となっており、またいずれも灰色に焼成され、一部銀黒色に焼され、同一焼成の丸瓦であるかのようである。そして全て 65-2 次掘立柱建物 SB1560A の同一の柱穴から出土していることも、その類縁性をうかがわせる。これまで大宰府史跡ではこのような事例が報告されたことがないため、確実なことを言うのは難しいが、今後、このような事例も注意を払うべきであろう。

焼成後に
打ち欠いて
製作した
もののか

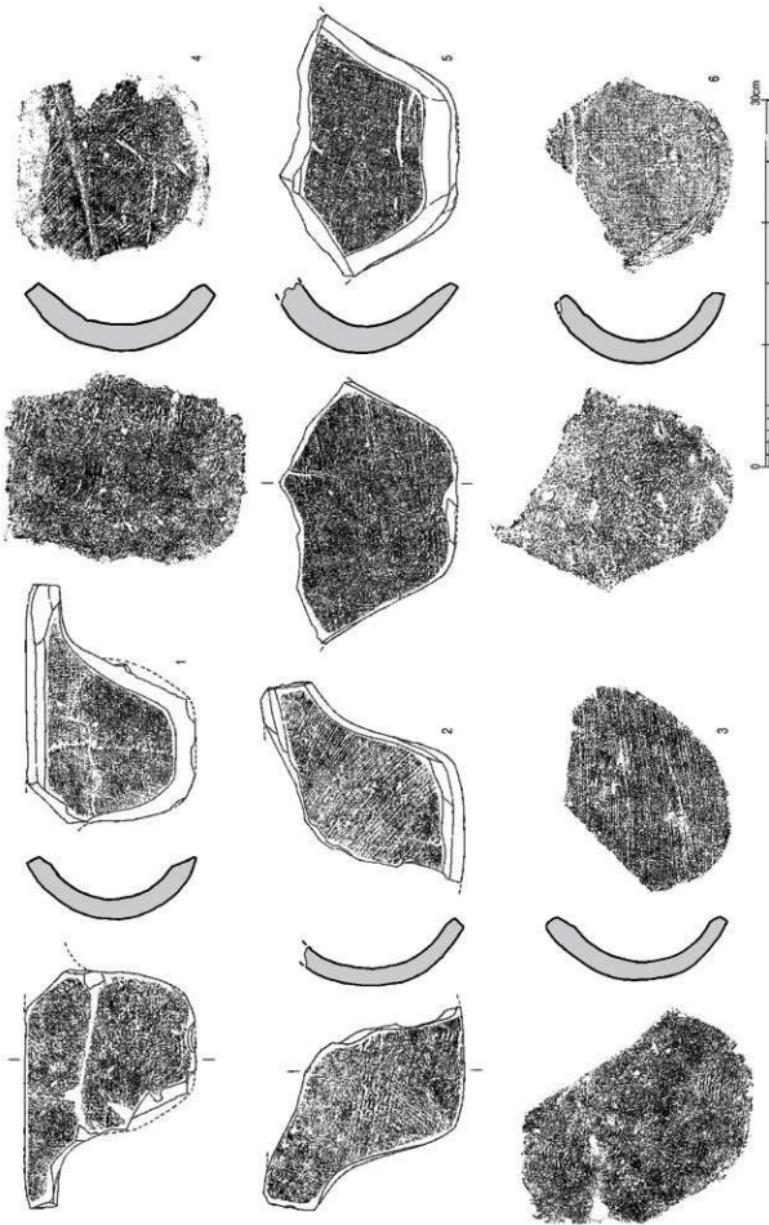


Fig.63 前后瓦拓影·实测图① (1/4)

20cm

Fig. 64 面广瓦拓影·夹测对② (1/4)

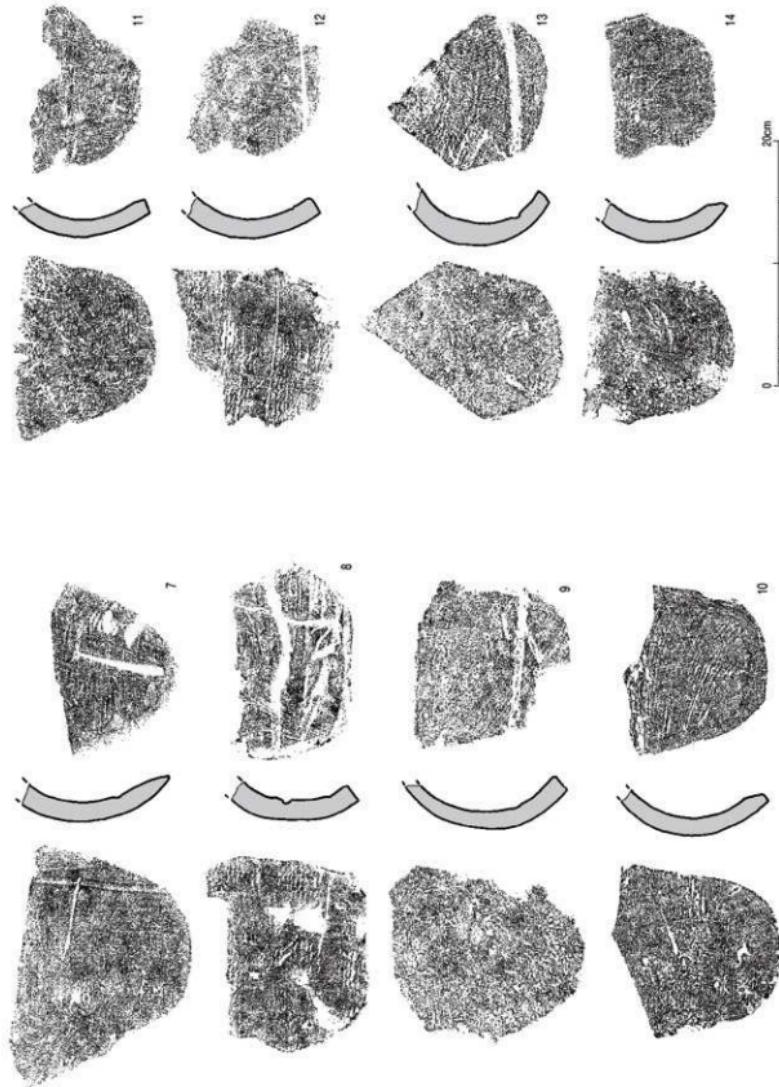
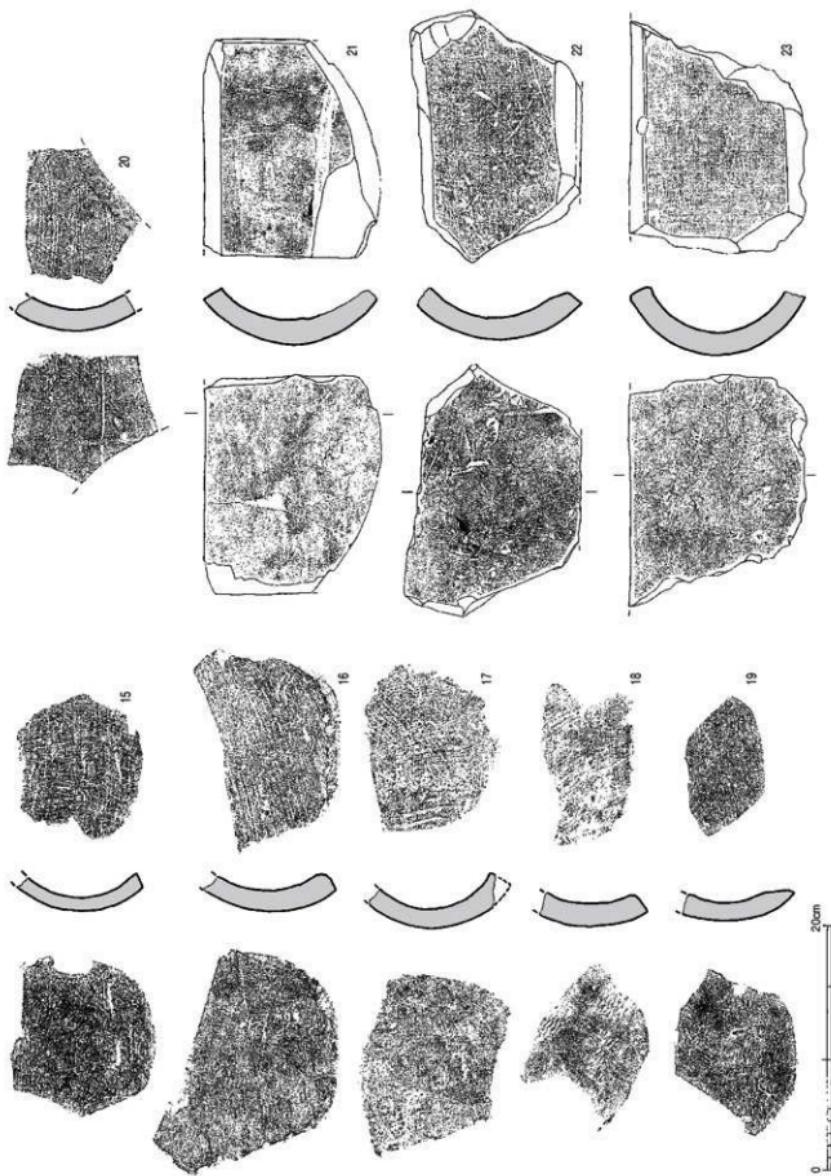


Fig. 65 面戸瓦拓影・実測図③ (1/4)



3) 文字瓦類

①叩打痕文字瓦 (Fig.66 ~ 69, Tab.7, PL.40)

丸・平瓦の凸面に木製長手叩打具により押捺することで格子目や斜格子目の中に文字が刻印される叩打痕文字瓦は、大宰府史跡では現在 23 型式 86 種類が設定されている（凡例参照）。これは 2000 年に発刊された『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』では、21 型式 76 種であったことから見ても、今後、若干ずつではあるが新型式が増加していくだろうし、また本報告においても新たに型式を設定したものがあった。また文字瓦であることに間違いはないが、判読不能な資料については番号設定を保留しており、そのような事例を含め、当地区では、17 型式 64 種 832 点が出土しているが、全体の半数近くを 901 型式が占める点では他の周辺官衙地区とさほど変わりがない。また、当地区の次数ごとの出土点数を見ると、60 次が 542 点と圧倒的に多い。時期的な差を示しているのだろうか。

なお、今回の当地区での検討により、新たに 9010 型式と 906H 型式を設定したため、大宰府史跡の文字瓦の型式・種類は、23 型式 88 種類となった。またさらに、未読型式として新種 5 と 6 を追加している。

901 型式：「平井」「平井瓦」「平井瓦屋」銘の文字瓦で A～N まで 14 種類が確認されてきたが、「平井」銘今回新たに O 型式を加えて 15 種類の範が確認されており、さらに范傷の有無や追刻等により、20 種類に細分される。当地区では、A～E・Fa・Ga・Gb・Ha～Hc・Ia・J・L・M・O が確認され、Fb・K・N 以外は全て確認されている。全部で 330 点出土しており、全体出土率の 39.66% を占め、当地区では最も多く出土している。なかでも、「平井瓦」と正字で印刻される B が 71 点出土しており、さらに 65-1 次調査区が 51 点と異常な集中度合いを示している。これは、「平井瓦」の正字を刻する C も 59 点中、65-1 次が 31 点と同じような割合を示し、それぞれ全体出土率の 8.53% と 7.09% を占めている。ただ、一方で不丁地区出土の 901 型式の内、最も出土の多かった D は 13 点とあまり多くなく、不丁地区とは対照的な在り方を見せる。また、今回新たに発見され、型式設定した O は、やや大きめの斜格子の中に少し間延びしたような「平井」の銘が正字で刻されている (Fig.69-1・2)。格子や文字の雰囲気は H・L・M に似ているが異なっており、明らかに別の叩打具によって打捺されたものである。

902 型式：「佐」「佐瓦」銘の文字瓦で、A～J の 10 種類が確認されており、追刻によりさらに 12 種類に細分される。当地区では 12 種類すべての型式が出土しており、出土点数は 280 点で全体出土率の 33.65% と 901 型式に次ぐ割合となっている。中でも C は 61 点で全体出土率の 7.33%、Db は 44 点で全体出土率の 5.29% を占めている。ほとんどが 60 次から出土している。901 型式同様、基本的には斜線帶あるいは斜格子の中に文字が刻されている。

903 型式：「賀茂瓦」「賀茂」「賀」銘の文字瓦で、A～I の 9 種類の叩打具が確認されており、「賀茂」銘追刻等で合計 11 種に細分される。当地区では I のみを除く 10 種類が確認されており、合計 72 点出土しており、全体出土率の 8.65% を占めている。数点を除いてはほぼ 60 次からの出土である。最も多いのが「賀茂瓦」と左字で刻する C で 19 点、全体出土率の 2.28% を占めている。C・G・H が小さめの格子の叩打痕であるが、それ以外は二重斜格子の叩打痕を用いており、若干新しい時期に属するものと考えられる。

〔安楽〕銘 904型式：「安樂之瓦」「安樂寺」「安」銘の文字瓦で、大宰府史跡においては A・B・D・E の 4 種のみが確認されているが、太宰府天満宮出土資料には、二重区画線内に「安樂寺天承二年歲次壬子」と刻された C などがある。政庁及び周辺官衙では A・D・E しか確認されておらず、Aa 型式は不丁地区でわずかに 2 点確認されるのみである。当地区では、「安樂之寺」の Aa を二重縦線により消去した Ab が 8 点、「安」と左字を二重斜格子文に重ねて刻する D が 10 点、いずれも 60 次から出土している。点数としてはあまり多くない型式といえよう。

〔筑前〕銘 906型式：「筑前瓦」「竹前」「筑」「前」銘の文字瓦で、A～G の 7 種類確認されているが、今回新たに H 型式を加えて 8 種類とした。当地区では全種類出土しているが、出土点数は 31 点とあまり多くはない。G はこれまで日吉地区で 1 点確認されてきたのみで、「筑前」と左字で刻していることまでしかわかっていないかったが、当地区出土のいくつかの破片を合成すると文字部分が完全な形がわかり、「筑前瓦」と左字で刻していることが判明した (Fig.69-906G)。60 次で 3 点出土している。また、G と字の雰囲気が似ているが、G よりも一回り字が小さい新

Tab.7 文字瓦出土点数一覧

型式番号	文字銘	4次	54次	60次	65-1次	65-2次	計	百分比 (%)
901	A 平井瓦屋(陰刻左字)	12	3	5			20	2.40
	B 平井瓦(陰刻正字)	3	5	11	51	1	71	8.53
	C 平井瓦		3	12	31	13	59	7.09
	D (正字)		4	2	4	3	13	1.56
	E	1	18	1	2	22	2.64	
	F			1		1	0.12	
	Fa			1		1	0.12	
	Gn		2	29		4	35	4.21
	Gb			5		5	0.60	
	H (正字)	1	5			6	0.72	39.66
	Ia		1	1		2	0.24	
	Ib		1	15		1	17	2.04
	Ic		2	16	1	1	20	2.40
	Ia		1	14		2	17	2.04
902	J 平井(左字)		2		1	3	0.36	
	L		32		2	34	4.09	
	M 平井(横書き正字)		2			2	0.24	
	O 平井(正字)		2			2	0.24	
	A		22			22	2.64	
	Ba		1			1	0.12	
	Bb		4			4	0.48	
	C	1	4	23		28	3.37	
	D	1	5	51	4	61	7.33	
	Ia		1	18		19	2.28	
	Ib		3			3	0.36	33.65
	Ib	1	5	35	3	44	5.29	
	E		3	24	1	28	3.37	
	F		3		3	6	0.72	
903	G 佐瓦(左字)		17	1	2	20	2.40	
	H	1	1	9	1	12	1.44	
	I		2	22	3	27	3.25	
	J 佐瓦(正字)	3	1		1	5	0.60	
	A		5			5	0.60	
	Ba	賀茂瓦(正字)	10	2	12	14	1.44	
	Bb		1			1	0.12	
904	C 賀茂瓦(左字)		18		1	19	2.28	
	D		12			12	1.44	
	E	賀茂(正字)	4			4	0.48	8.65
	F		1		1	2	0.24	
	G		2	1	2	5	0.60	
	Ha	賀(左字)	10			10	1.20	
	Hb		2			2	0.24	
904	Ab 安樂之寺(正字)	8				8	0.96	
	B 安(左字)	10				10	1.20	2.16
906	A 筑前瓦(左字)	1	4		1	6	0.72	
	B 竹前(左字)					1	0.12	
	C 筑(正字)		8		1	9	1.08	
	D		2			2	0.24	3.73
	E 前(左字)	1	3		2	6	0.72	
	F		2			2	0.24	
	G 筑前瓦(左字)		3			3	0.36	
907	H		1		1	2	0.24	
	大國(正字)	1	5		2	8	0.96	
910	A 小口瓦(左字)	18	2	23	1	44	5.29	
	B 小口瓦(左字)				1	1	0.12	
911	C □口瓦(左字)		2			2	0.24	
	D 末(左字)		2		1	3	0.36	
915	E 大(横書き・叢書正字)	1	1		2	0.24		
	F 大(正字)		2			2	0.24	1.08
	G 大(正字)		3			3	0.36	
	H 大(正字)		2			2	0.24	
	I917 八年(左字)	1	6	4	8	19	2.28	
	J918 Ba □(四)王		5		1	6	0.72	
919	K919 A 不明		2			2	0.24	
	L924 几に十(横書き)		1			1	0.12	
925	M925 未解読(3～4字)					1	1	0.12
	N925 5 □瓦(横書き)		1			1	0.12	
926	O926 6 「下」(左字)か?		1			1	0.12	
	P926 不明 判読不能		1	1	1	3	0.36	
合計								
8 81 543 128 72 832 100.00								

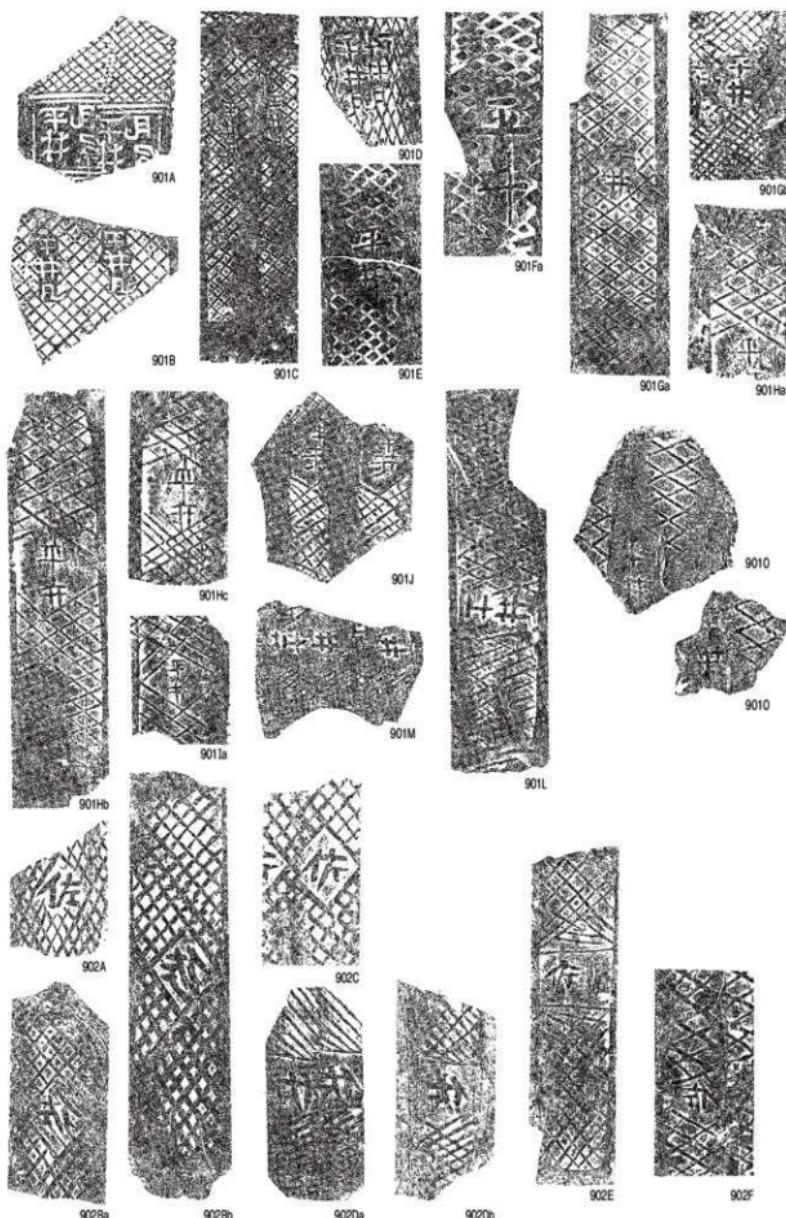


Fig.66 出土文字瓦型式拓影① (1/4)

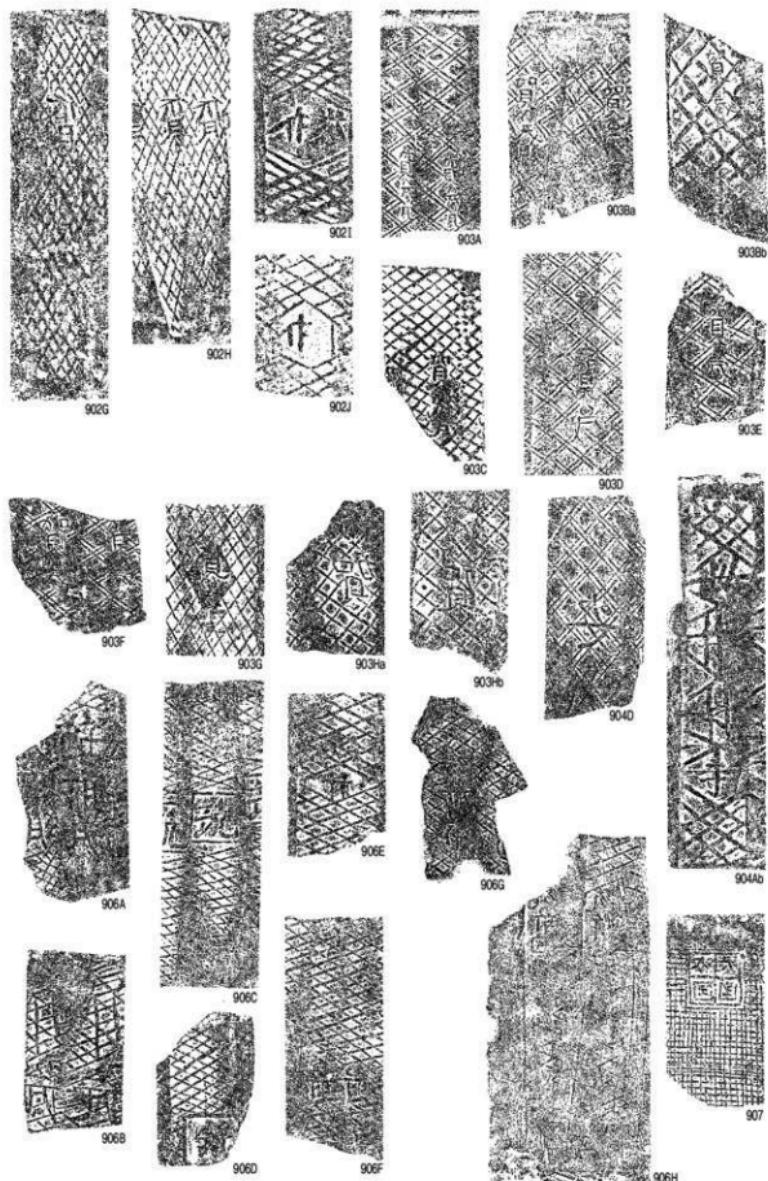


Fig.67 出土文字瓦型式拓影② (1/4)

たな型式が確認され、H型式を新たに設定した(Fig.69-5)。GとHとの差は文字の大小の他、Gが文字のすぐ近くまで斜格子文が施されているのに対し、Hは文字の周り、特に左側には斜格子文との間に若干の余白が生じていることが挙げられる。またHの文字上方の斜格子は、通常とは異なり、阿弥陀鐵状に互い違いの格子文となっていることも特徴といえよう。

907型式：「大国」銘の文字瓦で、格子文の中に田の字の区画を作り出し、その中に「大国」「大国」銘の鉢を2列刻するものである。当地区では8点出土している。

910型式：「小□瓦」銘の文字瓦で、AとBの2種類に細分される。共に斜格子文に囲まれるが、「小□」銘Bの字の方がやや細く長く刻される。2文字目は「ト」のようにも見えるが未解読である。当地区ではAが44点、Bと思われるものがわずかに1点(65-1次)確認されている。不丁地区ではAが25点、Bが16点の出土であったのに対し、当地区ではBの少なさが際立っている。

911型式：未解読の「□□瓦」銘を境にして、上に変則的な斜格子、下に互い違いに異なる平行文となる特徴的文字瓦で、政庁、不丁地区の他、筑紫野市劍塚瓦窯で確認されている。当地区ではわずかに60次から2点出土するのみである。

915型式：斜格子に「大」の鉢を持つ文字瓦で、これまでA～Gの7種類が確認されているが、当地区では、A・D・F・Gが出土しており、併せて8点で、65-1次のAが1点を除けば、残り全て60次からの出土である。Aは縦書きと横書きの正字の2種類の「大」が刻される一方で、D・F・Gは「大」の正字を刻する。Fは觀世音寺の報告書(『觀世音寺一遺物編2-1』)において新たに設定された形式で、粗い斜格子目3枠目の中に「大」と正字で刻される。「大」と記されたすぐ左上の斜格子の右隅が一部三角形に彫られているのが特徴である。Gは字体がEに似て、二画目が上へ突き抜けない「大」銘だが、格子の太さなどが異なることから、『大宰府政府周辺官衙跡IV—不丁地区遺物編1-1』において新たに新型式915Gとして設定された。当地区でもGと思われる文字瓦が60次から出土しているが、不丁地区報告の915G(上書のFig.15に掲載)と比べると、「大」の字の間隔が異なっている。おそらく打捺の際の叩打具の重ね具合が異なっているためであろうと考えられる。また、今回見いだされた915G型式の「大」の字は、拓本では表れないが、光を当てるなどして入念に観察すると、上に突き抜け、「大」の字になっていることが分かる(PL40-915G拡大)。平瓦の項でも報告する本型式の事例(Fig.78-24)もよく見てみると、やはり上に突き抜けているようである。当型式が元々は上に突き抜けない大の字が追刻等によって大の字となっているのか、はたまた最初から上に突き抜けているのかは、今後他の事例も含めて検討する必要があるが、今回はとりあえず細分はしていない。

917型式：比較的細かい格子目に「八年」の左字の鉢を持つ文字瓦である。当地区では全ての調査区で出土しており、総数は19点に上る。比較的古手の文字瓦かもしれない。

918型式：「四王」銘の文字瓦で、大きく明瞭に「四王」と刻するAと、四の字が省略されたBの2種があるが、Bには通例の「□王」の二文字のBaと、二文字目に「上」の左字に似た文字が入る「□□王」銘のBbが新たに不丁地区で見いだされ、現在は3種に細分されている。当地区ではBaが6点出土する。Aが国分寺、条坊内、四王院跡で見いだされている一方で、Baは政庁、周辺官衙、条坊内、Bbは不丁地区で1点のみと、出土地にかなりの差が見られる。

919型式：4.0cm四方の□の形に文字あるいは記号を刻されるが未解読の文字瓦。方形枠内

の記号の種類によって、AとBの2種に分類されている。当地区ではAが60次から2点出土したのみである。

924型式：比較的整った斜格子目5枚中に横書きで「凡に十」のような記号を刻しており、観世音寺の報告書（前掲）で新たに型式設定されたものである。60次から1点出土するのみである。

未読型式 **未読型式・新種3**：『大宰府政府周辺官衙跡II一日吉地区』で新種3として、また『大宰府政府跡』でも紹介された（Fig.258-5）もので、3～4文字が縦書きに刻されているが、未だ解読されていない。当地区では65-2次から1点出土している。

未読型式・新種5：『大宰府政府跡』でも紹介されたもので（Fig.258-3a）、平瓦凸面の斜格子目で横書きに「瓦」を刻し、さらに上部の格子内に文字らしきものがあることから、「□瓦」と刻されていた可能性がある。また、これとは別個体に、複数種類の叩打具が打捺された事例も報告されている。60次溝SD1513から1点出土した。新型式としてもよいが、不確定要素がまだ多いので、型式番号は付与せず新種として今回は報告する。

未読型式・新種6：丸瓦凸面の斜格子目の中に「下」の左字のような一文字を刻する文字瓦で、連続して打捺している。一角目が正字にもみえることから、正字の可能性もあるが、そうなると判読が困難である。60次から1点出土した。不確定要素がまだ多いので、型式番号は付与せずに新種として今回は報告する。

型式不明・判読不能の個体：既知型式のいずれにも属さないが、文字あるいは記号らしきものを刻した事例がある。これらは欠損が多いために既知型式に當てはまる可能性もあることから、あえて不明のまま報告しておく。今後良好な資料が見いだされれば、型式付与される可能性もあるだろう。不明1は54次灰色土出土。平瓦凸面に格子文と亀甲形の区画内に何らかの文字が確認されるが、全体がよくわからぬため判読不能である。不明2は60次炭層1出土。記号あるいは文字が2文字ほど刻されるが全体がよくわからぬため、判読不能である。

また、これら以外にも、不明3として多重円弧の文様を刻した斜格子文のものを挙げておく。この円弧文は『大宰府政府跡』でも紹介されたもの（Fig.258-8）と同じ叩打具によるものと考えられ、それには円弧の上部に「瓦」の異体字のような文字が刻されている。この変形の「瓦」の銘は、日吉地区的報告において「新種1」として報告されたものであることから、本例が「新種1」と同型式である可能性が想定される。ただ、「瓦」が刻された瓦の円弧文は、斜格子文と交わっており、本例作成後、叩打具に追刻がなされている可能性も考えられる。いずれにせよ、さらなる事例の出現を俟つこととしたい。

② 線刻文字瓦（Fig.68）

大宰府史跡では叩打痕文字瓦は非常に事例が多いが、焼成前の瓦に線刻された線刻文字瓦の事例はあまり多くない。大宰府政府跡で2例、観世音寺では中近世のものも含め12例くらいしかない。当地区では2点確認されたので、以下に報告する。

1は54次溝SD1399出土。「義、箕、眞」のような線刻文字が一文字見られるが、全体が残存しておらず、判読不能である。2は65-2次床土出土。「壽」のような線刻文字が一文字確認されるが判読不能である。

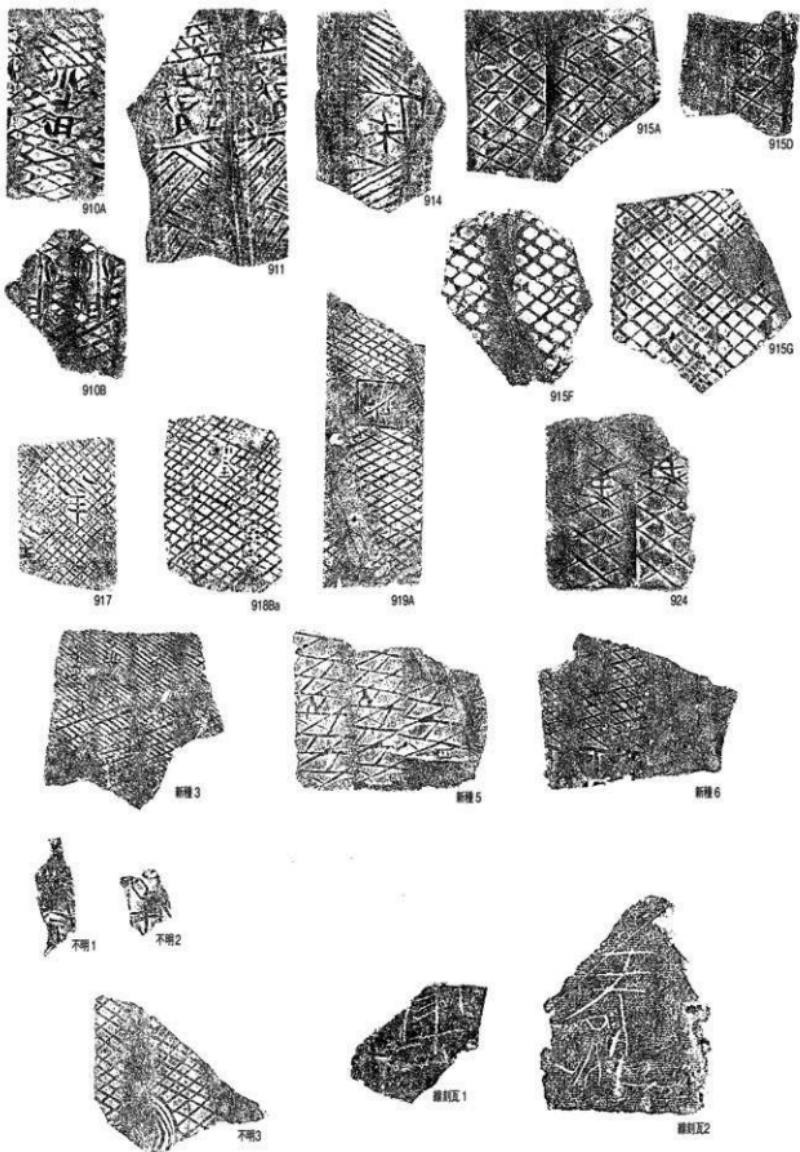


Fig.68 出土文字瓦型式拓影③ (1/4) · 線刻文字瓦拓影 (1/2)

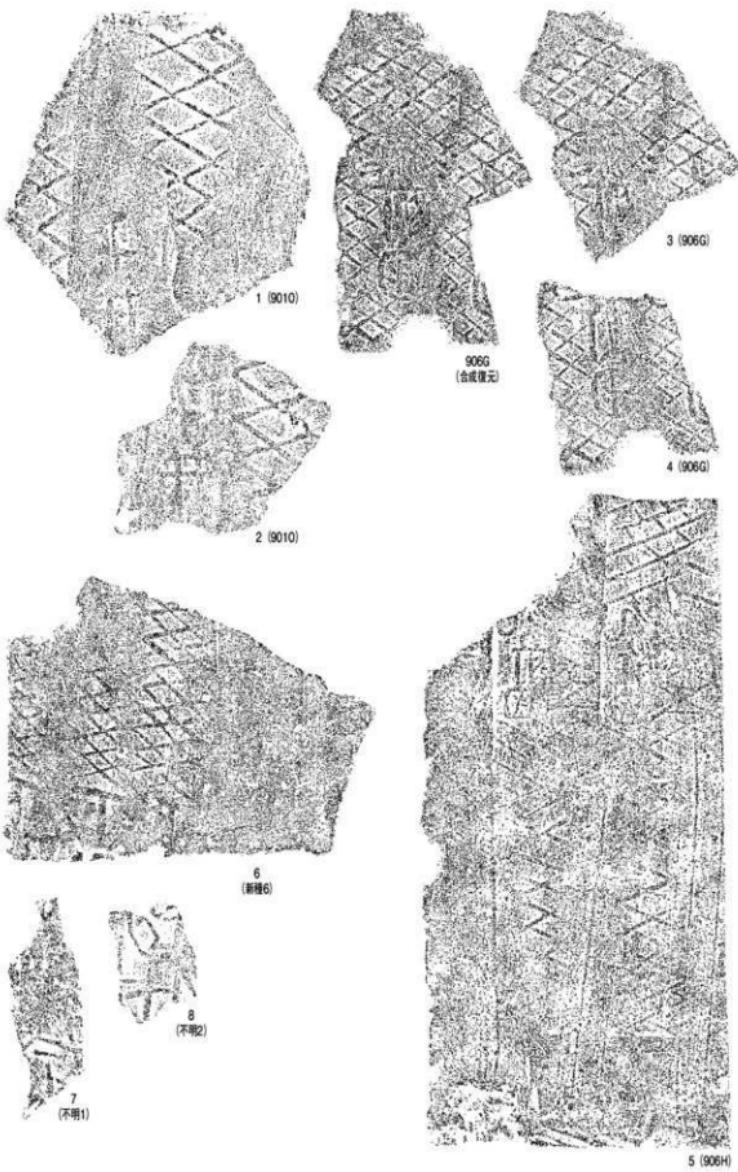


Fig.69 新型式等文字瓦拓影 (1/2)

4) 丸・平瓦

①丸瓦 (Fig.70 ~ 72, Tab.8, PL.41・42)

当地区では、築地などの瓦葺の施設が数多く検出されているため、瓦類も非常に多く出土しているが、中でも圧倒的な割合を占めるのが丸・平瓦片である。それらを網羅的に報告することとは非常に膨大であり現実的ではないので、非常に残存状況の良いものを中心報告する。

1・2はいわゆる「行基式」丸瓦である。1は全体的に黒色に焼されており、凸面はスリ消し、内面には糸切り痕跡と布目痕が残り、布目の縫合せ痕跡も見られる。凸面には繩目痕は残されていないが、觀世音寺の暗渠 SX1310・1832・1835 や、四王寺山の毘沙門堂経塚から出土した円筒土管を半裁したような形状に類似している。65-1 次の溝 SD1550B から出土しており、築地の北側の溝であることから築地 SA1410 に葺かれていたものであろう。2は1よりは小型のもので、灰色に硬質に焼成され、凸面に繩目を叩打し、一部スリ消している。凹面はやや粗い布目痕が均一に残る。65-2 次の掘立柱建物 SB1560A の柱穴の一つから出土した。行基式丸瓦は当地区の出土はあまり顕著ではない。

「行基式」
丸瓦

3~30は玉縁式丸瓦であり、3は幅約2cmの粘土紐を巻き上げて作成されたもので、灰色で硬質に焼成された非常に薄いつくりのものであるが、大きく横に歪んでいる。玉縁は完全に欠損しており、人為的に打ち欠かれた状態で使用された可能性が考えられるが、粘土紐を作成していることによる欠落の可能性もある。凸面はスリ消し、凹面は整った布目痕が残る。4も幅3cm弱の粘土紐を巻き上げて作成されたとみられる。灰白色に焼成され、凸面は繩目痕、凹面は布目痕が残る。これも3と同じく玉縁全体がきれいに欠損している。65-1次基壇 SA1440 北側で出土した。5は灰色で硬質に焼成され、凸面には繩目をスリ消し、わずかに繩目痕跡が残る。玉縁凸面にはカキメ状の痕跡が明瞭に残る。凹面には整った布目痕跡と共にわずかに糸切り痕跡が残るため、粘土板巻き付けにより作成されたことが分かる。6は幅3cm程の粘土紐を巻き上げて作成されたもので、灰白色に焼成する。凸面はスリ消し、玉縁凸面にはカキメが残る。整った細かい凹面には布目痕に加えて粘土紐の縦ぎ目痕跡が残る。7は暗灰色に焼成され、凸面は繩目をスリ消し、内面には布目痕に加え、わずかに糸切り痕が確認できる。8は暗灰褐色に焼成され、凸面に摩滅しながらも繩目痕が残り、凹面にはやや乱れた布目痕と糸切り痕に加え、粘土板を接合した痕跡が確認できる。玉縁付近の凸面側の肩部が不自然に欠損しており、瓦を使用する際に人為的に欠損した可能性も考えられる。9も暗灰褐色に焼成され、凸面は繩目をスリ消し、内面には布目痕と明瞭な糸切痕が残る。7~9は築地 SA1440 北側から出土した。10は暗灰色で硬質に焼成し、凸面は繩目をスリ消し、凹面には整った布目痕を残す。溝 SD1555A から出土。11は灰色で硬質に焼き上げ、凸面に一辺約8mmの斜格子の叩打痕を残し、一部はナデでスリ消す。凹面にはやや粗い布目痕に加え、粘土板の接合痕跡が確認できる。12は灰色で硬質に焼成され、幅約3.5cm、長さ約24.5cm以上の単位で一辺約7mmの斜格子文が打捺される。凹面には布目痕に加え、強いユビナデが何ヶ所か確認される。11, 12は築地 SA1440 北側出土。13は明褐色に焼成され、凸面には一辺7~9mmのやや不揃いな斜格子が打捺され、凹面には縫合せ痕を残す布目に加え、わずかに糸切り痕がみられる。14は灰色で硬質に焼成され、凸面には、幅約4cm、長さ約22cm以上の単位で、一辺約5~10mmの不揃いな斜格子が打捺される。打捺単位の境にナデ消しが入れられ

玉縁式
瓦

斜格子文

る箇所も見られる。凹面には整った布目痕にわずかに粘土板の接合痕跡が見られる。15は灰色で硬質に焼成されており、凸面には幅約3.5cm、長さ約24cm以上の単位で、一辺約9mmの正方形に近い斜格子文が打捺され、斜格子文の中央近くには連続する縦2枚に十字が刻される。この施文は『大宰府政跡』でも紹介されており(Fig.258-10・西脇殿出土)、このような斜格子文印打具の一部にちょっとした彫り込みが入れられた事例は他にもあるとして、同一工房内における使用工具の区別のためではないかと推測されている。築地SA1440北側から出土。16は白色の胎土に黒色に焼される。凸面には幅約4.5cm、長さ約30cmの単位で、一辺10~12mmの斜格子文が打捺される。斜格子のいくつかには右側を三角形に彫り込まれたものも見受けられる。凹面は一辺約5mmの網目のような布目痕が残る。17は灰色で硬質に焼成され、薄く造られる。凸面には幅約3cmの単位で、一辺16~21mmの大きな斜格子文が刻される。凹面には整った布目痕が残る。18は黄灰褐色に焼成され、凸面には一辺3~6mmの細かい不規則で、隆起線が太い斜格子文が打捺されるが、スリ消しにより大半が消失する。凹面には糸切り痕跡とわずかに布目痕が残るが、不明瞭で判然としない。19は灰色で硬質に焼成され、凸面には一辺約1.5cmの二重斜格子文が打捺される。「賀茂瓦」や「安」銘の文字瓦の斜格子に類似するものである。内面にはやや粗めの布目痕と縦方向のユビナデがあり

Tab.8 丸瓦計測一覧

No.	全長	玉縁長	広端部幅	狭端部幅	最大高	最大厚	種類	叩打痕	登録番号	備考
1	45.1	-	18.6	11.5	9.6	2.6	行基式	スリ消し	6	
2	(30.4)	-	(14.3)	9.6	(8.7)	1.6		繩目文	31	
3	(34.7)	-	12.4	12.1	6.2	0.9		スリ消し	1	粘土繩巻き上げ
4	(34.7)	-	15.4	(12.0)	7.6	2.0		繩目文	8	粘土繩巻き上げ
5	36.6	6.4	(13.0)	15.3	6.4	1.3			4	
6	38.0	5.6	15.1	15.1	8.0	1.7		スリ消し	17	粘土繩巻き上げ
7	38.0	5.2	17.0	15.0	9.1	2.4			10	
8	39.0	4.8	16.6	(14.8)	8.0	2.1		繩目文	9	
9	39.0	6.0	15.2	15.0	7.7	2.1		スリ消し	7	
10	40.1	5.0	(12.2)	15.1	8.9	1.4			5	
11	34.1	4.1	(12.7)	(14.5)	8.4	1.8			29	
12	34.5	4.0	(11.7)	14.8	8.5	2.1			11	
13	36.1	5.2	16.9	15.6	9.5	2.1			20	
14	37.6	5.8	(9.8)	17.0	9.4	1.8			19	
15	(27.3)	-	15.5	15.2	9.2	1.8			27	
16	35.0	5.2	17.0	16.4	8.7	1.8			18	
17	32.7	6.8	13.6	14.6	9.9	1.2			3	玉縁側の端部幅の方が広い
18	34.6	5.4	16.5	15.0	9.0	2.2			26	
19	33.7	5.3	14.0	14.2	7.8	1.8			15	玉縁側の端部幅の方が広い
20	33.0	5.0	16.2	14.4	8.7	1.8			2	
21	35.4	6.0	(17.0)	14.4	9.6	2.0			24	
22	32.7	4.7	16.3	14.7	8.7	1.8			28	
23	33.0	4.3	(12.7)	15.3	8.0	1.9			25	
24	33.2	4.4	15.9	15.4	7.6	1.9			14	
25	34.5	4.7	(12.5)	16.2	9.5	2.5			30	
26	34.4	4.4	(3.2)	15.3	9.0	2.2			22	
27	33.8	4.3	(10.6)	15.3	9.7	2.7			16	
28	33.3	5.5	(16.0)	14.4	7.7	1.8			13	
29	33.0	6.2	17.0	14.1	9.3	1.7			21	
30	33.5	4.6	(11.7)	(14.0)	9.2	2.0			23	

(単位はcm)

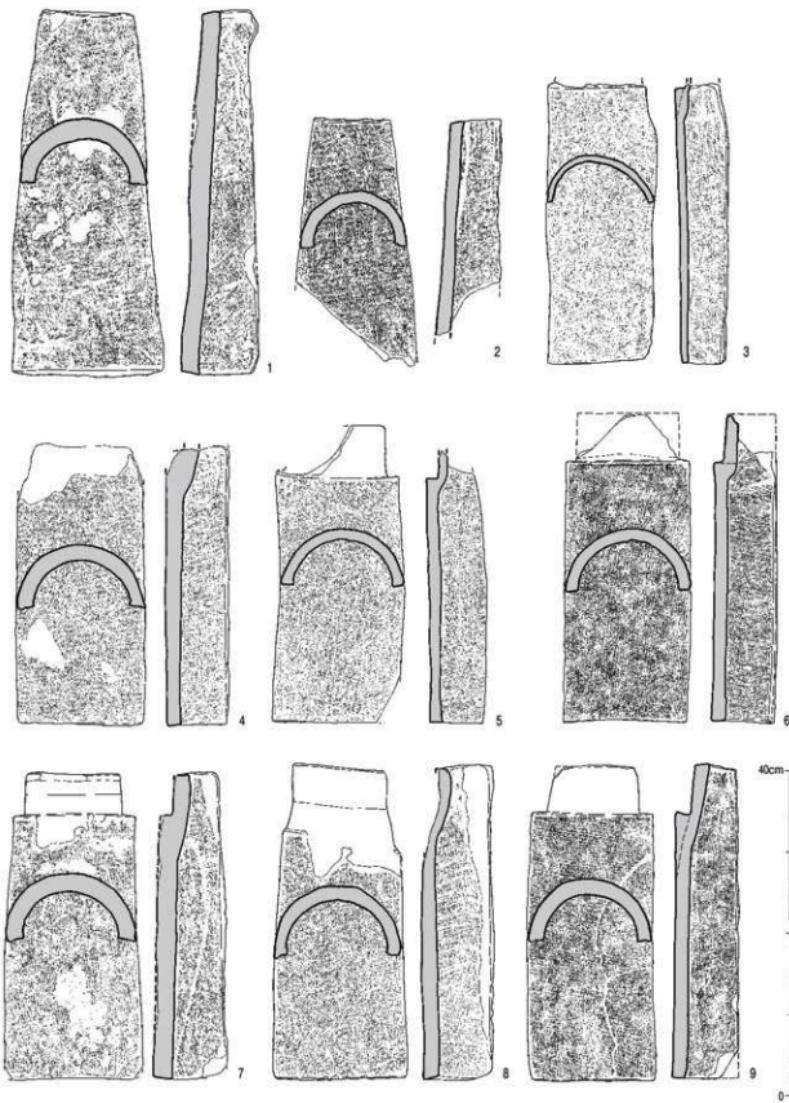


Fig.70 丸瓦拓影・実測図① (1/6)

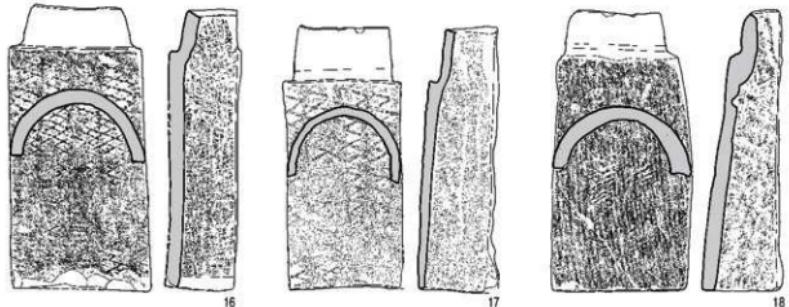
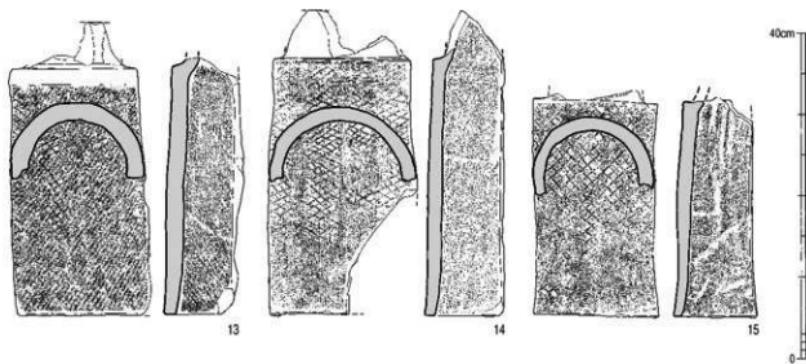
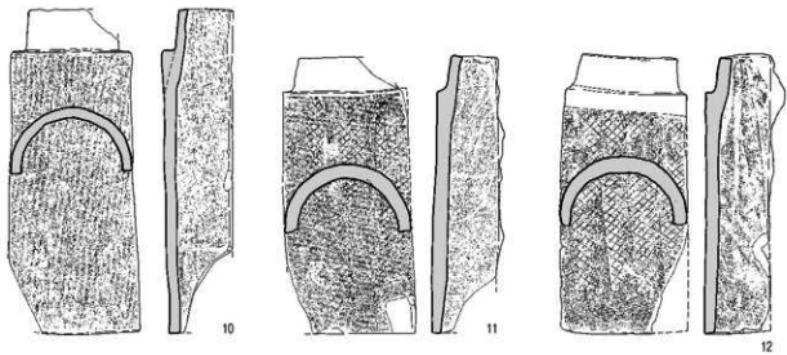


Fig.71 丸瓦拓影・実測図② (1/6)

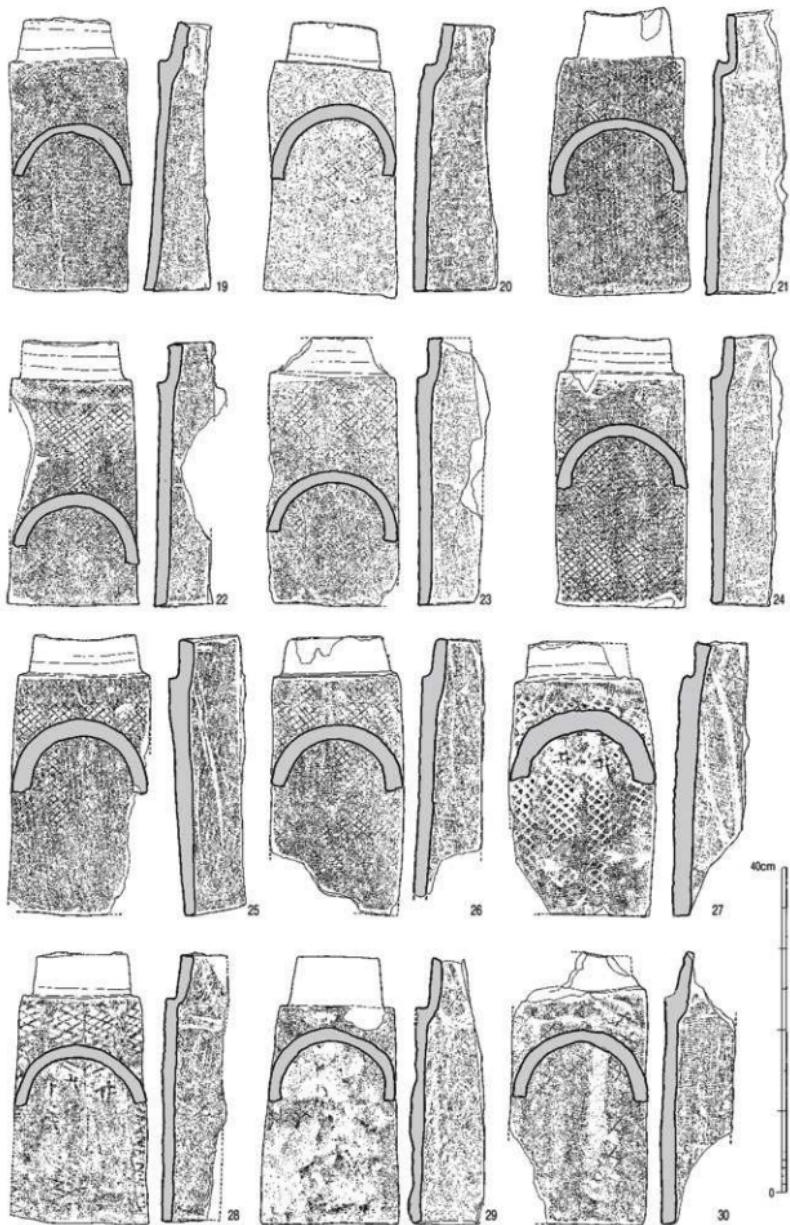


Fig.72 丸瓦拓影・実測図③ (1/6)

られる。凹面のみならず凸面にも粘土板の接合痕跡がみられるのは珍しい。20も灰色に硬質に焼成され、凸面の施文具は19と全く同じ二重斜格子文である。文様帶の中央部では格子線が2本のところが4本となる箇所がある。19同様、胎土中に大きめの白色粒が目立つ。21は黄褐色に焼成され、凸面には19、20に類似する二重斜格子の叩打痕を持つが、格子線が4本連続する箇所が、19、20よりも多く、叩打具の追刻あるいは別の叩打具を使用している可能性が考えられる。19～21はいずれも60次灰砂層出土。22は灰色に硬質に焼成され、凸面には11、12に類似する一辺約7mmの斜格子文を叩打するが、「平井瓦」の文字銘を有する901C型式である。凹面は比較的整った布目痕が残る。築地SA1440北側出土。23は灰褐色に焼成され、凸面は22と同じ「平井瓦」銘(901C)の文字瓦である。内面は整った布目が残る。24も901C型式の叩打痕を凸面に持つ。灰色に焼成される。ただ、打捺後に「平井瓦」の文字の部分のみをややナデ消しているような印象を受ける。偶然なのか人為的な理由なのは不明。25も901C型式で「平井瓦」をナデ消しているように見える。灰褐色の胎土に黒灰色に焼成される。25は築地SA1440北側出土。26も901C型式で、途中で叩打具の叩打位置が変わっている。「平井瓦」の高さが変化している。凹面にはやや糸のほつれた布目痕が粘土板の接合痕と共に残る。27は黄褐色に焼成され、厚ぼったく造られる。凸面には陰刻斜格子に加え、大きく「平井」銘が陽刻される901E型式の叩打痕を残す。叩打具の単位としては、幅約5cm、長さ約25cmである。凹面には糸切り痕と寄せのある布目痕が残る。28は灰褐色に焼成され、凸面に一辺10mm程度の不規則な斜格子の中に「佐」の異体字と思われる文字を刻する902I型式の叩打痕を有する。叩打具の長さは25cmを越える。凹面には糸がかなりほこりび、一部は網の目状にみえる布目痕が残る。29は黄褐色に焼成され、完形ながらも凸面は激しく損耗する。残存する表面には、一辺10mmの正方形の格子文の中に、「賀」の文字銘を有する903Ha型式の叩打痕が打捺される。内面は比較的整った布目痕が残る。30は暗褐色に焼成され、凸面に一辺1.5～1.9mmの斜格子文に「大」銘を持つ915D型式の叩打痕を刻する。文字の中には、「夫」のようにさらに一画多い字になっているようにも見えるものもあるが、叩打の重複によってそう見えているようであり叩打具は915D型式のものと考えて差し支えないようである。内面は非常に整った布目痕に粘土板の接合痕跡が確認される。

模骨桶巻 四枚造り

②平瓦 (Fig.73～78, Tab.9, PL.42～44)

1～7は、繩目文で模骨桶巻四枚造りによる製作技法と考えられるもの。1は褐色に焼成、凸面をナデ消した後に、部分的に約6cm四方の方形状に繩目文を一定間隔に打捺しており、あまり見られないものである。凸面は明瞭に模骨痕が残る。凸面側長側部が明らかに人為的に打ち欠かれ、幅が狭められているようになっており、実際に瓦を葺く時の所作である可能性が考えられる。2は灰色で硬質に焼成。非常に明瞭な糸切り痕が凹凸両面に見られ、凹面には模骨痕が認められず、また粘土板の接合痕跡も見られない。寸法等からみても一枚造りの可能性もあるが、両側部のヘラ切りの角度が垂直方向ではないため、いずれも断定が難しいが一応四枚造りとしておくが、もし一枚造りとすれば凹面側に布目痕がほとんど見られないのは、整形台に布を敷いていなかった可能性も考えられる。3は灰色で硬質に焼成。凸面には繩目文が交差するように全面に叩打され、凹面は模骨痕、布目痕が明瞭に残る。端部はいずれも複数面に面取りするようヘラ切りがなされる。4は灰白色に焼成。凸面は繩目文が斜め一方向に全面

に叩打され、凸面は模骨の凹凸は明瞭ではあるが、布目痕は摩滅とケズリなどにより不明瞭。四隅はヘラ切によってわずかに切り落としている。5は灰白色の胎土に、表面が黒く焼される。凸面には縄目文が斜め一方向に全面に叩打、凹面は模骨痕と布目痕に加え、中央付近に粘土板の接合痕跡があり、確実に桶巻造りということが分かる。4と同じく隅部をヘラ切りで切り落としている。6は暗褐色の胎土で、凸面が黒灰色に焼される。凸面は縄目文が斜め一方向に全面に叩打、凹面はわずかに模骨の凹凸や布目が見られるが、ケズリによってほぼ消されている。7も6とほぼ同じ状況である。

8～16も縄目文だが一枚造りによるものと考えられるもの。8は内部が吸炭する灰白色の胎土に、表面が黒灰色に焼される。凸面には長辺方向に直線的に縄目文が叩打される。特に凸面側には5mm大の白色粒の付着がとても目立ち、離れ砂を用いた可能性を考えられる。凹面には糸切り痕と布目痕が顕著にみられる。両側部は垂直方向にヘラ切りがなされることなど、一枚造りである証左が多くみられる。築地SA1440北側出土。9は灰色に焼成、凸面にはわずかに糸切り痕とユビオサエが残り、直線的な縄目文が叩打される。凹面には明瞭な糸切痕と布目が確認される。10は灰白色に焼成される。製作方法等はほぼ8や9に同じ。凸面の縄目文が整然と叩打されている。10も築地SA1440北側出土。11も8～10と同様の製作痕跡が

Tab.9 平瓦計測一覧

No.	種類	全長	広端部幅	狭端部幅	広端部高	狭端部高	最大厚	製作技法	登録番号	備考
1	縄目・スリ消し	36.8	(23.1)	(21.8)	(3.9)	(3.9)	2.1	模骨桶巻四枚造り	1	
2		36.8	—	22.8	7.0	5.2	2.5		8	一枚造りの可能性もある
3		36.4	(27.1)	26.7	(8.1)	7.9	1.7		6	
4		37.0	31.2	26.0	11.5	11.5	2.5		21	
5		38.9	34.4	(26.0)	8.2	8.7	2.4		14	
6		36.9	35.3	32.5	11.3	9.0	2.8		7	
7		37.1	35.0	30.5	10.4	9.3	2.6		20	
8		38.2	(23.5)	24.0	(4.5)	6.8	2.7		4	
9		37.5	25.9	24.4	(6.0)	6.5	1.9		12	
10		38.8	25.1	23.8	6.8	7.4	2.1		22	
11		36.9	25.8	(16.9)	7.4	7.0	1.6		15	
12		38.5	26.9	25.0	7.0	7.6	2.0		11	
13		38.8	25.1	24.8	6.6	7.6	2.8		10	
14		37.6	27.6	25.1	7.4	7.3	2.4		13	
15		(37.0)	(28.5)	19.7	(9.0)	(8.9)	4.6		9	
16		36.0	28.9	25.9	6.5	7.1	2.2		23	
17	スリ消し?	45.5	(27.0)	(17.0)	(5.6)	(6.2)	3.0	模骨桶巻四枚造り に粘土継ぎ足しか	16	雁振瓦のような道具瓦の可能性もあり
18	斜格子文	32.8	25.9	23.3	9.3	7.6	1.8		25	
19		32.2	24.8	21.6	7.2	6.3	1.8		5	
20		32.8	28.9	28.4	7.4	7.7	2.8		26	
21		30.5	(16.5)	26.4	(6.4)	6.8	1.8		2	
22	「平井瓦」銘文字瓦 (901B)	33.5	(25.5)	25.6	6.5	7.6	1.5	円筒桶四枚造り	24	
23	「平井瓦」銘文字瓦 (901a)	37.2	26.6	(23.7)	7.4	8.0	2.1		19	
24	「大瓦」銘文字瓦 (915c)	33.9	(19.9)	(22.7)	7.7	6.0	2.0		18	

(単位はcm)

見られるが、凸面には1mmもない微細な砂粒が全面に付着しており、離れ砂によるもの可能性がある。井戸SE1558出土。12, 13も築地SA1440北側出土で、他と同様の特徴を持つが、12の凹面の布目痕は、糸がややはつれた状態となっている一方で、13の凸面は8と同様に粒の大きな離れ砂が目立つ。14もほぼ同様だが、凹面の布目の糸のはつれや凸面の離れ砂に加え、凸面両側部に乾燥時に指頭圧痕の複数付いた痕跡が見られる。15は褐色に焼成され、製作痕跡の特徴は他の一枚造りのものとさほど変わりはないが、厚さが4.6cmもある非常に分厚いものである。ここまで分厚い平瓦は、当地区ではあまり例を見ない。溝SD1555Aから出土。16も築地SA1440北側出土で、他と同様の特徴を持つ。全面を黒色に焼す。

17は全面に黒色の焼しがかかり、一見縄目文の四枚造りの瓦のようにも見えるが、全長45.5cm、最大幅30.0cmと大型である。さらに両側部の端面の加工調整は、摩滅が激しいものの、凹面側からヘラ切りを入れてから、割って分割しており、通常の縄目文の平瓦ではない成形技法である。そして入念に観察すると、狭端部側から約29cmほどまでは、凹面に模骨痕と布目痕、糸切り痕が見られ、通常の平瓦に見る痕跡であるが、それよりも広端部側の凹面には、そのような痕跡は全く見られず凹面側にはユビナデのような調整痕が残るのみである。一方で凸面側は全体が横方向のナデ調整により、一体として調整がなされている。通常の四枚造りのように粘土板を桶に巻いた上で、さらにその桶の上部に輪状の粘土を巻ぎ足して長さを確保し、凸面側を全体的にナデで調整を行って分割した可能性がある。分割後については、通常の縄目文の平瓦に様なヘラ切り、ケズリによる端部調整は行われない。このように特異な製法や形状であることから通常の平瓦として製作されたものではないことは明らかである。大棟の上にかぶせる雁振瓦のような道具瓦の一種である可能性も考えられるが、性格不明であるため、ここでは平瓦として報告しておく。60次黄色粘土層出土。

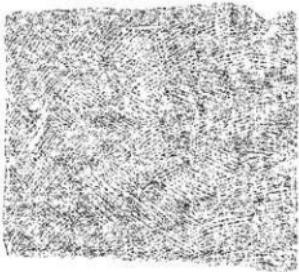
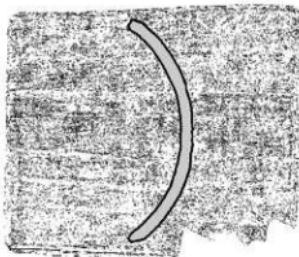
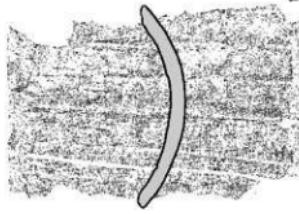
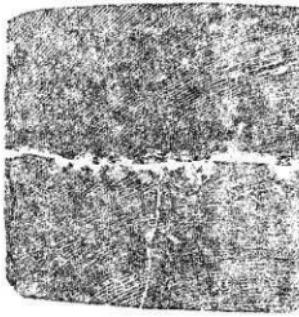
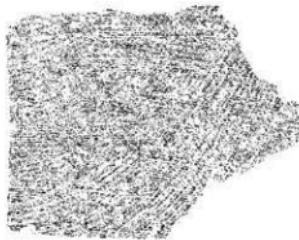
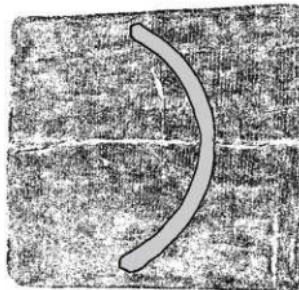
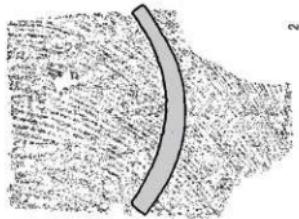
道具瓦の一種か

円筒桶四枚造り

18～24は、円筒桶四枚造りによるもので、凸面に主に斜格子文を刻する。18は灰色で硬質に焼成。一辺6～10mmの斜格子文を持つ。斜格子の中に何本か縱線が入る。凹面には糸切痕、布目痕に加え、粘土板の接合痕跡が確認される。築地SA1440北側出土。19もやや硬質に焼成するが、重ね焼きの痕跡と思われる色むらがみられる。凸面には一辺5～7mm、線の太さが2～4mmとやや太めの斜格子文が叩打される。斜格子文は、幅約5cm、長さ約30cm以上の叩打具が用いられる。凹面に粘土板の接合痕が見られる。20は灰褐色に焼成され、凸面に一辺10～14mmの不揃いな斜格子文が打捺される。凹面には整った布目痕が残る。築地SA1440北側出土。21は、凸面に一辺約15mmの二重斜格子文を叩打する。5単位ほどの叩打具の単位が確認できる。凹面にはわずかに糸切痕、明瞭な布目痕が残る。22は凸面に「平井瓦」と陰刻鉢を入れる901B型式の文字瓦の叩打痕を有する。6単位分が確認できる。文字部分はナデ消されたり、隣接する叩打痕によりほとんどが消失している。築地SA1440北側から出土。23は赤灰褐色に焼成され、凸面に「平井」銘の901la型式の文字瓦の叩打痕を有する。叩打痕は6単位確認でき、残存状態が良いものは、幅7.5cm、長さ約28cm確認することができる。凸面には粘土板の接合痕がみられる。24は凸面に斜格子に「大」銘の915G型式の叩打痕を有する。上に突き抜けない「大」の字のようにも見えるが、文字瓦の項でも述べたように、わずかではあるが上に突き抜けている痕跡を見ることが可能である。

40cm

Fig.73 平瓦拓影·米测① (1/6)



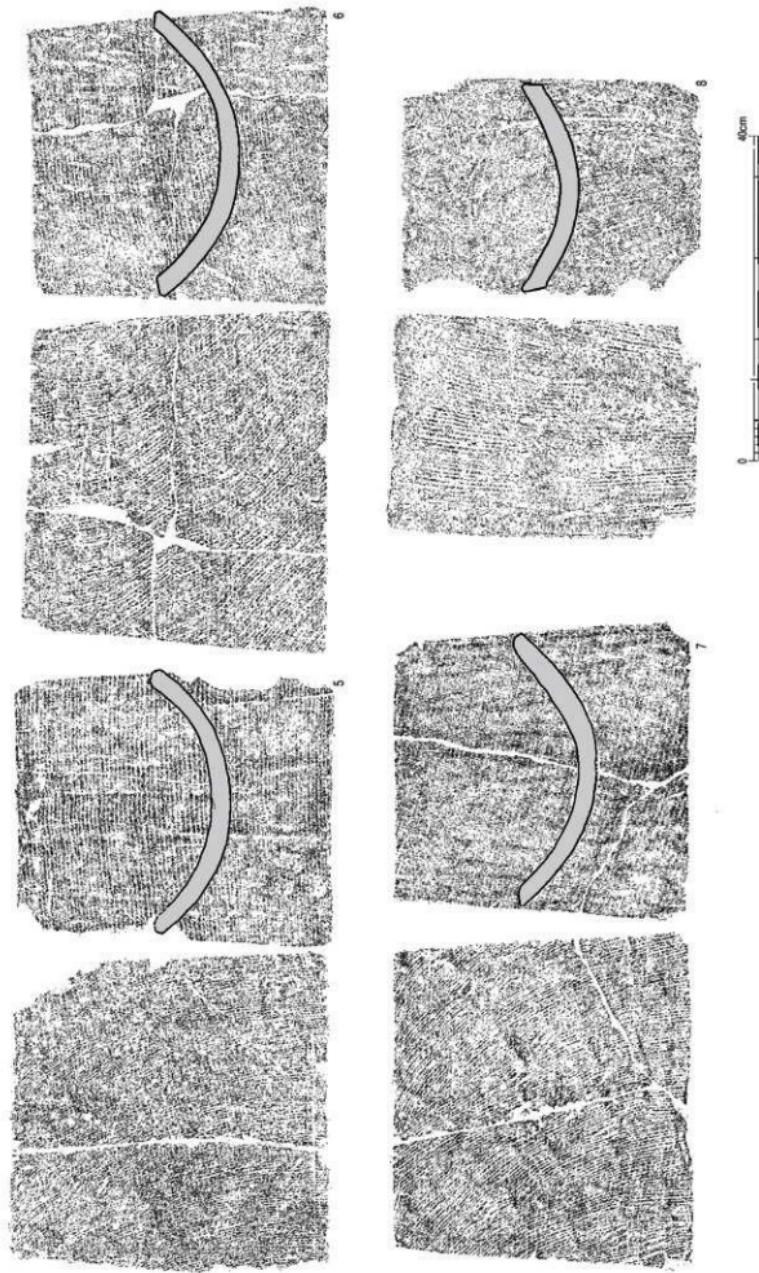
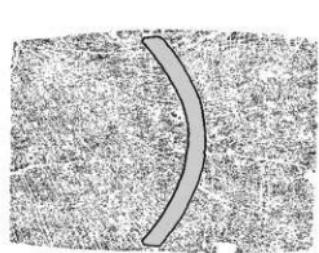
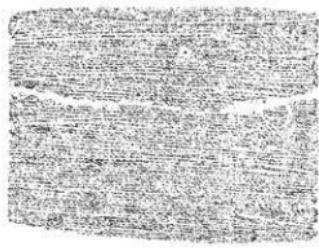


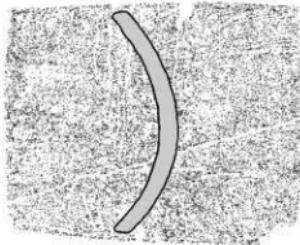
Fig.74 平瓦折影·夷面(2) (1/6)



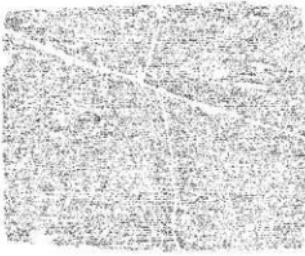
9



10

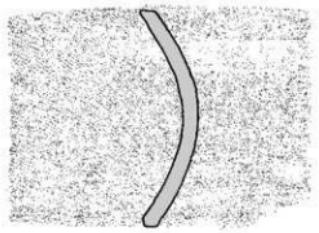


11

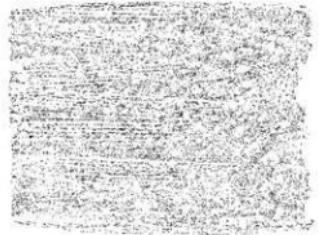


12

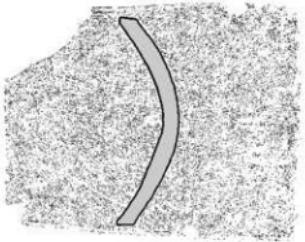
40cm
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14



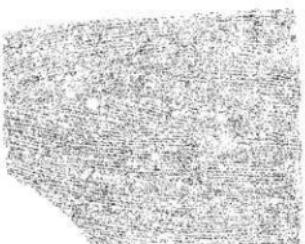
9



10



11



12

Fig.75 平瓦拓影·表面③ (1/6)

Fig. 76 半瓦拓影·麦穗(4) (1/6)

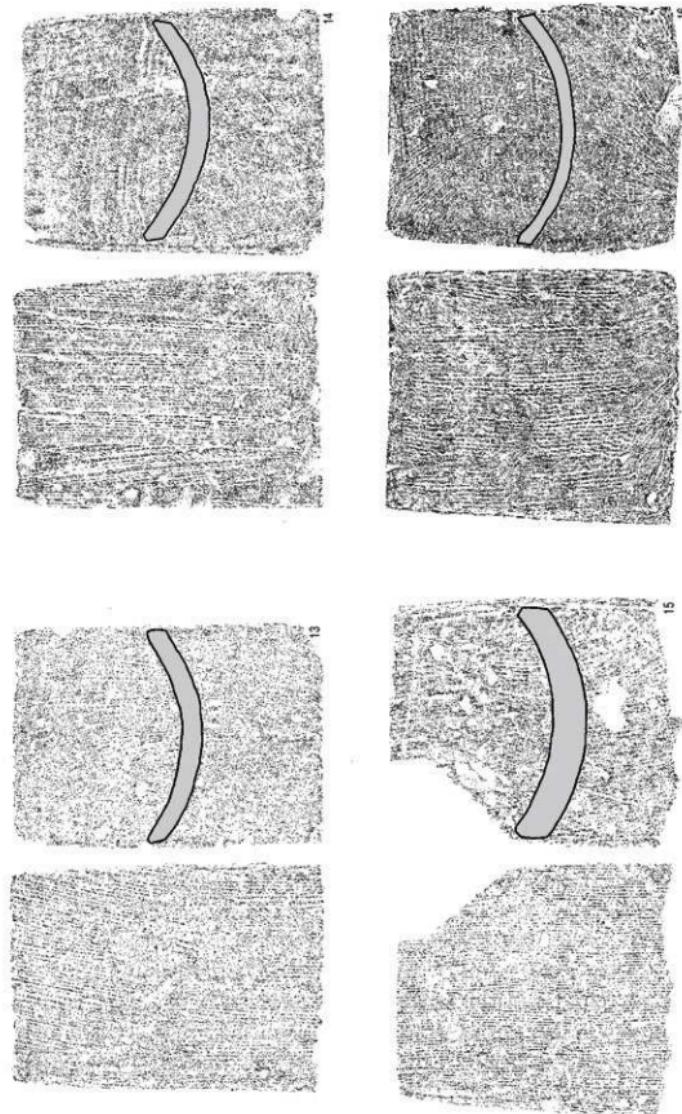


Fig.77 半瓦拓影·麦穗对⑤ (1/6)

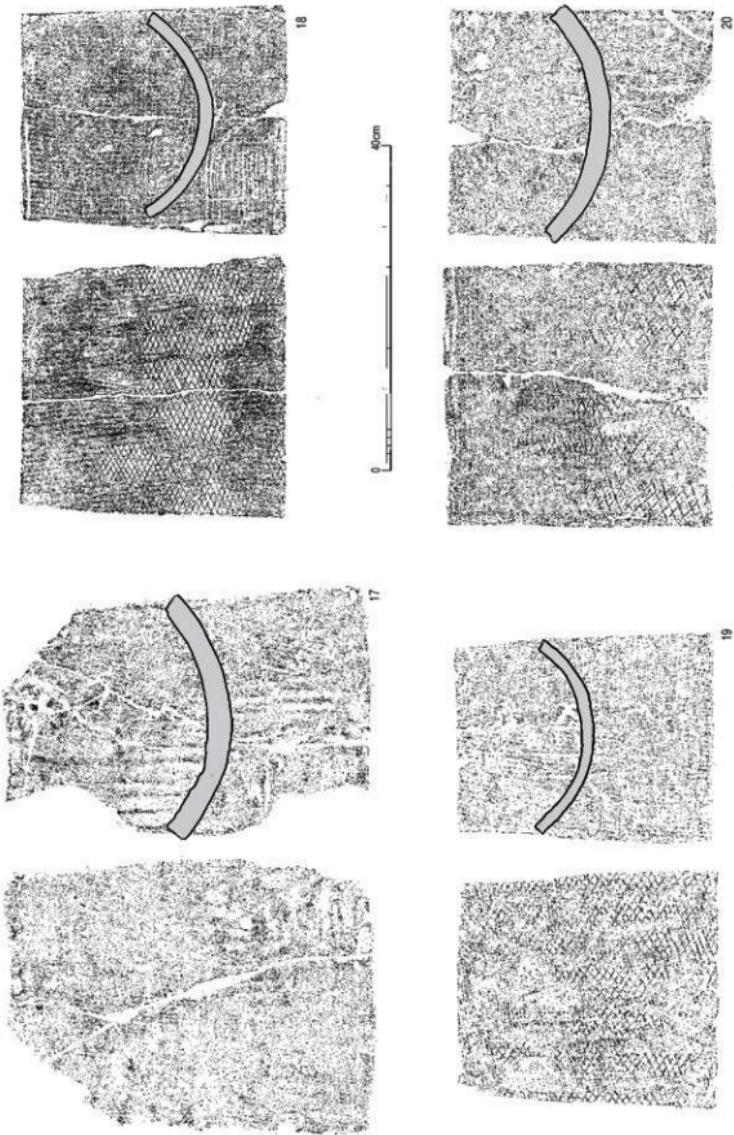
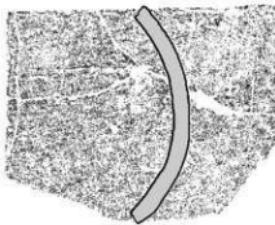


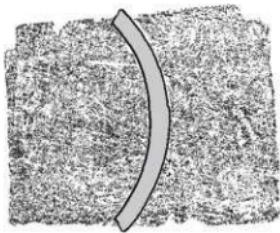
Fig.78 平瓦拓影·美观型⑤ (1/6)

0 40cm

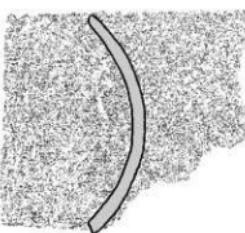
24



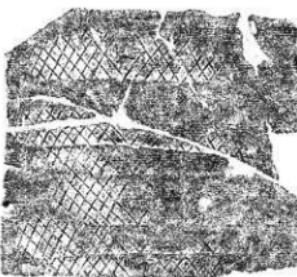
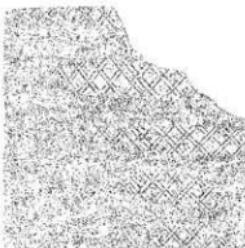
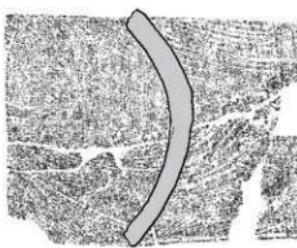
22



21



23



(2) 土器・陶磁器類

歳司地区官衙跡平地部の調査では、建物・築地・柵・溝・土坑・ピット等の遺構が検出され、数多くの土器・陶磁器類が出土している。その大半を須恵器・土師器が占めるが、黒色土器及び縁軸陶器・灰釉陶器・越州窯系青磁・唐三彩等の陶磁器もみられる。本項では、遺構出土品を主体に層位出土品、遺構検出時及び表採資料を報告する。

1) 建物

土器類は、建物の柱掘方及び柱穴（柱痕）内から出土しているが、遺構の性格上、出土点数は少なく、図示に耐え得る50点余りを掲載した。なお、出土柱掘方の表記は、基準となる柱掘方を含め〇番目の柱掘方・柱穴（柱痕跡）と記している。

SB1500 出土土器 (Fig.79, PL.45)

須恵器蓋（1～4）1・2は口縁部の小破片で、口唇部は丸く納める。天井部はドーム形を呈しよう。3・4は口縁部内面にかえりをもつ蓋で、3のかえりはシャープで、口径は15.0cmに復元した。4のかえりは高い。蓋としたが、或いは身の受部になるか。

須恵器皿（5）口縁部から底部にかけての小片で、口縁部はやや外反する。

須恵器壺（6）口縁部小片で、口唇部は丸く納める。口径は15.2cmに復元した。

須恵器高壺（7）壺部の破片で、体部の中程から外反する。口唇部は丸く納める。底部には脚部の一部が残存する。復元口径は16.6cmを測る。

須恵器壺（8）体部破片で、最大部位に沈線を1条巡らす。下半部は回転ヘラケズリ。

1は東から3列目で、北から2番目の抜取穴、2はその北側の抜取穴出土。4・7は南西隅の礎石掘方出土。3・5・6は建物整地層出土で、8は整地層下層から出土している。

SB1560A 出土土器 (Fig.79)

須恵器蓋（9～12）9の口唇部は小さく立ち、天井部には鉤形の攝みを貼付する。なお、口縁部と天井部は直接接合しないが、同一個体として実測した。復元口径18.2cm。10・11は鳥嘴状口縁をなし、10はやや大型のもので、口径は21.6cmに復元した。天井部にはヘラ記号かと思われる横方向の沈線がある。12は口縁部内面にかえりをもつ蓋で、かえりの先端を欠く。

須恵器壺（13）壺若しくは甕の口頸部破片。口縁部は緩やかに外反する。口唇部に平坦面を有し、笠先による沈線を1条施す。また、口縁部直下に沈線を巡らす。外面カキメの後ナデ、内面カキメ（8条/cm）による。

土師器甕（14）口縁部から肩部にかけての破片で、口径は19.8cmに復元した。頸部の締まりは良く、口縁部は鉤状に外反する。外面ハケメ、内面ヘラケズリ調整による。

9・12は北東隅柱掘方、10・11・13は北東隅柱から東に3番目の掘方、14は南側桁行西端の掘方から出土した。

SB1560A 抜取穴出土土器 (Fig.79, PL.45)

15～30は礎石抜取穴からの出土であるが、22～27がSB1560Bの時期にわたる資料。

須恵器蓋（15～17）15・16は口縁部の小片で、口唇部は丸く納める。天井部はドーム形になろう。15の口径は13.7cmに復元した。17は鳥嘴状口縁の小片で、立ち上がりは高い。

須恵器高壺（18）脚部破片で、壺部・裾部を欠く。脚部内外面はヨコナデによる。

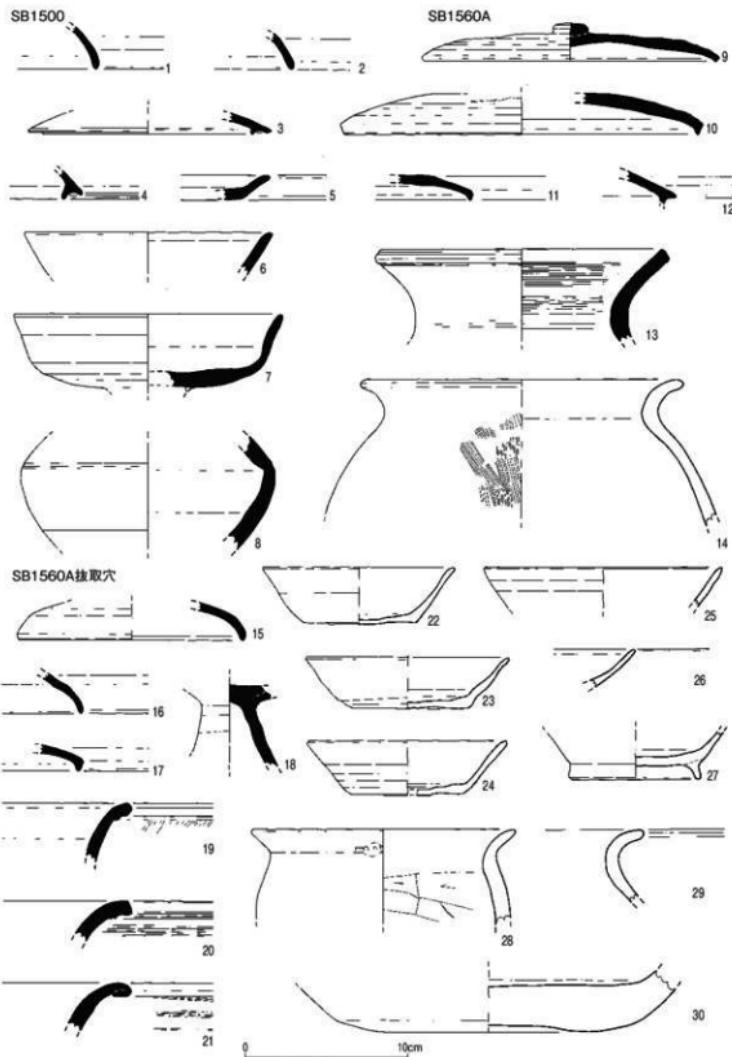


Fig.79 建物出土土器実測図① (1/3)

須恵器甕（19～21） 何れも口縁部小片であるが、20・21は大きく外反するようだ。19・20の口縁部直下には削り出しによる三角突帯を施す。21の口縁部は端部を折り曲げ、肥厚させている。外面調整は19が縱方向のハケメ後ヨコナデ、20・21はカキメ（4～5条/cm）による。

土師器壺（22～25） 22・24の口縁部は直線的に開き、23は外湾気味に開く。何れも底部は平底で、ヘラ切りによる。口径は22が11.8cmで、23は12.5cm、24は12.3cmに復元した。25は口縁部小片で、口縁部直下外面を強く撫でている。

土師器椀（26・27） 26は口縁部小片で、内湾して立ち上がる。口唇部はシャープ。27は口縁部を欠く。高台径は8.1cmを測る。

土師器甕（28～30） 28は小甕の口頸部破片。頸部の綺まりは悪い。外面粗いハケメ、内面ヘラケズリによる。復元口径16.2cm。29は口縁部小片で、鉤形に屈曲する。30は肉厚の底部破片。土師器甕としたが、3cmと肉厚であることから鋳造に関わる遺物の可能性がある。

20は北側柵行で、北東隅柱から2番目の抜取穴の出土。同じく17・23・28・29は、3番目の抜取穴から出土した。16・19・21・30は南側柵行で、南東隅柱から2番目の抜取穴出土。同じく15・25は3番目の抜取穴の出土で、18・22・24・26・27は梁行中央の抜取穴から出土した。

鋳造に関わ
るか？

SB1565 出土土器 (Fig.80, PL.45)

土師器壺(31) 底部が丸底を帯びる壺で、口唇部は丸く納める。器高2.3cm、復元口径11.6cm、底径7.9cmを測る。胎土は良好で、内外面とも灰白色を呈する。東側柵行で、北東隅柱から3番目の礎石抜取穴から出土した。

SD1562A を切るビット出土土器 (Fig.80)

32～34はSB1565に付随する南北溝SD1562Aを切るビット(S-2)内から出土した。建物の下限を示す土器として、ここに報告する。

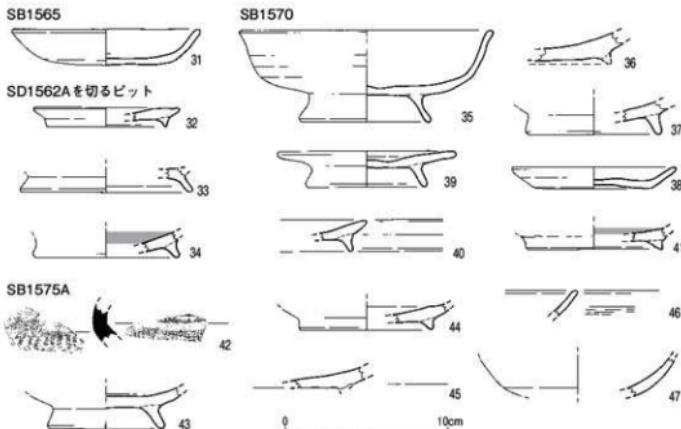


Fig.80 建物出土土器実測図② (1/3)

土師器台付皿（32） 口縁部は、欠損後に研磨しているため短くなってしまい、復元口径 9.0cm。高台は断面三角形を呈し、7.3cmに復元した。

土師器椀（33） 高台部の破片で、ハ字形に開く。復元高台径 10.6cm。

黒色土器椀（34） 内面を焼した A 類の底部破片で、ハ字に開く短い高台を貼付する。内面ヘラミガキによる。高台は 9.0cmに復元した。

SB1570 出土土器 (Fig.80, PL.45)

土師器椀（35～37） 丸底の椀にハ字形の高い高台を貼付した器形をなし、口縁端部は外方に小さく屈曲する。内外面ともナデ調整による。器高 5.7cm、口径 15.6cm、高台径 8.1cm を測る。36・37 は底部破片で、36 の高台は三角形をなす。37 の高台は低く、端部は丸い。

土師器台付皿（39・40） 39 の坏部は水平に開き、高台はハ字形を呈し、高め。器高 2.2cm、復元口径 11.0cm、復元高台径 7.4cmを測る。40 は口縁部から高台にかけての小片で、口縁部は欠損後に研磨している。高台はシャープ。

黒色土器椀（41） 内面を焼した A 類椀の底部破片。高台は低く、断面三角形をなす。

41 は北東隅柱穴の出土で、37 は北東隅柱から南に 3 番目の柱穴出土。38 は北西隅柱から南に 3 番目の柱穴出土で、39 は北側梁行の東隅柱から 3 番目の柱穴、35・36・40 は東から 2 番目の間仕切穴から出土している。

SB1575A 出土土器 (Fig.80, PL.45)

須恵器甕（42） 頭部破片で、外面格子目タタキ、内面平行当て具による。

土師器椀（43～47） 43～45 は底部破片で、43 の高台はハ字形を呈し、高い。復元高台径 7.2cm。44 の高台は低く、断面三角形を呈する。45 の高台は剥離している。46・47 は坏部破片で、46 は口縁部小片。外面ヘラミガキによる。47 は体部の破片で、内外面ともナデによる。

42・45 は南側桁行の南西隅柱から 2 番目の柱穴、43 は同じく 5 番目の柱穴、44・46・47 は東端の柱穴から出土した。

2) 築地

築地 SA100 の南側溝 SD102 と SA1400 の北雨落溝 SD1405・SD1550、暗渠 SX1390、S-12 から土器が出土している。

SD102 出土土器 (Fig.81, PL.45)

須恵器蓋（1） 口縁部から天井部にかけての破片で、天井部には平坦面を持つ。口唇部はシャープで、内面に浅い沈線を巡らせる。また、口縁部と天井部との境には、2 条の沈線を施す。口縁部ヨコナデ、外天井部回転ヘラケズリで、内天井部には同心円の当て具痕がみられる。外天井部にはヘラ記号を付している。器高 4.2cm、復元口径 13.4cmを測る。

須恵器环（2） 口縁部の立ち上がりが高いもので、斜め上方に立ち上がる。底部は丸底をなす。口縁部ヨコナデ、外面回転ヘラケズリにより、内底面には同心円當て具痕を留める。器高 4.5cm、復元口径 12.2cmで、法量的に 2 の蓋とセット関係をなす。

土師器皿（3） 平底の底部破片で、底部切り離しはヘラ切りによる。シャープな作り。底径は 8.8cmに復元した。1・2 は古墳時代の資料で、3 が溝の埋没時期を示す資料。

土師器高环（4・5） 4 は脚部が直線的に開き、裾端部が水平近くにまで開いた形状となる。

5は器壁が厚く、裾部は緩やかに開く。

SD1405 出土土器 (Fig.81)

須恵器壺 (6・7) 6は底部破片で、底部はやや丸みを帯びる。内面ナデで、外面は回転ヘラケズリによる。底径は12.6cmを測る。7も口縁部を欠く。底部はやや内窪み。内面ナデ、外面回転ヘラケズリ調整による。底部外面には格子状(縦3本、横4本)のヘラ記号を付す。蓋になる可能性を有するか。

須恵器鉢 (8) 口縁部小片で、口縁部は直立する。底部との境に3条のヘラ沈線を施す。口唇部はシャープな作り。

須恵器高杯 (9) 補足の小片で、端部は丸く納める。幅1cm程の透かし孔を施している。焼成は堅緻で、内外とも暗青灰色を呈する。

SD1550 出土土器 (Fig.81)

須恵器蓋 (10・11) 10は丸味を帯びた器形となる蓋である。口縁端部の内側にはわずかに稜が残る。11はほとんど水平近くにまで天井部が開いた器形となる。端部は下方に尖り気

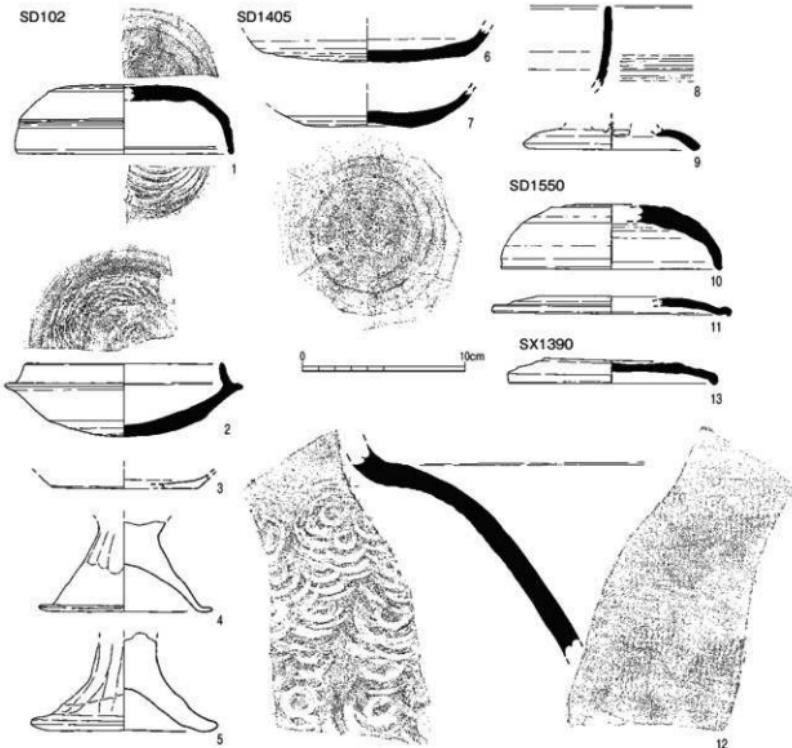


Fig.81 茅地出土土器実測図 (1/3)

味に仕上げられる。

須恵器壺（12）大型の壺体部片である。肩はあまり張らず直線的に傾斜するようである。内面には同心円当て具痕、外面には格子タタキが認められる。

SX1390 出土土器 (Fig.81, PL.45)

須恵器蓋（13）水平に長く伸びた天井部で、端部が短く下方に肥厚する形状となる。

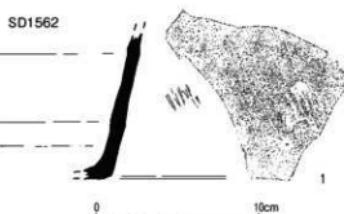


Fig.82 区画溝出土土器実測図 (1/3)

3) 区画溝

SD1562 出土土器 (Fig.82, PL.45)

須恵器壺（1）平底となる須恵器壺の底部片である。外面には平行タタキが残る。

4) 溝

SD099 暗青灰色粘土出土土器 (Fig.83, PL.45)

須恵器壺（1・2）1・2は立ち上がりが短く伸びる壺。2の立ち上がりは途中から短く上方に伸びる。

土師器皿（3）体部が大きく開き、底部との境は稜をなさず丸みを帯びる。

土師器壺（4～9）4は器壁が薄く、内面には横方向のヘラミガキが認められる。5～8は底部と体部との境が稜をなさず丸みを帯びる。9は内外面に細い線刻が見える。

SD099 灰色細砂出土土器 (Fig.83, PL.45)

土師器壺（10～18）10・11は底部と体部の境が稜をなさず丸みのある器形となる。12～18は底部糸切りの壺。板状圧痕も見える。

土師器壺（19・20）19は高台部の破片資料。20は体部が短く大きく開く浅い器形の壺である。高台は器壁が高く高みのある形状となる。

黒色土器壺（21）A類の黒色土器壺。底部には板状圧痕が認められる。

青磁碗（22）内面見込みに印刻のある龍泉窯系青磁碗。底部の器壁は厚く表面の釉には貫入が多く入る。

褐釉陶器壺（23）頸部は真っすぐに立ち上がり口縁部付近で直角に折れて大きく開く褐釉壺である。釉は比較的厚い。

SD099 灰色粘土出土土器 (Fig.84・85, PL.45・46)

弥生土器蓋（24）天井部の器壁がやや厚く、端部が短く開いた形状となる。

須恵器蓋（25～27）25は天井部が丸みを有し端部は丸くおさめる。26は低い撮みを有し外面天井部付近にはカキメ調整を行う。27は撮みが欠損する。外面天井部付近はやはりカキメ調整を行う。

須恵器壺（28～34）28～34は立ち上がりのある壺である。どれも立ち上がりが短く伸びる器形となる。28は内面に当て具痕が残る。

須恵器壺（35）浅い体部の壺である。高台部はやや高く端部が開いた形状となる。

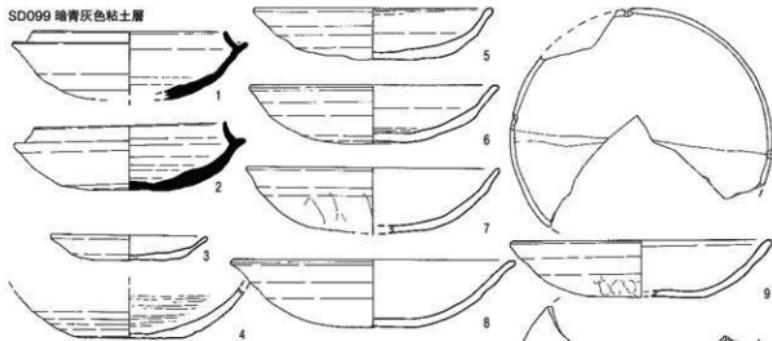
須恵器甕（36・37） 36は口縁端部がさらに外折して端部が水平面をなす。下端には低い三角突帯を巡らせる。外面にはカキメ調整が認められる。37は口縁端部を尖り気味に仕上げる。外面は平行タタキ。

土師器模倣甕（38） 模倣甕である。器壁は厚く、口縁部は直立し端部を丸くおさめる。内 土 師 器 甕
外面に丁寧な横ヘラミガキを行う。

土師器小皿（39） 底部が平坦で体部が短く立ち上がる小皿である。底部は糸切り。

土師器甕（40～56） 40～56は底部と体部の境が不明瞭で丸みを帯びた器形の甕である。底部はヘラ切りで板状圧痕を伴う。内外面ともナデ調整を行うが、41・43・49にはヘラ状工具による整形の痕跡が残る。また49の外面には指圧痕が残る。44は口縁部付近の内外面に油煙が認められる。

SD099 緑青灰色粘土層



SD099 灰色細砂

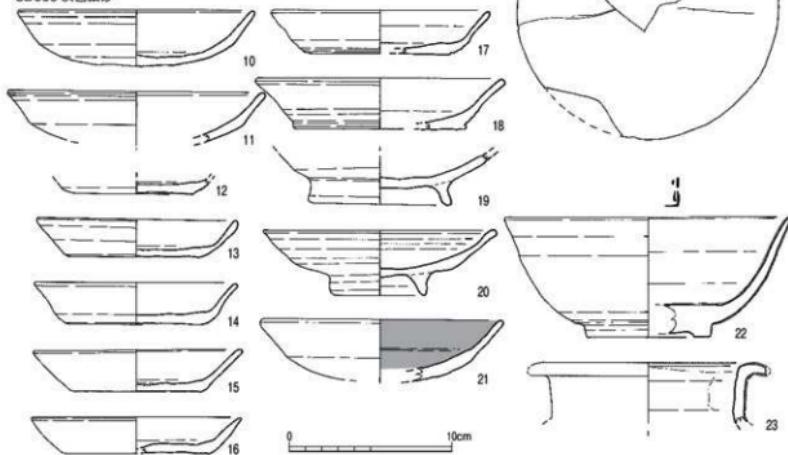


Fig.83 溝出土土器実測図① (1/3)

土師器椀（57） 低くて厚みのある高台の椀である。外面には整形時の指圧痕を残す。

土師器甕（58～62） 58・59は小型の甕である。58は内面ナデ、外面には横方向のヘラケズリを行う。59は内面ヘラケズリ、外面の底部付近にはハケメ調整を行う。60～62は甕の口縁部片である。60は肩が張らず、口縁部があまり開かない器形となる。61は口縁部が外反して大きく開き、端部は尖り気味に仕上げる。62も肩の張りが弱い。

瓦器椀（63・64） 63は器壁が厚く体部の丸みが少ない器形の椀である。内外面にヘラミガキが残る。64は口縁部付近が外反気味に開き、高台はやや外に開いた器形となる。内外面にヘラミガキがかすかに認められる。

白磁碗（65） 外面に細線の文様を描く白磁碗である。

SD099 腐植土出土土器 (Fig.86・87, PL.46)

弥生土器甕（66） 口縁部に刻目を入れる弥生土器甕である。端部の外反は緩やかである。

弥生土器壺（67～70） 67は肩が張り口縁部は短く直立する短頸壺である。端部は丸くおさめる。68は無頸の大型壺。口縁部は鈎先状となり外面の口縁部下にはM字状の突帯が巡る。69は長頸壺である。肩は丸く張り、口縁部は直線的に開く。内面には横ハケメ、外面には横ヘラミガキが残る。70は複合口縁壺である。内外面にハケメが見られる。

須恵器蓋（71～80） 71は口縁部が垂直に伸びる蓋。72～77は体部が丸みを帯び、かえりを持たない器形の蓋である。端部は丸くおさめられる。72・75は外面にヘラ記号を有す。78～80は撮みを持つ器形となる。78は低い撮みだが端部はシャープである。79は高さのある宝珠様撮みを有し、内面には短いかえりを有す。外面にはヘラ記号が見える。80のかえりも短い。

須恵器坏（81～94） 81～94は短い立ち上がりを有した坏である。立ち上がりの上半は緩やかに上方に立ち上がり、端部は薄く尖り気味に仕上げるものが多い。87は内面に同心円当て具痕、88は外面にヘラ記号を有している。

須恵器椀（95） 高台が長く、端部が外側に大きく開いた器形となる椀である。

須恵器高坏（96～100） 96は裾部が大きく開き端部が断面三角形状に尖った器形となる。97は立ち上がりが短く内傾しながら伸びる器形となる。98は裾部が二重に開いた形状となる。99・100は坏部と脚部が接合しないが同一個体だろう。土師質焼成である。坏部は上半が外反しながら開き、外面の下半にはカキメを巡らせる。脚端部は断面三角形状に尖る。

須恵器壺（101・102） 101は球形の体部片。外面には複数の沈線を巡らせ、その間に櫛描文を配す。下半には横方向のヘラケズリが認められる。102は扁球形の体部となる。肩部には沈線を巡らせ、その間にヘラ描き刺突文を配す。体部中位はカキメ、下半はナデ調整を行う。

須恵器鉢（103） 断面三角形状の口縁部となる須恵器鉢である。端部は上方を向く。

須恵器甕（104～107） 104は丸く外反した口縁部となる。口縁端部の内外面は強いヨコナデを加えて薄く仕上げる。105は直線的に開く口縁部となる。端部を丸く仕上げ、口縁部下には小さな三角突帯を巡らせた器形となる。106は大きく外反した口縁部となる。端部は丸く肥厚する。107は底部片。内外面ナデ調整を行う。

土師器坏（108） 体部下半が丸みを帯び、上半が直線的に開く器形の坏である。外面下半はヘラケズリを行う。

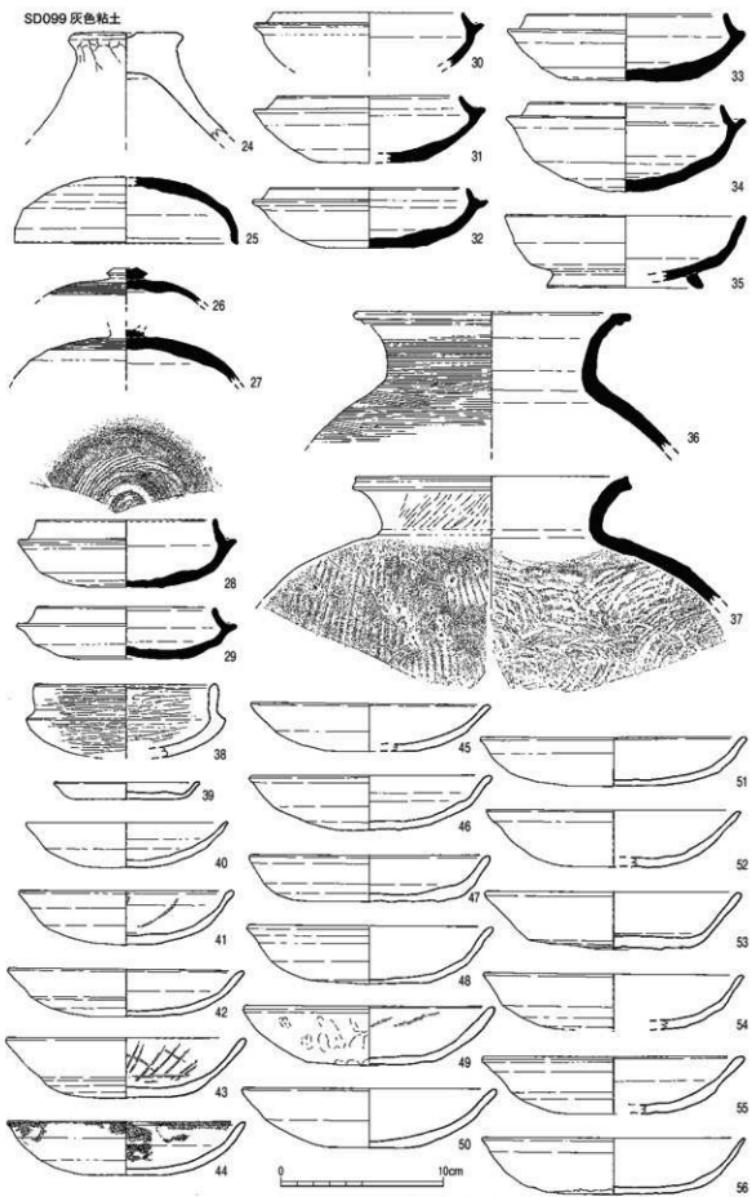


Fig.84 满出土土器实测图② (1/3)

土師器椀（109～111） 109は体部が丸みを有し、口縁部が内傾する器形となる椀である。外面にはヘラによるヨコナデの稜線が残る。110は体部が浅く口縁部が短く外反する。111は深みのある器形で口縁部は短く外反する。外面はヘラナデを行う。

土師器甕（112～116） 112は体部が丸く、口縁部が短く直線的に開く小型の甕である。113は肩があまり張らず口縁部が短く開く器形の小型甕。114も肩が張らず口縁部が短く開いた器形となる。内面は縦ヘラケズリ、外面は縦ハケメ調整。115は口縁部が丸く大きく外反した器形となる。内面には横方向のヘラケズリが認められる。116は口縁部が長く直線的に伸びた器形となる。

SD099 灰白色細砂出土土器 (Fig.88)

弥生土器壺（117～120） 117は頸部下に低い段を有した壺の口縁部片。口縁部は長く伸びる。118は肩部に不明瞭な段を有し、口縁部はやや長く伸びる。肩部には多重沈線を巡らせ、その下に多重の山形文を巡らせる。内外面にヘラミガキ調整を行う。119は大型の壺である。口縁部は肥厚しており、端部の上下端に刻目を配す。内外面ヘラミガキ調整が認められる。120は複合口縁となる壺。体部は丸く、あまり肩が張らない器形となる。頸部は大きく外反し、口縁部は直線的に伸びる。内面はハケメ、外面の口縁部はハケメ、体部は平行タタキを行う。

弥生土器甕（121～125） 121は鋤先状になる甕口縁部。122は甕または鉢の底部だろうか。底面は若干丸みを帯び、裾が横方向に短く伸びる。123は甕蓋でやや開いた形状となる。124は裾がやや高く高い底部となる。125はかなり厚い器壁となる甕底部。

弥生土器筒形器台（126） 鍔部が水平に長く伸びた筒形器台である。外面には丹塗りを行う。

SD099 灰色粘土

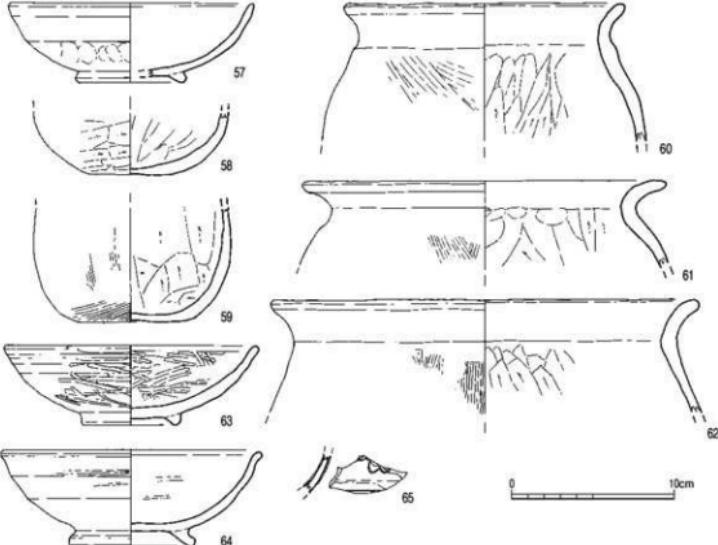


Fig.85 溝出土土器実測図③ (1/3)

SD099 腐植土

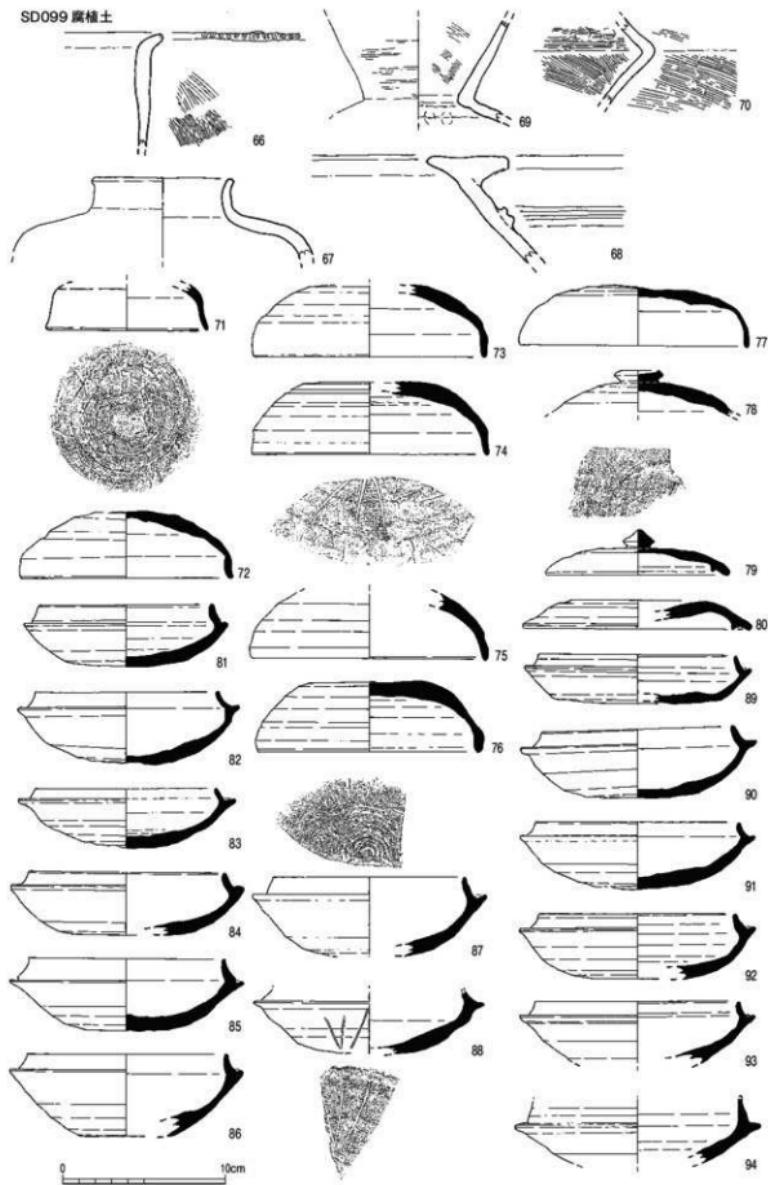


Fig.86 溝出土土器実測図④ (1/3)

SD103 出土土器 (Fig.89)

須恵器壺 (127) 短い立ち上がり部をもつ壺である。全体的に器壁が厚いが特に立ち上がりの器壁が厚い。外面にはヘラ記号が認められる。

青磁碗 (128) 龍泉窯系青磁碗の底部片である。釉は高台部付近にまで塗布される。

SD1395A 出土土器 (Fig.89・90, PL.46)

須恵器蓋 (129～133) 129～131は低平な掘みを有した蓋である。131は端部が嘴状に屈曲する。132・133は口縁端部片である。132は端部が三角形状に肥厚する。外端部は直立する面をなす。

須恵器椀 (134) 長い高台部を有す椀である。高台部は直線的に開いており、端部が上外方を向く。

須恵器高壺 (135) 135は口縁部が屈曲し、端部が面をなす。高壺の壺下半部片である。

須恵器壺 (136・137) 136は扁球形の体部を有し、頸部はあまり締まらず口縁部が短く外反する器形となる短頸壺。137は平底の底部で体部はあまり開かず長胴の器形となる。

須恵器鉢 (138) 口縁部付近の破片である。体部はあまり丸みを帯びず直線的に開き、口縁部付近で内傾した後、端部が外側へと外反する器形となる。内面には同心円當て具痕、外面には平行タタキが確認される。

須恵器甕 (139～142) 139は頸部が強く締まり口縁部が大きく外反する器形となる甕。端部は丸くおさめる。140は口縁端部を折り返して玉縁状にする。141は丸く肩の張った器形となる。142もやはり大きく肩が張った器形となる。

土師器皿 (143) 高台付の皿である。体部は直線的に開く。

土師器椀 (144・145) 144は体部があまり開かず、低くて器壁の薄い高台部となる。145は高さがあり端部があまり開かない高台部となる。

土師器高壺 (146) 高壺の脚部である。柱部から裾部にかけて緩やかに開いた器形となる。端部は尖り気味に仕上げる。

土師器甕 (147・148) 147は体部上半がやや内傾し、あまり肩が張らない器形となる。口縁部は丸く外反する。体部に対して口縁部の器壁が厚い。148も同じように口縁部が大きく外反し器壁が厚くなる。

土師器鉢 (149・150) 149は体部から口縁部にかけて直線的に開いていることから鉢であろう。体部に対して口縁部の器壁が厚くなる。150は顰の牛角把手であろう。

灰釉陶器壺 陶器壺 (151・152) 151は灰釉陶器壺の上半部片である。丸く肩が張った器形で恐らく長胴になるものと思われる。外面には二条の沈線が巡る。耳部は一ヶ所しか確認していないが恐らく双耳になるものと思われる。152は平底で体部が直線的に立ち上がる器形となる。須恵器の可能性もある。

SD1395B 出土土器 (Fig.90, PL.47)

土師器椀 (153・154) 153は高台部が開き気味に長く伸びた器形となる。154は器壁が比較的薄く、高台部はやはり開き気味に長く伸びる。

SD1399 出土土器 (Fig.90)

土師器壺 (155・156) 155・156はどちらも体部が直線的に開いた器形となる壺である。

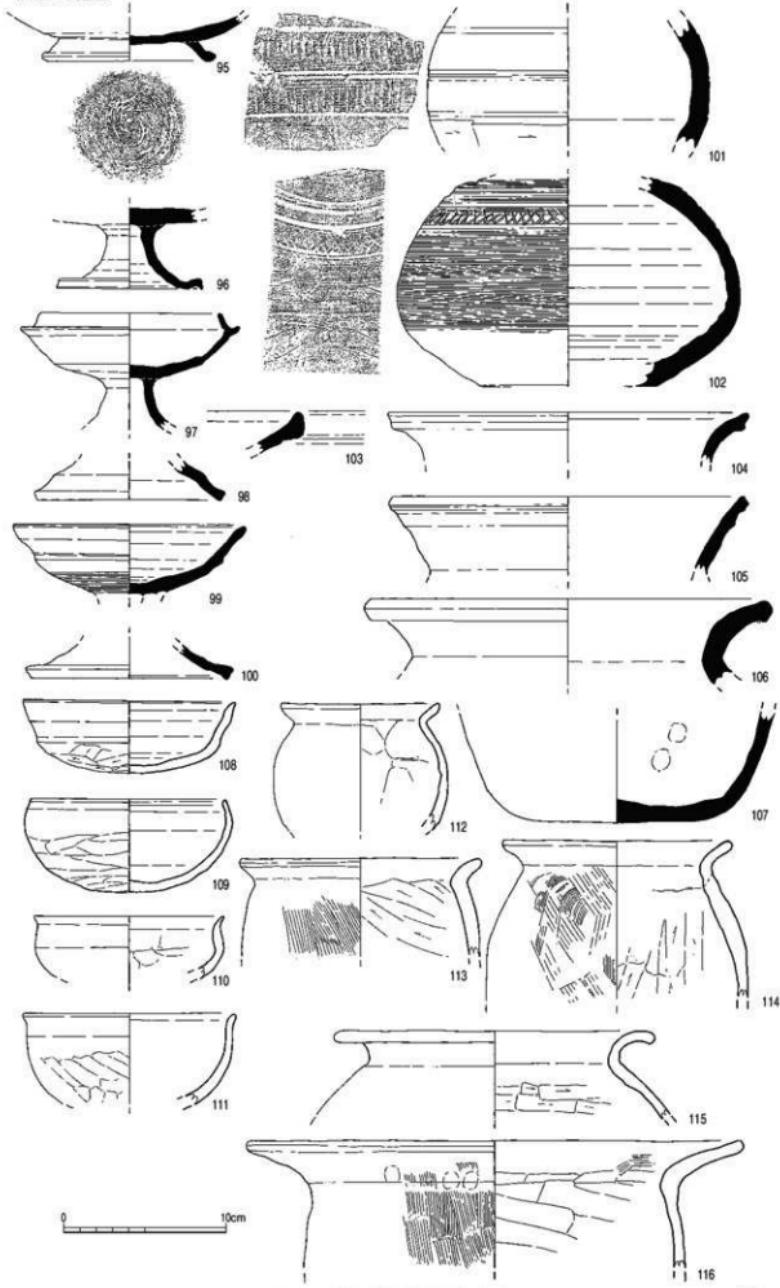


Fig.87 满出土土器実測図⑤ (1/3)

底部はヘラ切り。

SD1401 出土土器 (Fig.90, PL.47)

須恵器蓋 (157) 摱宝珠様の高い攝部を有した蓋である。天井部は平坦な器形となる。

須恵器環 (158) 体部が直線的に開いた器形となる。

土師器環 (159) 底部がわずかに湾曲しており、体部は外反気味に開く器形となる环である。

土師器榤 (160) 高台部があまり開かずに伸びる器形となる。端部は丸味を帯びる。

土師器甕 (161) 頸部があまり締まらず、口縁部が外反気味に大きく開いた器形となる。

SD1402 出土土器 (Fig.90)

須恵器蓋 (162) 低い攝部をもつ蓋である。天井部は低平で口縁部は短く折り曲げられる。全体的に器壁が薄い。

須恵器環 (163) 短くやや内傾気味に伸びる立ち上がりの环である。

瓦質土器甕 (164) 口縁部は緩く外反しており端部は丸く収めている。肩部は若干内傾して長く伸びる器形となるようである。内面はナデ、外面は格子タタキを行う。焼成は瓦質である。

SD1505 出土土器 (Fig.90)

須恵器榤 (165) 断面台形状の低い高台を有した榤である。体部は直線的に開いている。

須恵器甕 (166) 頸部が開き気味に伸び、端部がシャープな面をなす甕である。色調は茶灰色だが堅緻に焼成される。

SD099 灰白色織砂

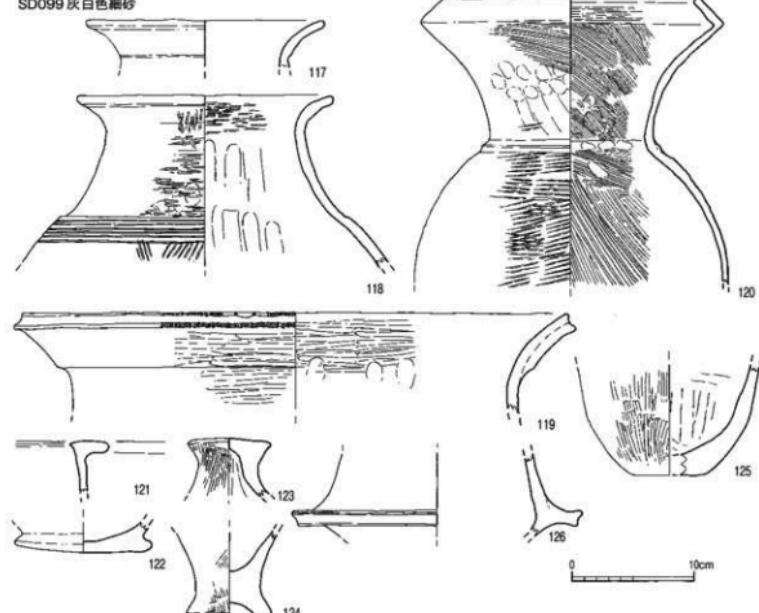


Fig.88 溝出土土器実測図③ (1/4)

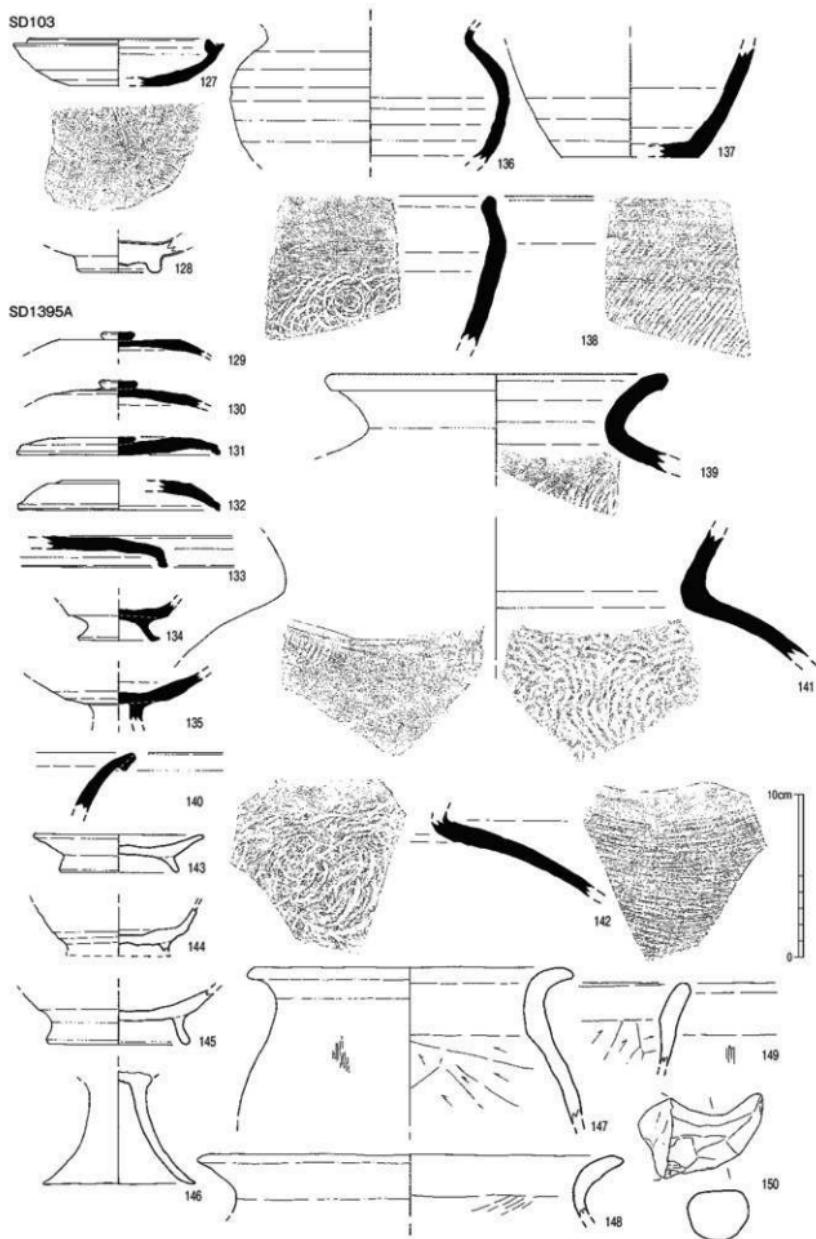


Fig.89 溝出土土器実測図⑦ (1/3)

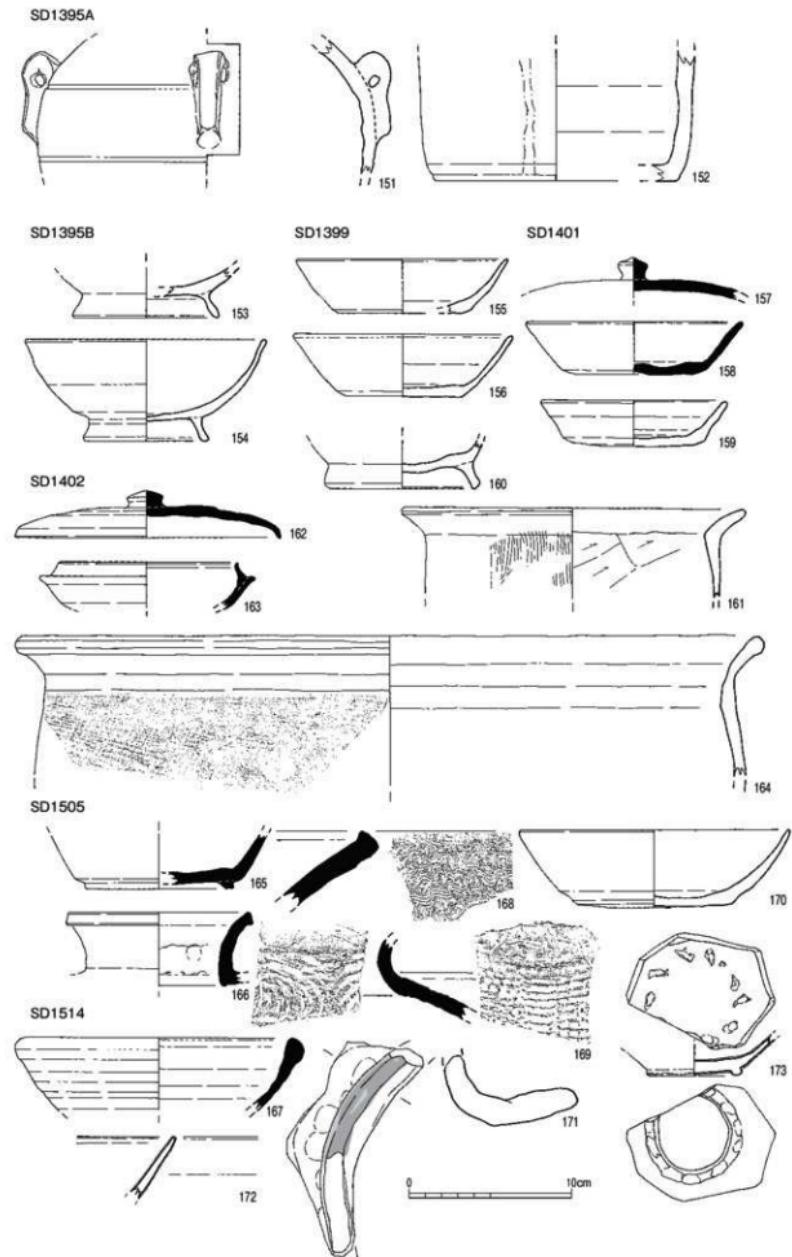


Fig.90 溝出土土器実測図⑤ (1/3)

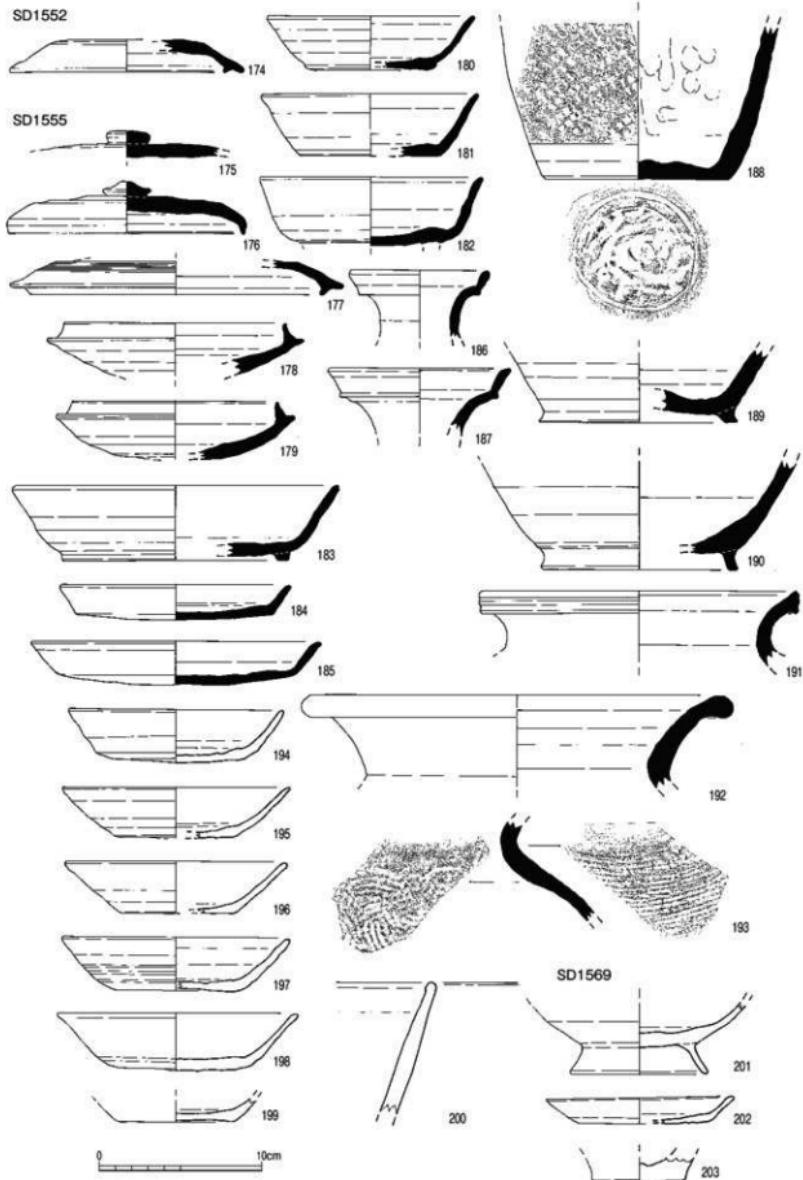


Fig.91 满出土器尖测图⑨ (1/3)

SD1514 出土土器 (Fig.90, PL.47)

須恵器鉢 (167) 口縁部が玉縁状に丸く肥厚した東播系の鉢である。

須恵器甕(168・169) 168は甕の口縁部片。直線的に大きく開いており、端部は上方に尖る。外面には波状文を描く。169は肩部片。肩が大きく張った器形で口縁部は強く外反する。器壁はあまり厚くない。

土師器壺 (170) 緩やかに内湾しながら大きく開く。口縁部付近は器壁が薄くなる。

土師器竈 (171) 竈の鉗部片である。外反しながら長く伸びた鉗部となる。

青磁碗 (172・173) 172は直線的に伸びる口縁部片。173は低い高台部となる底部片で内面や高台部に目跡が残る。

SD1552 出土土器 (Fig.91, PL.47)

須恵器蓋 (174) 174は内側に小さなかえりを有した蓋である。

SD1555 出土土器 (Fig.91)

須恵器蓋 (175～177) 175は断面方形に近い形状の低い撮部を有す。176は擬宝珠様の低い撮部を有し、端部は短く下方を向いて尖り氣味に仕上げる。177は径が大きい。やや長く伸びたかえりを有し、天井部外面はカキメを行う。

須恵器壺 (178～181) 178・179は三角形状の低い立ち上がりを有した壺である。180・181は底部がほぼ平底で端部に明瞭な稜を有し、体部は直線的に開く器形となる壺である。

須恵器椀 (182・183) 182は高台部が底端部からやや内側に添付される。体部は直線的に伸びる。183はやや径が大きく、体部はやはり直線的に開く。

須恵器皿 (184・185) 184は体部が直線的に立ち上がり、底端部に明瞭な稜を有す。185は底部がやや丸みを帯びており、底部と体部の境目の稜は不明瞭である。

須恵器壺 (186～190) 186・187は頸部上半が大きく開き、さらに口縁部が直線的に強く開く二重口縁となる壺口縁部である。屈曲部の外面は三角突堤状に肥厚する。188は平底となる壺下半部である。体部はあまり開かずに伸びており、長胴の器形となる。底部外面には当て具痕が残り、体部外面は格子タタキ目が明瞭に確認される。189・190は断面台形状の高台を有した壺底部片である。調整は内外面ナデによる。

須恵器甕(191～193) 191は口縁部が大きく外反し、端部外面に沈線を2条巡らせている。192は口縁部があまり弯曲せずに開き、端部は丸く肥厚する。193は肩が丸みを帯びた器形となり、頸部の境は丸く不明瞭である。内面は同心円當て具痕、外面は平行タタキが確認される。

土師器壺 (194～199) 194は体部が若干内湾しながら開く。195～198は体部が直線的に開く。

土師器鉢 (200) 大型の鉢か。体部は直線的に開いており、口縁部は丸くおさめられる。

SD1569 出土土器 (Fig.91)

土師器椀 (201) 高台部が直線的に長く伸びる椀である。全体的に器壁が薄く、高台端部は丸みを帯びる。

土師器皿 (202) 体部が直線的に開く皿である。

土師器壺 (203) 底部が平坦で体部との境に明瞭な稜を有す。器壁が厚く、内面にはロク口目が明瞭に残ることから壺などの深い器形を想定した。内面は焼成がやや悪く灰色を呈して

いる。底部はナデ仕上げで胎土は精良な粘土を使用する。

5) 井戸

SE1558 出土土器 (Fig.92 ~ 94, PL.47 ~ 49)

須恵器壺 (1) 低い高台を有した壺の底部片である。高台の接地部は面をなす。

須恵器甕 (2) 肩が丸く張り、口縁部が外反して開く。口縁端部は丸くおさめる。

土師器皿 (3 ~ 51) 3 ~ 46 は小皿である。底部は平底で体部はやや内湾しながら開き、体部との境は不明瞭である。底面はすべてヘラ切りで板状圧痕が残る。47 ~ 51 は高台付皿である。体部は水平近くまで大きく開く。高台部は若干開きながら長く伸びる。

土師器壺 (52) 丸味を帯びた底部で体部は内湾気味に開き、口縁端部はわずかに外反する壺である。器壁は薄い。

土師器椀 (53 ~ 77) 体部は丸味を有し、口縁部付近は若干外反するものが多い。高台部はやや開き、端部は丸くおさめられる。76・77 は高台部が他よりもやや長い。

土師器甕 (78 ~ 80) 78 ~ 80 は鉢に近い形状の甕である。78 は小型の甕である。最大径が中位よりやや上にあり、頸部はあまり締まらない。口縁部は短く外反し、端部は丸く收められる。調整は内外面ともナデ調整を行う。79 は頸部の締まりがなく口縁部付近は若干器壁が厚くなる。口縁端部は丸くおさめる。調整は内外面ともナデ。80 もやはり頸部があまり締まらず口縁部は短く外反する。端部は丸くおさめる。内面はヨコナデ、外面は平行タタキを行う。

黒色土器椀 (81 ~ 86) 81 ~ 83 は黒色土器 A 類の椀である。81 の体部は丸く深みがある器形で、口縁部は短く外反する。端部は丸くおさめる。内面には横方向のヘラミガキが認められる。82・83 もほぼ同様の器形で、高台はわずかに開く。84・85 は黒色土器 B 類の椀である。84 は高台内面に板状圧痕が認められる。85 は内外面にヘラミガキが認められる。高台は大きく開く。86 は黒色土器 B 類の托付椀である。高台は若干内湾気味に開き、端部は丸く收める。托部は端部が若干下方に下がる。内面にはヘラミガキが確認される。胎土は精良で焼成も良い。

黒色土器
托付椀

青磁碗 (87) 越州窯系青磁碗の底部片である。

SE1559 出土土器 (Fig.94, PL.49)

須恵器蓋 (88) 水平近くまで大きく開く。端部は下方に丸く肥厚し外側は稜をなす。

土師器壺 (89・90) 89 は丸味を有した形状で、口縁部付近はわずかに外反する。90 は底部が平坦で体部が直線的に開き、境目は明瞭な稜を有す。

土師器椀 (91・92) 91 の高台部はあまり開かない形状となる。92 の体部は丸味を帯びたあまり深くない形状となる。

土師器甕 (93) 丸い器形の甕で頸部はあまり締まらず、口縁部は短く外反する。口縁端部は丸く肥厚する。内面はナデ調整を行い、先行するハケメが残る。外面の上半は横ハケメ、下半は平行タタキを行う。

黒色土器椀 (94) 黒色土器 A 類の椀である。高台は低く丸みを帯びている。

SE1573 出土土器 (Fig.94)

須恵器蓋 (95・96) 95・96 は天井部が丸みを帯びた器形となる蓋の口縁部片である。ど

SE1558

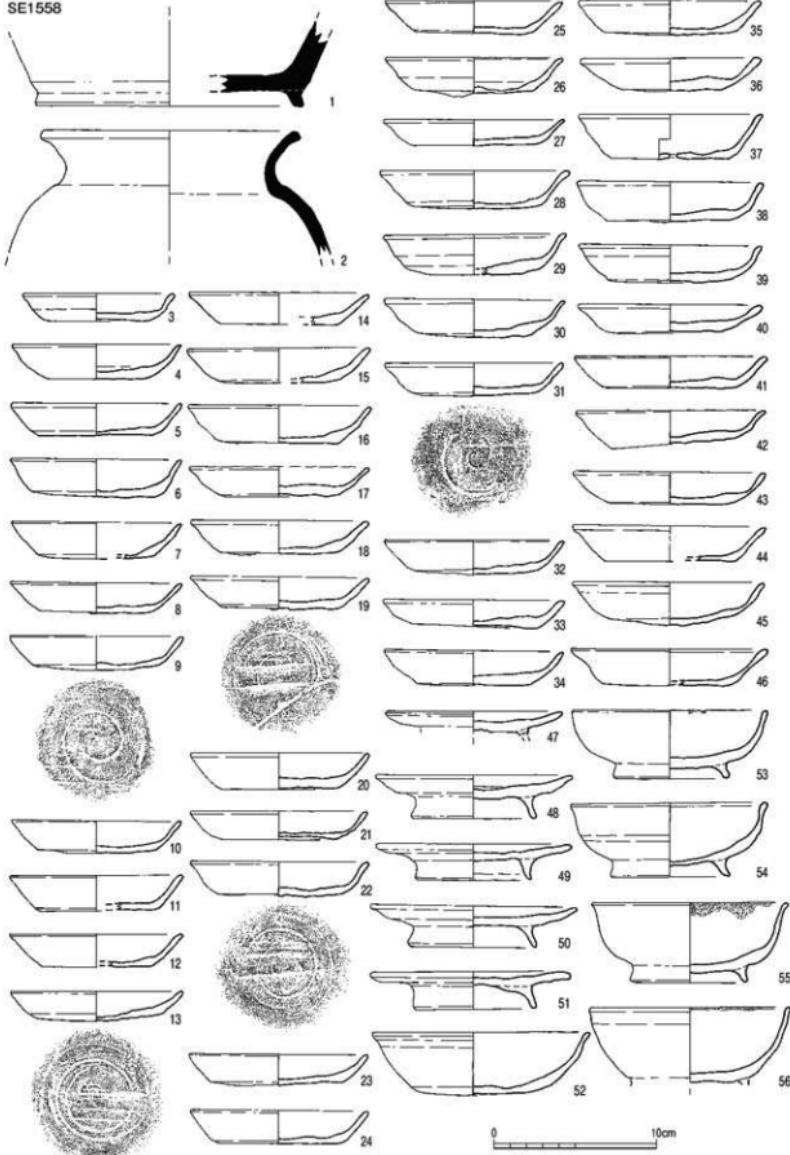


Fig.92 井戸出土土器実測図① (1/3)

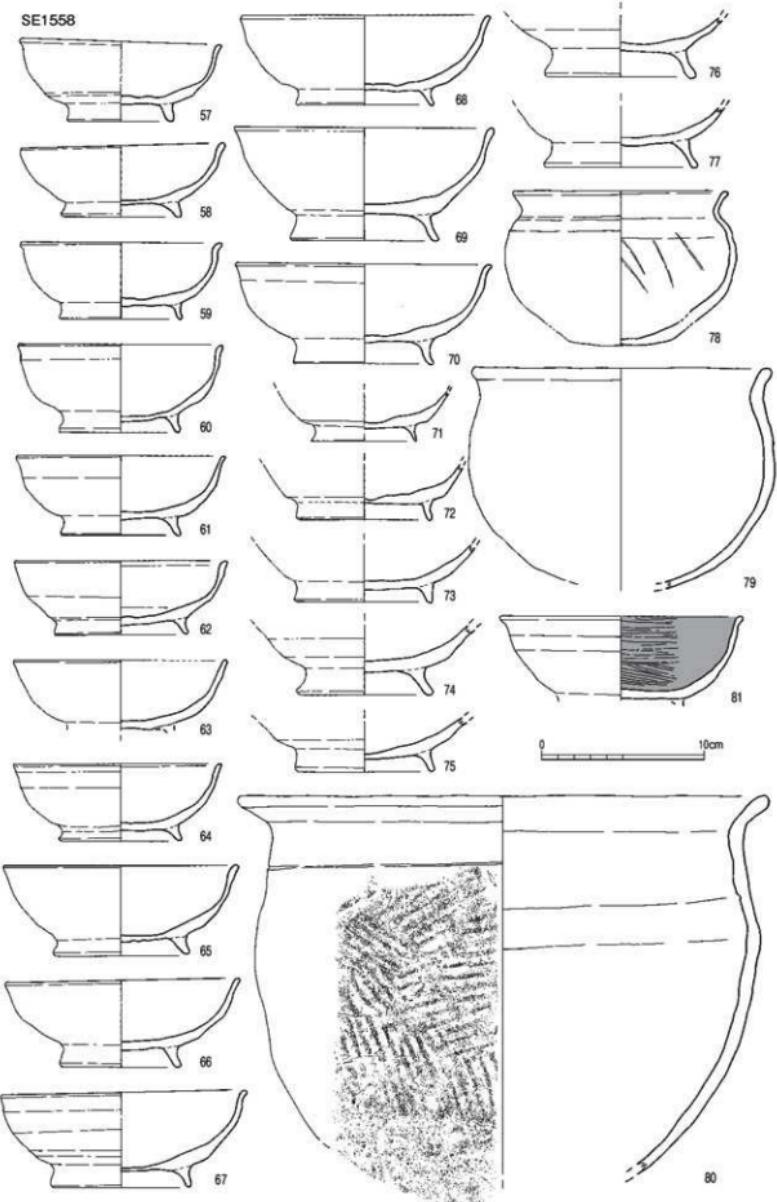


Fig.93 井戸出土土器実測図② (1/3)

ちらも先端部を尖り気味に仕上げる。

土師器皿 (97) 体部が大きく開いた形状となる皿である。

土師器高坏 (98) 高坏の脚柱部片である。内面には絞り痕が認められる。

土師器瓶 (99) 瓶の牛角把手であろう。先端部には整形・乾燥時に行ったと思われる支柱痕が2ヶ所に認められる。

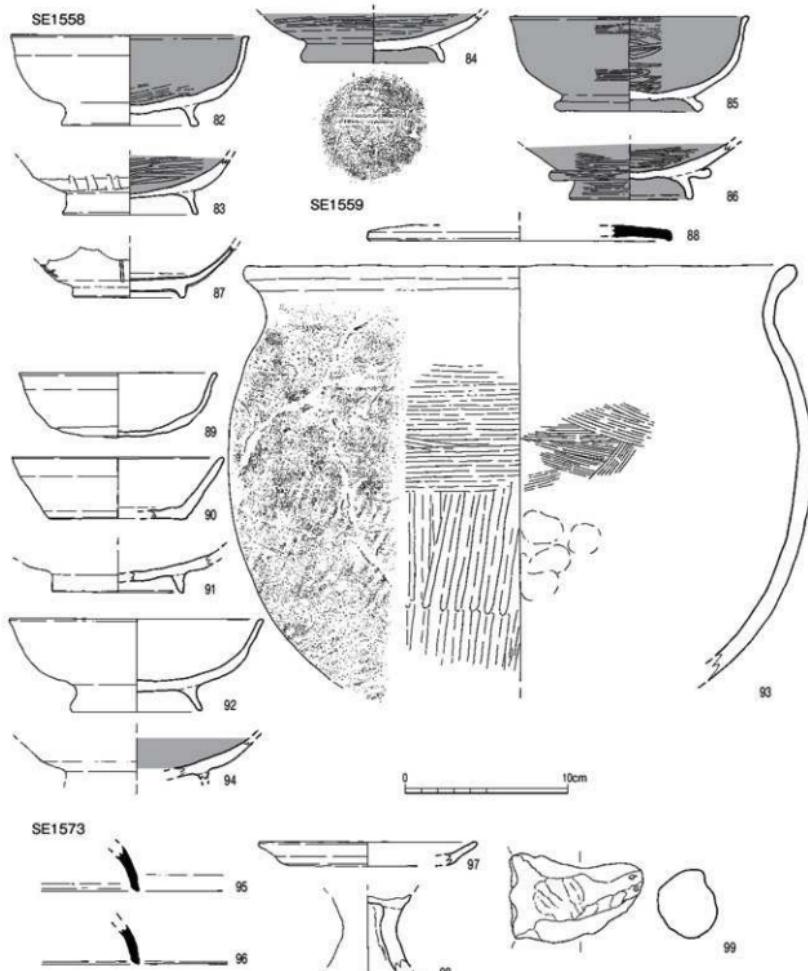


Fig.94 井戸出土土器実測図③ (1/3)

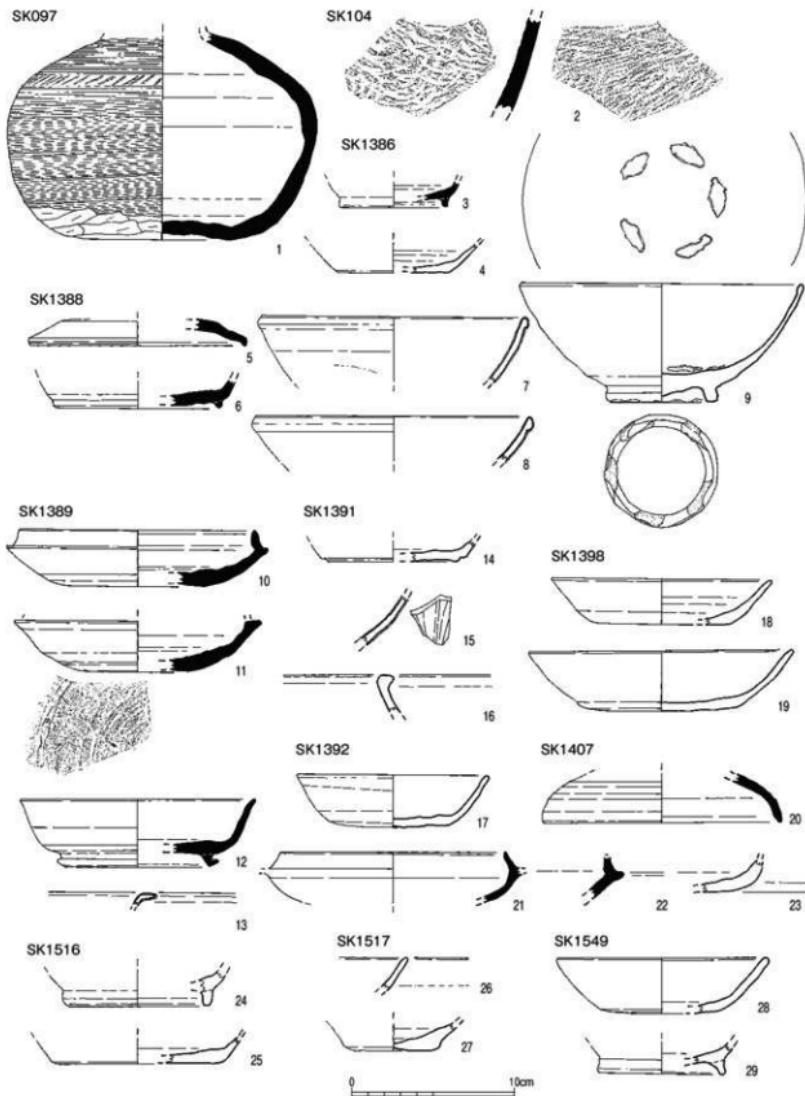


Fig.95 土坑出土土器实测图① (1/3)

6) 土坑

SK097 出土土器 (Fig.95, PL.49)

須恵器壺 (1) 最大径が上方にあり肩が張った器形となる壺である。外面の底部近くはヘラケズリを行い、肩部には櫛状工具による列点文を帶状に施文する。その他は全面カキメを行う。

SK104 出土土器 (Fig.95)

須恵器壺 (2) 須恵器壺の胸部片である。内面同心円当て具痕、外面平行タタキ。

SK1386 出土土器 (Fig.95)

須恵器椀 (3) 器壁が薄い小型品である。断面三角形に近い小さな高台を有す。

土師器壺 (4) 体部が直線的に大きく開いた器形となる壺である。底部と体部の境目は明瞭

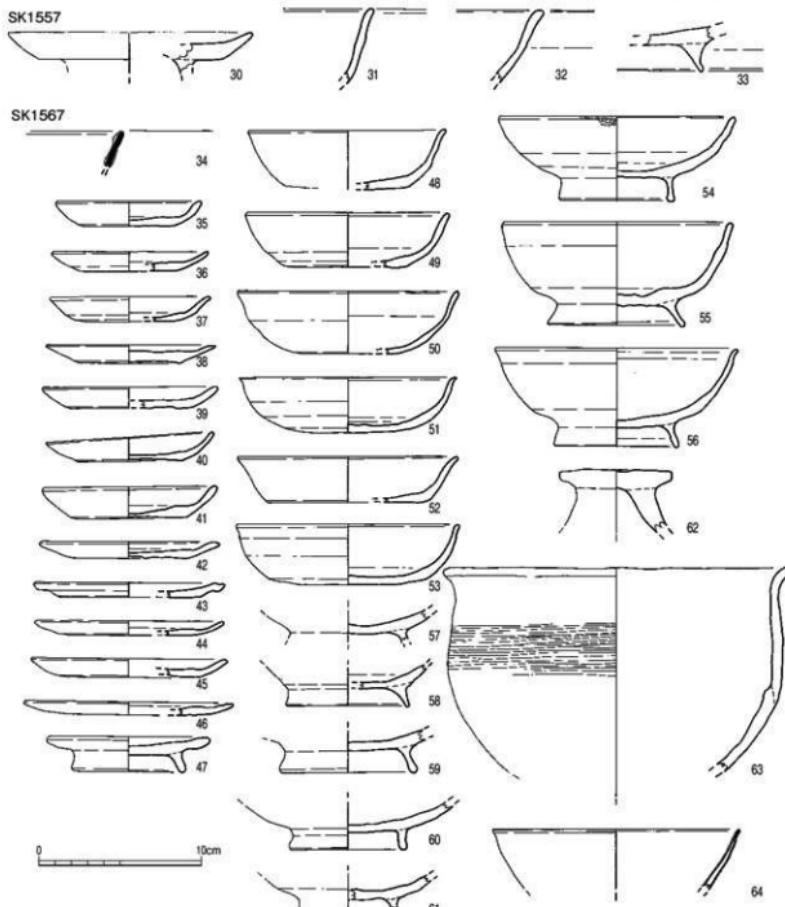


Fig.96 土坑出土土器実測図② (1/3)

な稜をなさない。

SK1388 出土土器 (Fig.95, PL.49)

須恵器蓋 (5) 平坦な天井部となる蓋である。口縁部は断面三角形状に下方に尖る。

須恵器椀 (6) 断面台形状の低い高台となる椀である。

白磁碗 (7・8) 7・8は口縁部が小さな玉縁になる白磁碗である。

青磁碗 (9) 越州窯系青磁碗である。体部は丸味を有した形状で、高台部は断面台形状で器壁が厚い。内面見込みと高台部疊付にそれぞれ5ヶ所の重ね焼きの目跡が残る。

SK1389 出土土器 (Fig.95)

須恵器坏 (10・11) 10は低い立ち上がりを有した坏である。11は立ち上がりを消失するが、10と同様の短い立ち上がりになるものと思われる。11の外面にはヘラ記号が認められる。どちらも浅い器形となる。

須恵器椀 (12) 口縁部があまり開かず直線的に立ち上がる。高台は端部の外側を上方に跳ね上げたような形状となる。

青磁碗 (13) 小型の青磁碗口縁部片である。短く水平に伸びており、端部は尖り気味に仕

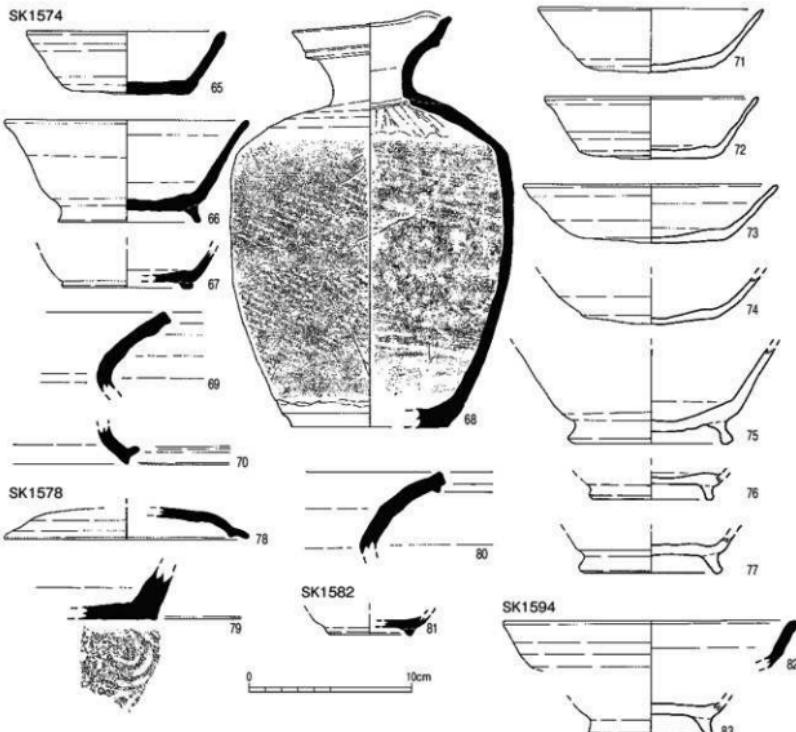


Fig.97 土坑出土土器実測図③ (1/3)

上げている。

SK1391 出土土器 (Fig.95)

土師器皿 (14) 体部を欠失する皿である。底部は平底でヘラ切り調整を行っている。

青磁碗 (15) 鎌蓮弁の青磁碗である。釉は青味が強い色調に発色している。

陶器壺 (16) 褐釉陶器の短頸壺である。肩部は内傾しており、口縁部は外側に三角形状に肥厚する。上端は平坦面をなす。

SK1392 出土土器 (Fig.95, PL.49)

土師器壺 (17) 体部がわずかに内湾しながら開く土師器壺である。総じて器壁が薄い。

SK1398 出土土器 (Fig.95, PL.49)

土師器壺 (18・19) 18・19は体部がわずかに内湾しながら大きく開く。底部と体部の境目は明瞭な稜をなさない。

SK1407 出土土器 (Fig.95)

須恵器蓋 (20) 天井部が丸みを有した器形となる蓋である。口縁端部は下方を向いて尖り、内側に明瞭な稜を有す。

須恵器壺 (21・22) 21・22は小さな立ち上がりを有した須恵器壺である。

土師器壺 (23) 皿または壺である。底部と体部の境目に明瞭な稜をもたない。

SK1516 出土土器 (Fig.95)

土師器椀 (24) 土師器椀の底部片。高台部は器壁が比較的厚く、接地面は丸くおさめられる。

土師器皿 (25) 皿または壺である。底部と体部の境は不明瞭な稜を有す。

SK1517 出土土器 (Fig.95)

土師器皿 (26・27) 26・27は土師器皿である。26は器壁が薄いので小皿であろう。体部は直線的に短く開いている。27は底部と体部の境目付近の器壁が非常に厚く、高台状の底部となる小皿。

SK1549 出土土器 (Fig.95)

土師器壺 (28) 体部が内湾しながら開く壺である。口縁端部は丸くおさめられる。

土師器椀 (29) 断面三角形状の高台を有した椀である。

SK1557 出土土器 (Fig.96)

土師器皿 (30) 恐らく三脚付皿だろうと思われる。皿の体部は大きく開いており、口縁部付近が若干内湾する。

土師器椀 (31～33) 31・32は土師器椀の口縁部片である。31は体部があまり開かずに伸び、口縁部付近がわずかに外反する器形となる。32も同様だが31と比較して体部の開きがやや大きい。33は土師器椀の高台部片である。断面三角形状でやや高い高台となる。接地面は薄く尖っている。

SK1567 出土土器 (Fig.96, PL.49)

須恵器椀 (34) 小片であり本来の器形がよく判らないが、椀または壺であろう。直線的に開く口縁部片である。内外面に付着物がある。

土師器皿 (35～47) 35～46は皿である。35～37は体部が内湾しながら開いているが、38は直線的である。43は口縁部付近が外反している。44～46は水平近くまで大きく開い

ている。47は高台付皿で体部は明瞭な立ち上がりをなさない。

土師器坏（48～53）48～51・53は底部と体部の境目が不明瞭で丸みを有した器形となり、口縁部付近は外反気味になる。52は底部が平坦で体部との境目が明瞭な稜を有す。

土師器椀（54～61）54は垂直にやや長く伸びた高台を有し、深みのない器形となる。55は体部があまり開かずに伸びており深みのある器形となる。56は口縁部付近がわずかに外反する。57～61は底部付近の破片。58は高台部が断面三角形状、59は端部が肥厚する。60は短く直立した高台部となる。

土師器器台（62）本来の形状がよく分からぬが器台として図示した。受け部は丁寧にナデ調整を行い、平坦面を形成する。側縁はシャープな面をなす。脚部はわずかに外反しながら開いている。全体的に器壁は厚いが胎土は精良で調整も丁寧である。

土師器甕（63）鉢状の甕である。体部下半は丸味を有し、上半はほとんど縮まらない。口縁部は緩やかに外反し端部を丸く収める。内面は丁寧なヘラナデ調整を行い、外面の上半は横ハケメ、下半はヘラナデ調整を行う。器壁の厚さはほぼ均一である。

青磁碗（64）越州窯系青磁碗である。体部はあまり開かず直線的に伸びており、口縁部付近は器壁が薄くなる。

SK1574 出土土器 (Fig.97, PL.49)

須恵器坏（65）体部が直線的に開く器形となる坏である。

須恵器椀（66・67）66は体部が外反気味に長く伸びる。高台はやや長く外方に開いている。67は低い高台を有しており、接地部は面をなす。

須恵器壺（68）口縁部が二重口縁となる壺である。底部は平底である。体部は長胴で最大径が上位にあり肩が張った器形となる。頸部は強く縮まり口縁部は大きく開く。

須恵器甕（69）口縁部が直線的に開き、端部が面をなす甕である。

須恵器高坏（70）高坏の裾部である。接地部は尖っており、裾外端部は突帯状につまみ出される。透かし孔は長方形になるものと思われる。

土師器坏（71～74）71～74は底部が若干丸みを有し、体部が直線的に開く器形となる坏である。どれも器壁は薄い。

土師器椀（75～77）75は体部が直線的に開き、高台部はやや長く外側に開いた形状となる。76は高台の接地部が面をなす。77は高台が直線的に開き内端部で接地する。

SK1578 出土土器 (Fig.97)

須恵器蓋（78）小さな突帯状のかえりを有した蓋である。

須恵器壺（79）無高台の平坦な底部となる壺で、体部はあまり開かずに立ち上がる。

須恵器甕（80）口縁部が外反しながら大きく開き、口縁外端部を突帯状につまみ出して肥厚させる。

SK1582 出土土器 (Fig.97)

須恵器椀（81）断面三角形の低い高台を有した椀である。

SK1594 出土土器 (Fig.97)

須恵器皿（82）体部があまり開かない器形の皿である。口縁部は丸味を帯びる。

土師器椀（83）断面三角形状でやや開いた形状の高台となる。

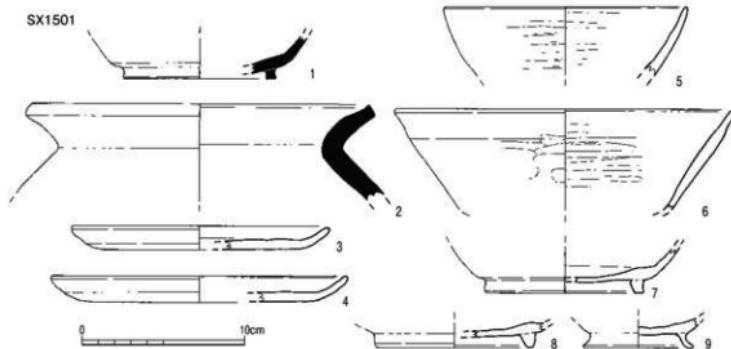


Fig.98 溝岸状遺構出土土器実測図 (1/3)

7) 護岸状遺構

SX1501 出土土器 (Fig.98)

須恵器楕 (1) 断面方形の高台を有した楕である。

須恵器甌 (2) 口縁部が直線的に開き、口縁端部が上方に尖る甌である。内外面ナデ調整。

土師器皿 (3・4) 3・4は体部がわずかに内湾しながら短く開く皿。端部は丸くおさめる。

土師器楕 (5～9) 5は体部がわずかに内湾しながら伸びる。内外面に横方向のヘラミガキが確認できる。6は体部が直線的に開き、口縁部付近は器壁が若干薄くなる。内面にヘラミガキが残る。7～9は底部片。9は端部が若干開いた形状の高台を有す。

8) 落ち込み

SX1394 出土土器 (Fig.99)

須恵器蓋 (1) ほとんど水平近くにまで天井部が開く蓋である。端部は断面三角形状に肥厚し外側が面をなす。

須恵器坏 (2～4) 2は短い立ち上がりを有した坏である。体部が浅い器形となる。3は体部が直線的に開いた器形となる坏。4は大型品で、体部はやはり直線的に開くようである。

土師器坏 (5) 底部と体部の境目が明瞭な稜をなさない器形となる。

土師器楕 (6) 体部が直線的に開き、低くて器壁が薄い高台を有す。

土師器高坏 (7) 底部と体部の境目がなく、わずかに湾曲しながら大きく開いた器形となる。口縁端部は丸くおさめる。

SX1396 出土土器 (Fig.99, PL.49)

須恵器蓋 (8) 低平な攝部を有し、天井部は水平近くまで大きく開いた器形となる。口縁端部は三角形状に肥厚し、外側が面をなす。

須恵器高坏 (9) 長い脚柱部の高坏である。柱部下方には2条の沈線が巡る。

土師器楕 (10・11) 10は体部が外反気味に開く楕。11は断面三角形状の低い高台となる。

土師器皿 (12・13) 12は体部が直線的に短く伸びる器形となる。13は体部が直線的に開いた器形の高台付皿である。

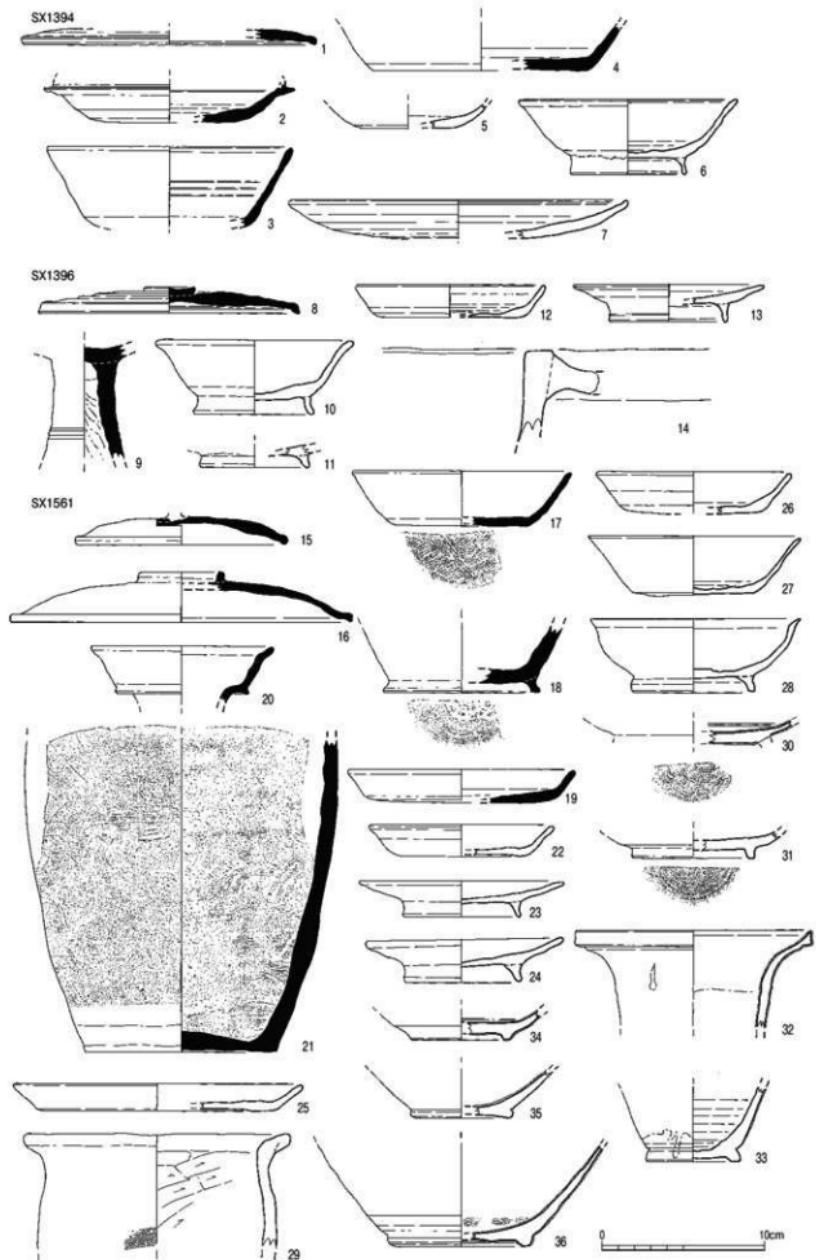


Fig.99 落ち込み出土土器実測図 (1/3)

土師器 土師器壺（14） 壺の底部付近である。口縁部上面は平坦面をなしており、口縁部上面から底部上面にかけて被熱により黒色に変化する。

SX1561 出土土器 (Fig.99, PL.49・50)

須恵器蓋（15・16） 15は撮部を欠失する。天井部は若干丸みを有して大きく開き、端部は丸く肥厚する。16は大型の蓋となる。撮部は環状となる。天井部は若干丸みを有しながら大きく開き、口縁部付近はさらに水平近くまで開く。端部は下方に尖る。

須恵器环（17） 体部がわずかに丸みを有しながら開く。底部にはハケメが見られる。

須恵器椀（18） 底部と体部の境目に高台を有し、体部は直線的に伸びる。高台部は内側に稜を有す。高台部内側には同心円當て具痕が観察される。

須恵器皿（19） 体部が短く伸びる皿。底部と体部の境目は不明瞭である。

須恵器壺（20・21） 20は二重口縁となる壺口縁部片である。頸部付け根が強く締まり、上方が大きく開く。口縁部はそこから反転して直線的に伸びており、口縁端部は若干開いた器形となる。屈曲部外面には突帯を巡らせる。21は筒状に細長い体部となる壺。底部は平底で体部との境は明瞭な稜を有す。

土師器皿（22～25） 22は体部が直線的に開き、底部と体部の境目は不明瞭である。23・24は高台付皿で体部は直線的に開いている。25は大型品。体部の立ち上がりは外反気味に短く伸びている。

土師器环（26・27） 26は体部が直線的に開く。27は体部が外反気味に長く伸びており器壁は薄い。

土師器椀（28） 口縁部付近が外反気味に開く椀である。高台の接地面は面をなす。

土師器壺（29） 小型の壺である。口縁部は外側に短く外反する。

縁輪陶器碗（30） 高台部を欠失する。内面には2条の沈線を巡らせる。底部外面は糸切り。

灰釉陶器碗（31） 台形状の低い高台を有した灰釉陶器碗である。

灰釉陶器 瓷（32・33） 32は頸部があまり開かずに長く伸び、口縁部付近が大きく開いた形状となる。端部は外側に面を有し上端が尖る。頸部内面は露胎。33は小型の壺である。低い高台を有し、体部はあまり開かずに伸びている。

青磁碗（34～36） 34～36は越州窯系青磁碗である。34は低い台形状の高台となる。内面には沈線が1条巡る。35は高台部内面が若干窪んだような形状となる。36は断面台形状の高台となる。

9) 流路

SD1506 出土土器 (Fig.100, PL.50)

須恵器环（1） 低い高台を有した环。体部は直線的に伸びており深みのある器形となる。

須恵器高环（2） 褶部が大きく開き、端部が下方へ三角形状に尖った器形となる高环である。

須恵器壺（3・4） 3は小片のためよく分からないが突帯を有した壺の肩部であろうと思われる。焼成は須恵質だが表面の色調は内外面とも茶灰色を呈し、胎土にはあまり砂粒を含まない。4は壺肩部に貼付された耳部。

須恵器壺（5・6） 5は口縁部片である。肩は水平近くまで大きく張っており、口縁部は直

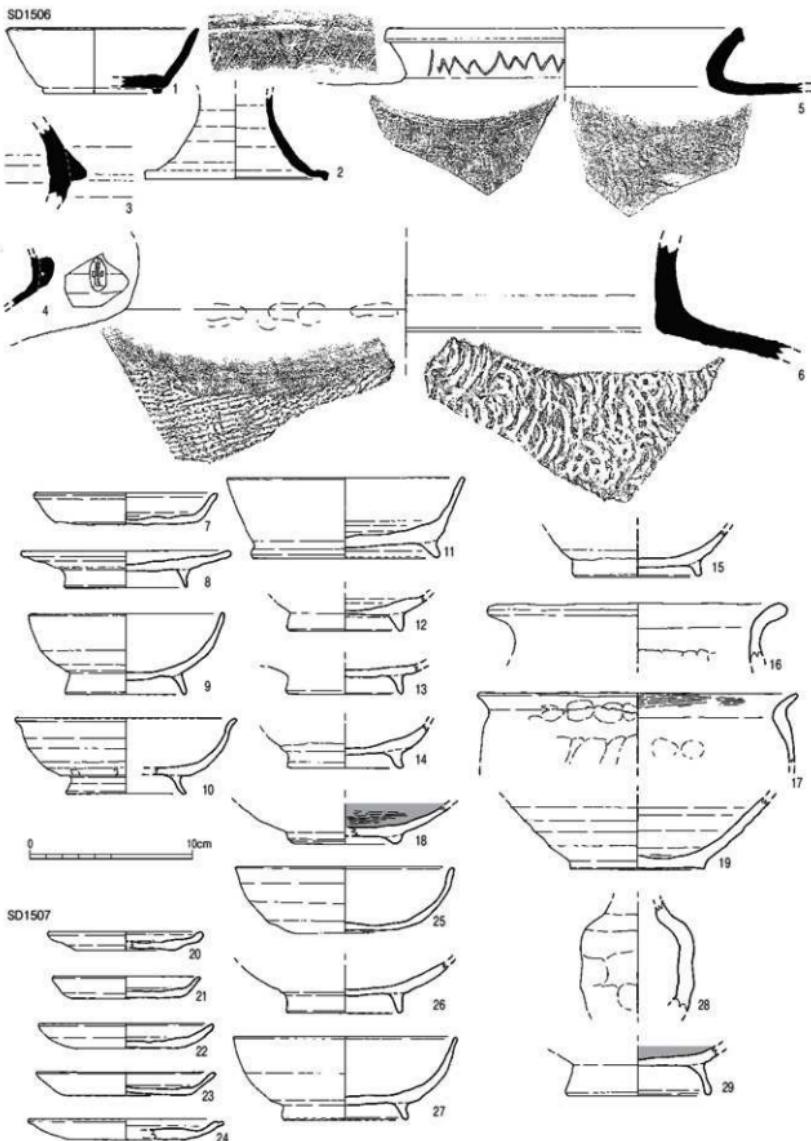


Fig.100 流路出土土器実測図① (1/3)

線的に短く開く。口縁外端部は突端状に仕上げる。頸部外面には1条の鋸歯文を雜に描く。6も肩が大きく張った器形となる。頸部はあまり開かず直立氣味に立ち上がる。

土師器皿（7・8）7は体部が直線的に開く皿である。8は高台付皿である。高台は端部が薄く尖る。体部は浅く立ち上がりのない器形となる。

土師器椀（9～15）9は体部が内湾しながらあまり開かずに伸びており、全体的に丸みを帯びた器形となる。10は口縁端部がわずかに外反する。11は体部が直線的に開き高台部は底部の境目付近にある。須恵器杯と似た器形となる。12・13は高台端部を尖り氣味に仕上げる。14は高台端部がやや外側に開く。15は高台が短く、端部は丸く取められる。

土師器甕（16・17）16は肩部があまり張らず、口縁部がゆるやかに外反する器形となる。端部は丸く器壁が若干肥厚する。17は口縁部が短く外反し端部を薄く仕上げる。

黒色土器椀（18）黒色土器A類の椀である。断面台形の低い高台がつき、内面にはヘラミガキ調整を行う。

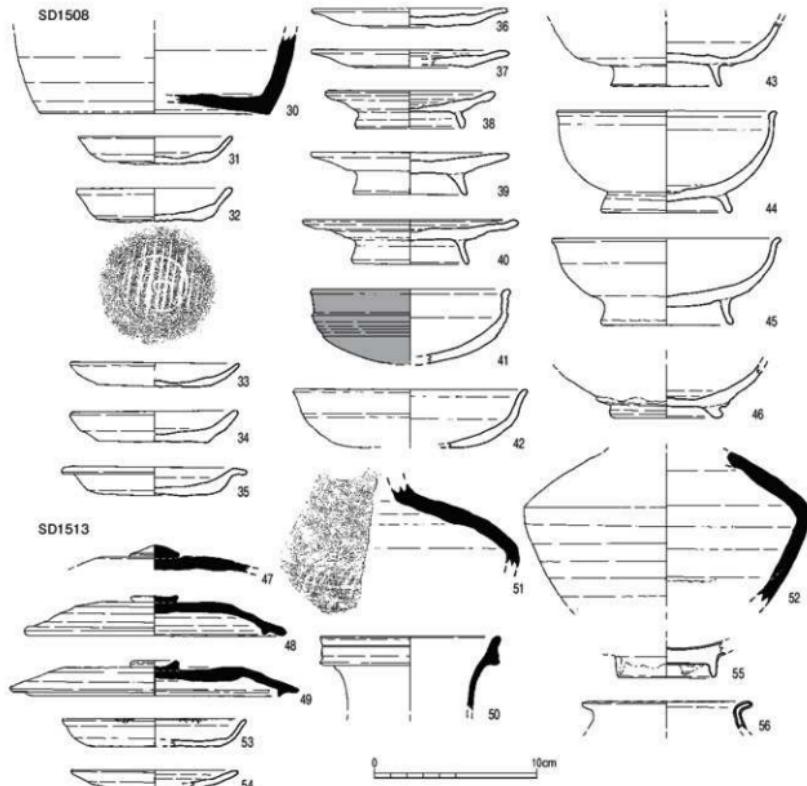


Fig.101 流路出土土器実測図② (1/3)

灰釉陶器壺（19） 無高台の壺であろう。底部と体部の境目には明瞭な稜を有し、体部は直線的に開く。外面にはロクロ目が明瞭に残る。底部糸切り。器壁が薄く胎土も精良である。

SD1507 出土土器 (Fig.100, PL.50)

土師器皿（20～24） 20～24は体部があまり長く伸びずにつき大きく開いた器形となる小型の皿である。24は口縁端部が水平方向にさらに短く開く。

土師器壺（25） 底部と体部の境が不明瞭で口縁部は上方に伸び、全体として丸みを帯びた器形となる。

土師器椀（26・27） どちらも比較的短い高台部を有した椀である。27は丸味を有す。

土師器壺（28） 手捏ね整形の小型壺である。体部は長胴気味で頸部付近が縮まった器形となる。器壁は厚い。

黒色土器椀（29） 黒色土器A類の椀である。高台はあまり開かず直線的に伸びており、端部付近が若干肥厚する。

SD1508 出土土器 (Fig.101, PL.50)

須恵器壺（30） 無高台の壺下半部片である。底部はわずかに上げ底となり、体部との境目は明瞭な稜を有す。体部はあまり開かず内湾しながら立ち上がる。

土師器皿（31～40） 31～34は体部が直線的に短く開く皿である。33は器壁が薄く、底部と体部の境目が明瞭ではない。35は口縁部付近が外折した器形となる。36・37は体部が大きく開き深みのない器形となる。38～40は高台付皿である。どれも体部と口縁部に境がなく直線的に開いた器形となる。40は高台部が長く伸びる。

土師器壺（41・42） 41は蓋とした方が適切かもしれない。体部が丸みを有し、口縁部付近は直立気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに丸く肥厚する。外面の口縁部下には多重の沈線を巡らせており、外面全体に黒塗りを行う。42は口縁部が外反気味に開く。

土師器椀（43～46） 43は全体的に器壁が薄い。高台部は径が小さく体部に対して内側に寄ったような形状となる。44は深みのある丸い体部となり、口縁端部は若干肥厚する。45は44と比較すると若干浅い器形となる。口縁端部はわずかに外反する。46は低く端部が丸みを帯びた高台となる。

SD1513 出土土器 (Fig.101, PL.50)

須恵器蓋（47～49） 47は断面三角形状の低い撮部を有す。48・49は断面三角形の小さなかえりを有す。48は扁平な撮部、49は中央が窪んだ低い撮部となる。

須恵器壺（50～52） 50は長頸となる壺口縁部片。口縁部下は突堤状に肥厚する。51・52は体部上半で屈曲し肩が張った器形となる壺である。

土師器皿（53・54） 53は体部が内湾気味に開いた器形となる皿。54は底部と体部の境目が不明瞭で浅い器形となる皿である。

白磁碗（55） 器壁が薄く低い高台を有した椀底部片。外面高台部付近にまで施釉する。

青磁壺（56） 口縁部が短く強く外反する青磁小壺である。

10) 瓦溜

SK1510 出土土器 (Fig.102～105, PL.50・51)

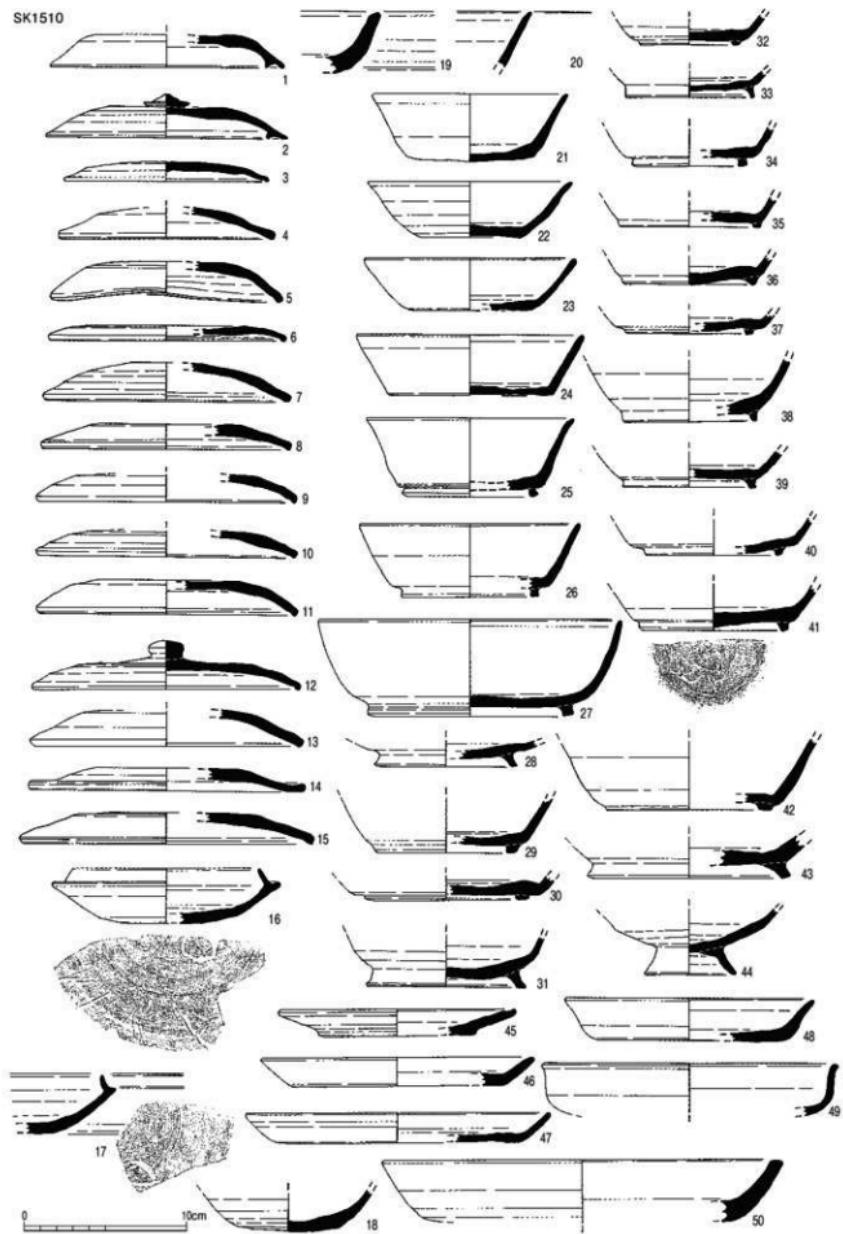


Fig.102 瓦溜出土器実測図① (1/3)

SK1510

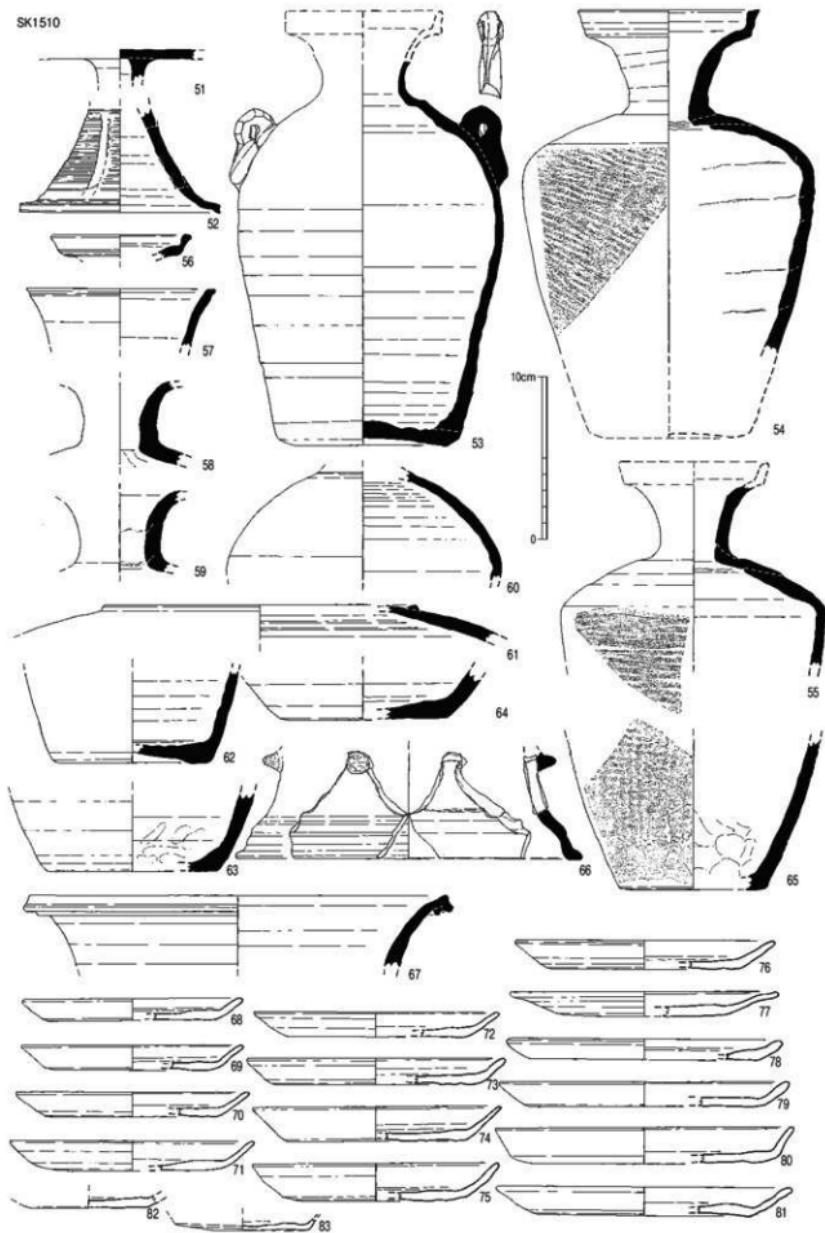


Fig.103 瓦窯出土土器実測図③ (1/3)

須恵器蓋（1～15） 1・2は内面に小さなかえりを有した蓋である。2は断面三角形状の低平な撮部を有す。3～15はかえりを有さない蓋である。どれも天井部が低く、水平近くにまで開いた形状となる。端部は下方に尖るものや丸く肥厚するものがある。

須恵器坏（16～24） 16・17は短い立ち上がりを有するもの。どちらも外面に似たようなヘラ記号がある。18は蓋の可能性もある。丸みを帯びた深い器形となる。19～24は底部が平坦で体部が直線的に開いた器形。19は器壁が厚い。21・22は口縁部付近がやや外反する。

須恵器榪（25～43） 25は体部があまり開かず直線的に伸びており、口縁部は若干外反する。26は体部が直線的に伸びる。27はやや内湾しながら伸びており、底部と体部の境目が棱をなさない。28～43は底部付近の破片である。29・30などのように断面台形状の低い高台となるものが多い。31は高台がやや長く、裾が外側に張り出したような形状となる。41は高台内側にヘラ記号状の細線が2本認められる。

須恵器高坏（44） 低脚の高坏である。体部は丸味を有しており、脚部は若干外反しながら開く。裾部は尖り気味に仕上げ、全体的に器壁が薄い。

須恵器皿（45～50） 45は高台状の平底を有し、体部は直線的に大きく聞く器形となる皿である。口縁部内面に強いヨコナデを加えて窪ませている。46・47は体部が短く直線的に聞く。48は体部が外反しながら短く聞く。49は体部が直立し、口縁部付近がわずかに外反する。50はやや大型品。器壁が厚く上端が水平面をなす。

須恵器高坏（51・52） 51は坏と脚の接合部片である。坏内部は水平に伸びている。52は脚部片。脚部は直線的に聞き、端部付近でやや強く聞く。裾端部は下方に尖り気味に仕上げる。外側は全面に櫛目を施し、三方向に方形の透かし孔を設けている。

須恵器二重口縁壺 須恵器壺（53～65） 53～55は二重口縁壺である。53は底部が若干上げ底で、体部はあまり開かず長胴となる。最大径が上方にあり肩は丸く張る。肩の二方向に耳を有する。頸部付け根で良く締まり、上半は大きく聞く。頸部より上は欠失するが、54とほぼ同じ形状になるものと思われる。54は口縁部上面が水平面をなす。外面には平行タタキと格子タタキが見られる。内面はナデ調整。55も54と同様の器形になると思われる。外面は平行タタキ。56はやや小型となる二重口縁壺の口縁部であろう。口縁部は上方へと立ち上がり、端部は外側に肥厚する。口縁部下には複数の沈線を巡らせる。57はやや外反しながら伸びる口縁部片。上端は面をなす。58・59は頸部付け根が強く締まり、頸部は直立てて上半が大きく開いた器形となる。60は肩があまり張らず丸みを帯びた器形となる。頸部付け根には低く不明瞭な段を有する。61は大きく肩が張った器形となり、頸部付け根に低い三角突帯を巡らせる。62～65は底部片である。62はわずかに上げ底、他は平底である。65は外面に格子タタキを行う。

須恵器器台 須恵器器台（66） 器台として復元した。裾部が段を有して聞き、端部は外側に短く伸びており接地部は面をなす。三角形になるであろう透かし孔を有し、瘤状の突起を有している。

須恵器甕（67） 口縁部が外反しながら聞き、端部は上方に尖るように整形する。外端部には2条の突帯を巡らせる。

土師器皿（68～83） 底部は平坦で体部は直線的ないし外反気味に短く聞き、端部は丸く收めるものが大半である。

土師器坏（84～97） 体部が内湾気味に聞き底部との境目が不明瞭なものと、体部が直線

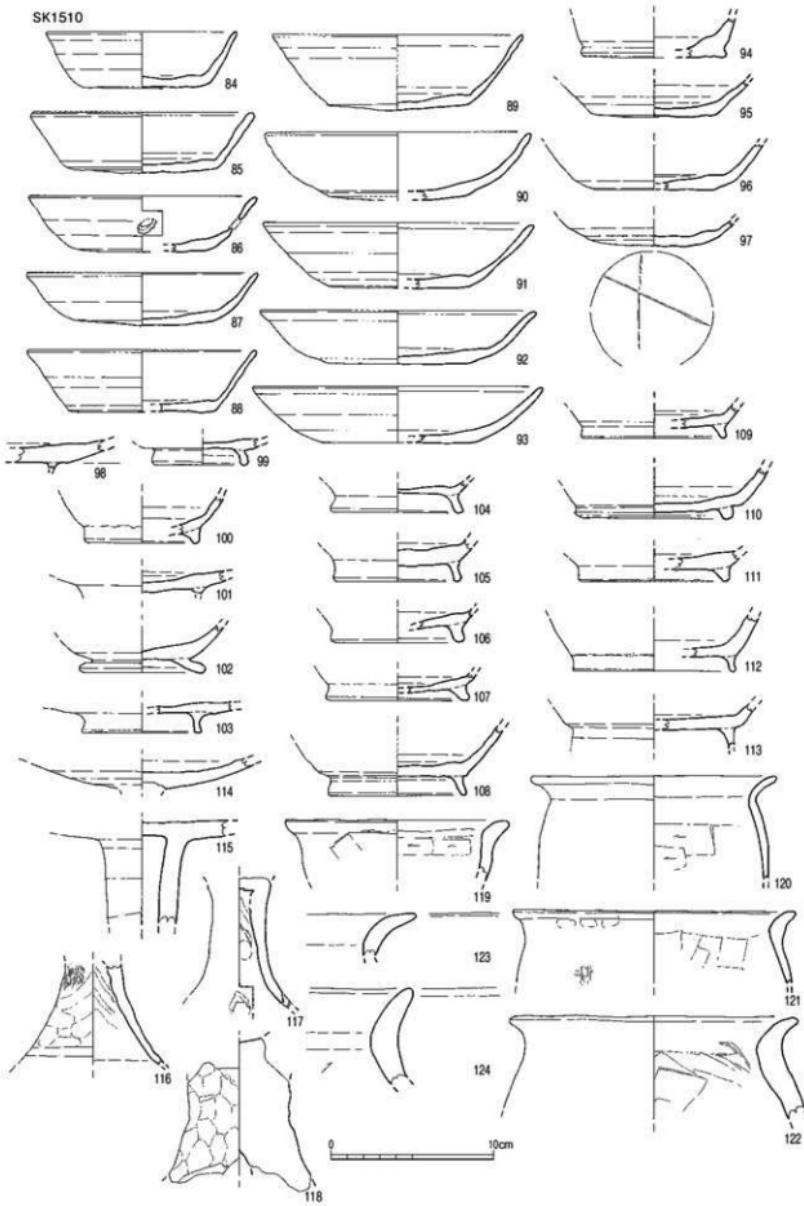


Fig.104 瓦窯出土土器実測図③ (1/3)

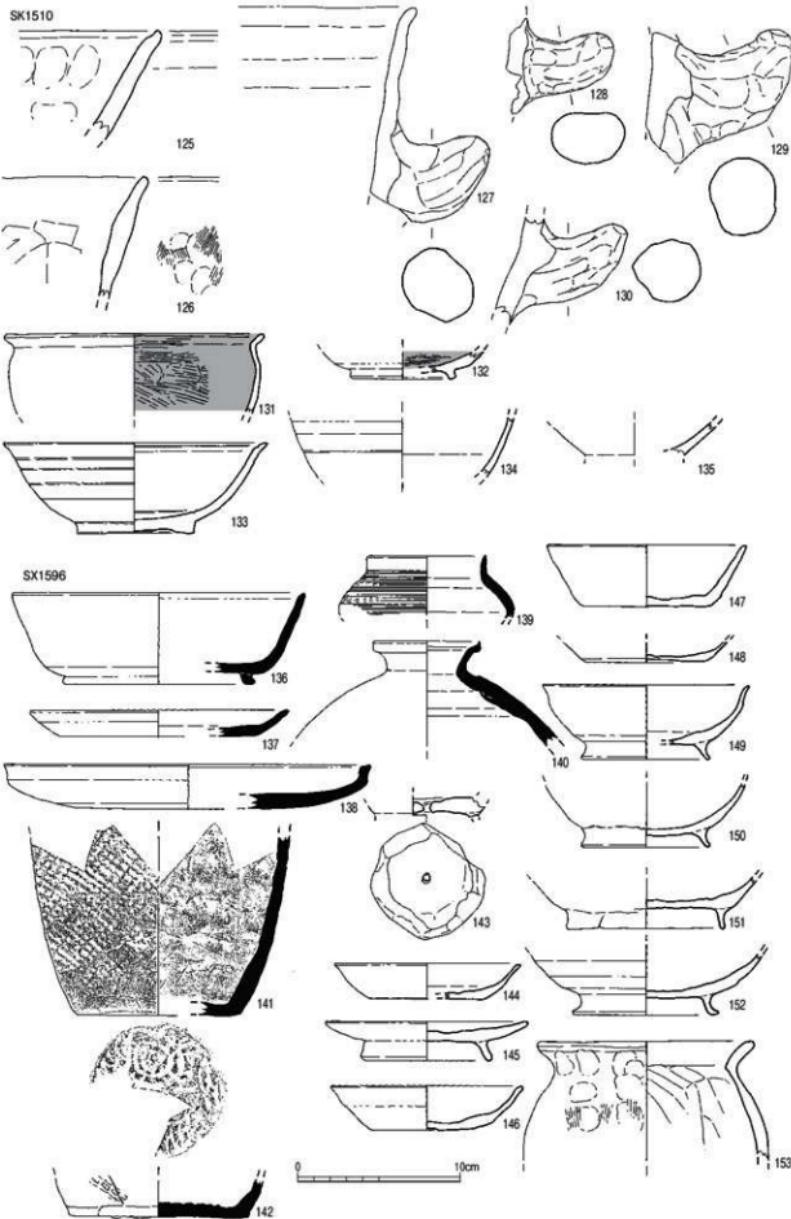


Fig.105 瓦溜出土土器実測図④ (1/3)

黒色土器
短頸壺

的に伸びており底部との境目が明瞭な稜をなすものとに大別される。86は体部に焼成後の穿孔がある。89は器壁が非常に薄い。94は器壁が厚く、裾が張って高台状を呈す。97は外面にヘラ記号状の線刻が2条ある。

土師器椀（98～113）底部付近の破片資料が大半である。高台はあまり伸びず低いものが多い。端部は丸く收められる。102は大きく横に開いた形状となる。

土師器高杯（114～118）114は大きく開いた杯部片。115は長く伸びた柱部の破片。116は接合部付近がわずかに外反しながら開く器形となる。117は柱部が長く伸び、裾付近に透かし孔を設ける。118は器壁が厚く、指整形を行う。

土師器甕（119～122）119は頸部が締まらず口縁部は短く外反する。内面には横向方向のヘラケズリが認められる。120は器壁が薄い。口縁部は外反しながらやや長く伸びる。121は口縁部付近が肥厚する。122は器壁が厚く、口縁部付近は薄く仕上げる。123も口縁端部の器壁が薄くなり、上端が水平面をなす。124は口縁部があまり外反せず上方に伸びている。

土師器瓶（125～130）125はやや開き気味に伸びる口縁部片。126は口縁部下の器壁が厚くなる。127は口縁部付近が若干外反する。把手接合部内面には接合痕が認められる。128～130は把手部。

黒色土器壺（131）黒色土器A類の短頸壺である。丸味を帯びた深い器形で口縁部下は内傾し、口縁部は短く開く。内面には横向方向のヘラミガキが確認できる。

黒色土器椀（132）黒色土器A類の椀。断面台形の低い高台を有す。内面にはヘラミガキが認められる。

青磁碗（133～135）133～135は越州窯系青磁碗である。133は体部が内湾しながら開き、端部は外反する。高台部は断面三角形の低い高台となる。外面には3条の沈線を巡らす。134も同様で外面に3条の沈線を巡らせている。135は下半部の小片である。

SX1596 出土土器 (Fig.105, PL.51)

須恵器椀（136）体部があまり開かず直線的に伸びる器形の椀である。口縁部は尖り気味に仕上げる。高台は接地部分が面をなす。

須恵器皿（137）体部が短く大きく開く器形となる。

須恵器高杯（138）底部と体部の境目が不明瞭で、口縁部は直立気味に短く立ち上がる。口縁上端部は面をなす。

須恵器壺（139～142）139は小型の短頸壺である。体部は扁球形で口縁部は短く直立する。端部は尖り気味に仕上げている。外面の体部上半には櫛目文を施す。140は肩が丸味を帯び頸部付け根で強く締まる。頸部は短く開き、口縁端部は上方へとつまみ上げられシャープに尖る。141の体部はあまり開かず長胴となる。外面には格子タタキを行う。142も141と同様の形状となる。底部内面には同心円當て具痕が残る。

土師器皿（143～145）143は皿の底部片である。中央に穿孔を行っている。144は体部が緩やかに内湾しながら開く。口縁部付近の器壁は薄い。145は高台付皿である。体部は水平近くにまで大きく開き、底部と体部の境目は見られない。

土師器杯（146～148）146は体部と底部との境目が稜をなさない。147は体部が直線的に伸びており底部との境目が不明瞭な稜をなす。148は器壁が薄い。

土師器楕（149～152） 149は口縁部付近が緩やかに外反する。高台は短く直線的に開く。150は丸味を帯びた体部で全体的に器壁が薄い。151は短く直立する高台部となる。152は高台端部付近が外反する。

土師器甕（153） 小型の甕である。肩はあまり張らず、口縁部は短く緩やかに外反する。端部は丸く收める。内面ヘラケズリ、外面ハケメ調整を行う。

SX1596 下層出土土器 (Fig.106, PL.51)

須恵器蓋（154） 平坦な形状の蓋である。端部は下方に丸くつまみ出される。

須恵器坏（155） 体部が直線的に伸びる器形の坏である。

須恵器楕（156～158） 156は体部上半が若干外反した器形となる。高台部は内側で接地する。157は底部と体部の境目付近に高台が位置する。高台の形状は断面台形を呈す。158は体部があまり開かない器形となる。高台の接地部は面をなす。

須恵器皿（159） 体部がわずかに外反しながら大きく開く器形の皿。口縁部は薄く尖る。

須恵器壺（160～162） 160は壺の頸部片である。頸部付け根で良く縮まり、上半は外反

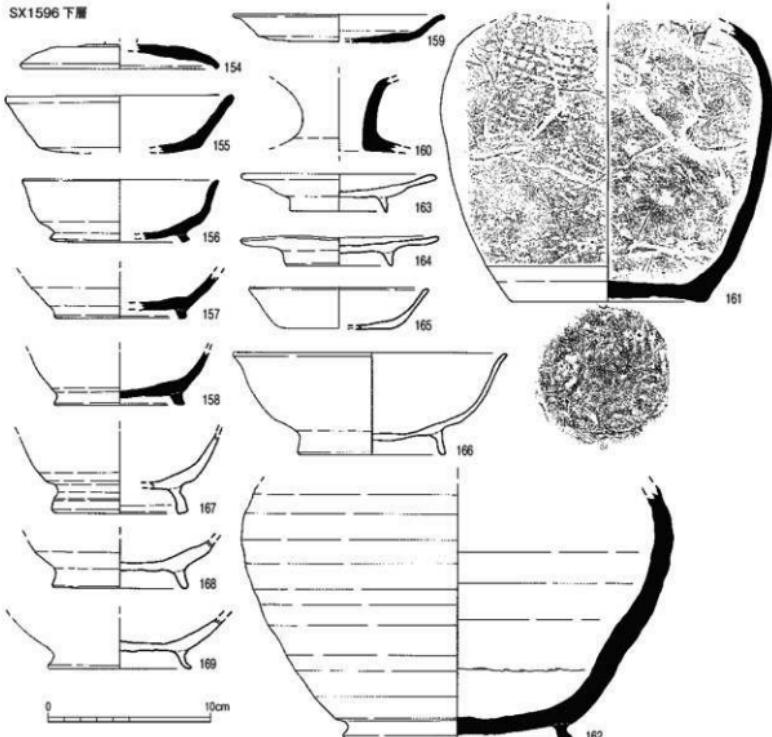


Fig.106 瓦窯出土土器実測図⑤ (1/3)

しながら開く。161は無高台の底部となる。体部上方に最大径があり、肩は丸く張る。内面は平行當て具痕、外表面は格子タタキ、底面は同心円當て具痕が認められる。162は低い高台を有した体部片。体部下半は直線的に開き、肩が丸く張った器形となる。内外面ナデ調整を行う。

土師器皿（163・164） 163・164は高台付皿である。高台は断面三角形でやや高い形状となる。皿部は水平近くにまで開いており、底部から体部にかけて直線的に続いている。

土師器壺（165） 体部が直線的に開く壺である。底部と体部の境目は稜をなさない。

土師器椀（166～169） 166は深くて丸みのある器形で、口縁部付近はわずかに外反する。高台はやや高く、端部は丸く收められる。167は体部があまり開かない器形で、高台は若干内湾しながら伸びる。端部は丸い。168は短く開いた高台部となる。169は高台端部が外側にやや開いた形状となる。

11) 炭・焼土層

SX1556 出土土器 (Fig.107, PL.51)

須恵器蓋（1） 天井部が水平近くにまで広がった器形となる蓋である。端部は下方に尖る。

須恵器壺（2） 体部が直線的に短く伸びる壺である。

須恵器椀（3） 体部があまり開かず直線的に伸びる器形となる椀である。高台外端部は外側に尖る。

土師器甕（4～6） 4は頸部が締まり、口縁部が大きく開く布留系の甕である。端部は丸く收められる。摩滅が著しく調整不明。5は肩が張らず口縁部が短く外反する器形となる。口縁端部は尖り気味に仕上げる。6は頸部が締まり、口縁部が強く外反する甕である。頸部付近は器壁が厚くなる。

12) ピット

4次調査区ピット出土土器 (Fig.108, PL.51)

須恵器壺（1） 低い立ち上がりを有した壺である。口縁部付近は打ち欠きが多くあり、底部外表面にはヘラ記号が認められる。

須恵器甕（2） 小型の甕であろう。口縁部は直線的に開いており端部はわずかに肥厚する。

土師器壺（3） 模倣壺である。立ち上がりは上方に長く伸び、端部は丸くおさめられる。

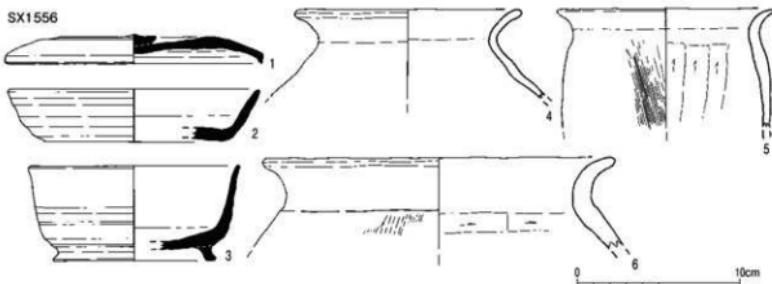


Fig.107 炭・焼土層出土土器実測図 (1/3)

土師器甕（4） 体部最大径が中位よりやや上にあり、頸部はあまり縮まらない。口縁部は外反気味に大きく開き、端部は面をなす。内面はハケメ、外面上半にはタタキとハケメ、下半にはヘラケズリが認められる。

54次調査区ピット出土土器 (Fig.108)

須恵器椀（5・6） 5は体部が直線的に開く器形となる。6は底部と体部の境が丸みを帯び、高台端部が外側にやや開いた器形となる。

須恵器壺（7） 体部が外反気味に開いた器形となる壺である。器壁が薄い。

須恵器蓋（8） 須恵器壺の底部片である。底部に対して体部の器壁が厚い。底面や体部下方にはヘラナデの痕跡が認められる。

土師器椀（9～12） 9は体部が丸みを有し、口縁部付近がわずかに外反する。10～12は低くてあまり径が大きくなりない高台部となる椀底部片である。

60次調査区ピット出土土器 (Fig.108)

須恵器蓋（13） 小さなかえりを有した蓋である。天井部が高い形状に復元される。

須恵器椀（14） 断面台形の低い高台部を有した椀である。

土師器甕（15・16） 15は尖り気味の丸底となる甕底部片である。16は頸部があまり縮ま

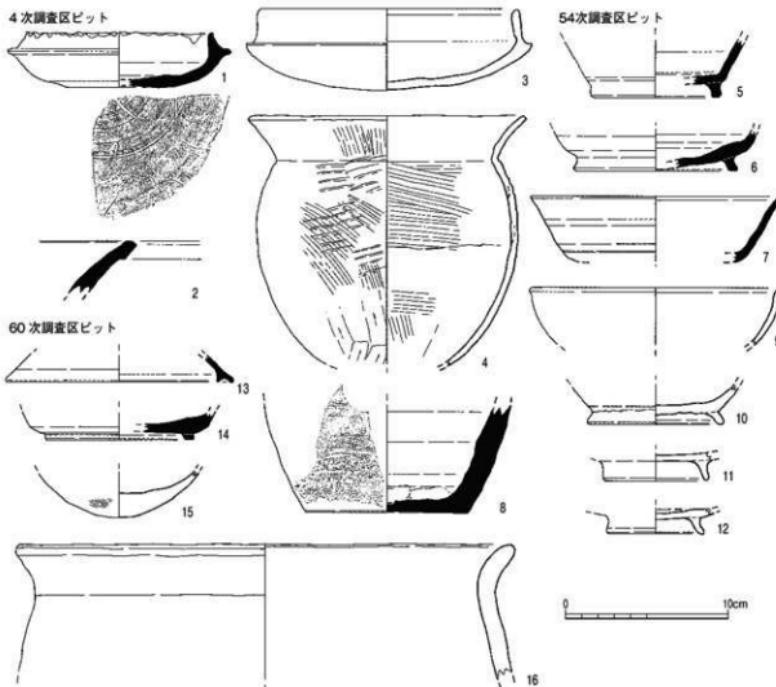


Fig.108 ピット出土土器実測図 (1/3)

らず、口縁部が緩やかに外反する甕である。外面はナデ調整を行う。

13) 包含層等

SA100 上層出土土器 (Fig.109, PL.52)

須恵器高环(1～3) 1は高环の环部片である。立ち上がりは内傾し直線的に伸びている。2・3は脚部片である。2は柱部と裾部の境が明瞭に屈曲する。裾端部は下方に尖る。柱部外面にロクロ目が明瞭に残る。3は柱部から裾部にかけて緩やかに開いている。端部は丸味を帯びているが、接地部は尖り気味に仕上げる。

須恵器甕(4) 大型の甕である。肩は丸く大きく張っており、頸部付け根が屈曲してよく締まった器形となる。頸部から口縁部にかけて大きく開いている。外面には沈線を複数巡らせ、その間には柳書き波状文が描かれる。

土師器鉢(5) 扁球形の体部を有し、頸部はあまり締まらず口縁部は短く外反する器形となる鉢である。内面には指ナデの稜線が残る。

SA100 土器溜まり出土土器 (Fig.109, PL.52)

須恵器蓋(6・7) 6は天井部と口縁部の境が屈曲したような形状となる。7は鉤状の撮部を有しており、丸みを帯びた器形となる。

須恵器甕(8) 頸部があまり締まらず口縁部が緩やかに開いた器形となる甕である。外面上半にはカキメ、下半には平行タタキが認められる。

土師器甕(9・10) 9は頸部があまり張らず、口縁部が直立気味であまり開かない器形となる甕。10は丸底となる底部で器壁が厚い。

SA100 土層中出土土器 (Fig.109)

土師器甕(11) 把手の破片である。甕であろう。内面ナデ調整を行っている。

SA100 下層砂質土出土土器 (Fig.109)

土師器甕(12) 小型の丸底甕である。球形に近い体部で頸部はあまり締まらない。内外面に指ナデの稜線が残る。

4次調査区北トレンチ出土土器 (Fig.110, PL.52)

弥生土器甕(13) 倒卵形の体部中位に刻目突帯を巡らせる甕である。内面はハケメ、外面の下半はヘラケズリ、上半は平行タタキを行う。

須恵器蓋(14) やや器高が低い形状の蓋である。端部は丸く收める。

須恵器環(15) 体部が内湾しながらあまり開かずに伸びる器形となる。端部は丸くわずかに肥厚する。

須恵器椀(16) 体部が外反気味に伸び、高台は低い台形状を呈す形状の椀である。

須恵器高环(17) 烧け歪みのため口縁部が下方に大きく歪んでいる。柱部は短く裾部は内湾しながら開く。

須恵器甕(18) 高台付の甕である。最大径が中位からやや上方にあり、その部分に垂下した大きな三角突帯を巡らせる。肩部にも断面台形の突帯が巡る。外面下半には横方向のヘラケズリが認められ、それ以外はナデ調整を行う。

須恵器甕(19) 肩部が若干丸みを有し、口縁部は直線的に開く。口縁端部は上方を向き、

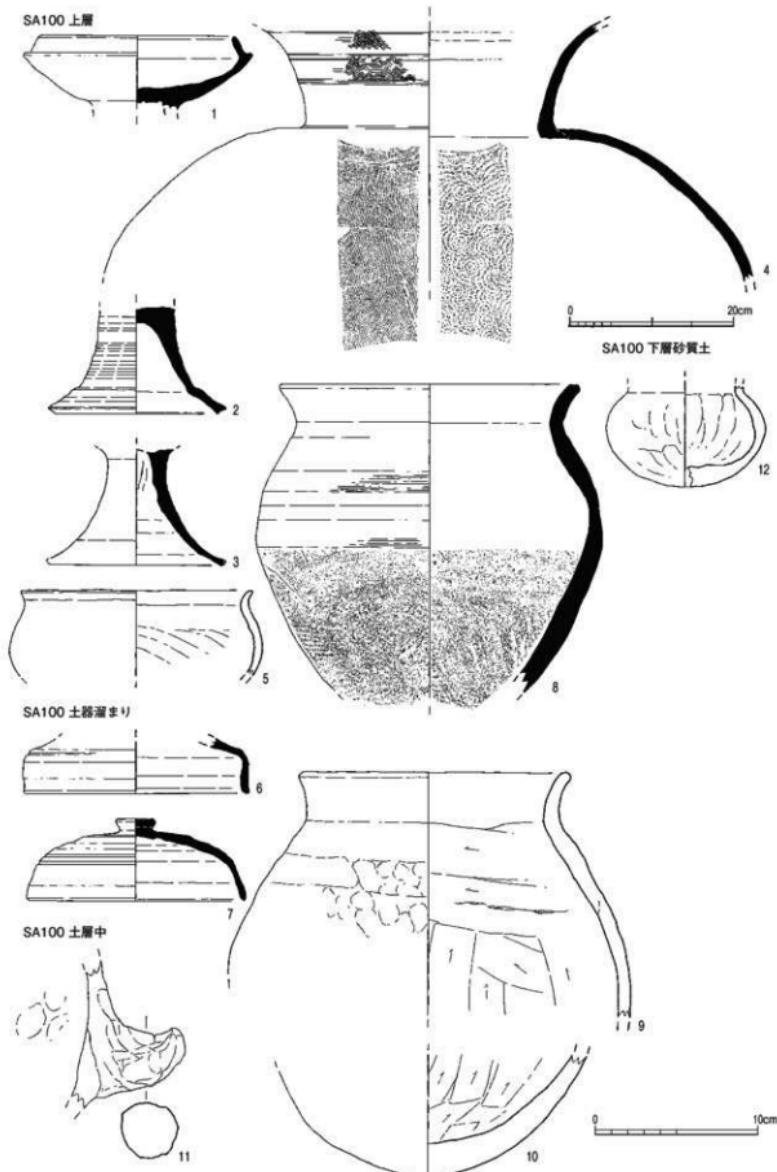


Fig.109 包含層等出土土器実測図① (4 : 1/6, 他 : 1/3)

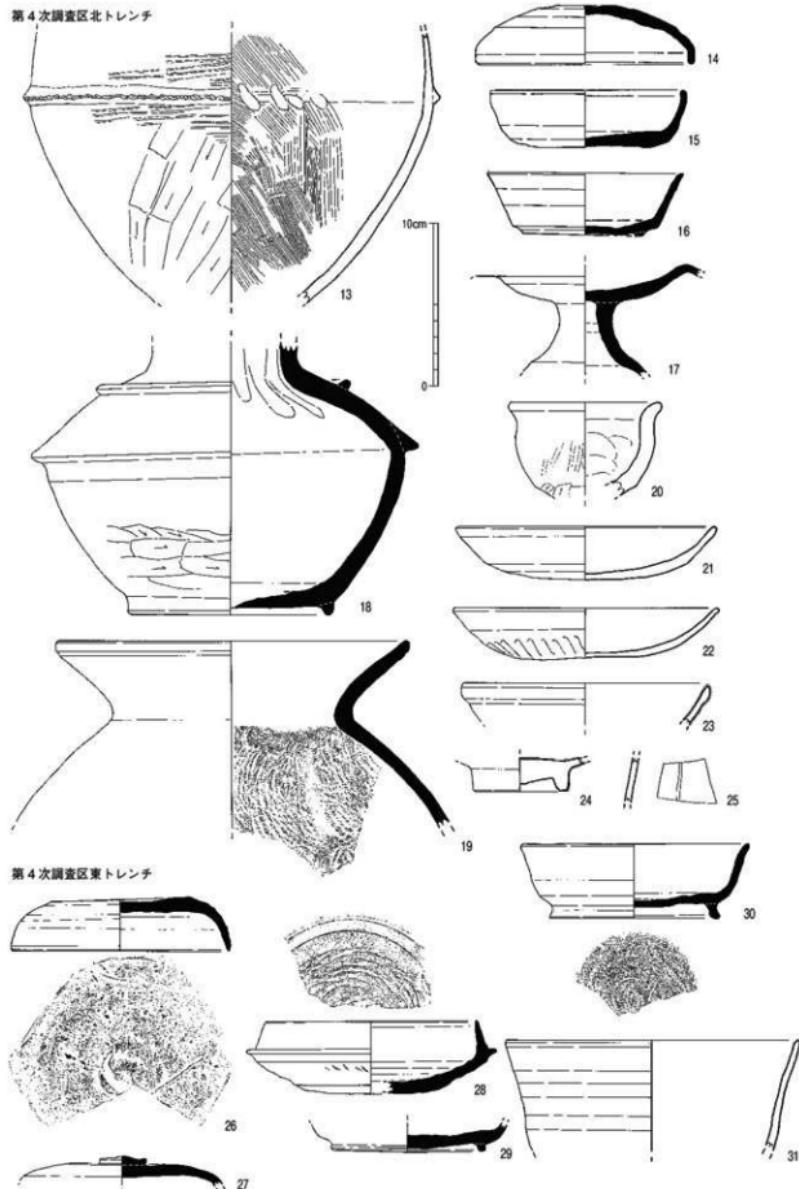


Fig.110 包含層等出土土器実測図② (1/3)

下端に強いヨコナデを加えて凹線状に窪ませる。

土師器鉢（20）小型の鉢である。口縁部はわずかに外反し端部は丸く收める。器壁が厚い。

土師器壺（21・22）21・22はどちらも底部と体部の境目が不明瞭で、体部が大きく開いた器形となる。どちらも器壁は薄い。

白磁碗（23・24）23は口縁部が小さな玉縁となる白磁碗である。24は碗の底部片。器壁が厚く、高台外面にまで施釉される。

青磁碗（25）越州窯系青磁碗の体部片。縱方向の沈線を有する。色調は内外面とも茶白色を呈す。

4次調査区東トレント出土土器 (Fig.110・111, PL.52)

須恵器蓋（26・27）26は天井部が扁平で器高があまり高くない。端部は薄く尖る。内面にはヘラ記号が認められる。27は低い撮部を有する。

須恵器壺（28）立ち上がりがやや内傾しながら直線的に伸び、端部をつまみ出すような特徴を有した壺である。受け部は小さい。外面にはタタキが残る。

須恵器椀（29～31）29は丸みを帯びた小さな高台を有す。30は体部が外反気味に開いており、高台は外側につまみ出したような形状となる。高台内面にはヘラ記号が認められる。31はやや大型となる椀である。体部があまり開かず外反気味に伸びる。

須恵器高壺（32・33）32の壺部は口縁に受け部を持たず、わずかに外反した器形となる。脚部は付け根から外反しながら大きく開く。33は柱状となる脚部片である。外面に絞り痕が認められる。

須恵器壺（34～36）34は二重口縁となる壺の口縁部である。口縁部は端部付近で大きく外反し、屈曲部外側は三角突堤状に仕上げる。35は扁球形の体部となる。最大径の付近に平行する沈線を巡らせており、その間に柳描き波状文を施文する。36は平底の底部で体部はあまり開かずに立ち上がる。底部と体部の境には明瞭な稜を有す。外面にはナデに先行する平行タタキが残る。

須恵器鉢 須恵器鉢（37）体部の最大径が上方にあり、口縁部は大きく開く。口縁端部は若干肥厚する。肩部の2ヶ所に耳朶状の把手を貼付する。内面同心円當て具痕、外面は平行タタキを行う。

土師器壺（38）底部が平底で体部は外反気味に開く壺である。

土師器高壺（39）柱部が長く伸びる高壺である。壺部はあまり開かずに外反し、端部は上方を向く。

土師器壺（40）頸部が若干内傾し、口縁部は緩やかに開いた器形となる壺である。

白磁碗（41・42）41は口縁部が玉縁状に肥厚する碗である。体部は直線的に開いている。42は全面露胎だが白磁か。高台は直立する。

陶器壺（43）備前焼の壺または鉢であろうか。端部外側を強くつまみ出しており、上部が凹面を形成している。

瓦質土器釜（44）茶釜の耳部片である。焼成は瓦質に近い。

4次調査区西トレント出土土器 (Fig.111・112, PL.52)

須恵器壺（45～49）45・46は短い立ち上がりを有した壺である。46は器壁が厚い。47は蓋の可能性もある。48は底部付近が丸味を帯びた器形となる。49は底部が平坦で体部はあ

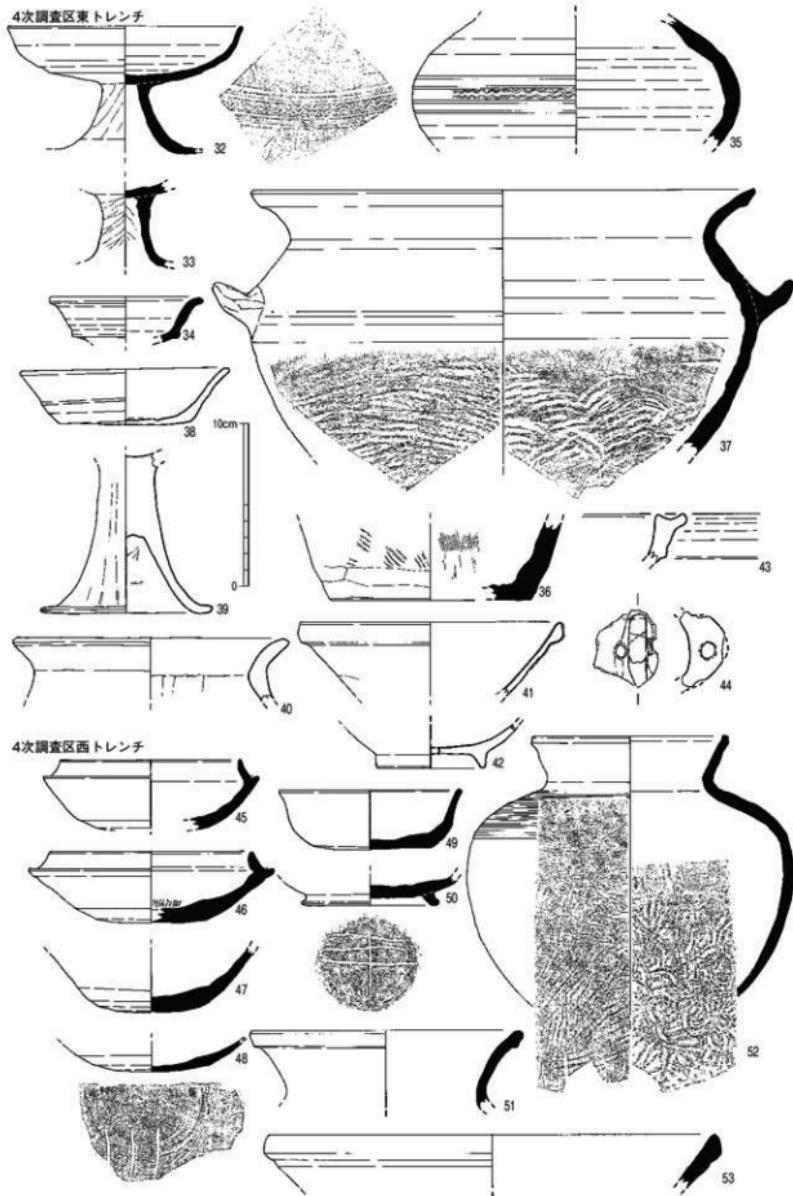


Fig.111 包含層等出土土器実測図③ (1/3)

まり開かずに立ち上がり、上半が外反気味になる。

須恵器楕（50） 低くて端部付近が外側に開いた形状の高台を有した楕である。高台内面にはヘラ記号が見られる。

須恵器甌（51・52） 51は口縁部が外反気味に開き、端部が肥厚する。52は体部最大径が中位よりやや上にあり肩が張った器形となる。口縁部は直線的に開き、端部は外側を強くナデて凹線状にする。上端部は面をなす。外面の肩部にはカキメを施し、下半には平行タタキが認められる。

須恵器鉢（53） 口縁部が玉縁状に肥厚する束縛系の鉢である。

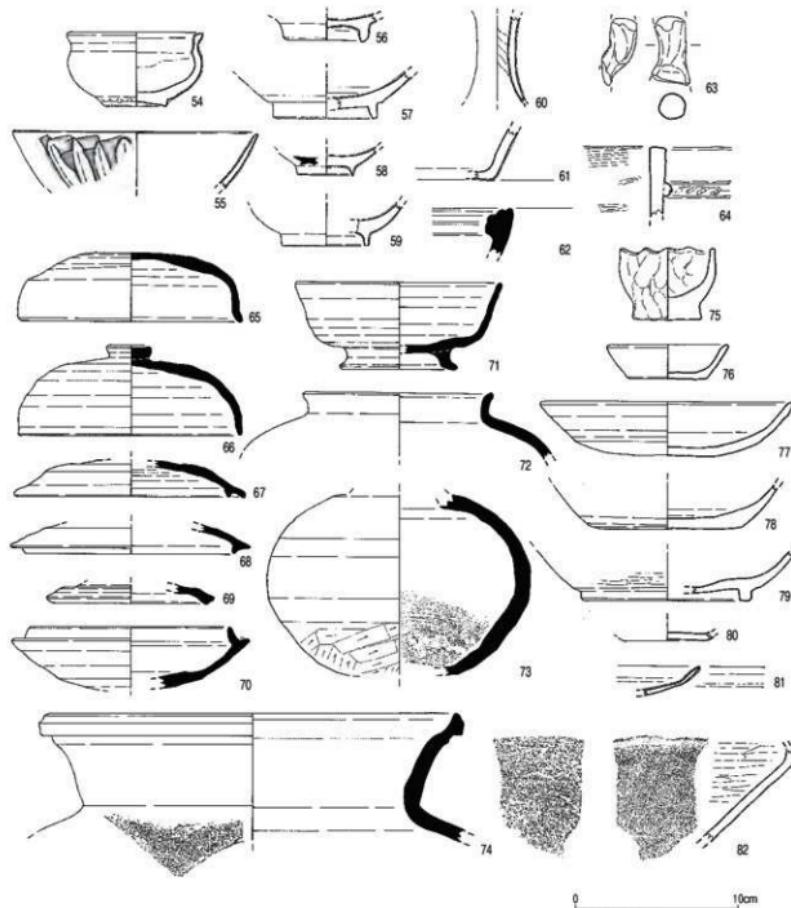


Fig.112 包含層等出土土器実測図④ (1/3)

青磁碗（54・55）54は扁球形の体部で頸部が直立し、口縁端部が若干肥厚する形状の小青磁碗である。55は鍋蓮弁の青磁碗。

白磁碗（56・57）56は高台部が直立する。釉は高台外側まで施釉される。57も高台部が直立し、内端で接地する。釉は高台までは施釉されない。

染付碗（58・59）58は小碗である。高台は薄く先端が尖る。59は高台端部のみ露胎となる。

陶器瓶（60・61）60は中世褐釉陶器瓶の頸部である。内外面施釉される。61は瓶または壺の底部片。内面は露胎となる。外面茶褐色を呈すが胎土は須恵器に近い。

陶器鉢（62）無釉陶器鉢である。内端部が肥厚し、凹線状の段を3条設ける。

陶器壺（63）壺の類の耳部であろう。施釉されていない。胎土に砂粒を含まず緻密であることから近世期の所産と思われる。

瓦質火鉢（64）外面の口縁部下に刻目突帯を巡らせる。上端部は平坦面を形成する。内面には横ハケメが見られる。

4次調査区その他出土土器 (Fig.112, PL.52)

須恵器蓋（65～69）65は丸味を帯びた天井部の蓋。端部は外反気味にわずかに開いている。66は天井部が丸く、外面に断面方形状の攝みを有している。口縁端部は薄く尖る。67～69は器高が低い蓋である。67・68は内面に小さなかえりを有している。69は小型の蓋である。内端部で接地する。

須恵器坏（70）短い立ち上がりを有した坏である。

須恵器椀（71）体部が直線的に開き、高台部は端部が外側に開いた形状となる椀である。体部の器壁は薄い。

須恵器壺（72・73）72は肩が丸く張った器形で口縁部は短く上方へと伸びる。内外面ヨコナデ調整を行う。73は球形に近い体部となる。外底部付近はヘラケズリ、内面には工具痕が認められる。

須恵器甕（74）口縁部が直線的に開き、端部が断面三角形状に肥厚する。口縁外端部は明瞭な稜を有す。

土師器壺（75）手捏ね整形の小型無頸壺である。

土師器皿（76）体部が直線的に長く開き、やや深い器形となる小皿である。

土師器坏（77・78）77は底部が丸く体部が大きく開いた器形の坏である。78は底部と体部の境目に明瞭な稜を有さない。

土師器椀（79）断面方形の低い高台を有す。外面にはかすかにヘラミガキが見える。

白磁皿（80）小型の皿であろう。底面にも施釉が行われる。

青磁皿（81）小型の皿で、口縁部下に屈曲部を有する。体部下半は露胎となる。

繩文土器浅鉢（82）精製の浅鉢である。内面はヘラミガキ、外面にはナデに先行する横条痕が残る。

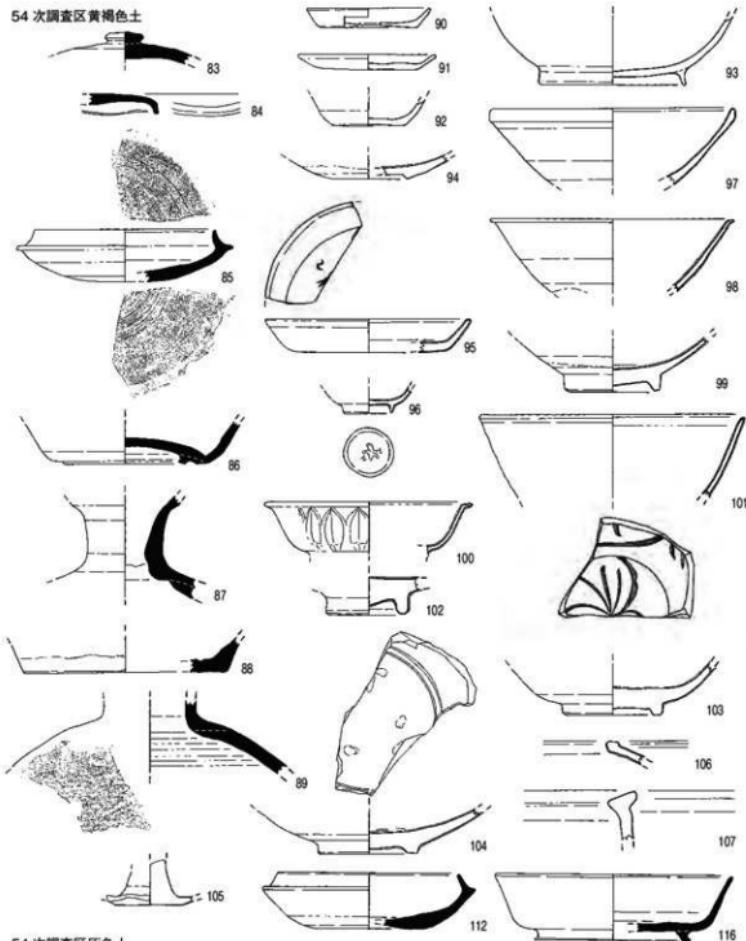
繩文土器
精製浅鉢

54次調査区黄褐色土出土土器 (Fig.113, PL.52)

須恵器蓋（83・84）83・84は須恵器蓋である。83は鉗状の低い攝部となる。天井部は平坦である。84は天井部がほぼ水平にまで開き、口縁部は下方に折れ曲がる。端部は面をなす。

須恵器坏（85）短い立ち上がりを有する坏である。外面にはヘラ記号、内面にもヘラ状工

54 次調査区黄褐色土



54 次調査区灰色土

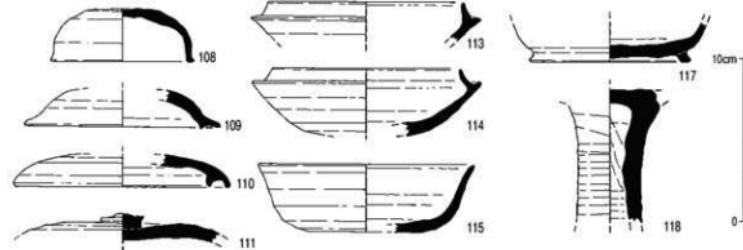


Fig.113 包含層等出土土器実測図⑤ (1/3)

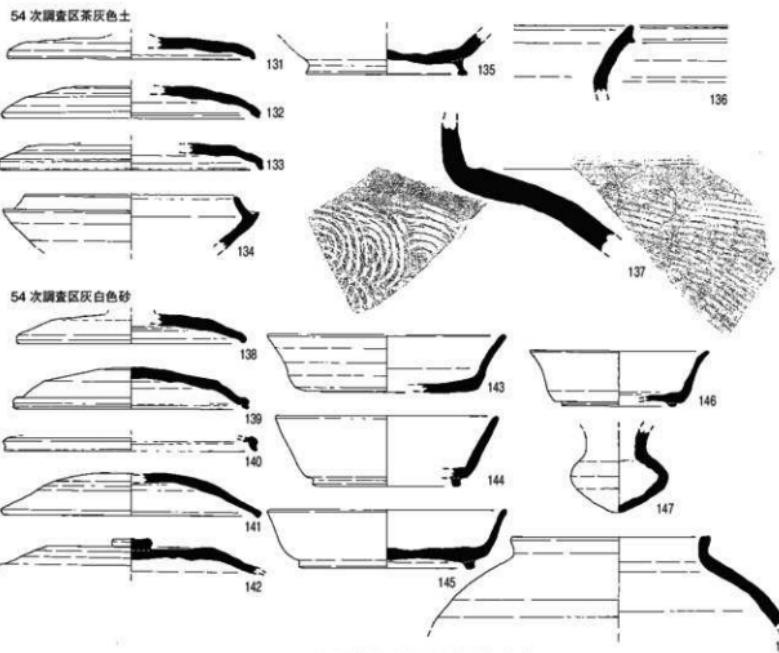
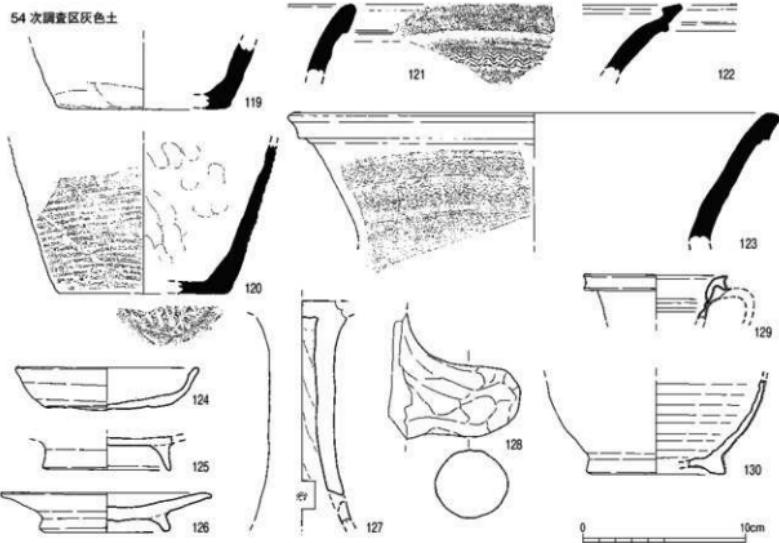


Fig.114 包含層等出土土器實測圖⑥ (1/3)

具の痕跡が見られる。

須恵器楕（86） 焼け歪みが著しい楕である。高台は断面台形状の低い形状を呈す。

須恵器壺（87～89） 87は二重口縁となる壺の頸部である。付け根付近は締まり、上部に向けて緩やかに開く。口縁部下の屈曲部外面には明瞭な稜を有す。88は平底となる底部である。底部と体部の境目には明瞭な稜を有す。89は肩が丸く張り頸部が締まった器形となる。外面の肩部にはタタキが見える。

土師器皿（90～92） 90～92は小皿である。90・91は体部が直線的に短く開く。90は底部に穿孔がある。92はやや長く伸びるようである。

瓦器楕（93） 体部が丸みを有し器壁が薄い楕である。

白磁皿（94・95） 94は甚簡底となる皿である。95は体部が外反気味に短く立ち上がる浅い器形の皿。内面見込みに施文を行う。

白磁碗（96～99） 96は小碗である。97は口縁部が小さな玉縁となる。98は端部が小さく外反し上面が水平面をなす。99は底部付近の器壁が厚くなる。外面の体部以下は露胎。

青磁皿（100） 鍋蓮弁を配した皿である。体部は直線的に開き口縁端部が水平近く屈曲する。

青磁碗（101～104） 101は体部があまり開かず直線的に伸びる深い器形となる。102は厚い高台部の破片。釉は高台部外面にまで塗布される。103は内面見込みに片彫りで花文を描く。104は高麗青磁碗で内面の体部と底部の境目に2重の團線を象嵌する。内面見込みの3ヶ所に目跡が残る。釉は高台疊付も含めて全面施釉される。

陶器灯明台（105） 外面に明茶色の釉を塗布する。胎土は明茶灰色を呈す。

陶器壺（106） 肩が丸く張り口縁部が短く上方に立ち上がる器形の短頸壺である。上端部は水平面をなす。

黄釉陶器 陶器鉢（107） 黄釉陶器の鉢または盤であろう。口縁部が大きく肥厚し上端部が内傾する面をなす。

54次調査区灰色土出土土器 (Fig.113・114, PL.52・53)

須恵器蓋（108～111） 108は天井部が高く丸い器形の蓋である。端部は外側につまみ出したような形状であり、接地面は面をなす。109・110は内面に小さなかえりを有した蓋である。111は低い攝みを有した蓋である。

須恵器坏（112～115） 112～114は短い立ち上がりを有した坏。115は底部が平坦で体部が外反気味に開く。底部と体部の境目は明瞭な稜をなさない。

須恵器楕（116・117） 116・117は端部が外側に短く伸びた形状となる楕。116は体部が直線的に伸びている。

須恵器高坏（118） 筒状に長く伸びた高坏の脚柱部片。

須恵器壺（119・120） 119・120はどちらも平底で体部があまり開かない長胴の壺である。120は外面にタタキ、底面に同心円当て具痕が残る。

須恵器甕（121～123） 121は口縁端部を玉縁状に肥厚させる。外面の口縁部下には櫛描き波状文を巡らせる。122は口縁内端部が突出し、上端が面をなす。外面の口縁部下には三角形状の突帯がある。123は121と類似する。

土師器皿（124～126） 124は底部が丸みを帯びる形状の皿である。125・126は高台付皿。

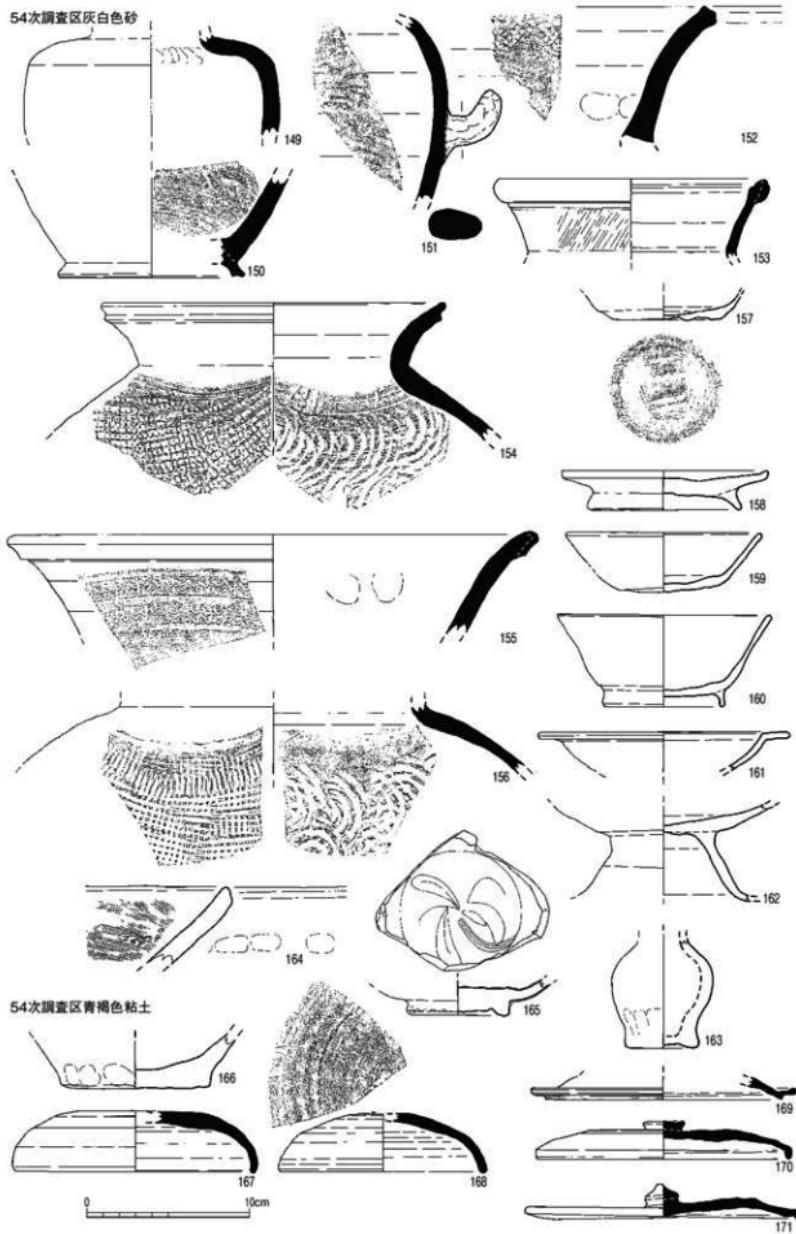


Fig.115 包含層等出土土器実測図⑦ (1/3)

54次調查區青褐色粘土

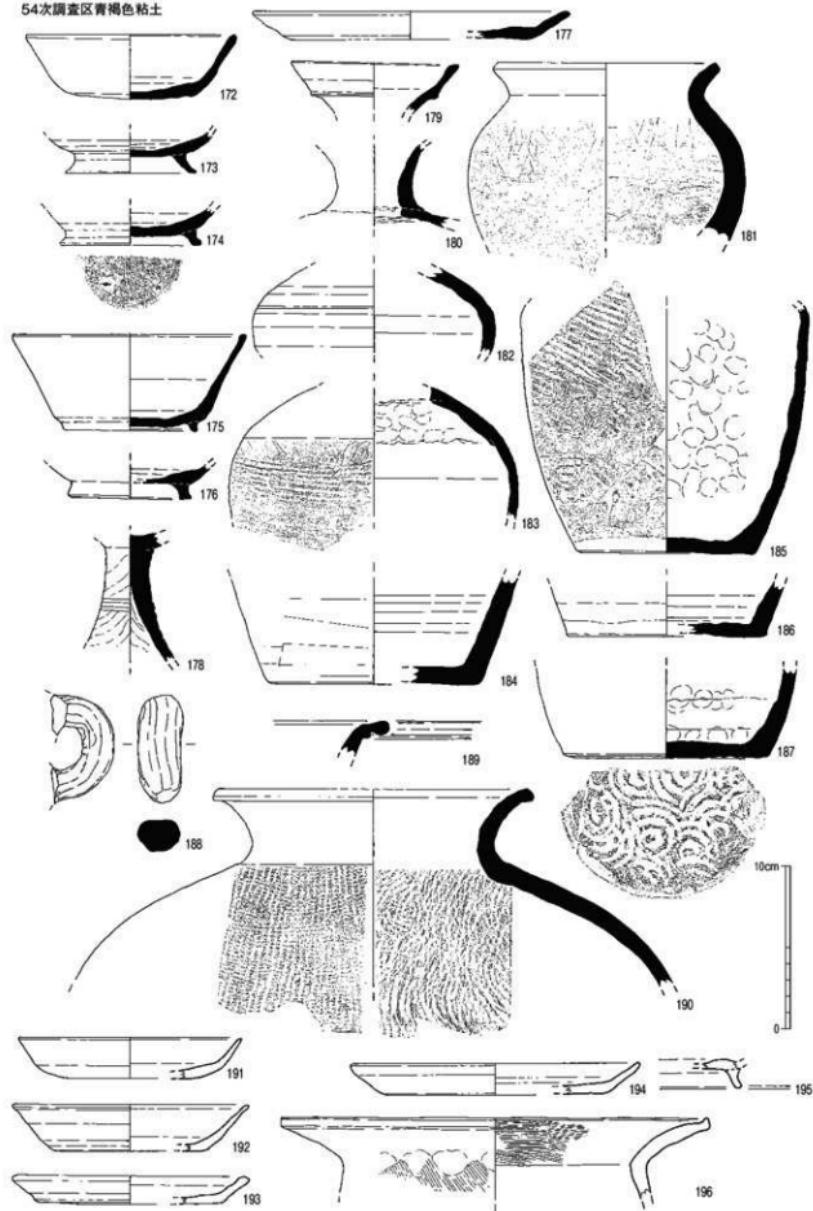


Fig.116 包含層等出土土器実測図⑧ (1/3)

126は体部が直線的に大きく開き、高台は短く開く。

土師器高坏（127） 筒状に長く伸びた高坏の脚柱部片である。下方には小さな円形の透かし孔がある。

土師器榠（128） 榺のものと思われる牛角把手である。水平に短く伸びている。整形は指整形による。

青磁壺（129） 長頸壺の口縁部片である。口縁下端部が断面三角形状に引き出され、把手を持つ。内面には2条の沈線が巡る。

白磁壺（130） 壺の下半部片で丸みを有した形状となる。高台部は断面三角形を呈し、高台豊付は露胎である。

54次調査区茶灰色土出土土器 (Fig.114, PL.53)

須恵器蓋（131～133） 131～133は天井部が水平近くにまで開き、低い器高となる蓋である。端部は短く屈曲または肥厚する。

須恵器坏（134） 立ち上がりが短く直線的に伸びる形状の坏である。

須恵器榠（135） 高台端部が内外に張り出し、接地部が面をなす形状の榠である。

須恵器壺（136・137） 136は口縁部があまり開かずに立ち上がり、端部外面に小さな三角突帯を巡らせる。137は肩が大きく張った器形となる。内面には同心円當て具痕、外面には平行タタキが見える。

54次調査区灰白色砂出土土器 (Fig.114・115, PL.53)

須恵器蓋（138～142） 138は天井部が水平近くにまで開き、口縁部付近が下方に尖る。139は天井部にやや丸みを有し、口縁部付近は一度水平にまで開いた後、強く下方に屈曲し、さらに端部が外方に開く特徴を有している。口縁部付近の形状は140も同様。141は口縁端部が若干肥厚する。142は鉢状の扁平な撮部を有する。

須恵器坏（143） 底部が平底で体部が外反氣味に開く坏である。底部と体部の境目は稜をなさない。

須恵器榠（144～146） 144は体部が直線的に開く。145も直線的な体部だが底部との境目には明瞭な稜をなさず丸味を帶びている。146は体部が外反し、高台は低い台形状を呈す。

須恵器壺（147～151） 147は小型の壺である。底部は尖底氣味で体部中位に最大径がある。頸部はあまり綿まらず直線的に立ち上っている。148は肩が丸く張り口縁部は短く直立する短頸壺である。端部は平坦面をなす。149は肩が張り、体部があまり丸みを帶びない器形となる。150は開き気味の高台となる。151は耳付壺である。外面の肩部には格子タタキが見られる。

須恵器壺（152～156） 152は緩やかに外反しながら開く瓣口縁部片。端部は上方にやや尖る。153は直線的に開き端部が丸く肥厚する。154は外面の口縁部下に三角突帯を巡らせる。体部の内面には同心円當て具痕、外面には格子タタキを行う。155は口縁部下に三角突帯、その下に二段の柳描き波状文を巡らせる。156は肩が丸く張った器形となる。

土師器皿（157・158） 157は皿の底部片である。底部と体部の境目は明瞭な稜をなさない。外底面には板状圧痕が残る。158は高台付皿。口縁端部が上方を向き、外側が面をなす。

土師器坏（159） 底部が丸みを帶び体部が直線的に開く坏である。

土師器榠（160） 体部が外反氣味に伸びる榠である。あまり開かず深みのある器形となる。

54 次調查區整地層

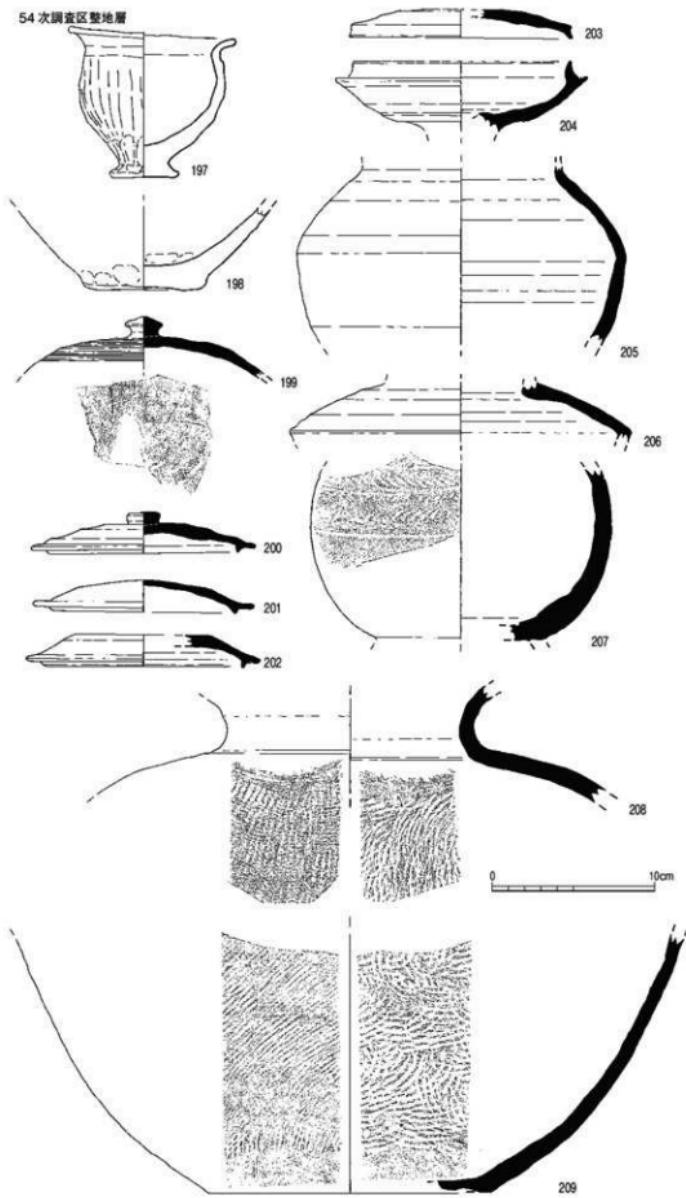


Fig.117 包含層等出土土器尖測圖⑨ (1/3)

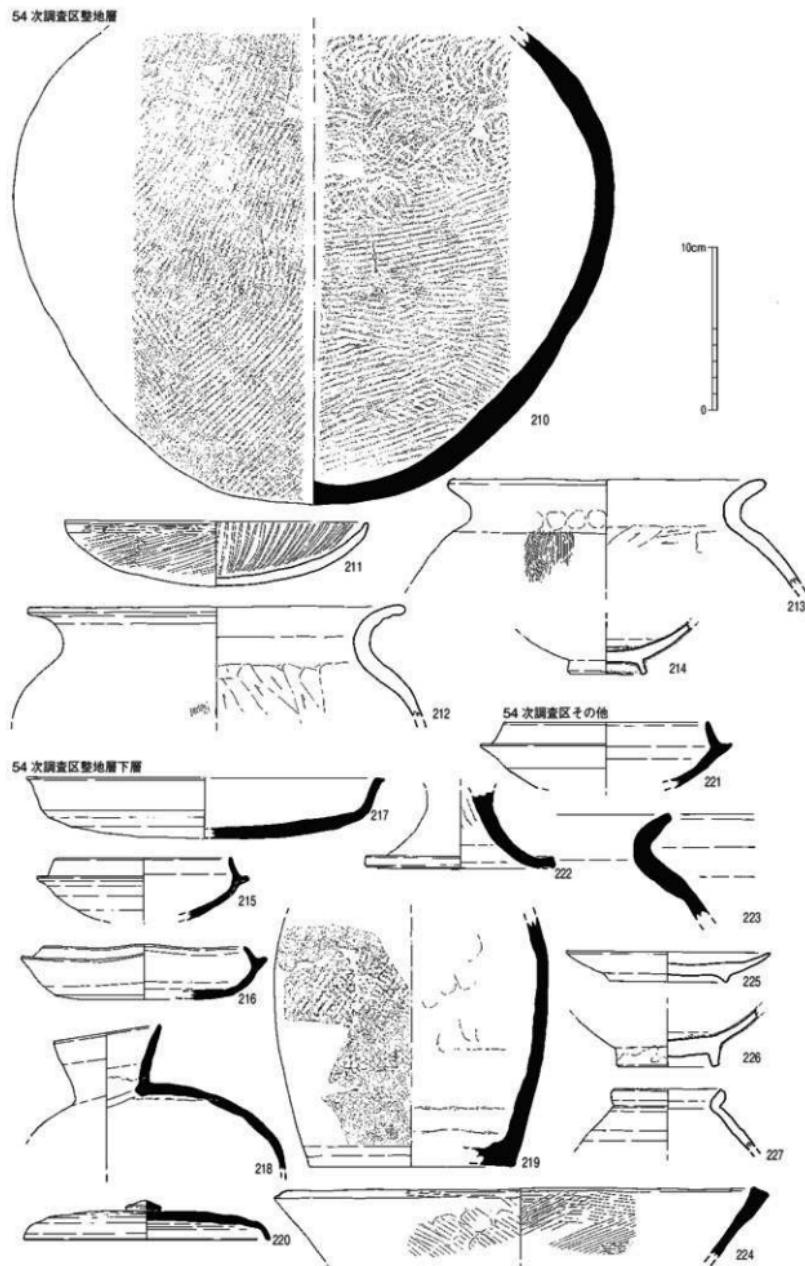


Fig.118 包含層等出土土器実測図⑩ (1/3)

土師器高坏（161・162） 161は口縁部が鈎状に長く伸びた高坏坏部で弥生土器か。162は付け根の径が大きく、脚部が直線的に開く形状の高坏脚部である。

土師器壺（163） 小型の壺である。底部は若干上げ底となり、体部は長胴気味となる。

瓦質土器鉢（164） 体部が直線的に開き、端部は丸味を帯びて上方を向く。内面にはハケメが見られる。

青磁碗（165） 内面に花文を片彫りする碗である。底部の器壁が厚い。

54次調査区青褐色粘土出土土器 (Fig.115・116, PL.53)

弥生土器壺（166） 平底となる壺底部片である。

須恵器蓋（167～171） 167・168は丸味を帯びた器形となる。口縁部は丸く收められる。169は端部の内側に短いかえりを有している。170・171は端部が下方に屈曲する。

須恵器坏（172） 底部がやや丸みを有し、体部は直線的に開く器形となる坏である。

須恵器椀（173～176） 173・174は高台部が外反氣味にやや長く開く器形となる。173は端部が尖り、174は丸く收められる。175は高台が断面三角形を呈し、体部は直線的にあまり開かずに伸びる。176は断面方形のやや高い高台となる。

須恵器皿（177） 体部が直線的に短く開く皿である。

須恵器壺（178） 柱部中央付近に2条の沈線が巡る高坏である。

須恵器壺（179～188） 179は二重口縁となる壺口縁部。口縁端部は水平面をなす。180は頸部が締まった形状となる。181は口縁部が短く外反する短頸壺である。口縁端部は面をなし、全体的に器壁が厚い。182は扁球形の体部となる壺。肩部に1条の沈線が巡る。183は丸味を有した器形となる壺。下半には平行タタキが見られる。184～187は平底となる壺底部。185は長胴となる。187は底面に同心円凸で具痕が残る。188は半環状の耳部。

須恵器壺（189・190） 189は口縁部が強く外折して端部が丸く肥厚する。外面の口縁部下には低い突帶が巡る。190は肩部が丸みを有し、口縁部は強く外反する。端部は素口縁となる。

土師器坏（191・192） 191は体部と底部の境目が丸く稜をなさない形状となる。192は体部が直線的に開き底部との境目が不明瞭ながら稜をなす。

土師器皿（193・194） どちらも体部が直線的に短く開く皿である。

土師器椀（195） 高台部がやや長く伸び、端部が外側に折れたような形状となる椀である。

土師器壺（196） 口縁部が外反しながら大きく開き、端部が上方へ尖る形状となる壺である。屈曲部内面は稜をなす。

54次調査区整地層出土土器 (Fig.117・118, PL.53・54)

弥生土器壺（197） 小型の壺である。底部はやや高い平底で裾が張る。体部中位に最大径を有し、口縁部は大きく外反する。外面はヘラナデ調整を行なう。

弥生土器壺（198） 平底で器壁がやや厚い底部となる。

須恵器蓋（199～203） 199は擬宝珠状の撮部で、天井部外面にはクシメが施文される。200は鉤状の撮部となるもので口縁端部内側には小さなかえりを有する。201・202も同じく小さなかえりを有する。203は口縁端部が下方へと尖り、外端部は凹面を形成する。

須恵器高坏（204） 立ち上がりが短く伸びる高坏坏部である。

須恵器壺（205・206） 205は肩があまり張らず最大径が体部の中位にある。内外面ナデ

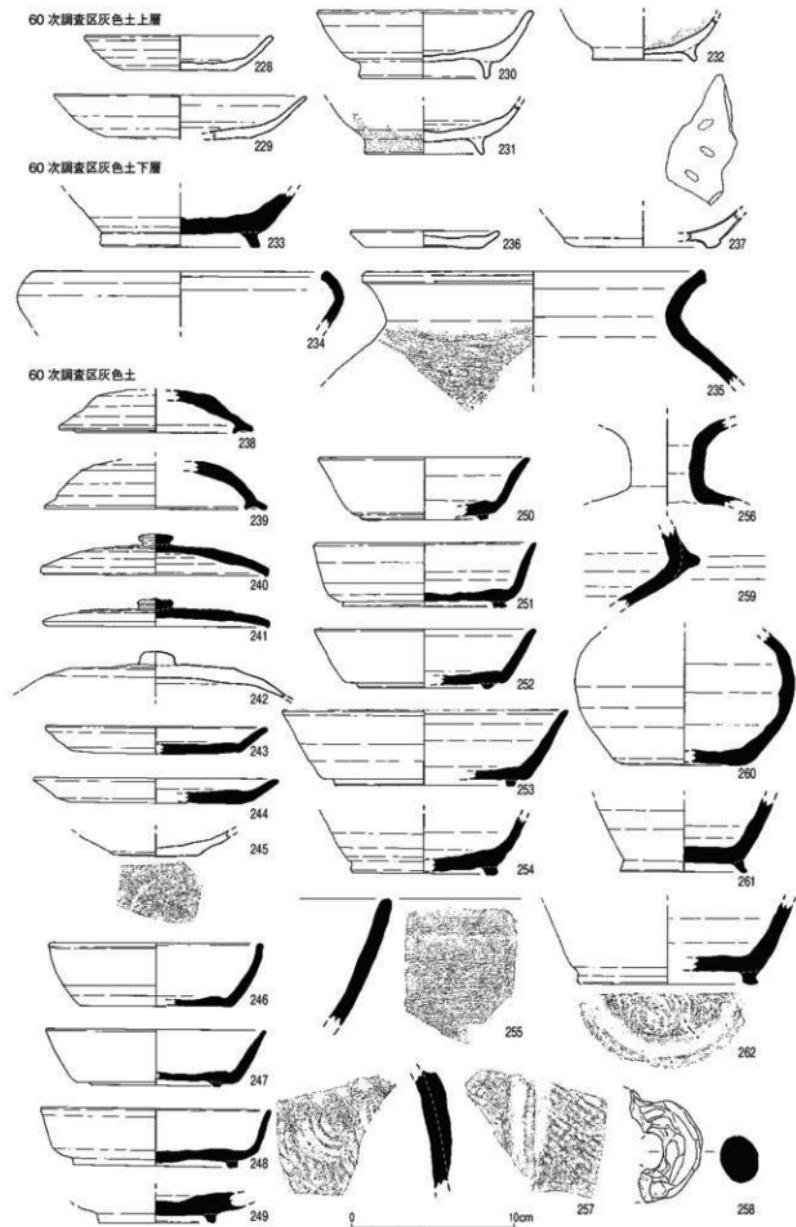


Fig.119 包含層等出土土器実測図⑪ (1/3)

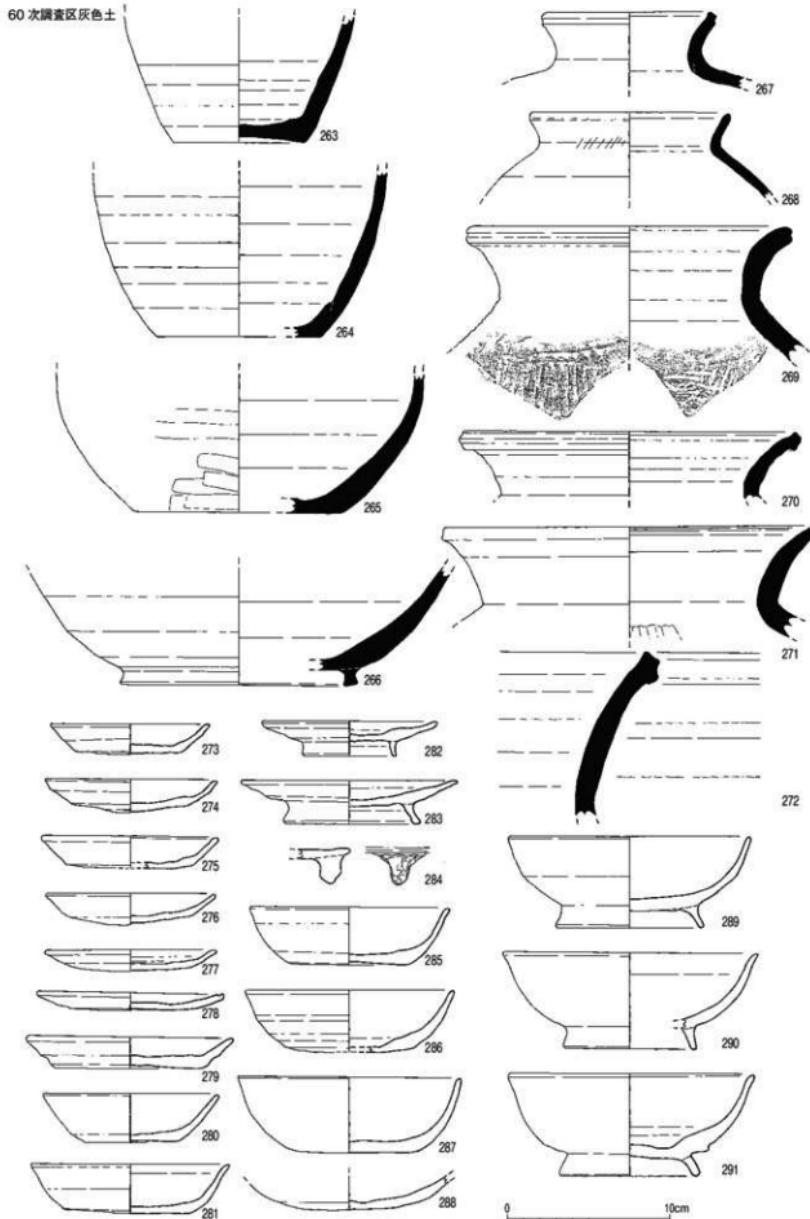


Fig.120 包含層等出土土器實測圖② (1/3)

調整を行う。206は肩部で屈曲し明瞭な稜をなす。

新羅土器壺（207）文様帯から新羅土器と思われる。球形に近い体部で肩部の沈線間に竹管文と綾杉文を巡らせる。器壁は厚い。
新羅土器壺

須恵器甕（208～210）208は肩が大きく張り、口縁部が強く外反する器形となる。209は体部下半が丸味を有した器形となる。内面同心円當て具痕、外面は平行タタキが見られる。210は底部が丸く体部の最大径は中位よりやや上にある。内面の上半は同心円、下半は平行當て具痕が見られる。外面は平行タタキ。

土師器皿（211）丸味を帯び浅い器形となる都城系の皿である。口縁端部は丸くおさめる。都城系皿内面には放射状の暗文、外面には横方向のヘラミガキが行われる。

土師器甕（212・213）212・213は肩が張り、口縁部が強く外反する器形となる甕。口縁端部は丸くおさめられる。

白磁碗（214）丸味を帯びた器形となる碗である。高台置付以外施釉される。

54次調査区整地層下層出土土器 (Fig.118, PL.54)

須恵器壺（215・216）どちらも立ち上がりが短く直線的に伸びる器形となる壺である。

須恵器高壺（217）体部が丸みを有し、口縁端部が水平面をなす形状となる高壺である。

須恵器平瓶（218）肩部は丸味を有し、口縁部は直線的に伸びている。内外面ともナデ調整を行う。

須恵器壺（219）底部が平底で体部はほとんど開かず直立気味に伸びる壺である。外面には格子タタキが見える。

54次調査区その他出土土器 (Fig.118, PL.54)

須恵器蓋（220）扁平な体部となる蓋である。口縁部は緩やかに下方へと曲がり端部は丸くおさめられる。

須恵器壺（221）短く直線的に伸びる立ち上がりを有した壺である。

須恵器高壺（222）低脚の高壺脚部である。裾部は水平近くまで大きく開き、端部は下方へとつまみ出される。

須恵器甕（223）口縁部が短く外反する甕。端部は面をなす。

須恵器鉢（224）口縁部が若干肥厚し、端部が面をなす鉢。内外面ハケメ調整が行われる。

土師器皿（225）断面三角形の低い高台を有し、口縁部は薄く尖る皿である。

白磁碗（226）高台外面から内側が露胎となる白磁碗である。

陶器壺（227）口縁部が短く開き若干肥厚する褐釉陶器壺である。

60次調査区灰色土上層出土土器 (Fig.119, PL.54)

土師器皿（228）体部がわずかに内湾しながら開く皿である。

土師器壺（229）体部が内湾しながら開き、底部と体部の境目が明瞭な稜をなさない壺である。

土師器椀（230～232）230は体部が直線的に短く伸びる浅い器形の椀。231はやや高い断面三角形の高台を有す。外面には油煙が付着する。232は断面三角形の高台を有した小型の椀。内面には油煙が付着する。

60次調査区灰色土下層出土土器 (Fig.119, PL.54)

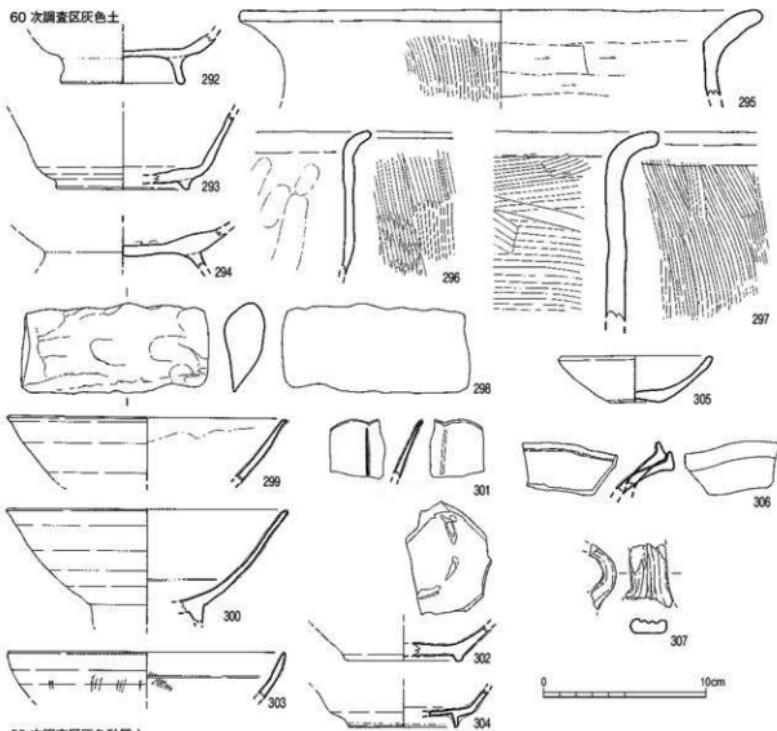


Fig.121 包含層等出土土器実測図⑩ (1/3)

60 次調查區灰色砂質土

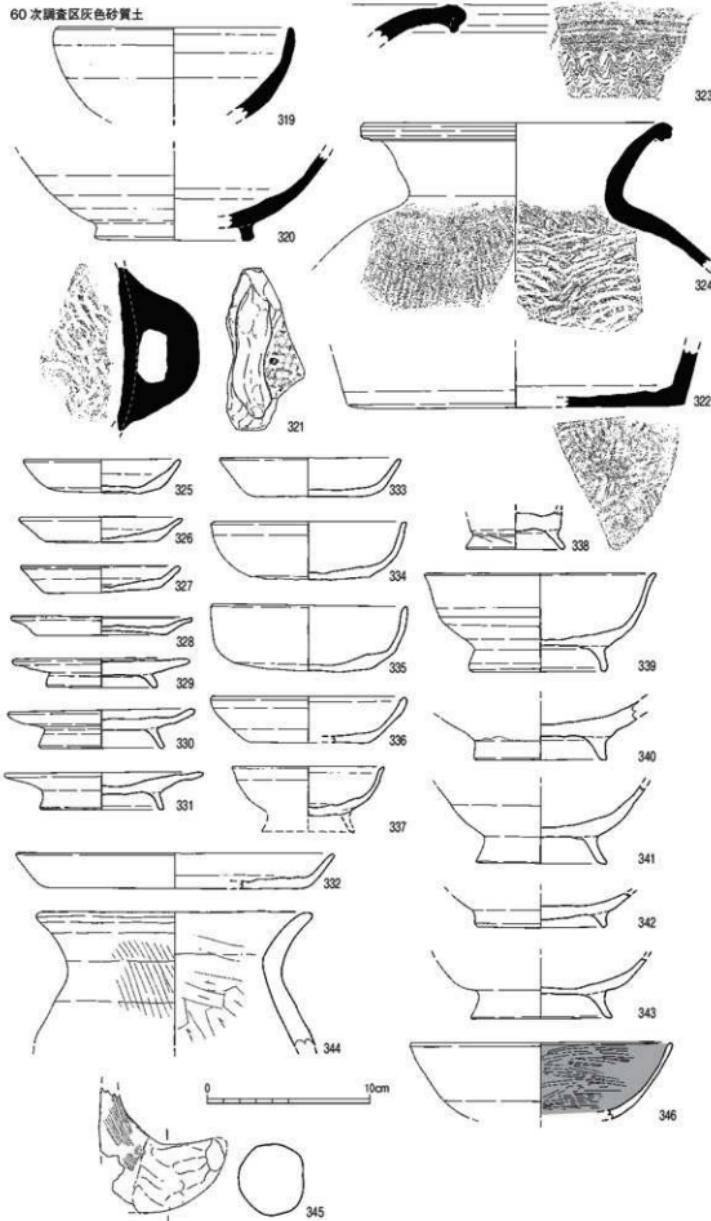


Fig.122 包含層等出土土器實測圖⑩ (1/3)

須恵器椀（233） やや大型となる椀である。高台は若干開き気味に貼付されており端部はシャープである。体部は直線的に開いている。

須恵器鉢（234） 口縁部下で強く内湾する鉢である。端部は面をなす。

須恵器甕（235） 口縁部が外反し端部が上方を向く。肩部外面には格子タタキが見られる。

土師器皿（236） 底部ヘラ切りの小皿である。底部と体部の境には明瞭な稜を有し口縁部は丸く收められる。

青磁碗（237） 越州窯系青磁碗である。高台は低い台形状を呈し、内端部で接地する。内面見込みには目跡が残る。

60次調査区灰色土出土土器 (Fig.119 ~ 121, PL.54・55)

須恵器蓋（238 ~ 242） 238・239は口縁部内面に小さなかえりを有する蓋である。天井部は丸味を帯びる。240・241は器高が低い形状で、どちらも端部は下方へ尖る。242は焼成が土師質に近い。撮部は断面方形を呈す。

須恵器皿（243 ~ 245） 243・244は体部が直線的に大きく開く。245は体部が大きく開き、底部と体部の境目が明瞭な稜をなす。

須恵器壺（246） 底部が平坦で体部はわずかに内湾しながら開く。口縁端部は丸味を有す。

須恵器椀（247 ~ 254） どれも体部はあまり開かず直線的に伸びており、底部と体部の境目が明瞭である。高台部は低く断面台形を呈す。

須恵器鉢（255） 深みのある形状の鉢である。口縁部は丸く收められる。

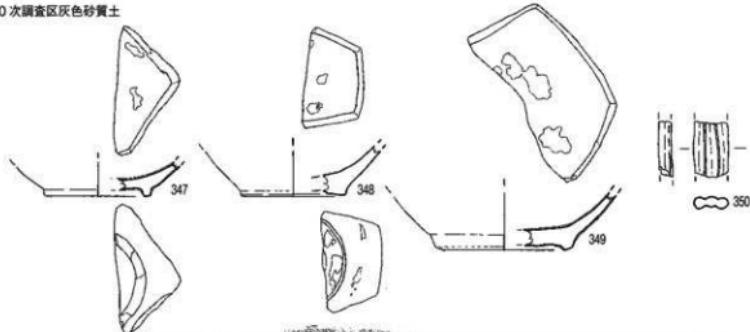
須恵器壺（256 ~ 266） 256は壺の頸部片である。付け根付近で強く締まっており、頸部は細い筒状を呈す。257は縦長の小さな耳部を有している。258は半環状の耳部である。259は大きな三角突帶状をなす体部片である。260はわずかに上げ底の底部で、体部は丸く球形に近い形状となる。261は開き気味の小さな高台を有し、体部は直線的に伸びている。262も体部が直線的に伸びている。外底面には同心円当て具痕がある。263は平底で体部は直線的に伸びている。内外面ナデ調整を行う。264も平底だが263と比較するとやや丸みをもって立ち上がっている。265は平底で丸みを帯びた器形となる。内面はナデ、外側の下方には横方向のヘラナデが確認できる。266は有高台の壺底部片。高台は接地部が面をなす。体部は丸味を帯びて大きく開いている。内外面ナデ調整を行う。

須恵器甕（267 ~ 272） すべて口縁部片である。267は頸部が強く締まった器形となる。口縁部は強く外反し口縁部上端は面をなす。外端部は強いヨコナデを加えて凹線状に仕上げる。268は口縁部が直線的に開き、端部を丸く收める。269は口縁部が緩やかに開き、端部には沈線を1条加える。270は口縁端部を上下に拡張させる。271は口縁端部が上方に尖る。272は大型品。口縁部は緩やかに外反し、端部を肥厚させる。強いヨコナデで端部は突帶状の稜をなす。

土師器皿（273 ~ 284） 273 ~ 276は体部が内湾気味に開き底部との境目が稜をなさない。277は体部が外反気味に開いており平たい形状となる。279 ~ 281は体部が直線的に開き、やや深い形状となる。282・283は高台付皿である。体部は大きく広がっており立ち上がりがない。284は三脚皿の脚部片。皿の口縁部付近に貼付されていたようである。

土師器壺（285 ~ 288） 285 ~ 287は底部が平底で体部は内湾しながら開く。口縁端部は

60次調査区灰色砂質土



60次調査区黄灰色土

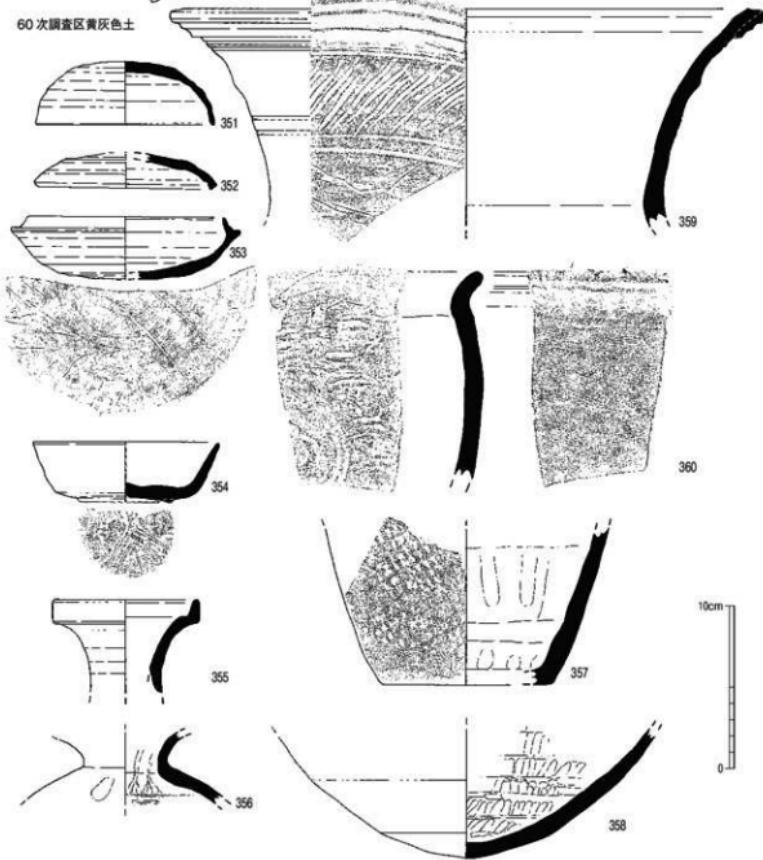


Fig.123 包含層等出土土器実測図⑮ (1/3)

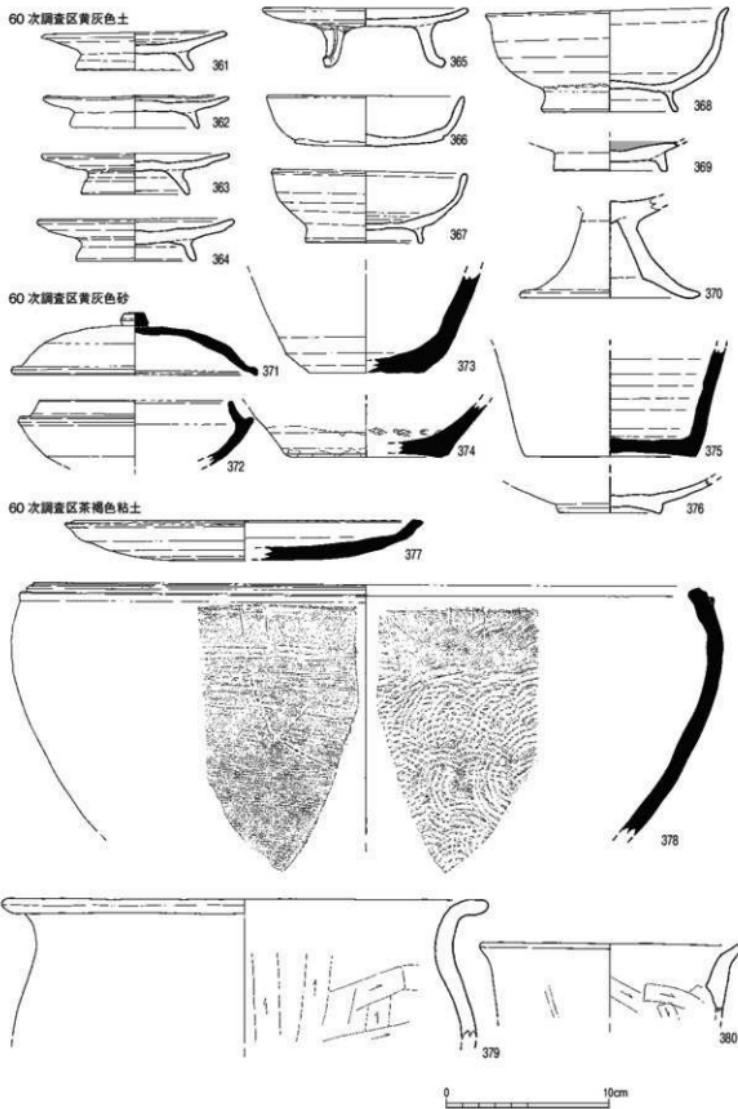


Fig.124 包含層等出土土器実測図⑩ (1/3)

丸く収める。288は底部がやや丸みを帯びた器形となる。

土師器椀（289～294） 289～291は高台部が直線的に開き端部を丸く収めている。体部は内湾しながら開いており、口縁部はわずかに外反する。292は高台があり開かずに高く伸びる。293は断面三角形状の低い高台を有し、体部は外反気味に開いている。294は高台部が長く開くようだが欠失している。

土師器甕（295～297） 295は屈曲部内面に稜を有す。口縁端部は丸く収める。内面は横ヘラケズリを行う。296は頸部が締まらない器形で口縁部は緩やかに外反する。端部は丸く収める。297は頸部が締まらず口縁部は大きく外反する。内面には横方向のハケメ調整を行う。

土師器甕（298） 正確な形状は不明だが土師質焼成の甕底部として報告する。全面指整形。

白磁碗（299・300） 299・300は口縁端部が外側に尖り、上端が面をなす碗である。298は内面見込みに沈線を1条巡らせる。

青磁碗（301～304） 301・302は越州窯系青磁碗。301は口縁部が輪花となる。302は内面見込みに目跡が残る。303は同安窯系青磁碗で内外面にハケ状工具による文様が見られる。304は底部と体部の境目が稜をなす。置付は露胎となる。

陶器碗（305） 濱戸系のいわゆる山茶碗だと思われる。透明感のない褐色の釉が内外面に施釉される。調整は内外面ナデ。

陶器壺（306） 灰釉陶器で壺の口縁部になると思われる。口縁部は大きく開き、端部は屈曲して上方へと尖る。内面のみ施釉され外面は露胎となる。

陶器水注（307） 勾軸水注の把手部もしくは壺の耳部であろう。外面に三条の凹線がある。 陶器水注
60次調査区灰色砂質土出土土器 (Fig.121～123, PL.55)

須恵器蓋（308～310） 308は天井部が平坦で体部下半が開かず垂直に伸びる壺蓋である。309は天井部が丸みを有した器形となる蓋で端部は丸く収める。天井部外面にヘラ記号がある。310は端部が下方に肥厚させたような形状となる。

須恵器壺（311～316） 311～315は短い立ち上がりを有した壺である。312と315は底部外面にヘラ記号がある。316は底部が平坦で体部が直線的に開く形状となる壺である。

須恵器椀（317） 高台外端部が外側に尖った形状となる。体部は浅く外反気味に伸びている。

須恵器皿（318） 底部がやや丸みを有しており、体部は直線的に短く伸びる。

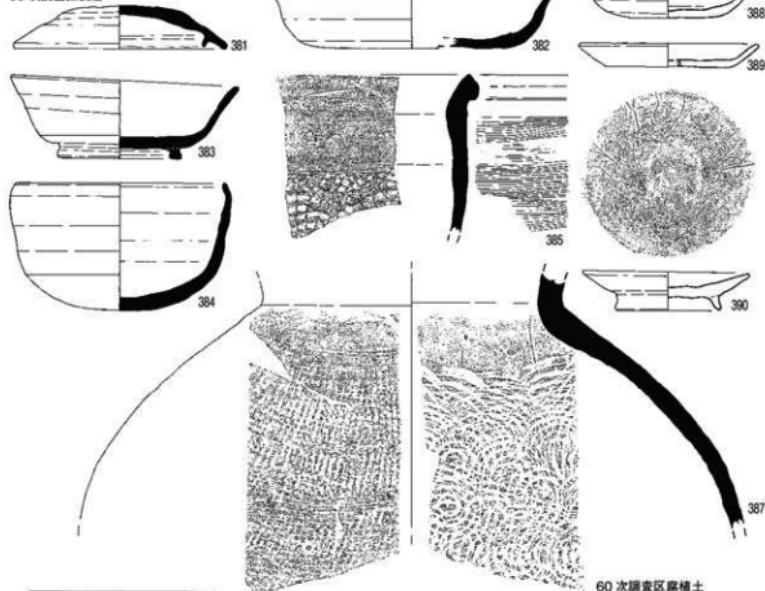
須恵器鉢（319） 丸い体部を有し口縁部が素口縁となる鉢である。

須恵器壺（320～322） 320は有高台の壺底部片。体部は丸味を有しながら開いている。321は半環状の把手。内面には同心円當て具痕、外面には格子タタキが見られる。322は平底で体部あまり開かない器形となる。底面は同心円當て具痕が認められる。

須恵器甕（323・324） 323は口縁部が大きく開いた形状で、外端部を強くつまみ出して突端状にする。外面には柳描き波状文を巡らせる。324は頸部がよく締まった器形で口縁部が外反しながら開き、口縁端部は肥厚する。

土師器皿（325～332） 325～327は体部が内湾気味に開き底部との境目に稜を有さない形状となる。328は体部が外反気味に開き底部との境目が稜をなす。329～331は高台付皿である。329は低い高台となる。332は大型の皿である。体部は直線的に短く開き端部を丸くおさめる。

60 次調査区炭層



60 次調査区灰植土

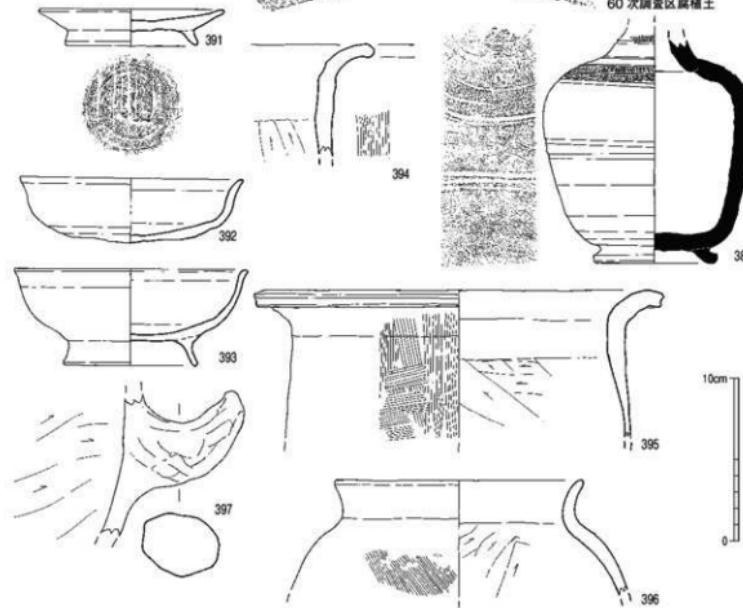


Fig.125 包含層等出土土器実測図② (1/3)

土師器壺（333～336） 333は体部が外反気味に開く。334・335は体部が直立気味に伸びており深い器形となる。336は口縁部が若干肥厚する。

土師器椀（337～343） 337・338は小型の椀。339は体部下半が丸みを有して開き、上半は外反する。高台部はあまり開かず端部を丸くおさめる。341は高台部が外反気味にやや長く伸び、接地部は面をなす。342は断面三角形状の高台部となる。343は341と同じように高台部がやや長く伸びた器形となる。

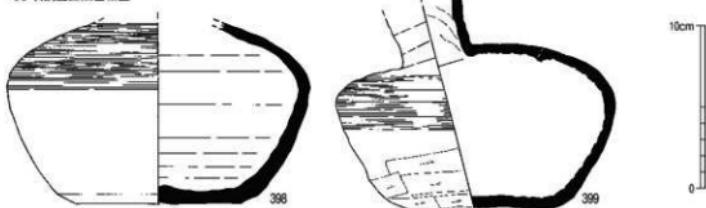
土師器甕（344） 肩部が直線的に内傾し、口縁部が緩やかに開いた甕である。内面はヘラケズリ、外面はハケメ調整を行う。

土師器瓶（345） 土師器の牛角把手。恐らく甕であろう。整形は指整形による。

黒色土器椀（346） 黒色土器A類の椀。内面に緻密なヘラミガキが確認される。

青磁碗（347～349） 347～349は越州窯系青磁碗である。347は高台が断面台形状を呈し、

60次調査区黒色粘土



60次調査区青灰色粘土

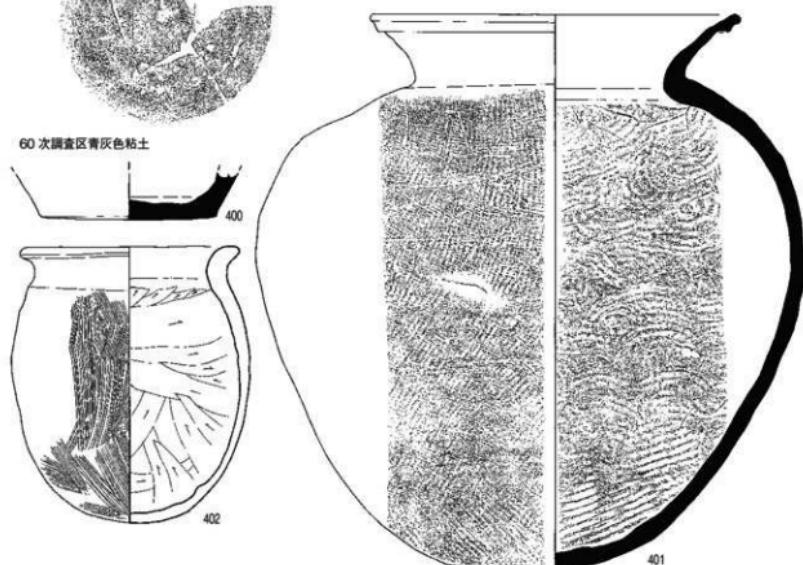


Fig.126 包含層等出土土器実測図⑧ (1/3)

内面見込みと高台置付に目跡が残る。348は低い削り出し高台を有し高台外側で接地する。内外面にやはり重ね焼きの目跡が残る。349も低い高台の内端部で接地する。内面に目跡が残る。

青磁水注(350) 越州窯系青磁水注の把手部である。両面ともに2条の凹線を施文する。

60次調査区黄灰色土出土土器 (Fig.123・124, PL.55)

須恵器蓋(351・352) 351は丸い天井部となる蓋である。352は低い天井部となる器形で口縁端部は下方に尖る。

須恵器杯(353) 口縁部に短い立ち上がりを有した杯である。外面にヘラ記号が見られる。

須恵器椀(354) 小型の椀である。屈曲部からかなり内側に小さな高台が貼り付けられる。体部は直線的に開く。外底面にはヘラ記号が見られる。

須恵器壺(355～357) 355は二重口縁となる壺である。頸部は細く、上半は大きく開く。口縁部は短く直立し、屈曲部外面は明瞭な稜をなす。356は肩が丸く張り、頸部が強く締まった器形となる。頸部は付け根から大きく外反している。357は平底の底部となる壺である。体部はあまり開かず立ち上がる。外面には格子タキが認められる。

須恵器鉢(358) やや尖った底部となり体部は丸味を有して開いている。内面にはヘラミガキが確認される。鉄鉢形の器形となるだろう。

須恵器甕(359～360) 359は口縁部が大きく開く大型の甕。端部は外側に肥厚し稜を形成する。頸部中位には2条の沈線を巡らせ、口縁部との間には斜方向の線刻を巡らせる。360は頸部が締まらず口縁部が短く外反する器形で鉢状となる可能性もある。端部は丸く收められる。内面同心円當て具痕、外面は細かい平行タキ。

土師器皿(361～365) 361～364は高台付皿である。高台は直線的にやや長く開き、体部は立ち上がりがなく大きく開いた器形となる。365は三足皿である。脚部は長く、端部が外側に折れた形状となる。体部は立ち上がりがなく大きく開いた器形となる。

土師器杯(366) 体部が内湾しあまり開かない器形となる杯である。

土師器椀(367～369) 367は体部が内湾しながら開く浅い器形となる。高台はあまり開かず短く立ち上がり、端部は丸く收められる。368は体部が丸みを有し口縁部はわずかに外反する。高台は若干開いた形状となる。369は断面台形に近い低い高台となる。内面丹塗り。

土師器高环(370) 脚部の付け根から裾部にかけて緩やかに開き、内面には明瞭な稜を有す。

60次調査区黄灰色砂出土土器 (Fig.124)

須恵器蓋(371) 天井部がやや丸みを有した器形となる蓋である。口縁部付近は大きく外側に開き、端部は下方に尖る。

須恵器杯(372) 立ち上がりが内傾しながら短く伸び、端部は薄く仕上げられる杯である。

須恵器壺(373～375) 373～375は平底の壺底部片である。373は体部が内湾気味に立ち上がり、あまり開かない器形となる。体部の底部近くは横方向のヘラケズリを行う。374は体部が外反気味に開く。375は底部と体部の境に明瞭な稜を有し、体部はあまり開かない。

緑釉陶器碗(376) 軸が完全に落ちているが緑釉であろう。断面三角形の低い削り出し高台を有す。体部は大きく開き、内面にはヘラミガキが確認される。色調は暗灰色を呈しており焼成は須恵器に似る。

60次調査区茶褐色粘土出土土器 (Fig.124, PL.55)

60次調査区その他

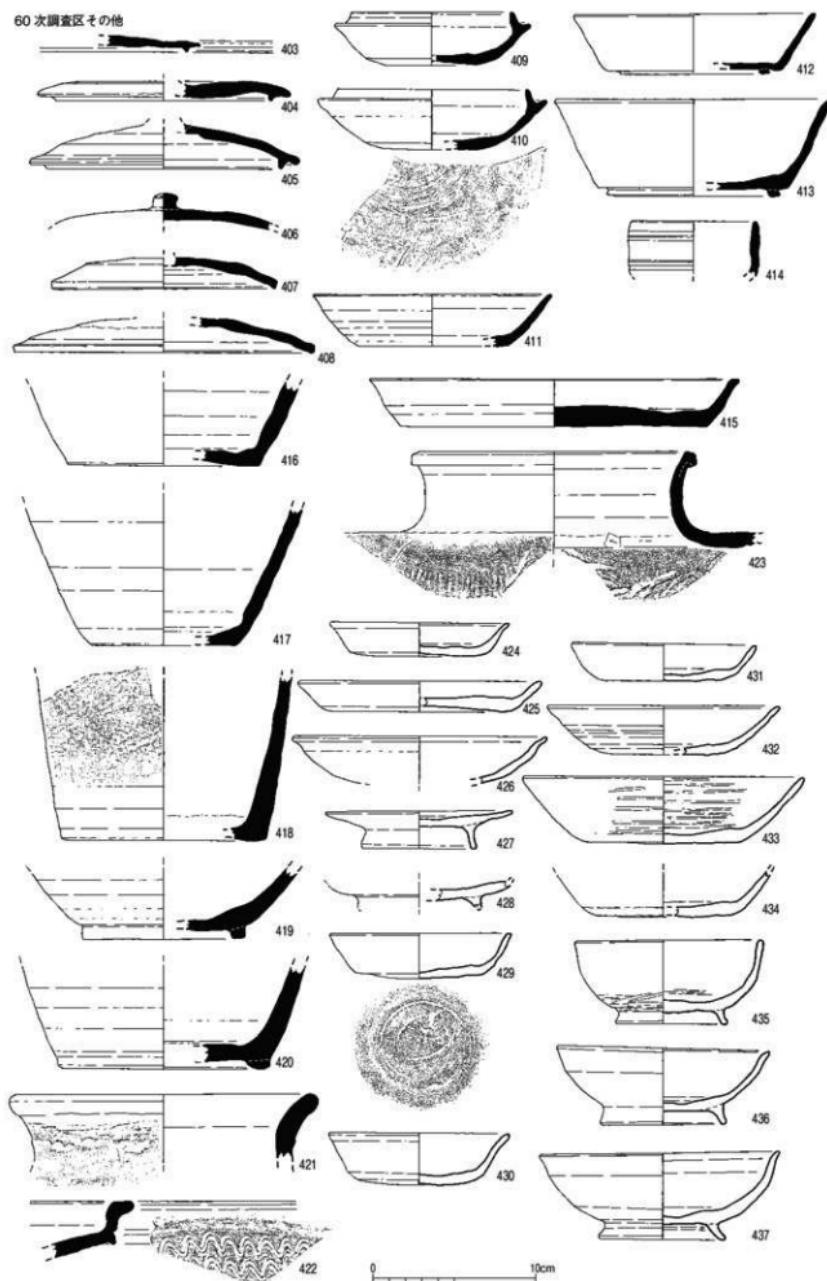


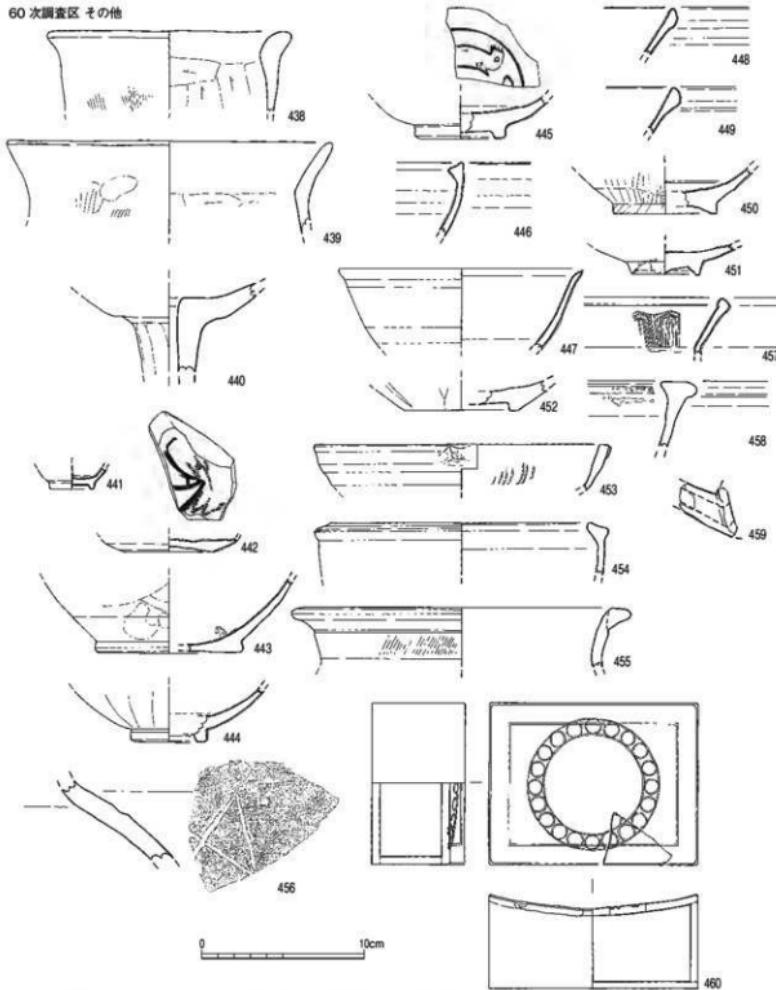
Fig.127 包含層等出土土器実測図(1/3)

須恵器高環(377) 体部から口縁部付近にかけて大きく開き、口縁端部を外側につまみ出して尖らせる高環である。

須恵器鉢(378) 体部下半が直線的に開き、上半が強く内湾して口縁部へと至る形状の鉢である。口縁端部は不明瞭な面をなし、外側には一条の三角突帯を巡らせる。内面は同心円当て具痕、外面は細かい平行タタキ後、下半を中心にカキメ調整を行っている。

土師器甕(379・380) 379は頸部がやや内傾し、口縁部が大きく外反して水平近くにまで開く。端部は丸く收められる。380は頸部が縮まるず口縁部は短く外反する。口縁部下は内

60次調査区 その他



側に肥厚しており、体部との境目には明瞭な稜を有している。

60次調査区炭層出土土器 (Fig.125, PL.55)

須恵器蓋 (381) 口縁部内面に短いかえりを有した蓋である。

須恵器坏 (382) 底部が平底で体部が外反気味に開き、底部と体部の境目は稜をなさない形状の坏である。

須恵器椀 (383) 接地部が平坦面をなす高台を有し、体部は外反気味に開く椀である。

須恵器鉢 (384・385) 384は体部が半球形で口縁部が短く内湾する鉢である。口縁端部は丸く收められる。外面の下半はヘラケズリを行う。385は頸部が締まらず直立し、口縁部は短く外反して外側に若干肥厚させる。体部内面は格子タタキ、外面は横方向のカキメ調整。

60次調査区腐植土出土土器 (Fig.125, PL.55)

須恵器壺 (386) 端部が大きく開いた高台を有し、体部は直線的に伸びており肩が張った器形となる壺である。頸部は付け根から口縁部に向かって内傾している。頸部と肩部には複数条の沈線を施し、その間に櫛描き波状文を施す。体部下半はヘラケズリを行う。

須恵器甕 (387) 丸くあまり肩が張らない器形の甕。頸部付け根付近の器壁が厚くなる。

土師器皿 (388～391) 388・389は体部が内湾気味に大きく開き、底部との境目には明瞭な稜を有さない皿である。390・391は高台付皿である。高台部は直線的に短く開いており、体部は立ち上がりを有さない。390は内面にヘラ状工具による雑な円を描く。391は高台内面のヘラ切りと板状直痕が明瞭に残る。

土師器坏 (392) 底部が丸底で体部が外反気味に開く坏である。

土師器椀 (393) 体部が丸く口縁部付近が若干外反する。高台部は直線的にやや長く伸びる。

土師器甕 (394～396) 394～396は甕口縁部片である。394は頸部が締まらず口縁部が大きく外反する。395も頸部が締まらない器形となる。体部と比較して口縁部は器壁が厚く、口縁端部は横ナデを加えて凹線状に仕上げる。396は肩が丸みを帯び口縁部はあまり開かない。

土師器瓶 (397) 瓶等の把手である。

60次調査区黒色粘土出土土器 (Fig.126, PL.55・56)

須恵器壺 (398) 壺体部片である。底部は平底で体部は中位よりやや上方に最大径があり、肩が張った器形となる。肩部にはカキメを施す。底部にはヘラ記号が認められる。

須恵器平瓶 (399) 肩が張った器形となる平瓶である。頸部はあまり開かずに伸びている。体部の上半にはカキメ、下半はヘラケズリ調整を行っている。

60次調査区青灰色粘土出土土器 (Fig.126, PL.56)

須恵器壺 (400) 平底の壺底部片である。内面ナデ、外面には自然釉が認められる。

須恵器甕 (401) 完形に復元される甕である。体部は中位よりやや上に最大径があり、口縁部は外反気味に開く。外面の口縁部下には三角突帯を巡らせる。体部と比較すると口縁部付近の器壁が薄くなる。内面同心円當て具痕、外面格子タタキを行う。

土師器甕 (402) 長胴となる甕である。底部は丸底で頸部はあまり締まらず、口縁部は短く外反する。口縁端部は丸く收められる。器壁は体部と比較して口縁部付近が厚くなる。内面ヘラケズリ、外面縦ハケメ調整を行う。

第60次調査区その他出土土器 (Fig.127・128, PL.56・57)

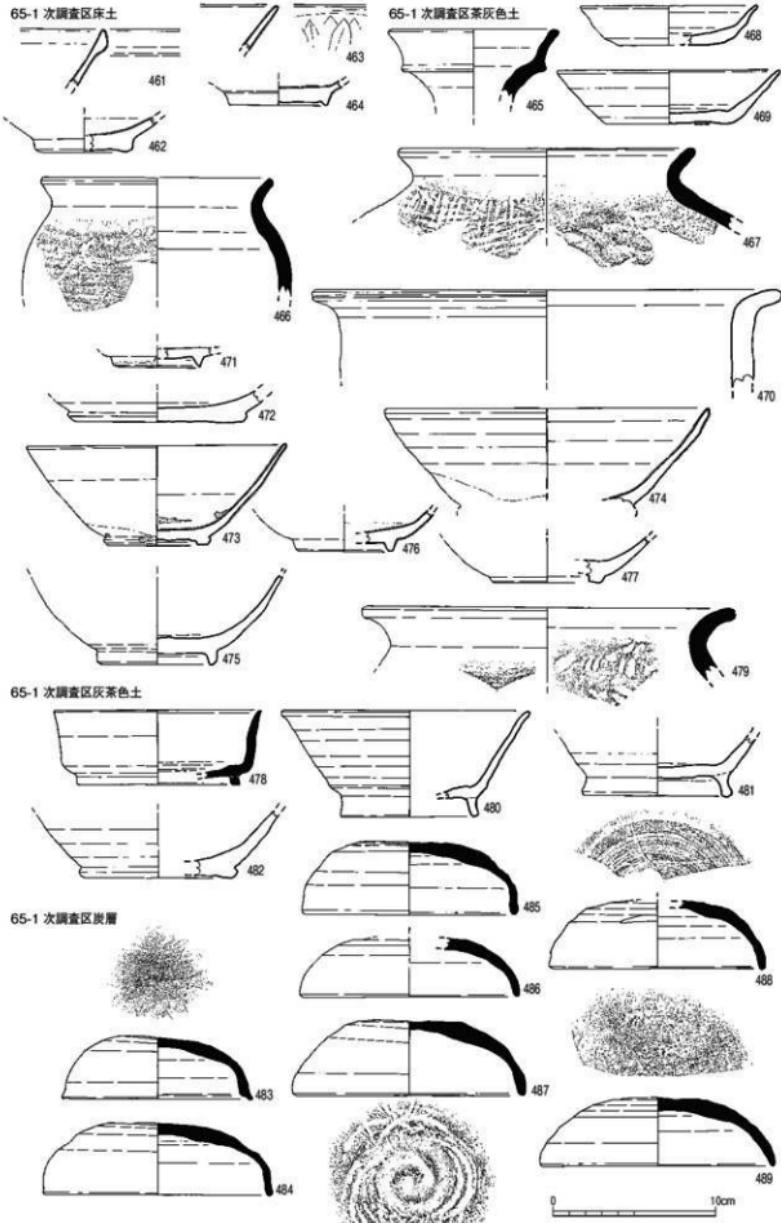


Fig.129 包含層等出土土器実測図② (1/3)

65-1 次調査区炭層

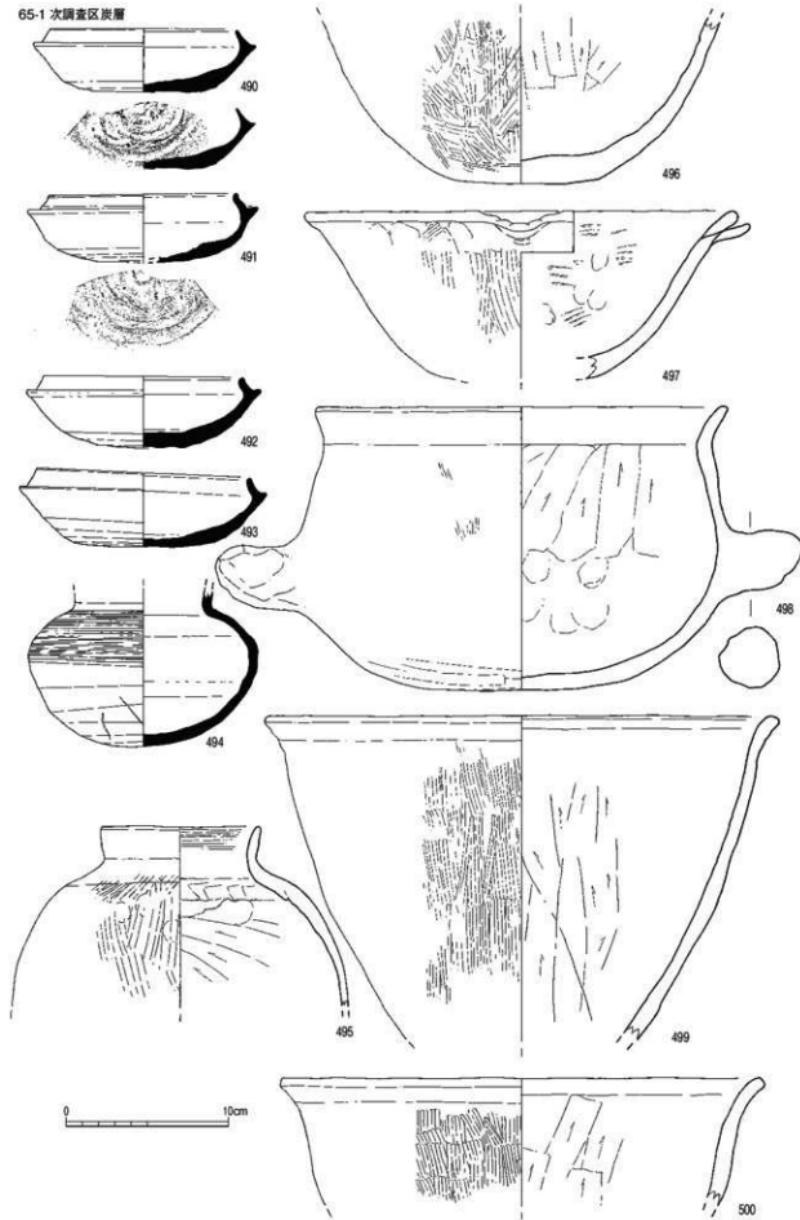


Fig.130 包含層等出土土器実測図② (1/3)

須恵器蓋（403～408） 403～405は口縁部内面にかえりを有した蓋である。403は水平近くまで開き、かえりは小さな突帶状を呈す。405はかえりがやや長く伸びた形状となる。406は高めの撮部を有した蓋。407・408は天井部が平坦で口縁端部は下方に短く折れる。

須恵器壺（409～411） 409・410は短い立ち上がりを有するもの。410の外面にはヘラ記号が認められる。411は平底で体部が直線的に開く。

須恵器榠（412・413） 412・413はどちらも体部が直線的に開き、底部との境目に明瞭な稜を有す。高台部は低い台形状を呈す。

須恵器鉢（414） 小型の鉢である。体部上半が直立し、そのまま口縁部へと至る。口縁端部は丸くおさめられる。外面には複数条の沈線を巡らす。

須恵器皿（415） 体部がわずかに内湾しながら短く開き、口縁端部は外側につまみ出して薄く尖らせた形状の皿である。

須恵器壺（416～420） 416～418は平底の壺底部片である。416・417は体部があまり開かず直線的に伸びる。418は体部がほとんど開かず筒状を呈す。外面の下端は横方向のヘラケズリ、上方は格子タタキを行っている。419・420は高台付壺の底部片である。どちらも高台は断面台形状の低いものである。419は体部が開く。420はあまり開かずに立ち上がる。

須恵器壺（421～423） 421は頸部が締まらず口縁部が緩やかに外反する。端部は丸く收められる。外面の口縁部下にはタタキ工具端部の痕跡が強く残る。422は口縁部がいったん直立し、端部付近で水平に短く折れている。外面口縁部下には大きな波状文を施文する。

423は肩部が水平にまで張り、頸部は直立気味に立ち上がり、口縁部付近がゆるく外反する。口縁端部は肥厚させている。

土師器皿（424～428） 424は体部が外反気味に開き、やや深みのある形状の小皿。425は平底で体部が外反気味に短く開く。426は体部が丸みを有し口縁部付近が外反する。内外面ともヘラナデを行う。427・428は高台付皿である。

土師器壺（429～434） 429・430は底部が丸みを有し体部は直線的に伸びており、やや深みのある器形となる。431は体部が内湾気味に開く。432・433は体部が直線的に大きく開いた器形となる。433には横方向のヘラミガキが認められる。434は平底の底部となる。

土師器榠（435～437） 435は高台端部がやや外側に開き、体部は丸く深みのある器形となる。内外面の下方にヘラミガキが認められる。436は体部が内湾しながら開く。437は口縁部付近がわずかに外反し、端部は薄く尖り気味に仕上げられる。

土師器壺（438・439） 438は頸部が締まらず口縁部がわずかに外反する形状の壺。口縁部付近は内側に厚く肥厚する。439は頸部が若干締まり、口縁部は直線的に開く。

土師器器台（440） 高环状の脚柱部を有し、体部と柱部を貫通する穿孔を行うものである。調整はナデを行う。

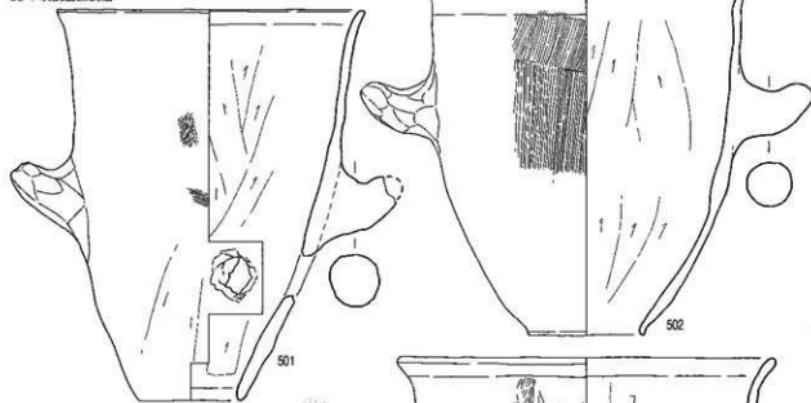
青磁小碗（441） 体部はあまり開かずに立ち上がる器形となる小碗である。

青磁皿（442） 内面に櫛描き文を施文する皿である。

青磁碗（443～445） 443は越州窯系青磁碗である。高台部は内面の削り出しが弱く、平底状になる。444は外面に蓮弁を配した青磁碗。445は内面見込みにヘラ描き文様を施文する。

青磁鉢（446） 丸く深みのある器形の鉢である。口縁部は内側に三角状に肥厚する。

65-1 次調査区炭層



65-1 次調査区黄灰色土

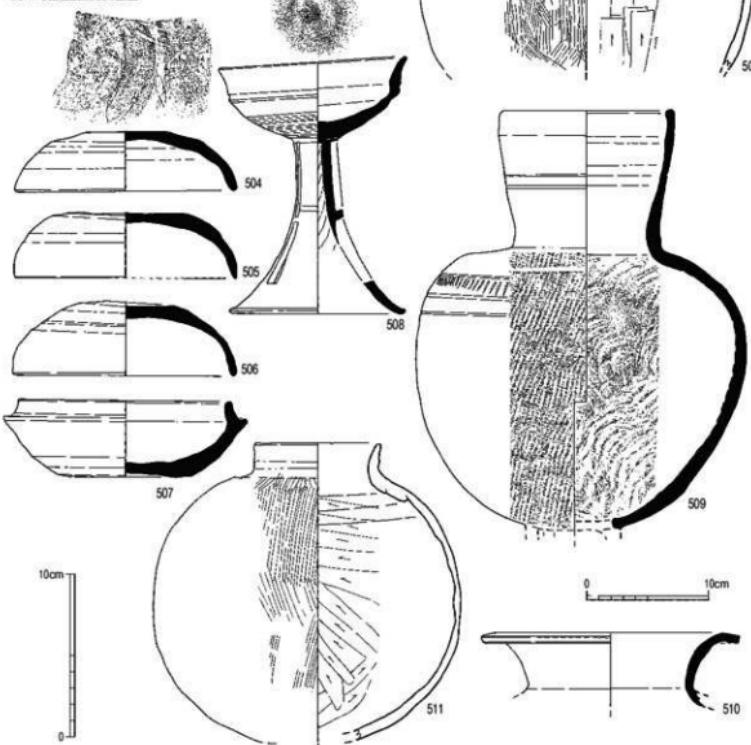
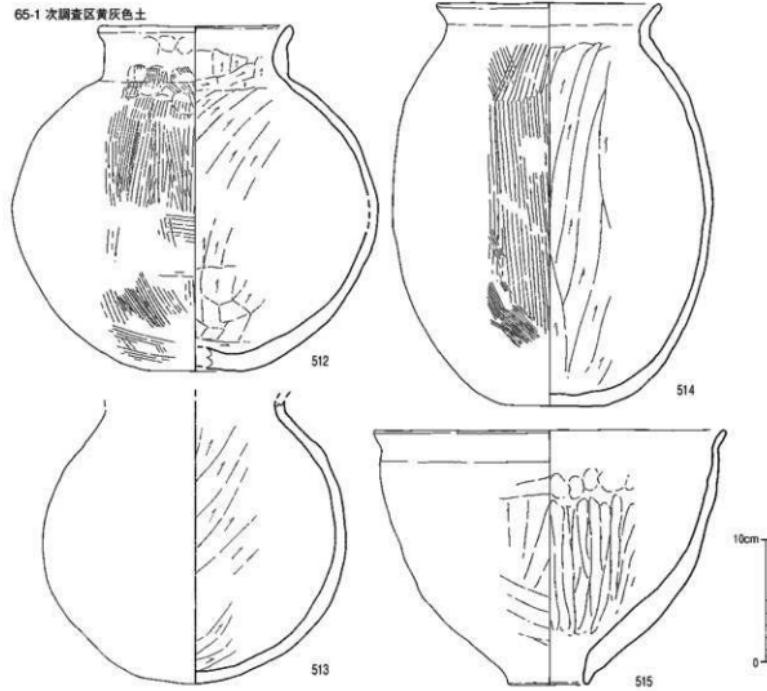


Fig.131 包含層等出土土器実測図㉓ (504 ~ 508 : 1/3, 他: 1/4)

65-1 次調査区黄灰色土



65-1 次調査区その他

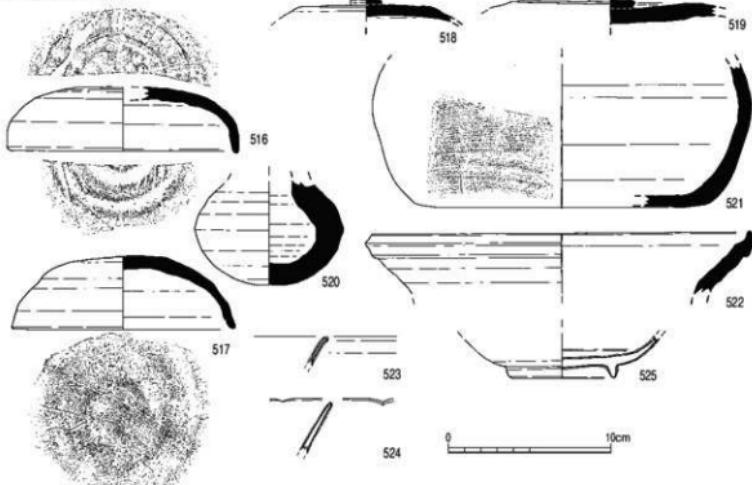


Fig.132 包含層等出土土器実測図2 (512～515: 1/4, 他: 1/3)

白磁碗（447～450）447は端部がわずかに外反する碗。448・449は端部が玉縁となる。450は底部片である。外面にはケズリの稜線が縱方向に残る。

磁器碗（451）内面見込みの軸を搔き取っており、外面の高台部には重ね焼きによる付着物がある。近世期の磁器であろう。

陶器鉢（452）中国産の陶器であろう。甚簡底の鉢である。体部外面には縱方向の稜があるようにも見える。内外面とも露胎で色調は茶色を呈す。

甚簡底の陶器鉢

陶器皿（453）灰釉陶器で無色釉を塗布する。口縁部は平坦面を有し片口となる。内面には摺目が見られる。瀬戸系の鉢皿か。

瀬戸系陶器鉢

陶器盤（454）は口縁部が外側に丸く肥厚する。黄釉盤か。

陶器甕（455～458）455は甕の脚部にも似た形状だが透かし孔が見られないことから、壺の口縁部とした。口縁部付近は外反気味に開き、端部は外側に肥厚する。456は常滑焼であろう。肩が丸味を有し、ヘラ記号を配す。457は藁灰釉を施釉し口縁部内面に線刻文様を象嵌する。唐津焼か。458は頸部が締まらない器形で口縁端部が内傾し、断面三角形状に肥厚する。中国産陶器であろう。

磁器水注（459）越州窯系磁器の注口部片である。

唐三彩陶枕（460）陶枕の破片で、縦3.0cm、横4.2cm、厚さ0.4cmの小片である。胎土はきわめて良質の白色の陶土を使用している。上面には連珠円文と円文の内側には唐草文の一部と思われる型捺しがみられる。縁・茶褐色・白色の釉が鮮明に残っている。ここでは円文等の径から陶枕の上面として復元した。円文の径を復元すると4.8cmとなり、器壁の厚さを考慮すると、奈良県大安寺跡出土の小型のものに類する。

唐三彩陶枕

65-1次調査区床土出土土器 (Fig.129)

白磁碗（461・462）461は口縁部が玉縁となる。462は器壁の厚い高台部片。

青磁碗（463・464）463は錦蓮弁の青磁碗。464は削り出しが少なく厚い器壁となる。

65-1次調査区茶灰色土出土土器 (Fig.129, PL.56・57)

須恵器壺（465）二重口縁となる壺。口縁端部は小さな水平面をなし、屈曲部外面には三角突帶を巡らせる。

須恵器甕（466・467）466は頸部があまり締まらず、口縁部が緩やかに外反する。口縁端部は丸く收められる。467は肩が張り口縁部は短く外反する。口縁端部は丸く收められる。

土師器环（468・469）468は体部が外反気味に短く開き、口縁部付近の器壁が薄くなる。469は底部が平坦で体部は直線的に開く。

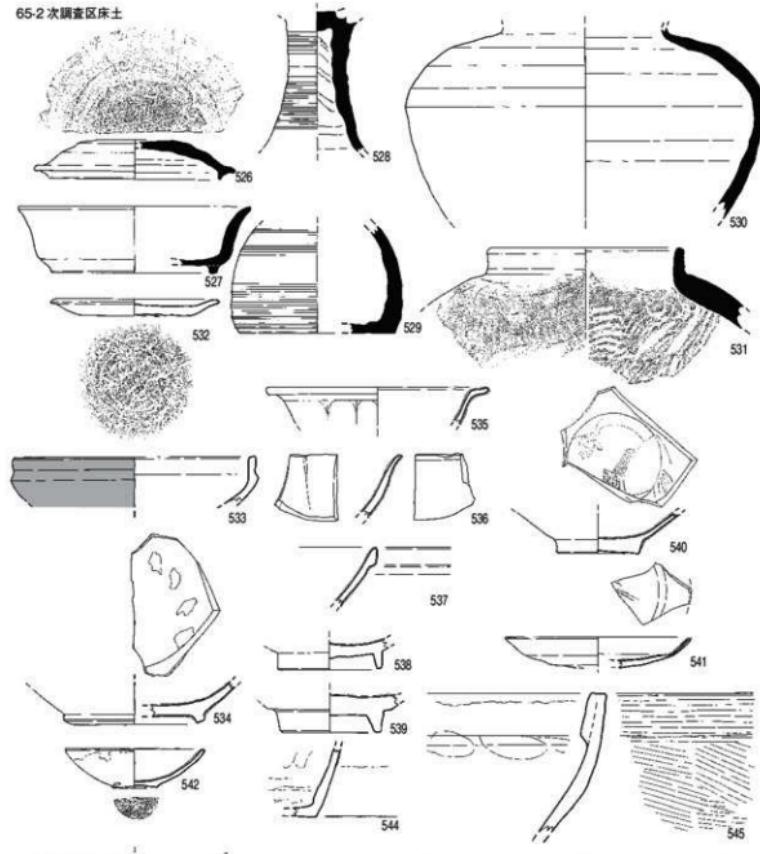
土師器甕（470）頸部が締まらず口縁部が短く外反する器形の甕である。口縁端部は丸くおさめられる。

綠釉陶器碗（471・472）471は断面三角形の低い高台を呈す。472は平底で端部が突帶状に短く外側へと突き出た形状となる。

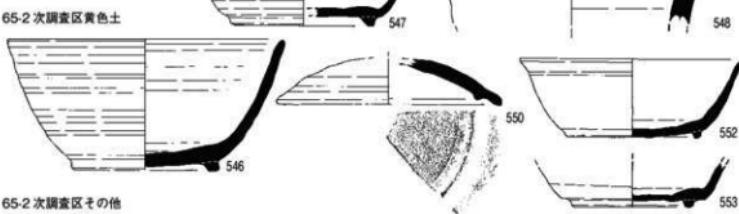
青磁碗（473～477）473は高台の接地部が面をなし、体部が直線的に開く碗である。内外面に目跡が残る。474も体部が直線的に開く。475は高台がやや高く、内端部で接地する。体部は丸味を有している。476は断面台形状の低い高台となる。477も底部片。

65-1次調査区灰茶色土出土土器 (Fig.129, PL.57)

65-2次調査区床土



65-2次調査区黄色土



65-2次調査区その他



Fig.133 包含層等出土土器実測図(1/3)

須恵器椀（478） 体部が直立気味に立ち上がり、端部付近は若干外反して薄く尖る。高台部は低い台形状を呈す。

須恵器甕（479） 口縁部が強く外反する甕である。口縁端部には1条の沈線を巡らせる。

土師器椀（480・481） 480は高台がやや長く、端部は面をなす。体部は丸味を有さず直線的に開いている。内面には煤が多く付着する。481も高台がやや長めに伸びる。

青磁碗（482） 高台内側の削り出しがほとんどなく、底端部が外方へと突窓状に肥厚するような形状となる碗である。体部はほとんど湾曲せず直線的に開いている。

65-1次調査区炭層出土土器 (Fig.129 ~ 131, PL.57)

須恵器蓋（483～489） どれも天井部が丸みを有した器形となる。483は小型の蓋。端部内面には不明瞭な段を有している。484～489は口縁端部が丸く收められる。487は内面に同心円当て具痕が、488・489はヘラ記号が見られる。

須恵器环（490～493） 490～493は口縁部内面に短く伸びる立ち上がりを有したものである。491は内面に同心円当て具痕、外面にヘラ記号が認められる。

須恵器壺（494） 短頸壺であろう。体部は最大径が中位よりやや上にあり、頸部はあまり締まらない器形となる。肩部にはクシメを施し、底部にはヘラ記号が見える。

土師器甕（495・496） 495は肩が丸く、口縁部が短く直立気味に立ち上がる。内面にはヘラケズリ、外面には縦ハケメ、口縁部内面には横ハケメが見える。496は甕底部片である。内面ヘラケズリ、外面ハケメ調整を行う。

土師器鉢（497・498） 497は口縁部が片口となる鉢である。体部はあまり丸みを有さず、口縁部は緩やかに開いている。内面にはナデに先行するタタキが残る。498は把手付鉢である。体部は下方に最大径があり口縁部は短く外反する。

土師器瓶（499～503） 499は体部が直線的に開き、口縁端部が若干外反する。内面ヘラケズリ、外面縦ハケメ調整を行う。500も499と似たような形状となる。501は完形に復元される。底部の蒸気孔は単孔で体部は直線的に伸びており、全体的にスリムな形状となる。口縁部はわずかに外反する。体部中位に牛角把手を貼り付ける。体部下半には焼成後の穿孔が一つある。内面縦ヘラケズリ、外面ハケメ、ヘラケズリ調整を行っている。502も完形に復元される。底部の蒸気孔は単孔である。体部上半が直立しており、やや丸みを帯びた形状となる。口縁部はわずかに外反する。体部の中位よりやや上に牛角把手を貼り付ける。内面は縦ヘラケズリ、外面は縦ハケメ調整を行う。503も口縁部がわずかに外反する。内面縦ヘラケズリ、外面縦ハケメ調整を行う。

65-1次調査区黄灰色土出土土器 (Fig.131・132, PL.57・58)

須恵器蓋（504～506） 504～506は丸味を有した天井部となる蓋である。端部は丸い。

須恵器环（507） 短い立ち上がりを有した环である。全体的に器壁が厚い。

須恵器高环（508） 長脚の高环である。环部は上半が外反し、口縁部は器壁が薄くなる。下半はクシメを施す。脚部は裾へと向かってなだらかに外反しており、三方向に二段の長方形透かしを配置する。

須恵器壺（509） 脚付壺である。体部は倒卵形で肩が張った器形となり、口縁部はあまり開かず上方へと伸びる。口縁端部は内側に丸く肥厚する。肩部には3条の沈線があり、その

65.2 次調査区その他

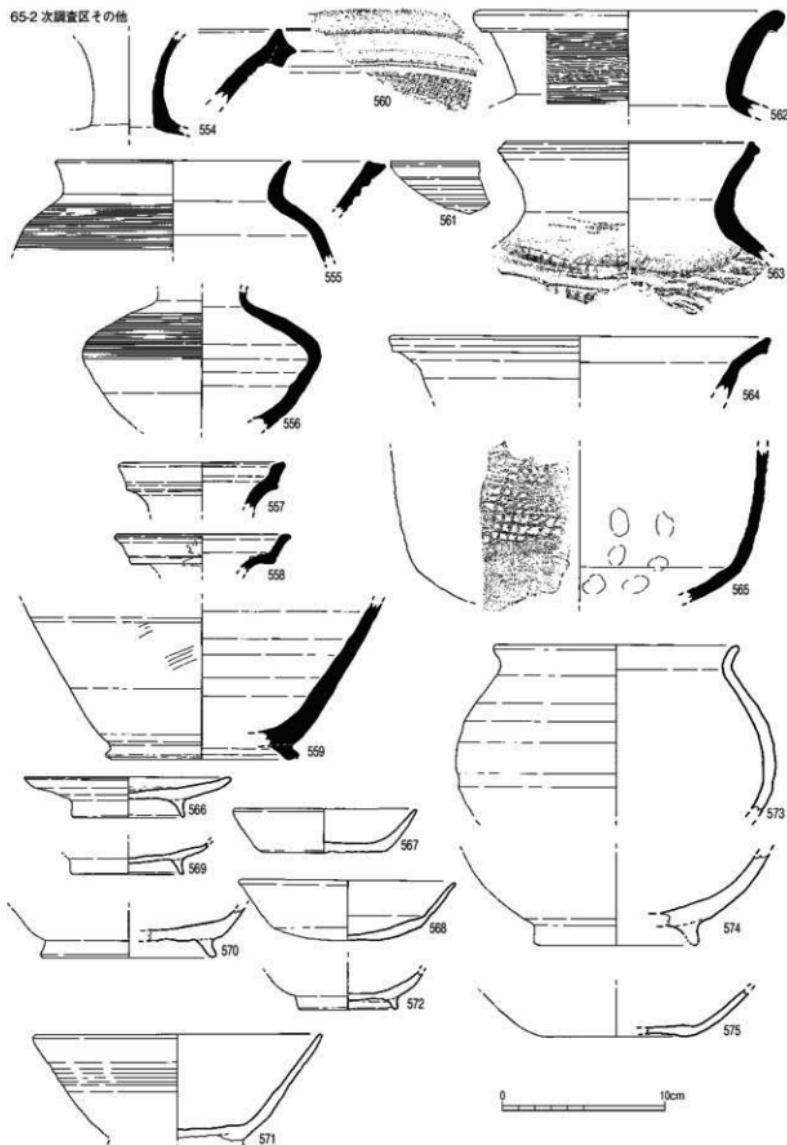


Fig.134 包含層等出土土器実測図 (1/3)

間に工具による刺突文を巡らせる。頸部にも2条の沈線が巡る。体部下方には焼成時に付着した他の土器の痕跡が残っている。

須恵器甕（510） 頸部から口縁部にかけて外反し、口縁端部が垂下気味に大きく開く。

土師器甕（511～514） 511は球形の体部で短く直立する口縁部を有した甕である。内面はヘラケズリ、外面はハケメ調整を行う。512は球形の体部で口縁部は直立し、端部がわずかに開く。頸部や底部が他と比べて器壁が厚くなる。513も球形に近い体部となる。514は長胴で口縁部が短く外反する形状となる。端部は丸くおさめる。内面は縱方向の長いヘラケズリ、外面は粗いハケメだが下方にのみ細かいハケメを行う。

土師器甕（515） 鉢形の甕である。蒸気孔は単孔で、底部から口縁部に向かって大きく開く。口縁端部はわずかに外反する。内面には指ナデの稜線が明瞭に残る。外面は工具ナデ調整。

65-1 次調査区その他出土土器 (Fig.132, PL.58)

須恵器蓋（516～519） 516・517は天井部が丸みのある器形の蓋である。516の端部は丸く収められる。内面には当て具痕、外面にはヘラ記号が認められる。517は内面に不明瞭な段を有す。内面にヘラ記号を有す。518・519は天井部が平坦な形状で鉗状の低い攝部を有す。

須恵器壺（520・521） 520は小型の壺である。球形の体部で器壁が非常に厚い。521は底部が平底で体部が丸みを有しながら立ち上がる。底部と体部の境目は稜をなさない。外面はカキメ調整を行う。

須恵器甕（522） 口縁部が直線的に開き、端部が上方を向く。強いヨコナデを加えることによって内外面に突帯状の稜線を有している。

縁釉陶器皿（523） 縁釉陶器の小片で、器壁が薄いことから皿とした。

青磁碗（524・525） 524・525は越州窯系青磁碗である。523は口縁部が輪花となる。525は高台部が断面三角形を呈し、疊付のみ露胎となる。内面には不明瞭な段を有している。

65-2 次調査区床土出土土器 (Fig.133, PL.58)

須恵器蓋（526） 天井部が低く、口縁内側に短いかえりを有した蓋である。

須恵器椀（527） 体部が外反しながら開く椀である。底部は断面台形の低い高台である。

須恵器高杯（528） 筒状に長くのびた高杯の脚柱部片。中央付近に不明瞭な稜を有し、上下にクシメを施す。

須恵器壺（529～531） 529は平底で体部が開かず、内湾しながら肩部へと至る壺である。外面にはカキメを有す。530は最大径が中位よりやや上にあり、肩が丸く張った形状となる。531は短く直立する口縁部となる短頸壺である。

土師器皿（532） 浅い器形の小皿である。底部はヘラ切り。

土師器模倣环（533） 口縁部が短く直立し、口縁部下が不明瞭な段を有した模倣环である。表面は黒色を呈す。

青磁碗（534～536） 534は越州窯系青磁碗。高台は断面台形を呈し内端部で接地する。内面見込みには重ね焼きの目跡がある。535は外面に蓮弁を配した小型の碗。口縁部は水平近くまで屈折する。536は口縁部が輪花となる青磁碗。

白磁碗（537～540） 537は口縁部が小さな玉縁状になる。538・539は高めの高台となる底部片。540は内面見込みに柳描きで施す。高台の内側はほとんど削り出されない。

青白磁皿（541） 体部中位で屈折し、口縁部が直線的に開く器形となる皿。内面見込みには毛彫り文様を描く。

陶器皿（542） 濱戸産の灰釉陶器であろう。平底で径の小さな底部から、大きく開いた体部へと続く。

陶器碗（543） 近世陶器であろう。底部と体部の境が稜をなす。口縁部は大きく開く。

陶器壺（544） 底部片である。体部はあまり開かずに立ち上がっており、底部との境目が明瞭な稜を有す。釉は褐色釉。

陶器鉢（545） 常滑焼の鉢か。口縁部は内側に肥厚して段を有す。上端部は面をなす。外面にはハケメ調整を行う。

65-2次調査区黄色土出土土器 (Fig.133)

須恵器椀（546・547） 546は体部があまり開かずに長く伸び、深い器形となる椀である。断面台形の低い高台となる。547も断面台形の低い高台となる。

須恵器壺（548） 口縁部が外反し、外面の口縁部下に小さな三角突帯を巡らせる。

65-2次調査区その他出土土器 (Fig.133・135, PL.58)

須恵器蓋（549・550） 549は天井部が平坦で口縁部内側に小さなかえりを有する蓋である。550は天井部が丸く、口縁部内側にはやはり小さなかえりを有する。内面にヘラ記号がある。

須恵器椀（551～553） 551は体部が短く直線的に伸びる浅い器形の椀。552は上半が外反気味に長く伸びて深い器形になる。高台部は小さく、内端部で接地する。553は体部が直線的に開くようである。

須恵器壺（554～559） 554は頭部が細長く伸びる形状の壺。口縁部付近は外反する。555は肩が丸味を有し口縁部が短く外反する。口縁端部は器壁が薄く尖っており、肩部にはカキメが施文される。556は肩が張った器形となる。頭部はよく締まっている。肩部外面にはカキメが施文される。557・558は二重口縁となる壺口縁部片である。どちらも屈曲部外面には明瞭な稜を有し、口縁部は短く直線的に開いている。559は短く開いた高台を有し、体部は直線的に開いている。内外面ナデ調整を行い、外面には先行するタタキが残る。

須恵器壺（560～565） 560は口縁部が外側に肥厚し、強いヨコナデにより鋭い稜を有す。口縁部下には沈線を巡らせ、その下にはハケ状工具による刺突文が施文される。561は上端が面をなし、口縁部下に強いヨコナデによって形成された複数の突帯を巡らせる。562は頭部が直線的に開き、口縁端部が丸く肥厚する。下端部は突帯状に仕上げる。563は口縁部が直線的に開き、外端部が稜をなす。564は口縁端部外面が突帯状の稜を有す。565は体部片である。

65-2次調査区その他

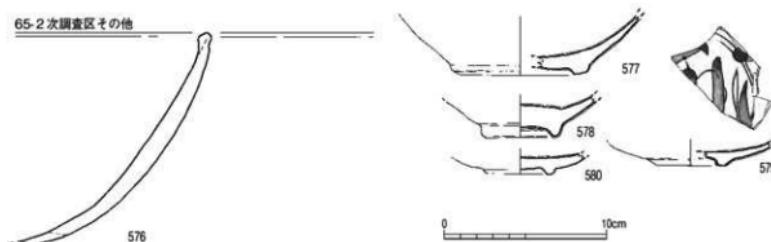


Fig.135 包含窯等出土土器実測図② (1/3)

内面は當て具痕、外面には格子タタキが行われる。

土師器皿（566）高台付皿である。高台部は直線的に短く伸び、体部の立ち上がりはない。

土師器壺（567・568）567は底部が平底で体部が直線的に開く。568は底部がやや丸みを有し、体部は直線的に開く。底部と体部の境は不明瞭である。

土師器椀（569～572）569は器壁が薄い。570は高台部が外反気味に短く伸び、外端部で接地する。571は体部が直線的に長く伸びて深い器形となる。外面の中位にはロクロ目の稜線が複数残る。572は丸味を帯びた器形となるようである。

土師器壺（573～575）573は体部が丸みを有し、頸部はあまり締まらず口縁部は短く外反する。574は高台付の底部である。体部は丸味を有している。575は底部がわずかに上げ底となり、体部は大きく開く。体部と底部の境目に明瞭な棱を有さない。

土師器鉢（576）体部が丸味を有して大きく開き、外面の口縁部下は凹線状に窪ませる形状となる鉢である。調整は不明だが内面はかなり平滑でありヘラミガキの可能性もある。

青磁碗（577・578）577は越州窯系青磁碗である。内面見込みと高台疊付に重ね焼きの目跡が残る。578は青磁碗である。底部の器壁は厚く、高台部は断面三角形を呈す。

染付磁器皿（579）呉須の発色はあまり良くななく緑青色を呈す皿である。

陶器碗（580）内面には薙灰釉を施釉する。外面は露胎。高台は低く断面台形状を呈す。

（3）木製品

藏司地区平地部においては、谷部にあたる4次NTr SD099及び54次・60次調査区前面に堆積する腐植土及び青褐色粘土より木製品が出土している。なお、墨書のある木簡については、文字資料の木簡の項目で報告する（218頁～224頁）。

1) 漆製品 (Fig.136, PL.59)

漆皿（1）一部欠損するが、完形に近い黒漆塗りの椀である。漆は外面は剥離が顕著で、
黒漆塗りの皿
漆の遺存状況は良くない。全体的に薄く仕上げられ、体部はゆるやかに内湾しながら立ち上がり、口縁端部はやや尖った仕上げである。高台は2・3の形態とは異なり、低く台形状を呈す。口縁部内面は面を持つような輻輳で整形する。なお、漆は塗りは下地にしないで、直にし、刷り込み止めをして2回以上塗り、塗り離しのままで施したと考えられる。材質は「はりぎり」もしくは「せんのき」と同定される。4次NTr SD099の2層より出土した。

籠状木製品（2）厚さ0.75cmの籠状木製品の表面に赤漆を塗布したもので、ほとんど漆の
刷毛状工具
被膜が剥落し、裏面では確認できない。上端部では加工痕・使用痕がみえないが、下端部は摩滅し、角が丸くなっているため、漆を塗布した際の刷毛状工具として使用した可能性を考えられる。なお、両側面は削ったままの未加工な状態であるため、本来は両横があった製品であった可能性がある。4次NTr SD099の5層より出土した。

2) 容器 (Fig.136, PL.59・60)

皿（3・4）3は4次排土中より発見したものであるが、後述する皿（4）と同様の「大」「大」の刻書の刻書があることから、4と同じく4次NTr SD099の5層に伴う可能性が高い。3は完形に

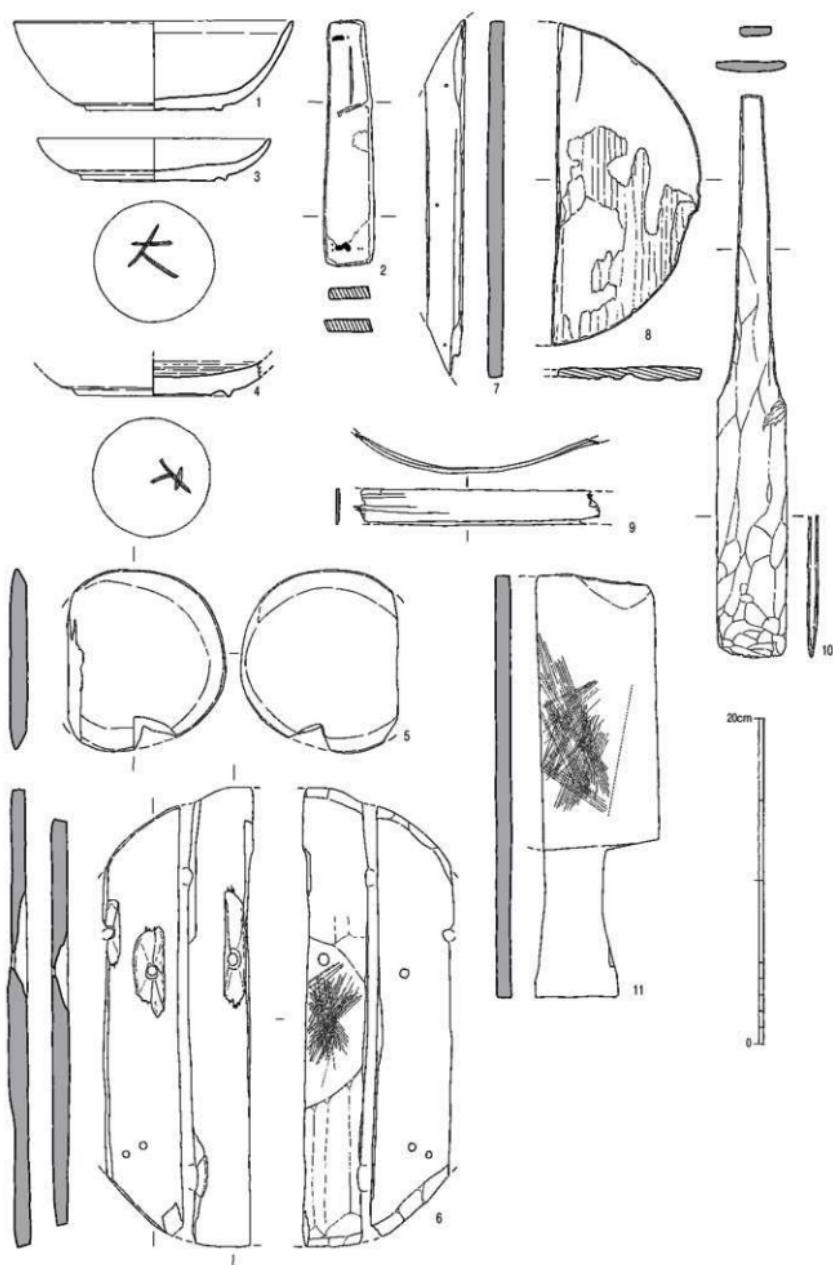


Fig.136 木製品実測図①(容器・食膳具)(1/3)

近いもので、全体的に薄く、口縁部は内湾気味である。内外面は轆轤挽で整形する。低いが先端部が尖る高台の内面には、銳利な工具により「大」を刻む。また体部外面下位には沈線を巡らす。

4は3と器形は同じであるが、4の方が大きい。内面は轆轤目が明瞭で、高台の内面には3 「大」の刻書と同じく、「大」を刻書する。4次 NTr SD099の2層出土。なお、3・4とも材質は広葉樹とされる。その他に4次 NTr SD099の2層から、楕の未成品の可能性がある粗加工した円筒状の木器が出土しているようである。

蓋（5）円形を呈する形状から、容器の蓋として使用されたと推測できるもので、径11.1cm、厚さ1cmと、小型製品にして厚めのものである。側面は斜めに面取りし、木取りは柾目である。4次 NTr SD099の5層から出土した。

曲物（6～9）6は復元径28cm、厚さ1cm前後を測る大型の曲物底板である。二片あり、4次調査地内での出土地点が異なること、近接する部材であるものの接合しないこと、材質が異なることなど別の曲物部材である可能性があるが、概報では穿孔方法や線状の刃物痕、形状から、短冊形のいくつかの部材を組み合わせた大型の曲物としているため、本報告でも概報に従い同一製品として報告する。

別部材の
可能性も

左側の側面は斜めに仕上げている。縫じ合わせ穴が2孔穿りで、樹皮ないしは紐で縫じ合わせたと考えられる。縫じ合わせ孔とは別に径3mmの2孔と径2mmの2孔が穿たれているが、用途は不明である。なお、栓や目釘穴はみられない。

また右側の中央は厚くなり、その裏面には細かな刃物痕が密に認められることから、この部材のみ後に転用した可能性がある。またこの刃物痕周辺は焦げている。4次調査出土。このほか、概報では復元径16センチ、厚さ0.8cm、側面に縫じ合わせのための小孔（目釘孔）を規則的に施したもの1点が4次 NTr SD099の5層より出土したとされる。

細かな刃物痕

7・8は、曲物の底板である。7は厚さ1cmの部材で、縁に沿って径1mmの目釘孔を施す。4次 SD099 5層出土。8は復元径20cm、厚さ0.7cmで、縁には目釘孔がみられない。特に裏面は腐食により凹凸が顕著である。54次青褐色粘土出土。9は曲物の側板で、幅2.2cm、厚さ4mm程度を測る。4次 NTr SD099の5層より出土した。

3) 食膳具 (Fig.136, PL.60)

杓子（10）10は縱割りした板材を使用した大型の杓子で、完形品である。表面には加工痕がみられるが、裏面はほとんど加工痕がみられない。身の側面はほぼ直線で、横断面は中央部がやや厚くなる甲高である。また身の先端部は細かな加工により尖らせる。柄は身から弧状に削り込んで柄尻にかけて徐々に狭くなる平面形状である。側面も面取りする。長さ34.4cm、身の長さ15.7cm、身厚0.6cm、身幅4.3cm、柄幅最小1.3cmを測る。54次腐植土より出土した。

完成品の
大型杓子

羽子板状木製品（11）長さ26cm、厚さ1cmを測る堅い材で作られた羽子板状のもので、角をもたせた長方形を呈する身左側は欠損する。全長の2/3を占める身の中央部には細かな刃物痕が密にあるため、食膳具に含めた。柄は最も幅狭くなる中央部に向かって徐々に狭くなる平面形状である。4次 NTr SD099の5層より出土した。

細かな刃物痕

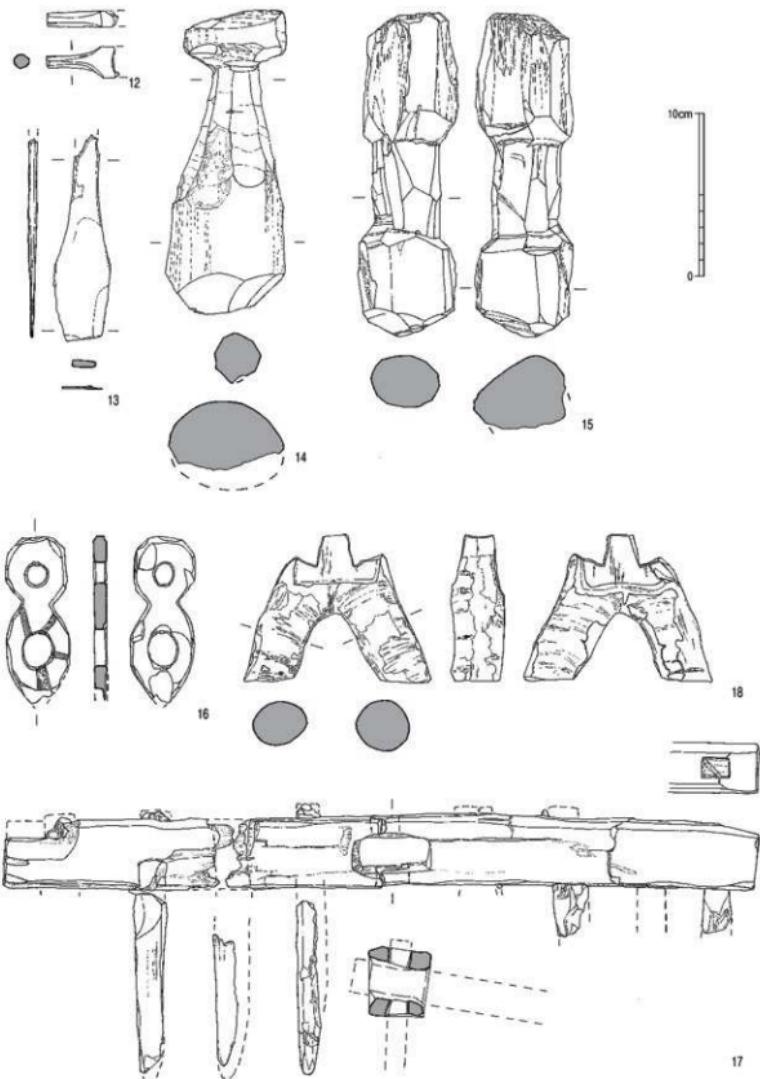


Fig.137 木製品実測図②（農耕具・奢侈品）(1/3)

4) 農工具 (Fig.137・138, PL.60)

糸巻横木 (12) 中央部に軸孔を施した、端を丸い棒状に成形した糸巻の横木と考えられる。端部は丸く加工する。4次 SD099 の4層より出土した。

鍔状木製品 (13) 全体的に薄いつくりの、漆用の鍔の可能性があるもので、柄の一部は欠損する。身は中央部から先端部に向かって狭くなる形状で、直線的な先端部は両刃状に薄く整形する。現存長 12.6cm。60 次腐植土出土。
漆用の鍔か

横槌未成品 (14) 広葉樹を加工した短い柄の横槌であるが、全体が粗加工のままで、身には樹皮が残ることから、未成品と考えられる。柄の先端には大きめの突起をつくり出し、身の断面は梢円形で、身の裏面は大きく欠損する。長さ 18.5cm、身幅 7.0cm、身と柄部の境の幅 2.8cm。54 次腐植土より出土した。

砧 (15) 長さ 5.5cm程度、径 4cm の削り込んだ柄の両端に円柱状の身が取り付く形態のものである。全体的に粗い加工痕が残るため、未成品の可能性がある。上端部は腐食している。全長 20cm、身幅 10cm 程度を測る。60 次腐植土より出土した。
未成品か

紐掛け状木製品 (16) 二つの穴を穿った眼鏡状を呈するもので、下方の穴には紐をかけた痕跡が残り、下部は欠損する。工具などを吊るすないしは運搬に使用したものか。法量は長さ 10.5cm、幅 3.9cm、厚さ 0.8cm を測る。60 次腐植土出土。

馬鍼 (17) 断面方形の材を台木として、方形の穴を穿ち、4～6cm間隔で計 9 本歯を装着したもの。台木の中央には歯と直交する $2.4 \times 5\text{cm}$ の方形の穴が 1 箇所施されているため、柄を取り付けたと考えられる。歯は 5 本残っており、いずれも枝の先端部と頭部を加工し、台木に装着と取り替えができるように整形している。歯は下から差し込み、薄い板状の楔で歯と台木と固定している箇所が 3 箇所残る。法量は、台木全長 46.2cm、台木幅 3.8 × 4.4cm、最も残る左端の歯で、全長 11cm を測る。54 次腐植土の下層より出土した。
9本歯の馬鍼

堅杵 (19) 全体的に腐食が顕著で、握部と下端部の一部に加工痕が残る。撃部の下端部は平坦であることから、顕著な使用は認められない。長さ 98.5cm、撃部径 8cm、握部径 3cm 程度を測る。60 次腐植土出土。
堅として使用か

5) 奢侈品 (Fig.137, PL.61)

琴柱形木製品 (18) 二股の桜の枝を加工したもので、上端部は突起をつくり出し、下両端部は切り落としたままである。それ以外は樹皮がそのまま残る。脚として使用したものか。60 次腐植土出土。

6) 履物 (Fig.138, PL.61)

下駄 (20) 20 は本体と歯が一体の連歯のものである。本体は長方形で、下寄りの左側に鼻緒を通すための穴が穿たれる。本体の台長 21.5cm、台厚 1.5cm、前歯・後歯とも幅 2.7cm 程度を測る。4 次 NTr SD099 の 4 層より出土した。そのほか、4 次 NTr SD099 の 5 層から差歎の下駄先端部が 1 点出土しているようである。

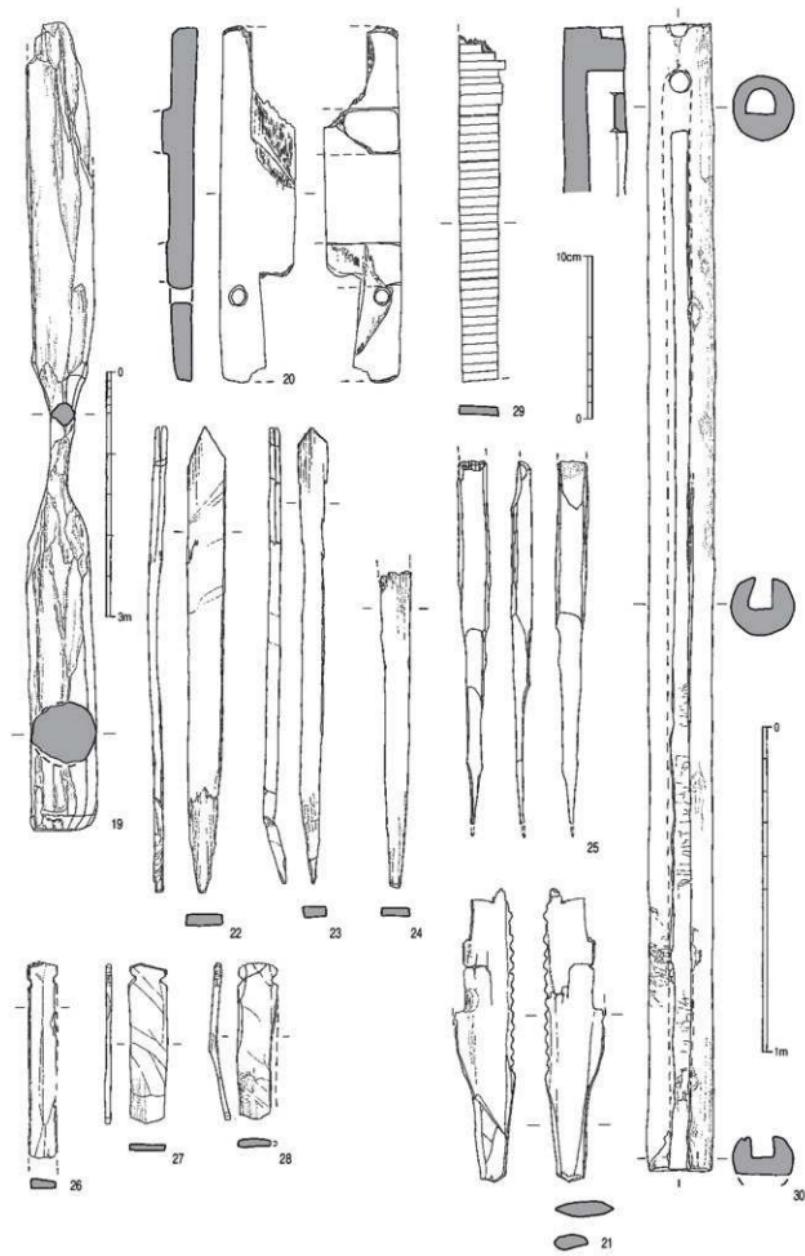


Fig.138 木製品実測図③（農耕具・履物・祭祀具・用途不明品・その他木製品）(19:1/6, 30:1/15, 他:1/3)

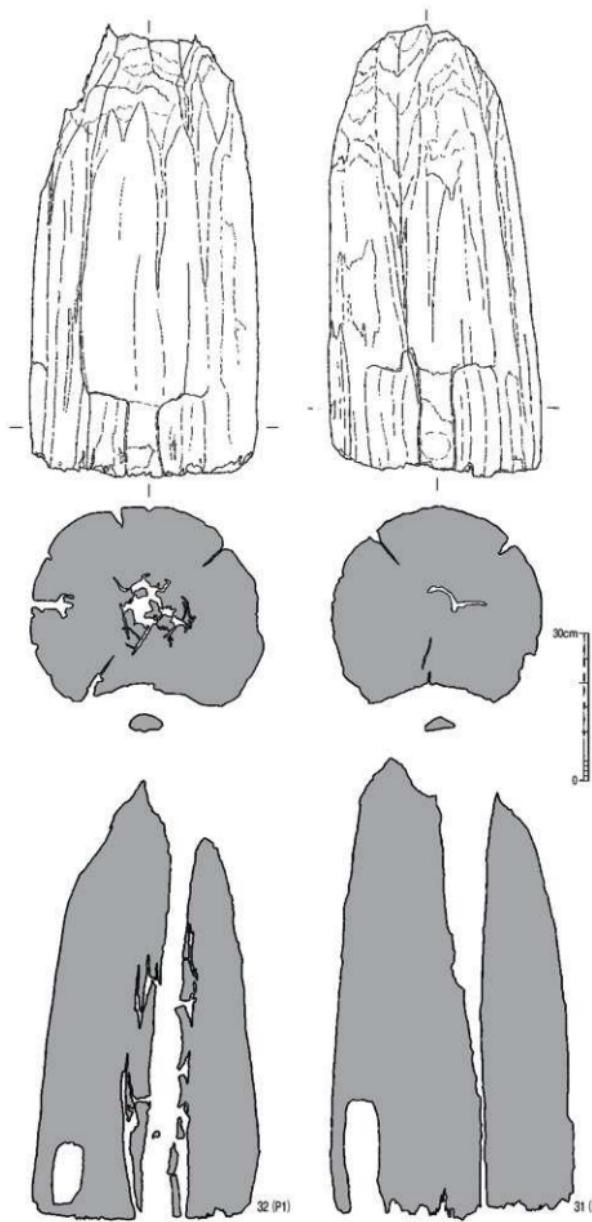


Fig.139 木製品実測図④ (木柱) (1/10)

7) 祭祀具 (Fig.138, PL.61)

斎串 (21 ~ 25) 21は側面を剣目加工, 22 ~ 25は切り込み加工したものである。21は上部断面が杏仁形で、身左側面に鋸歯状の切り込みを入れ、右側面も刃をつくり出した、珍しいもの。下端部にかけてやや幅を狭め、下端部は平面三角形に加工する。現存長13cm、幅3.6cmを測る。60次腐植土出土。

剣先形状の斎串 (22 ~ 25) 22 ~ 25はいずれも頭部を主頭状にかたどり、下部を剣先状に加工したものと考えられる。22の長さは28.5cm、最大幅2.3cm、厚さ0.8cm。23は両側面には3箇所程度の刃物による切り込みを入れている。長さ27.9cm、最大幅1.8cm、厚さ0.8cmを測る。24は上半部を欠損したので、側面には切り込みがみられない。長さ19.2cm以上、幅1.9cm、厚さ0.5cmを測る。22 ~ 24はいずれも54次腐植土出土。25は上部と下端部を欠損したので、全体的に加工痕がよく残る。長さ22.2cm、幅2.0cm、厚さ1.6cmを測る。60次腐植土層出土。

8) 用途不明品 (Fig.138, PL.61・62)

墨書きがない 付札状木製品 (26 ~ 28) 木筒状を呈するが、いずれも墨書きがみられないものを付札状木製品として報告する。26は下部を欠損するが、上部を主頭状に加工し、両側面に切り込みを施す。長さ12cm以上、幅1.8cm、厚さ0.6cmを測る。54次腐植土下層出土。27・28はほぼ同じ法量・形態のもので、上端部をやや平坦に加工し、両側面に切り込みを施す。縦割りにした柾目板の両面を丁寧に加工している。27は長さ9.7cm、幅2.3cm、厚さ0.4cm。28は長さ9.6cm、幅2.4cm、厚さ0.5cm。いずれも54次SX1394より出土した。

用途不明品 (29) 29は概報では曲物の側板として報告しているが、約5mm間隔の切り込みを全体的に施しているため、曲物の側板ではないと判断した。上部及び右側は欠損するが、長さ21.3cm以上残存する。切り込みの深さは1/3ほどまで入れているが、材に対してやや斜めになっているため、物差しなどの目盛りではないと考えられる。表面には光沢があり、薄い漆を施した可能性がある。柾目材で製作したもので、4次NTr SD099の3層から出土。

9) その他木製品 (Fig.138・139, PL.62)

一本造の木 柄木 (30) 54次SX1404で出土した。木柄は長さ3.46m、上端部径18.5cm、下端部径19.5cm、中央部径20cmの建築材を転用したとみられる一本に、深さ10cm前後の凹型の溝を施し、その上に木蓋をのせて木柄として使用したものである。

溝は上端より31cmの所まで上面から彫るが、それより上方は端部に向かって横から中をくり抜き、上端部から14cmのところで径6cmの円孔を上から穿って溝と貫通させる。下端部は溝が貫通する。上端部には平面半円形の切り欠き、下端部にも長さ6cm、深さ5cmのL字状の切り欠きが施されているが、機能は不明である。なお、下端部から63cmのところの溝上面には幅4cmほどのあたり痕がある。

SB1560A の柱頭 木柱 (31・32) 65-2次の掘立柱建物のSB1560Aの柱穴に残っていた切り取られた柱根2点である。材はいずれもコウヤマキとされる。31が高さ93cm、径45cm、32が高さ91cm、径41cmとほぼ同じ大きさで、いずれも下部には筏穴があり、調査時には平坦に切り取られた

底部には粗く削った手斧痕がみられたようであるが、その後の自然乾燥によるヒビ割れのため現在は不明瞭であるが、側面には幅4cm程度の刃物痕がわずかにみられる。また表皮もなく、上面には切り取り痕も残ってらず、朽ちている状態で、内部はいずれも空洞化している。

P7出土の31は縦方向に大きなヒビ割れ3箇所あり、うち1箇所は空洞の中央部まで貫通する。復穴は幅26cm、下部は欠損しているが鍵部の幅6.5cm、穴内部の高さは21cm程度、奥行は5cm前後を測る。P1出土の32は31よりはヒビ割れが顕著でなく、残存状況が良い。復穴も本来の形状をなんとか保っており、穴の幅24センチ、穴内部の高さは11cm、穴内部の奥行きは3cm、鍵幅6cmを測る。

復 穴

(4) 金属製品

1) 鉄製品 (Fig.140・141, PL.63)

今回報告する金属製品については、1～39は鉄製品、40～44は銅製品である。鉄製品のうち、2・3・5～14・16～18については、かなりの高熱で二次的に被熱した被熱鉄製品で、鉄製品自体が半溶解し、それぞれが溶着する。一方、建物に使用されたと考えられる24～36の鉄釘は被熱鉄製品ではない。これら被熱鉄製品の大半は古代の遺構に伴つたものではなく、古代以降の流れ込み等からの出土で、被熱鉄製品が集中して出土している本地区北側の蔵司丘陵地区からの流れ込んだ可能性が考えられる。

被熱鉄製品

蔵司丘陵部
に由来

鉄鎌（1～18）先述したように二次的な被熱のため、鋸による腐食はほとんどなく、部分的には鉄自体の光沢がみられるほど残りが良い反面、被熱のため鉄製品自身が変形・膨張するため、鉄鎌の形状は残しつつ、細部では本来の形状が若干異なる。また刃部なら刃部、頭部なら頭部という同じ部位付近で互いに溶着することから、軸を揃えて束ねられた状態で被熱したと考えられる。

1は方頭斧筒式の鉄鎌。刃部両端は欠損し、断面は杏仁形を呈す。4次WTr出土。

2～15はいずれも長頭鎌と考えられる。2・3は豊筒式の鉄鎌である。2は4個体溶着するが、2個体は豊筒式の刃部、他の2個体は茎部である。刀闌はなく、なだらかに刃部と頭部が接続する。54次茶灰粘質土から出土した。3は12個体程度が溶着したもので、図裏面部分は鉄鎌単位もわからないほど激しく溶着し、一部は膨張する。また7個体程度把握できた刃部はお互いに軸を揃えて溶着していることから、被熱した際に束ねられていたことを把握できる。65-1次茶灰色土出土。

豊筒式

4は小型の片刃鎌で、先端部の大半は欠損する。65-2次出土。

片刃鎌

5は片刃筒式と考えられる小型の鉄鎌刃部で、刀闌は緩やかで明瞭ではない。65-1次SE1559下層から出土した。

6～8は刺籠被を有する鉄鎌茎部である。6は2個体溶着するが、刺籠被は1個体のみみえる。54次灰色土下層出土。7も2個体溶着するもので、2個体とも刺籠被部分であるが、その溶着位置はややずれている。54次茶灰粘質土下層出土。8は65-1次茶灰色土出土。

刺籠被

9～15は鉄鎌茎部の破片である。9～14はいずれも鉄鎌束の軸は揃っており、ほぼ同じ部位同士で溶着する。9は茎部が13～15個体程度溶着したものと考えられ、図裏面は激しく溶解する。また被熱時の二次的な溶解により、自重で変形したため、断面形が半円形を呈す

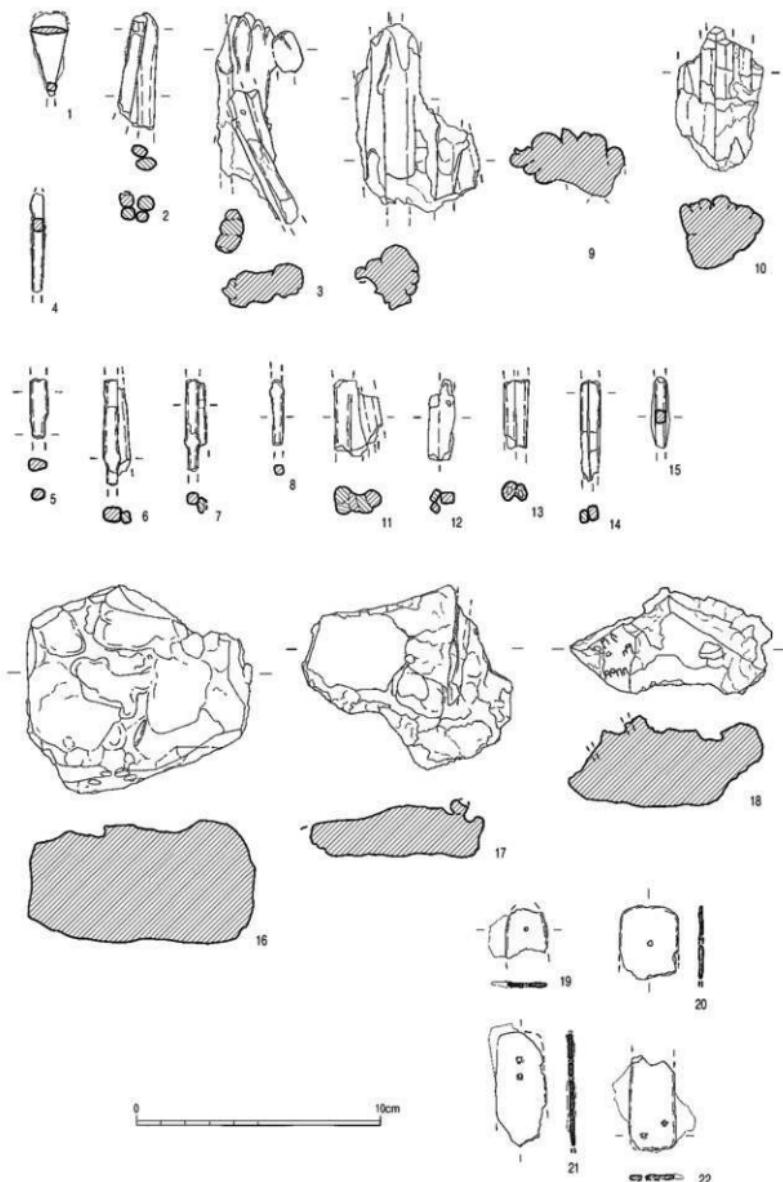


Fig. 140 金属製品実測図① (1/2)

ると同時に、膨張の有無により大きさに差が生じている。65-1 次茶灰色土出土。10は7個体以上の鉄錠が溶着したもので、図裏面部分に石英を多く含む土が付着することから、溶解時に床に接していた可能性がある。4次ETr床下土から出土した。11は5個体溶着したもの。54次茶灰粘質土下層出土。12は3個体溶着したもので、外面は剥離が顕著である。54次茶灰色粘質土下層出土。13は2個体溶着したもので、内部は中空である。65-1 次茶灰色土出土。14は2個体溶着したもので、外面剥離が顕著である。65-1 次床土出土。15は鉄錠莖部ないしは鉄釘のいざれかで、65-1 次SB1560A出土。

溶解時は
床 上

16～18は鉄塊表面の一部に鉄錠莖部の一部を残す鉄塊状遺物である。いずれも鉄錠莖部が残る面以外は溶解が著しく、個体判別すら難しいため、鉄塊内部では完全に溶解しているとみられる。16は図下方の面に幅5cm前後の5個体前後の鉄錠莖部が断面にみえるもので、それ以外は完全に溶解したとみられる。図上面には鉄が流れた痕跡がなく、淀んだ状態で固まっていること、また上面以外は平坦面をなし、角を持っていること、また平坦部分には土が付着していることから、被熱時、溶けた鉄が四角形の場所で淀んで固まった可能性がある。54次S-13から出土した。

17も16と同様、図上面の鉄が淀んで固まったような状態を示し、図裏面には土(壁土か床土)に由来する石英が土とともに多く付着する。また上面には溶着した鉄錠莖部が1個体確認できるが、なぜ1個体のみ溶解しきれなかったのかは不明。65-1 次茶灰土出土。18は径3mm程度の細い鉄錠莖部10個体が3mm程度断面に飛び出してみえる。図裏面には石英を多く含む土が付着する。65-1 次茶灰土出土。

小札(19～22) 19～22は65-2 次表土出土の小札で、いずれも被熱していない。19・

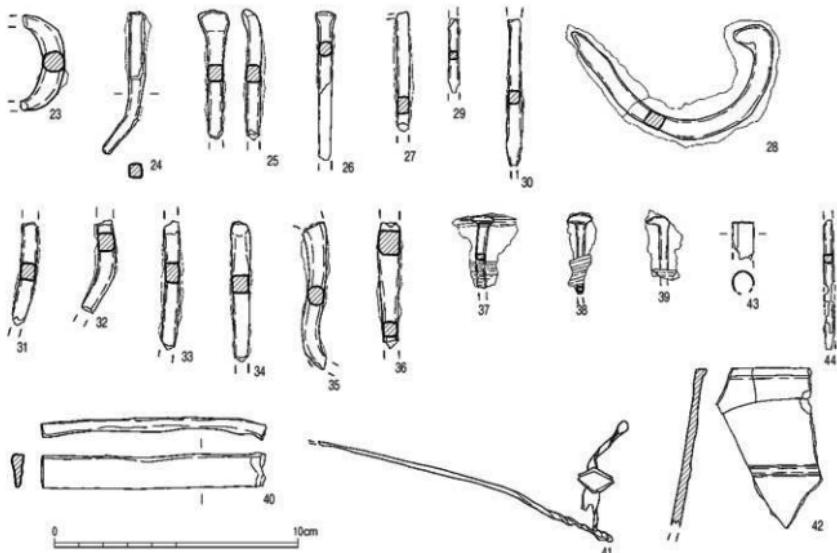


Fig.141 金属製品実測図② (1/2)

20は円頭形の札頭で、威孔1列配置のものである。19は中型、20は大型の部類になる。21は中型の方頭形の札頭で、威孔1列配置のものである。第1と第2威孔が確認できる。22は中型の札尻の破片で、下掘孔が2個確認できるが、位置がずれる。

円環形鉄製品（23）23は両先端部が細くなる円環形鉄製品である。把手の可能性がある。65-1次SK1549から出土した。

建物に使用された鉄釘か
鉄釘（24～39）大半が建物が集中する65-1・2次からまとめて出土しているため、実際に建物で使用されたものである可能性がある。まず頭部が残存しているものから、体部は法量で小から大の順に掲載した。24は体部から釘頭にそのまま至る形状のもの。体部下位で折れ曲がる。4次WTr出土。25は頭部を片側に若干折り曲げたもので、頭部頂部がつぶれていることから、実際に打ち込まれた履歴のある鉄釘であったと判断できる。65-2次床土出土。26は頭部が小さな鉈状になるもので、形状と60次攢乱土からの出土であることから、古代以降のものとなる可能性がある。27は頭部を片方にほぼ直角に折り曲げた形状になると考えられる。65-2次SK1582出土。28は頭部を片方に折り曲げた完形の大型鉄釘で土圧のためか大きく曲がる。本来の長さは12cm程度になるとみられる。65-1次茶灰色土出土。

29～36は鉄釘体部である。29は幅3.5mmの小型のもの。65-2次表土より出土。30～36は中型の鉄釘体部である。30は釘先部付近がやや膨らむ形状のもの。65-2次表土出土。31・32は土圧のため曲がる。31は65-2次表土、32は65-2次灰褐色土からの出土。33は65-1次瓦層出土。34は頭部が片方に折れ曲がったものである可能性があるもの。65-2次床土出土。35・36は大型の鉄釘体部で、釘先付近は断面形が円形を呈す。35は土圧のためか、大きく曲がる。65-2次SK1567からの出土。36は65-2次床土出土。

37～39は木質が残るため木箱等の収納具や調度品等の木製品に使用されたものか。いずれも釘頭を鉈状に加工した、幅3mm程度の小型の釘で、65-1次SD1401からの出土。

2) 銅製品 (Fig.141, PL.63)

刀子鞘（40）完形の刀子鞘である。鞘口は土圧のためか、全体的に曲がる。長さ9.1cm、幅1.4cm、厚さ0.5mmを測る。54次黄褐色土出土。

簪（41）1本足の青銅製の簪で、先端部には耳かきと菱形を重ねた飾りを施し、上半部全体をよじっている。足先端部は欠損する。60次黄褐色土出土。

銅鏡（42）口縁端部を外側に「コ」の字形に肥厚させたもので、体部は直線的な器形になる。外面体部中位には「M」字状の突帯を削り出している。残存長6.4cm、厚さ0.3mmを測る。65-2次瓦層出土。

円筒状銅製品（43）棒状製品の先端部に取り付けたと考えられるもの。54次黄褐色土出土。

棒状銅製品（44）剥離が顕著な棒状のもので、65-1次茶灰色土出土。

（5）土製品 (Fig.142, PL.63・64)

各調査区から出土した土製品を一括して報告する。

手づくね土器（1～15）いずれも手づくねのミニチュア土器。丸底で椀形の1～5、平底で鉢形の6～11、壺形の12～15の器種がみられる。壺形は12・13のように頭部が短く

直立するが、14は外反しているようである。またこの器種には丸底になるものと平底がある。調整は内面にはいずれも成型時の指頭圧痕が残るが、外面は不整方向にナデを施している。6・9は胎土に砂粒を比較的多く含んでいるが、その他は全体的に砂粒を含まず精選されている。5の外面には煤が付着する。法量は最小の1が口径2.0cm、器高2.6cm、最大の11が口径8.6cm、器高5.0cm。

鉗鍊車（16・17） 16・17はそれぞれ径4.3cm、4.8cm。孔径は0.4cm、0.6cm。16の孔は中心よりもやや離れて穿たれている。重量はそれぞれ29.2g、39.1g。

円盤状土製品（18・19） 土器の胸部の周縁を打ち欠いて円形に整えたもの。18は周縁部の摩滅が著しいが、擦って加工しているようである。19は須恵器類の胸部とみられる。下面（内面）は平滑に擦れています。

円盤状瓦製品（20～24） いずれも瓦片の周縁部を打ち欠いて整えたもの。22を除いて

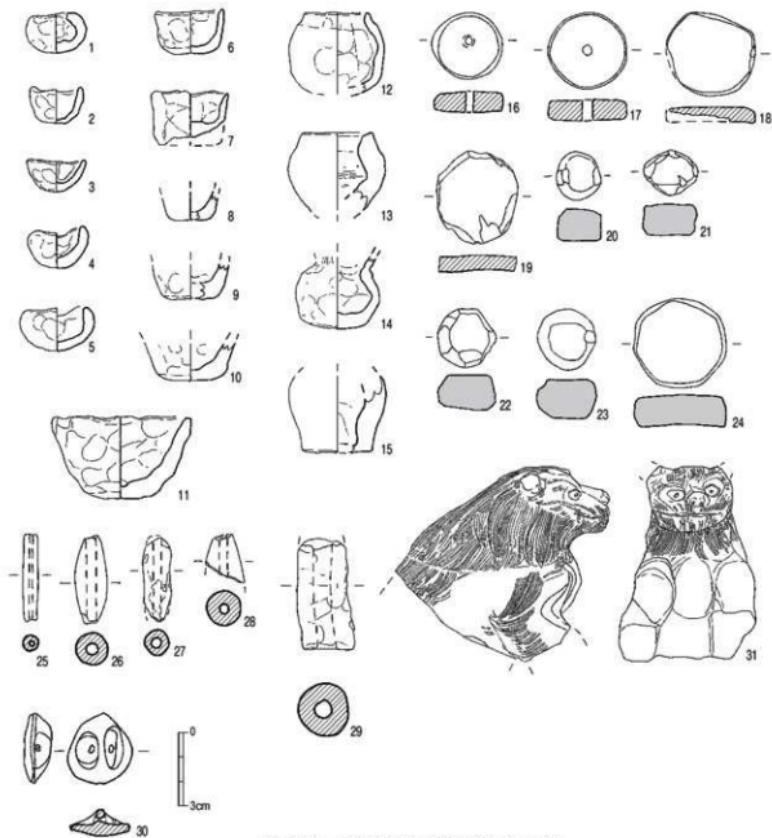


Fig.142 土製品実測図 (30:1/2, 他:1/3)

ずれも周縁部を掠っており、面が平滑になる。また 24 の上面には縄目のタタキが、下面には布目が残る。

土鍤（25～28） 形態的には細身の 25 と、中央部が膨らむ 26～28 がある。調整はすべてナデ。完形の 25 の重量は 6.5 g を測る。

棒状土製品（29） 形状は太い円柱形で上部に向かってややすぼまり、上端部は欠損している。また下端部にも接合痕がみられ剥落している。調整は外面がナデで、成形時の指頭圧痕が顕著に残る。内面には部分的に絞りの痕跡が残る。胎土は精良で、砂粒をわずかに含む。用途はわからないが、あるいは器物に接続する把手のようなものか。

模造鏡（30） 円盤状の粘土塊の一面をつまみあげて紐をつくり出したもの。孔径 3 mm ほどの孔を穿つ。

動物形土製品（31） 獅子のような瓦質の土製品で、体部の下半と胸部および耳を欠損している。調整は成形の後に、ケズリとナデによって行い、厚みを持って盛り上がった鬚、尾、体毛は 3 本 1 単位の櫛書きによって描いている。胸部と脚部後ろ側の調整はケズリで、ともに筋肉質であるようにつくりこまれている。目の部分はケズリの後に、鼻孔と同様に櫛状の工具を刺して表現する。口は真一文字で、上顎から 4 本の鋭い牙を持つ。色調は暗灰色。現存高 12.0 cm、現存最大幅 8.4 cm。

（6）石器・石製品 (Fig.143, PL.64)

各調査区から出土した石器・石製品を一括して報告する。

石鍋（1～5） 1～4 は縦耳タイプ、5 は鈎がまわるタイプ。1 は口縁端部に接して、方形に近い鈎が遺存している。2・3 は口縁端部を丸くおさめるもの。4 は口縁端部が面をなす。いずれも外面にノミ痕跡が残る。5 は底部が小さく、外方に大きく開く器形で、口縁部寄りにまわる鈎は退化形態で小さい。

勾玉（6） 滑石製の勾玉。頭部の孔は両側から穿たれている。長さ 3.2 cm、厚さ 0.3 cm、重量 4.6 g。

不明滑石製品（7～9） 7 は不整形の滑石片の頭に両側から孔を穿ったもので、垂飾と考えられる。8 は円盤状に整えた素材の周縁部に溝を切り込んだもの。上面はケズリ痕跡、下面は平滑になっている。石鍋の再加工品と考えられる。9 は鈎がまわるタイプの滑石製石鍋の転用品。中央の縁際に径 0.5 cm の孔を一方から穿つ。

碁石（10・11） それぞれ砂岩の円礫で、11 は全面が磨かれている。10 は暗青灰色、11 は明灰色。法量は 10 が 2.0 cm × 1.4 cm、11 は 4.5 × 3.7 cm。特定はできないが碁石とみられる。

砥石（12～15） 12～14 はいずれも棒状を呈する。15 は台状の砥石。側面は自然面であるが、上面は使用により平滑になっている。12・13 は粘板岩、14・15 は砂岩。

二次加工剥片（16） 厚みを持った笠状の剥片の側縁と広端部の一部に加工を施している。主要剥離面と素材の自然面を残す。

使用痕剥片（17） 縱長剥片の右側縁部に刃こぼれ状の使用痕がみられる。

扁平打製石斧（18） 素材の周縁部に粗い加工を施して短冊状に形を整えたもの。刃部を欠損している。片岩。法量は残存長 10.2 cm、最大幅 6.5 cm、厚さ 1.3 cm。重量 147.1 g。



Fig.143 石器・石製品実測図 (6～8・10・16・17:1/2, 他:1/3)

磨製石剣（19）切先と基部を欠損し、身の一部のみ残る。砂岩製。

石包丁（20）1/2ほどが欠失している。孔径0.4cm。片岩製。

凹石（21・22）21は円碟の表裏と側面5か所の計7か所を使用したもの。また、周縁下部には細かい剥落がみられ、敲石としても使用している。法量は9.0cm×7.3cm、厚さ4.7cm。重量は542.3g。22は長円形の碟を打ち削って使用したものとみられる。中央部に7.0cm×4.5cm、深さ1cmほどのくぼみがあり、上面および周縁部は磨れて平滑になっていることから磨石としても使用されたものと考えられる。法量は15.5cm×11.0cm、厚さ5.8cm。重量は1162.9g。

（7）文字関連資料

1) 木簡 (Fig.144, PL.65・66)

歳司地区周辺では、4次調査と54次調査において、古代の木簡10点が出土した。

第4次調査出土木簡 (Fig.114, PL.65)

第4次調査歳司では、調査区東半部の水田となっていた低湿地に設定したNTr, STrで南北方向の溝を検出し、溝の第1層から第6層のうち、第5層から木簡が出土した (Fig.31)。第5層は現地表面から1.5mをはかり、植物性遺体が圧縮された厚さ約20～40cmの茶褐色を呈する腐植土層である。この層は西岸付近で厚く、東に行くに従い次第に薄くなり、西岸から約10.6m付近で終わる。受け部を有する須恵器壺、土師器壺や無返りの壺蓋から6世紀中葉から8世紀初頭に比定される。STrでは、遺物は極めて少なく、第5層では認められなかった。NTrが溝の傾斜変換線付近にあたり、その西岸に堆積が集中したと解される⁽¹⁾。

第4次調査出土木簡は、福岡県教育委員会編・発行『大宰府史跡 昭和45年度発掘調査の概要』(以下、大宰府史跡の発掘調査概報は、『昭和45年度概報』と略す)において報告され、後に9点のうち5点が『大宰府史跡出土木簡概報(一)』(以下『木簡概報(一)』と略す)にも収録された。また、1号木簡は他の木簡に先行して、横田義章・亀井明徳両氏によって紹介されている⁽²⁾。

第4次調査で検出した9点の木簡は、『昭和45年度概報』では、本文29頁に1～6号と8号木簡の訛文を載せ、図版8～10に全木簡の写真を掲載する。また、『木簡概報(一)』では、5号・7～9号は採録せず、収載した1～4号・6号も『昭和45年度概報』とは番号が異なる。したがって、本報告では全木簡を掲載している『昭和45年度概報』の番号によって示す。ただし本文29頁に8号として訛文が掲げられている木簡は、写真と対照すると、図版10の7号であり、また図版9で7号とする木簡は5号の誤りである。したがって、本文29頁の8号を7号に、図版9の7号を5号に訂正した上で報告する。

大宰府史跡
で最初に出土した木簡

1 • □□疾病為依

〔闕カ〕

□日下部牛□

里長日下部君牛闕

木簡1—1⁽³⁾ (147)・31・6 5019

1970年3月7日に大宰府史跡で発見された最初の木簡である。この木簡のみは他の8点が南北溝第5層の腐植土層から出土したとの異なって、第5層にブロック状に混入する黄色砂質粘土に含まれていた⁽⁴⁾。1号は上端折れ、下端および左右両刃削り。木簡の時期は、荷札木

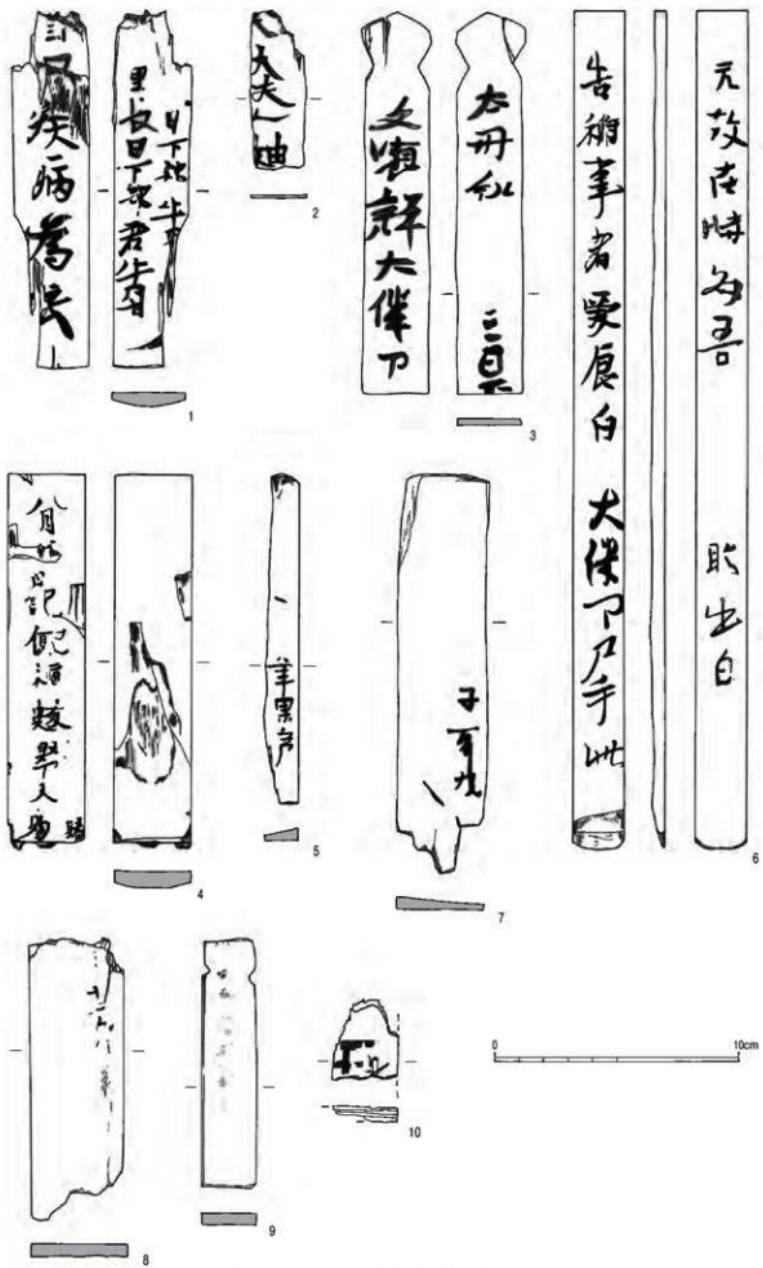


Fig.144 木简实测图 (1/2)

簡におけるサトの表記が「五十戸」から「里」に変わるのが、天武天皇12年（683）から持統天皇2年（688）にかけてであることが指摘されているので⁽⁵⁾、天武天皇12年を上限とする。さらに横田義章・亀井明徳両氏によって、裏面に里長とあるところから、從来の里の呼称を郷と改め、郷の下に新しい里を1郷2～3里の割合で置くようにし、里には里正を設置した靈亀元年（715）を下限とすること、日下部君が大宰府管内では豊後・肥前・肥後に分布し、大伴連支配下の軍事組織である鞍部・鞍負となっていた国造級豪族の後裔であること、里長日下部君牛闘^闘が労役のために徵發されていたが、疾病のために欠勤するという理由を記したと解釈できることなどが指摘されている⁽⁶⁾。

裏面2行目最後の文字を從来、あなかむりに「甘」という旁の文字に読んで来た。しかし仔細に観察してみると、あなかむりの1画目と見えた部分は「牛」の四画目的一部であり、あなかむりの3画目と考えられた部分は、「甘」と捉えた旁の一部と一筆でつながっている。つまり、この文字は、もんがまえの中に「八十」に似た旁が入っている。結論から言えば、これは、奈良県の飛鳥池遺跡と石神遺跡出土木簡、法隆寺金堂木造広目天像の光背銘文に類例があり、「闘」という文字で、人名の一部であるマロを表す⁽⁷⁾。1行目の牛□も残画から「闘」だった可能性が高い。

表面について、『木簡概報（一）』は「疾病の為により」と読み下してよいのか文法上疑問であるとする。しかし、7世紀中葉には漢字を用いてやまと言葉の語順のままに記してゆく和文の表記が可能であったことが指摘されており⁽⁸⁾、漢文法によらずに和文の語順で読み下して不都合はないが、読み下しは「疾病たるにより」とすべきであろう。裏面の「日下部牛□〔闘カ〕」「里長日下部君牛闘」が同一人物かどうかは、裏面上部の文面が不明なため、判然としない。

内容は横田・亀井論文のように労役の欠勤とは断言できない。「里長日下部君牛闘」が末尾にあることから、この人物が差し出し側の一人であるのは確かである。さらに文書で伝達していることから、里長より下位の階層に宛てたとは考えにくく⁽⁹⁾。里長の個別の申請文書木簡が郡（評）を越えて国や大宰府まで到達するとは考えられないので、郡（評）ないし地域首長層が宛所であり、その宛先で廃棄されたのだろう。

2 〔袖カ〕

大夫之□

木概1-5 (66)・(23) 5091

2号～9号の8点はすべて南北溝第5層の腐植土層から出土した⁽¹⁰⁾。2号は削屑である。4文字目について、『昭和45年度概報』は、「袖カ」とするが、へんの部分を観察すると、いとへんよりは、きへんの可能性もある。なお、『延喜式』巻第24、主計上65大宰府・66筑前国～71豊後国に調として錦袖を載せる⁽¹¹⁾。

大夫は律令制下において五位以上を称する⁽¹²⁾。大宰府においては、少弐以上が五位以上に相当する。『木簡概報（一）』では『万葉集』巻第5,815～852番歌に載せる天平2年（730）正月13日に大宰帥大伴旅人宅で行われた「梅花の宴」で、大夫は「紀卿」、少弐は「小野大夫」と称していることを指摘する。梅花の宴の和歌に付けられた作者名では、この他に「少弐粟田大夫」「筑前守山上大夫」「豊後守大伴大夫」「筑後守葛井大夫」が知られ、「大夫」と称された人物はすべて五位を帯していたと推定される⁽¹³⁾。

大夫は大宰府官人、もしくは都司 第4次調査出土木簡は後述のように、7世紀末から8世紀初頭に位置づけられるが、この当

時、筑前国は大宰府から別置されていないので⁽¹⁴⁾、「大夫」と称された対象としては、まず大宰府官人が考えられよう。もう一つの可能性としては郡司も想定できようか。郡司でも外位の五位を帯びる者が存在するからである⁽¹⁵⁾。

3 久須評大伴ア

・太母□□□三貝

木概1-2 156・27・3 5032

久須評の
荷札

3号は上下両端及び左右両辺削り。久須評は後の豊後國球珠郡である。「評」は大宝元～2年(701～2)に施行された大宝律令以前の郡にあたる行政単位である。したがって、この木簡の下限も大宝律令施行前後となる。大伴部は後述の6号木簡にも見え、西海道では筑後国や薩摩国に分布が確認される⁽¹⁶⁾。

『昭和45年度概報』と『木簡概報(一)』が「丹」とした文字は、字体から「母」であろう⁽¹⁷⁾。『木簡概報(一)』は「大伴ア」から続く人名なのか、赤色顔料である丹の別称なのか、という二つの可能性を指摘しているが、「母」と読めば、人名となる。7世紀の木簡は一行書きのものが多く、漢字を並べて文章にしたものと、一直線上にめりはりなく並べていくことが指摘されている⁽¹⁸⁾。したがって、表裏が変わっても名前を裏面まで書き続けた可能性が高い。以上より本稿では「大伴ア太母」という人名として捉える。

人名の後に続くのは、赤外線写真によると「和」または「私」で始まる物品名と推定される。その後の二文字は「里」または「具」、「信」または「伊」「行」などの可能性があるが、物品名は不明である。裏面最後の文字は「貝」と読める。平城宮跡出土木簡ではアワビなど貝類の単位として多く用いられる⁽¹⁹⁾。

4 八月廿日記貸稻數

□ 貸物

木概1-4 (153)・32・7 5061(物差)

貸稻は出舉
の古称

4号は上端及び左右両辺削り、下端二次的切断。貸稻は出舉の古称であり⁽²⁰⁾、大宝律令以降は、もっぱら出舉の呼称が用いられたので、下限時期は大宝前後である。また、文章の最初に年月日を記して「一記」と書く形式が7世紀末を下限とすることから、大宝律令以前の木簡であるとされる⁽²¹⁾。出舉は毎年の耕種に先立って農民に稲穀を貸付け、秋収のうち一定の利息とともに還納せしめるものである。出舉には公私とのものがあって、公のものである官稻出舉は諸国に収集する稻を春と夏の二度にわたって貸し付けた後、秋に本稻に利稻を加えて徴収し、国府の行政運営費や中央政府にたいする貢進物料にあてる公的貸借制度である⁽²²⁾。春の出舉は2月後半より3月中旬頃、夏の出舉は5月を中心とする前後の時期と推定され⁽²³⁾、収納は当時における稻の取扱の早晚により9月から11月前後と考えられる⁽²⁴⁾。

4号木簡は出舉した稻の数を記録したもので、下端を欠損しているが、双行になっているところから欠損部にかけて稻を借りた人名とその稻束数を記していたと推定される。このような記載様式は、現存部分では人名の直下に稻束数が確認できないものの、小都市井上薬師堂遺跡出土2号木簡と共通する⁽²⁵⁾。8月20日という日付から、春夏の出舉時ではなく、秋の収納に際して負稻人名と稻束数を記録したものと見られる⁽²⁶⁾。

この木簡は裏面が物差になっており、5寸のところで物差側から刀子で切り込みを入れ、折られている。『木簡概報(一)』に指摘があるように、物差と墨書の先後関係は明らかではない。記載内容が欠損部分に続いていることから、現用記録としての役割が終わった後に5寸のところ

裏面が物差
になっている
木 簡

ろで破壊されたのであろう。

5 □年里五戸

(134)・(15)・(5) 5081

5号は上下両端折れ、右辺削り、左辺割れ。『昭和45年度概報』では「果」のみ判読しているが、改めて観察してみると、「里」である。その上の文字は「年」であろう。ただし「～年里」という里名は知られておらず、不明である。里の下は「五戸」である。五戸は平城宮跡出土木簡などに類例があり、戸令9五家条に規定される「五保」を意味する⁽²⁷⁾。その下には墨痕はない。

付札の可能性がある箇木
裏面に続いているかもしれないが、当初の上下端部と裏面を欠損しており、確認できない。地名と戸数が見えることから、付札の可能性がある。現状で上端部表面右側に角を丸く加工したような痕跡が認められるが、付札の切り込みの跡であろうか。

6 告稟事者受食臼 大伴ア戸手此

・无□在時□吾□□□□□面白

木概1-3 343・21・6 5011

6号は四周削り。表面については墨痕も鮮明である。裏面は、『昭和45年度概報』では推定も含めて8文字を判読していたが、『木簡概報(一)』では、2文字にとどめている。赤外線写真によって観察すると、1・2・5・7文字目が順に「无」「故」「奴」「麻」と判読でき、9・10文字目は残画から「稲取」であろうか。8文字目は上半部の墨痕と下半部の筆の動きから「恭」かと憶測するが、確定できない。

つぎに6号の表面最初の「告」は上申・下達といった特定の方向性がない場合と上申の場合がある⁽²⁸⁾。以下の部分を見ると、この木簡は申請文書なので、上申の意味の「告(もうす)」と捉える。「食」を「させていただく」の意味の「たまふ」⁽²⁹⁾、「白」を藤原宮跡から出土した「宛先の前に申す」という形式の木簡に見える「白(もうす)」⁽³⁰⁾として読むと、「告す、稲の事は受けたまへむと白す」と読める。文意は「稲については、受給させていただきたいと申し上げます」となろう。

続く「大伴ア戸手此」は、稲受給の申請者か、申請の宛先かという二つの可能性があるが、裏面文末の「面白」を「出でて白す」と読むことから考えると、裏面の「吾麻」が稲受給の申請主体となる。裏面最初の部分の文意が取り難いので、「大伴ア戸手此」と「吾麻」との関係がわかりにくいが、まず「手」と「此」との間がやや離れているので、名前を「大伴ア戸手」として「此」を裏面に續くと取り、「大伴ア戸手、此れなし」と読めれば、大伴ア戸手は不在であるという意味になる。以下は憶測を述べると、「故に在時に、奴吾麻、□稲を取らむと出でて白す」と読んで、「ゆえに、大伴ア戸手がいる時に、奴吾麻は、□稲を取りたい（借りたい）と出頭して申し上げます」と取るべきかと考える。その場合、大伴ア戸手は稲を授ける担当者だったが、吾麻が以前に申請した際に不在であったため、戸手がいる時に吾麻は稲受給を改めて申し出ましたという意味になろうか。「奴」は吾麻が自らを卑下して称したものだろう。

6号に記された稲受給は、何によるものであろうか。ここで、裏面に「稲取」と推定される文字があることが注目される。長野県屋代遺跡群から出土した出舉の記録木簡に「稲取人」という用例があるので⁽³¹⁾、6号も出舉にともなう稲貸付の申請文書かと推定される。4号が出舉の記録であったことも考慮される。

7 □□□□子亥戌□

□□□□□□□□□□

(『昭和 45 年度概報』図版 10 の 7 号, 同概報本文 29 頁の 8 号) (163)・37・5 5019 十二支の記録か
7 号は上端及び左右両辺削り, 下端折れ。『昭和 45 年度概報』で「守」「歌」「丸」と見られた文字は, 赤外線写真により, それぞれ「子」「亥」「戌」であることが確認された。十二支が逆順で書かれているので, 右行 4 文字も「辰卯寅丑」と読めるか。これらが年を表していると取ると, 何らかの記録木簡であろうか。

8 □十二篇其□□□

(116)・37・6 5081

8 号は上下両端折れ, 左右両辺削り。『昭和 45 年度概報』には釋文が掲載されていないが, 赤外線写真によって上記の文字が判読できた。習書と考えられるが, 出典は明らかではない。

9 (墨痕なし)

101・22・6 5032

赤外線写真でも墨痕を確認できなかった。しかし形状から付札として製作されたことは明らかであり, 何らかの事情で使用されなかつたか, 使用後に文字を削り取られたものの, 再利用されなかつたかのいずれかであろう。9 号の上側写真的面は平坦に調整されているが, 下側写真的面は切り込み付近の厚さが 3 ~ 4mm で, それ以外の部分が 6mm であるよりも薄く加工されており, 再利用のために文字を削り取った可能性がある。

54 次調査出土木簡 (Fig.144, PL.66)

10 □

(33)・(27)・5 6081

10 号は上下端折れ, 右辺削り, 左辺削れ。築地 SA1400 の存続期間と重なり, 出土遺物により, 8 世紀後半から 9 世紀初頭とみられる青褐色土層から出土した⁽³²⁾。未報告資料である。1 文字分の墨痕があり, 2 本の横画と上に突き抜けない 1 本の縦画からなる。左辺の右手前に 2 本の横画の起筆があるので, 失われた左辺に続かない。縦画は折れた下端より下に続く。右辺が削りであることから, さらに右には横画は伸びない。1 文字の上半分, または右上部分の残画とみられるが, 判読はできない。

註

- (1)『昭和 45 年度概報』1971 年, 17 頁
- (2)横田義章・龜井明徳「大宰府発見の木簡」(『考古学雑誌』55-4, 1970 年), 福岡県教育委員会編・発行『大宰府史跡 昭和四十五年度発掘調査の概要』1971 年, 九州歴史資料館編・発行『大宰府史跡出土木簡概報(一)』1976 年。
- (3)木簡の釋文, 法量, 型式の記載方式は, 奈良文化財研究所の方式によった。九州歴史資料館編・発行『大宰府史跡』2002 年。
凡例 561 頁を参照。なお「木簡 1-1」は『大宰府史跡出土木簡概報(一)』1 号木簡を意味する。4 次調査出土木簡の本報告文は, 酒井芳司「大宰府史跡藏司西地区出土木簡の再検討」(『九州歴史資料館研究論集』30, 2005 年)と同「福岡・大宰府跡藏司西地区(1977 年以前出土の木簡)」(『木簡研究』37, 2015 年)をふまえて, 改稿したものである。
- (4)『昭和 45 年度概報』26 ~ 7 頁。ただし 1 号木簡が出土した日付は, 概報では 1970 年 3 月 18 日とするが, 同月 10 日付の「西日本新聞」の記事から, 同月 7 日朝に発見されたことが知られる。伊崎俊秋「大宰府史跡の発掘調査等」(『九州歴史資料館編・発行』「大宰府史跡発掘 50 年記念特別展 大宰府への道—古代都市と交通—」2018 年) 185 頁も参照。
- (5)奈良文化財研究所編・発行『評制下荷札木簡集成 奈良文化財研究所史料 第 76 冊』2009 年, 11 頁(市大樹氏執筆)
- (6)横田・龜井氏註 2 前掲論文, 108 ~ 8 頁。要里制の施行期間は, 岸俊男「古代村落と要里制」(『日本古代耕軒の研究』培文房, 1973 年) 263 ~ 7 頁により, 龜亀元年(715)に施行, 天平 11 年(739)末から翌 12 年初頭に廢止が通説であつたが, 鎌田元一「要里制の施行と龜亀元年式」(上田正昭編『古代の日本と東アジア』小學館, 1991 年) 128 頁は, 長屋王母庄跡出土の和銅 8 年計帳軸の焼討を出発点に, 龜亀 3 年 6 月から 11 月 8 日の間に施行された可能性を指摘した。
- (7)奈良国立文化財研究所編・発行『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報(十四)』1999 年, 13 頁上段, 奈良文化財研究所編『同概報(十七)』2003 年, 20 上段 109・21 頁下段 132, 「同概報(十八)」2004 年, 27 上段 166・28 頁下段 177, 松浦正昭編『日本の美術 第 455 号 飛鳥白鳳の仏像 古代仏教のかたち』至文堂, 2004 年, 第 38 図, 市大樹「石神遺跡(第

- 一五次)の調査第一一二二次 4 木簡 荘田木簡」(『奈良文化財研究所紀要 2003』2003 年) 125 頁。
- (8) 稲岡耕二「國語の表記史と森ノ内道跡木簡」(『木簡研究』9, 1987 年) 121 頁
- (9) 当時の一般民衆の識字率は低かったと考えられる。山中章「行政機構の非識字層」(『日本古代都城の研究』柏書房, 1997 年) 331 頁は、都城出土の線刻土器や記号墨書き土器を分析し、諸官から徵發された膨大な数の課役民達の相当数が非識字層であった可能性を指摘する。
- (10) 「昭和 45 年度概報」27 頁
- (11) 「延喜式」の条文番号は、虎尾後改編「延喜式上」集英社, 2000 年巻末の「条文番号・条文名一覧」による。
- (12) 新訂増補国史大系「令集解」公式令 68 授位任官条占吉間音, 893 頁 5 行目。養老律令の条文番号は、日本思想大系「律令」岩波書店, 1976 年による。
- (13) 少弐小野大夫は小野老で從五位上。少弐栗田大夫は栗田馬義で從五位下。筑後守葛井大夫は葛井大成で外從五位下。筑前守山上大夫は山上惟良。豊後守大伴大夫は大伴首昌也。二人とも五位官人と推定される(虎尾達哉「勢議制の成立一大夫制と令制四位」『日本古代の参議制』吉川弘文館, 1998 年, 63 ~ 4 頁)。なお、虎尾氏が葛井大成を從五位下としたのは、外從五位下の誤りである。(就日本紀) 神龜 5 年 5 月丙辰条参照。
- (14) 菅住靖彦「筑前国司をめぐる若干の検討」(『九州歴史資料館』研究論集 13, 1988 年) 12 頁
- (15) 例えば、「統日本紀」大宝 2 年 11 月庚辰条に不破郡大頭宮勝木実に外從五位下を授けたことが見える。
- (16) 篠原国(筑後国)上闇岬の大伴部博麻(『日本書紀』持統天皇 4 年 9 月丁酉・10 月乙丑条)、薩摩国某郡の大伴部足床・大伴部福足(『大日本古文書 編年文書』巻之二, 20 頁)。
- (17) 奈良文化財研究所編「飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報(十五)」2002 年, 18 頁下段 105, 「同概報(十七)」2003 年, 12 頁上段 18。
- (18) 鍋江宏之「7世紀の地方木簡」(『木簡研究』20, 1999 年) 291 頁
- (19) 奈良国立文化財研究所編・発行「平城宮発掘調査出土木簡概報(三十一)」1995 年, 34 ~ 5 頁などを参照。
- (20) 『日本書紀』大化 2 年 3 月辛巳条・壬午元年 7 月丁巳条を参照。
- (21) 岸俊男「木簡と大宝令」(『日本古代文物の研究』塙書房, 1988 年) 229 頁
- (22) 藤田香織「出舉一天平か延喜まで」(『日本古代財政史の研究』塙書房, 1981 年) 49 頁、八木充「出舉本簡見書」(門脇裕二編「日本古代国家の展開 下巻」思文閣出版, 1995 年) 357 頁。
- (23) 舟尾好正「出舉の実態に関する一考察—編中大祝負死亡帳を中心として—」(『史林』56-5, 1973 年) 90 ~ 93 頁
- (24) 八木氏注 22 前掲論文, 358 頁
- (25) 平川南・清雄雄二・三上喜孝・田中史生「井上葉姫跡出土木簡の再検討」(小都市教育委員会編・発行「上里田跡 調査概報 小都市文化財調査報告書第一四二集」2000 年) 64 ~ 73 頁。なお、このような人名の書き出しをそろえて段組に列記する歴名記載様式の木簡は 7 世紀に出現した(鍋江氏註 18 前掲論文, 293 頁)。
- (26) 八木氏注 22 前掲論文, 343 頁
- (27) 奈良国立文化財研究所編・発行「平城宮木簡二解説」1975 年, 2292 号木簡を参照。
- (28) 前者の例は、假令令 10 官人遣任條「凡官人、遣任及公使、父母喪応解官、無人告者、雖家人経所在官司、陣牒告追。若奉勅出使、及任臣近要者、申官免分」などがある。後者の例は、告朔を「ついたちまうし」と読み場合が挙げられよう(『日本書紀』天武天皇 5 年 9 月丙寅条の北野神社本古訓。新訂増補国史大系「日本書紀後篇」342 頁を参照)。
- (29) 有坂秀介「二二段活用の補助動詞「たまふ」の源流について」(『国語と国文学』10-5, 1933 年) 85 ~ 88 ~ 9 頁
- (30) 奈良国立文化財研究所編・発行「藤原宮木簡一解説」1978 年、総説付章「藤原宮木簡の記載形式について」31 頁。東野治之「木簡に現れた『某の前に申す』という形式の文書について」(『日本古代木簡の研究』塙書房, 1983 年) 255 ~ 283 頁。
- (31) 長野県埋蔵文化財センター編・発行「長野県信代遺跡群出土木簡」1996 年, 87 号木簡, 94 ~ 5 ~ 156 頁
- (32) 「昭和 53 年度概報」17, 34 頁

2) 墨書き土器 (Fig 145 ~ 146, PL.66)

16 点の墨書き土器を確認したが、判読できないものが多い。また、4 次調査北 Tr の排土中 (SD099) から墨痕土器が 1 点出土しているが、報告を割愛した。

須恵器蓋 (1) 握宝珠形の握みを貼付する。口縁部を欠くが、天井部は平坦であり、壺蓋になるか。色調は内外面とも灰白色を呈する。墨書きは握みの上面に 1 文字あり、「人」と判読した。54 次調査灰白砂からの出土。

須恵器有高台坏 (2 ~ 3) 2 は須恵器の有高台坏で、2 の口縁部は斜め上方に直線的に開く。高台は断面台形を呈し、低めのもの。器高 5.4cm、復元口径 17.6cm、高台径 11.2cm を測る。

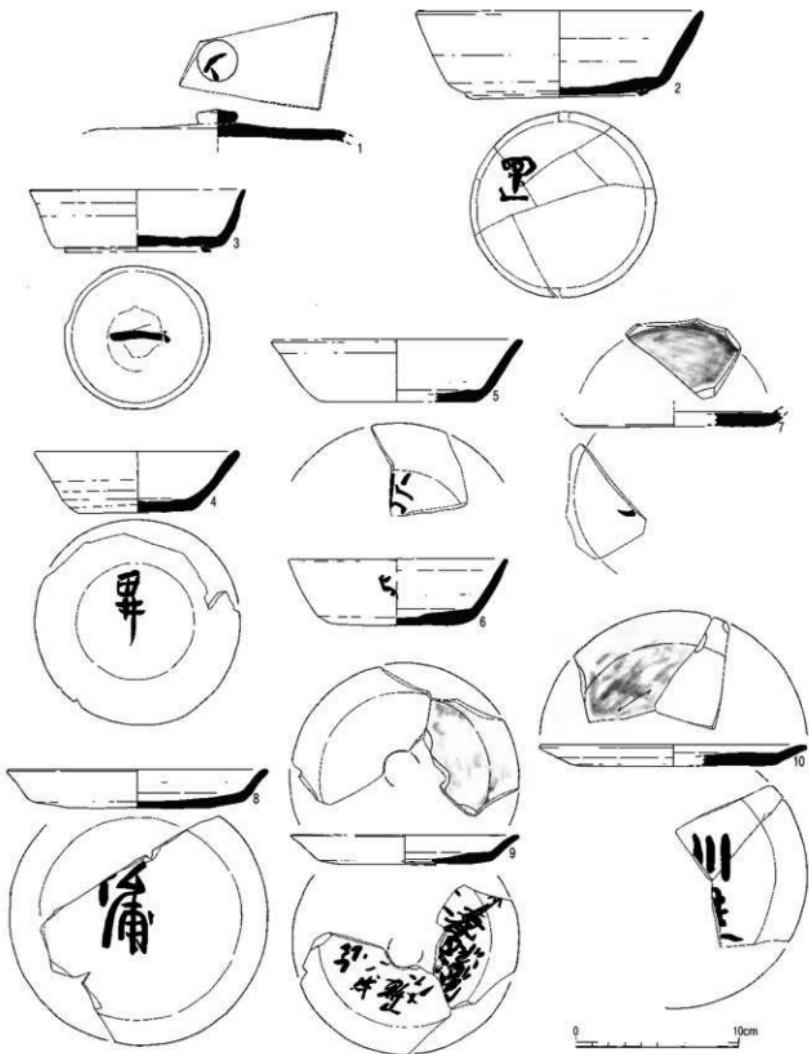


Fig.145 墓書土器実測図① (1/3)

内外面ともナデ調整による。墨書は高台内の左上に1字あり、「四」の下に「止」の字を書いており、「罝」(岡)と読める。なお、「罝」の文字は左端にあり、その右側が欠損しているためもう1字あった可能性を有する。不丁官衙の南北区画溝SD2340出土木簡には、「罝都全」「罝都紫草」等の文字がみられる。当土器は4次調査上面出土と注記があるので、出土地の詳細は不明。3は口縁部直下を強く撫でる。薄手の作りで、口唇部はシャープ。底部には細身で低い高台を貼付する。器高3.8cm、口径13.2cm、高台径9.0cmを測る。墨書は高台内の中央に1文字あり、「一」と判読できる。木簡が出土した自然流路SD099に当たる北Tr4区の灰黒粘土出土。

「田井」

須恵器壺(4~7) 4~7は平底の須恵器壺である。4・5の口縁部は底部から斜め上方に直線的に聞くもので、6はやや内湾気味に立ち上がる。7は底部破片。底部は何れもヘラ切り後、未調整のもの。4は器高3.8cm、口径12.5cm、底径7.0cmを測る。墨書は底部外面に2文字あり、縦方向に「田井」と書かれている。60次調査瓦溜SK1510の出土。5は器高3.8cmで、口径15.4cm、底径9.6cmに復元した。底部外面に縦横方向の墨書があるが、小破片でもあり、判読不可。65-2次調査茶色土の出土。6は器高4.1cm、口径13.5cm、底径9.5cmを測る。墨書は口縁部外面に1文字あるが、判読できない。7は底部破片で、底径は12.2cmに復元した。墨書は底部外面中央にあり、文字の左側部分が残る。「一」になるか。また、内面には墨痕が顕著に遺存し、硯として使用している。54次調査青褐粘土の出土。

「松浦」

須恵器皿(8~10) 8~10は須恵器皿で、口縁部は外反する。底部は何れもヘラ切り後ナデによる。8は器高1.4cmで、口径16.0cm、底径12.8cmに復元した。墨書は底部外面に2文字縦方向に書いており、上の文字は上部を書くが、右下に「ム」、左側に「丨」がある。下の文字は「浦」と判読でき、両者で「松浦」と判読した。54次調査青褐粘土の出土。9は器高1.8cm、口径14.0cm、底径10.6cmを測る。底部中央に穿孔を施している。墨書は外底部一面にあり、図示した左から2文字目には「戌」の文字がみえる。他は判読できないが、習書したものと考えられる。また、右半部の内底面には墨痕が遺存し、硯として使用している。10は器高1.8cmで、口径16.4cm、底径12.6cmに復元した。前者に比して肉厚な作り。墨書は底

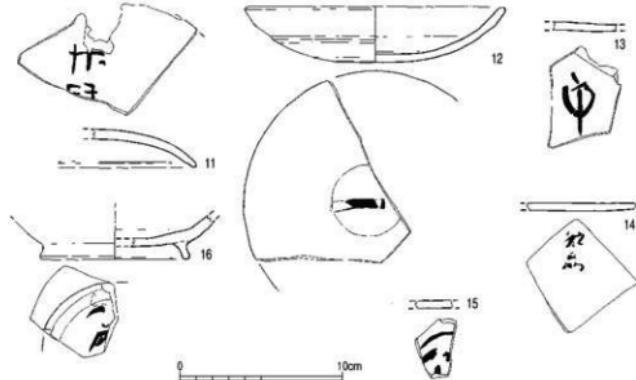


Fig.146 墨書土器実測図② (1/3)

部外面に2文字縱方向に書いており、上の文字は「川」と判読できる。下の文字は「佐」の右端部分で、その下の横線を「爻」の右端部分とすると「進」の文字になるが、「佐」部分は横線一つが足りない。内面は墨痕が明瞭で、転用硯として使用している。60次調査瓦溜SK1510の出土。

土師器蓋（11） 土師器蓋の口縁部から天井部にかけての破片で、天井部は丸みを帯びる。或いは壺になるか。口唇部内面には浅い段を持つ。内面ヘラミガキで、丁寧な作り。墨書は天井部外面に2文字あり、直線的な縱横の線があるものの、判読不可。62-2次調査SX1561（瓦層）の出土。

土師器壺（12） 口唇部は肥厚する。底部は丸みを帯びるが、径4.5cm程の平坦面を持つ。内面はヘラミガキを一部ナデ消している。墨書は底部外面中央に1文字あり、「一」と判読した。木簡が出土した自然流路SD099に当たる北Tr灰青色粘質土中の出土。

土師器皿（13～15） 13～15は土師器皿或いは壺の底部小片。13は「中」と判読した。14は2文字あるが、遺存状態も悪く、判読できない。60次調査炭層Iの出土。15には4箇所墨があり、上部に円弧の線、その下左右に墨の点、その中央に縱線があり、上部の円弧を眉毛、左右の点を目、中央の縱線を鼻とみると顔となり、人面墨書き土器の可能性がある。65-1次調査SD1555の出土。

土師器壺（16） 壺の底部破片で、断面ハ字形の低めの高台を貼付する。高台径は9.2cmに復元した。外面ともヘラミガキ調整による。墨書は高台内にあり、左側の眉毛と目を描き、目の中には点を描き込み瞳を表現している。右半分と口を欠くが、人面墨書き土器になる。15同様、65-1次調査SD1555の出土。

人面墨書き土器

人面墨書き土器

3) 刻書・籠書き土器 (Fig.147, PL.66)

1点の刻書き土器（1）と、2点の籠書き土器（2・3）が出土している。

須恵器蓋（1） かえりを有する須恵器の壺蓋で、天井部は丸みを帯びる。かえりは口縁端部を折り返して作っている。器高3.4cm、復元口径12.4cmを測る。天井部には三角形の攝みを貼

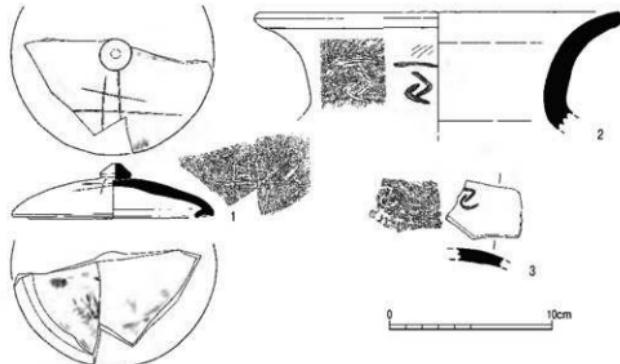


Fig.147 刻書・籠書き土器実測図 (1/3)

付している。刻書は天井部外面にあり、半乾きの状態で縦横 2 本の細い線を刻んでいる。「井」字形のヘラ記号と思われる。内面には墨痕があり、転用硯として使用している。54 次調査暗茶土の出土。

須恵器甕（2）須恵器甕の口縁部破片で、口縁部は緩やかに外反する。口唇部直下に浅い沈線を 1 条巡らせる。口径は 22.6cm に復元した。頸部外面はハケ目をナデ消している。竪書きは頸部外面にあり、横線の下に「く」形とそれを反転させた「く」形の記号「々」を籠先で描いている。太宰府市宮ノ本 4 号窯跡及び熊本県大江遺跡群に出土例があり、窯記号かとみられる。54 次調査淡黄粘土の出土。

須恵器蓋（3）須恵器の小片で、カキメを施していることから蓋の天井部として実測した。外面に 2 同様の記号を籠先で描いている。4 次調査築地南側溝 SD102 の出土。

4) 陶 砚 (Fig.148 ~ 155, PL.67 ~ 70)

形態分類

太宰府史跡からは種々な形態の陶硯が出土しており、以下の如く分類している。

- I 類：円面硯…硯面が円形をなし、その周囲に海部及び外堤を有するもので、脚部の形態により、蹄脚（A）・獸脚（B）・多足（C）・圈足（D）・低脚（E）に細分できる。
- II 類：円形硯…硯面は円形を呈するが、海部が不明瞭なもの（A）、坏蓋形を呈するもの（坏蓋硯：B）、皿形の器形に脚を付した形態のもの（脚付円形硯：C）、亀頭形の取手を貼付したもの（特殊円形硯：D）がある。
- III 類：風字硯…平面形が「風」字の旁に似るもので、硯面が單面のもの（A）と二面のもの（B）がある。
- IV 類：方形硯…平面形が方形若しくは長方形を呈するもの。
- V 類：形象硯…動物・宝珠・花などを形取った形態をなすもの。
- VI 類：土器転用硯…蓋・坏・甕・鉢・壺等の土器を硯に転用したもので、猿面硯は転用硯の範疇に含めた。

概 要

歲司官衙跡平地部では、8 ~ 9 世紀代の定形硯（I D 類円面硯・III 類風字硯）15 点と転用硯 187 点を確認した。遺構的には 54 次調査の溝 SD1395A から円面硯 1 点と転用硯 6 点が、60 次調査溝 SD1505 から転用硯が 10 点、同瓦溜 SK1510 からは転用硯が 18 点、65-2 次調査 SX1561（瓦層）から円面硯 1 点と転用硯が 16 点出土している。

定形硯の内訳は、圈足円面硯が 13 点、風字硯が 2 点で、定形硯の大半を圈足円面硯が占める。転用硯の内訳は、須恵器蓋 70 点（37.4%）、甕 56 点（29.9%）、皿 22 点（11.8%）、有高台坏 16 点（8.6%）、壺 12 点（6.4%）、坏 5 点（2.7%）で、平瓶・盤・鉄鉢形が各 1 点あり、坏蓋と甕を多用する点は他の太宰府政府周辺官衙跡と同様である。また、土師器の椀・甕の転用硯もみられた。なお、陶硯総数に占める定形硯の比率は 7.4% であり、周辺官衙跡においては低い数値を示す。

定形硯 (Fig.148, PL.67)

圈足円面硯（1 ~ 8）1 ~ 8 は圈足円面硯（I D 類）である。1 ~ 3 は陸部から脚上部突

帶にかけての破片で、1の海部は浅く、外堤もそれ程高くはない。外堤直下に三角突帯を貼付する。現状で長方形透かし孔が3個遺存し、復元すると14個になる。陸部はよく擦れしており、墨痕も明瞭である。外堤径14.0cmに復元した。54次調査青灰粘土の出土。2はシャープな作りで、海部は深く外堤も多い。外堤直下に三角突帯を貼付する。透かし孔は半円形を呈し、3

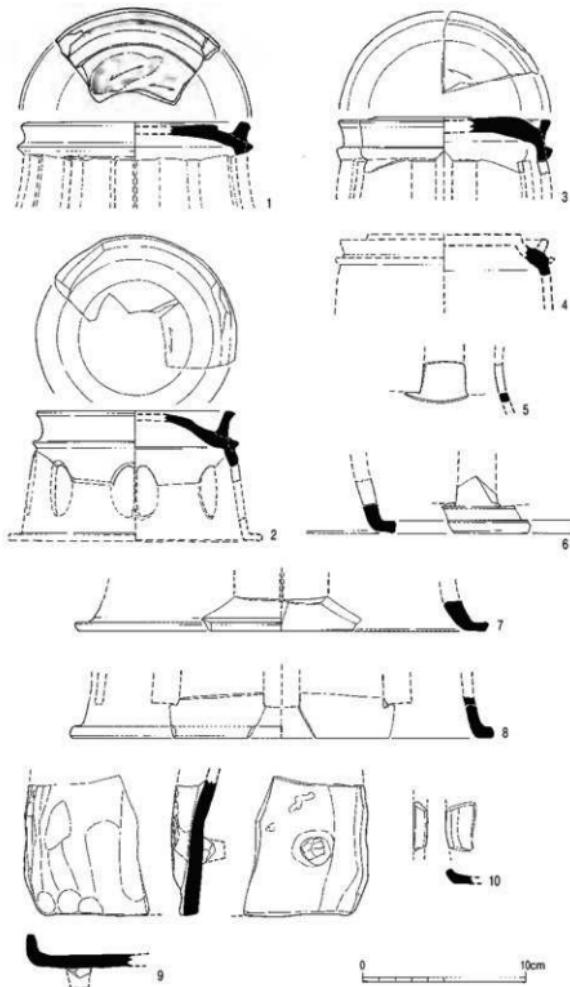


Fig.148 定形窓実測図 (1/3)

個遺存するが、復元すると8個施していたものとみられる。外堤径12.2cmに復元した。陸部は余り擦れておらず、墨痕も僅かに遺存する程度。65-2次調査SX1561(瓦層)の出土。3の海部は浅く、外堤も低い。長方形透かし孔が2個残存するが、復元すると8個になる。外堤径は13.0cmに復元した。陸部中央はよく擦れているが、墨痕は確認できなかった。60次調査黄灰土の出土。4は海部から脚上部突帯にかけての破片で、外堤及び突帯を欠損する。透かし孔は長方形であるが、小片であるため何個施していたかは不明。60次調査砂層の出土。

5～8は脚部の破片で、5は脚柱部の小破片であるが、方形の透かし孔を施していたか。6～8は裾部の破片で、何れも端部はL形に屈曲し、長方形の透かし孔を施している。7は脚裾径25.4cmに復元したが、透かし孔の個数は不明。8は透かし孔が2個残存し、復元すると9個になる。脚裾径は26.0cmに復元した。また、6の透かし孔直下には細い沈線を巡らせている。5・6は65-1次調査SD1556出土、7は54次調査SD1395A出土、8は60次瓦溜SK1510の出土。他に54次調査SD1395A、同茶灰粘土・灰白砂、65-1次調査SD1555、65-2次調査暗灰土から闊足円面観の脚柱部破片が1点ずつ出土している。

風字硯(9・10)9・10は風字硯(皿類)で、破片であるため單面か二面かは判らない。9は陸部左側の破片で、残存部位の中程から屈曲し、海部へと続く。側縁はL字形に折り曲げている。裏面には柱状の脚を貼付する。陸部は擦れておらず、墨痕もみられないことから未使用品であろう。10は陸部左側縁の小片で、L字形をなす。残存部位に墨痕は認められない。9は60次調査灰色土、10は同じく黄灰土から出土した。

転用硯 (Fig.149～155, PL.67～70)

1～62までが須恵器の転用硯で、1～22が蓋、23～33は有高台坏、34～36は坏、37～44は皿、45～47は壺、48は鉄鉢形土器、49～62は甕である。1は坏の可能性もあるが、一応蓋として実測した。天井部はドーム形をなし、天井部外面は手持ちヘラケズリによる。口径は11.6cmに復元した。内面全体に墨痕が遺存するが、余り擦れておらず、使用頻度が低かったと思われる。4次調査の出土であるが、詳細な出土場所は不明。2・3は口縁部内面にかえりを有する蓋で、2のかえりは低く、段をなす程度。復元口径11.8cm、内面を硯面とし、よく擦れており、墨痕も顕著である。3のかえりは断面三角形を呈する。天井部は高めで、擬宝珠形の掘みを貼付する。器高3.0cm、口径14.2cmを測る。内面はよく擦れており、墨痕も顕著。この土器は自然流路SD099で、木簡が出土した腐植土層の上層に当たる灰色粘土(B粘)出土で、藏司木簡の年代の下限を示すものとして重要である。3は60次調査で、築地整地土の下位となる腐植土から出土している。

4・6～10・13・14は鳥嘴状口縁をなす蓋で、7・8・14は鉗形掘み、9は円柱形掘み、13は擬宝珠形の掘みを貼付する。6・13の天井部は高いが、7・8・14の天井部は低平なもの。9の天井部は高く、平坦面を持つ。調整はいずれも口縁部ヨコナデ、天井部外面回転ヘラケズリによる。墨痕は内面にあり、6・10の墨痕は顕著であるが、7・8の墨痕は不明瞭。13も墨痕は不明瞭であるが、硯面はよく擦れている。7は器高1.7cm、復元口径14.6cmで、8は器高2.5cm、復元口径16.6cm、9は器高3.0cm、口径16.6cm、13は器高3.0cm、復元口径15.1cm、14は器高1.9cm、復元口径15.6cmを測る。4・8は60次調査灰色土、6は60次調査SD1505、7は65-1次調査灰砂、9は65-2次調査SX1561(瓦層)、10は60次調査暗灰粘土、13は

藏司木簡の
下限を示す

54次調査 SX1394, 14は60次調査灰色粘土の出土。

5は口縁部内側の段が不明瞭なもの。天井部は高めで、擬宝珠形の撮みを貼付する。内面に墨痕があるが、不明瞭で余り擦れていない。器高3.0cm、復元口径12.7cmを測る。60次調査灰色土の出土。11は口縁端部が僅かに立つもの。天井部は低平で、撮みは欠損する。内面の墨痕は明瞭で、よく擦れている。65-2次調査SX1561（瓦層）下層の出土。12は1/4弱の破片で、口縁端部を欠く。天井部は低平で、中央に撮みの形骸化した高まりがみられる。内面の墨痕は不明瞭であるが、観面はよく擦れている。60次調査新期溝（S6）の出土。

15の口唇部はシャープで、内側を強く撫でている。天井部は低平で、撮みは貼付していない。

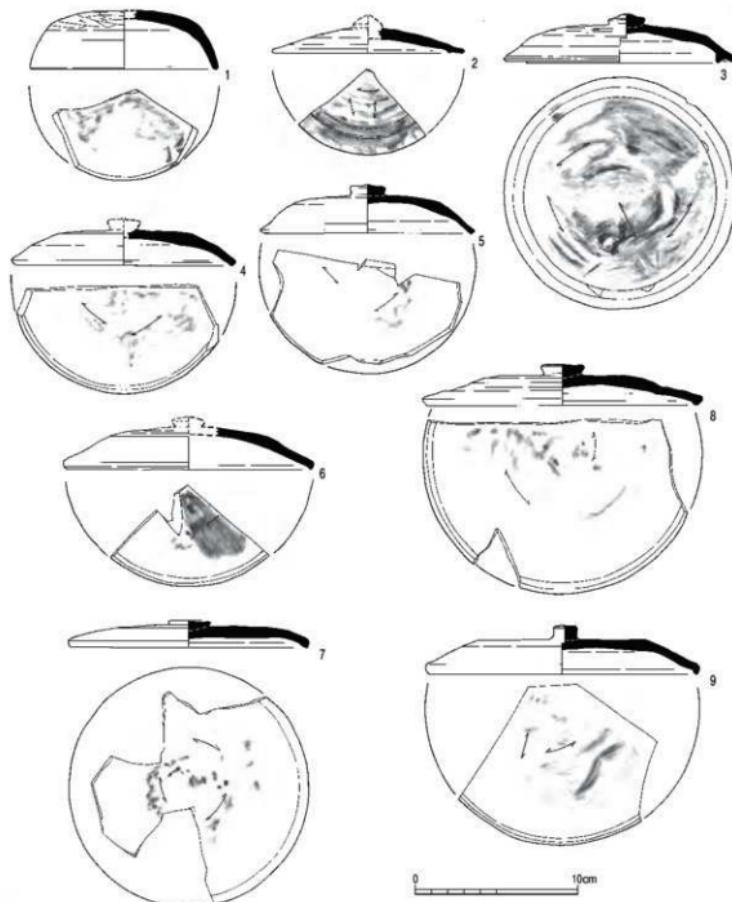


Fig.149 転用窯実測図① (1/3)

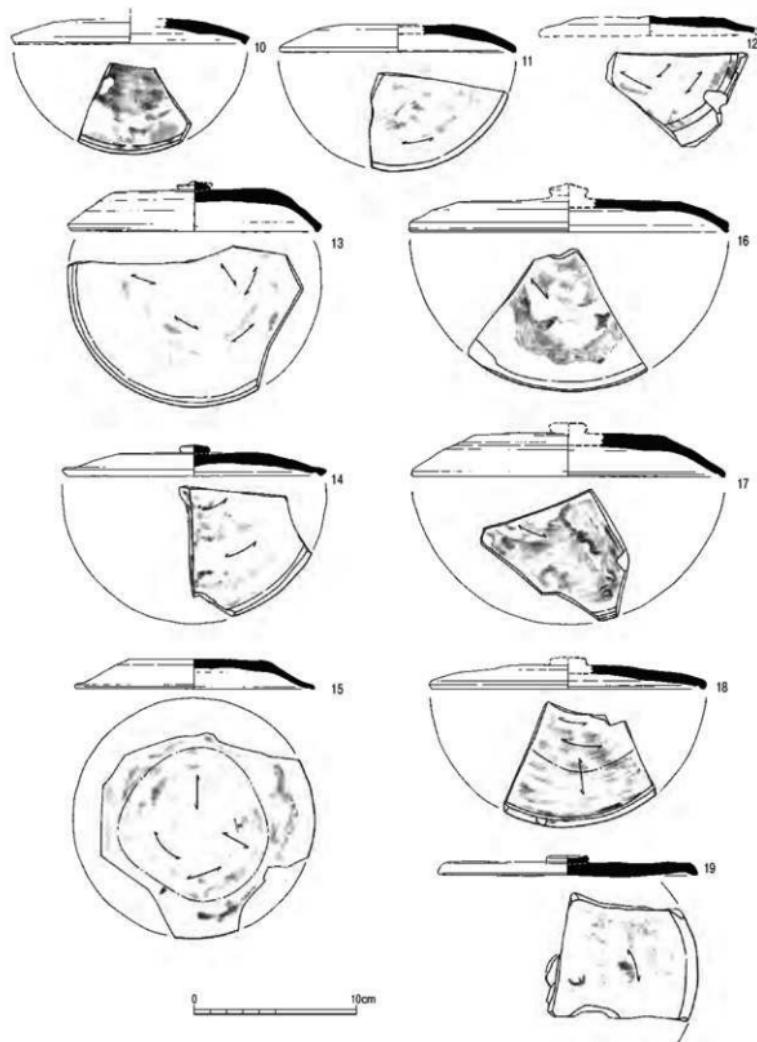


Fig.150 軸用硯美測圖② (1/3)

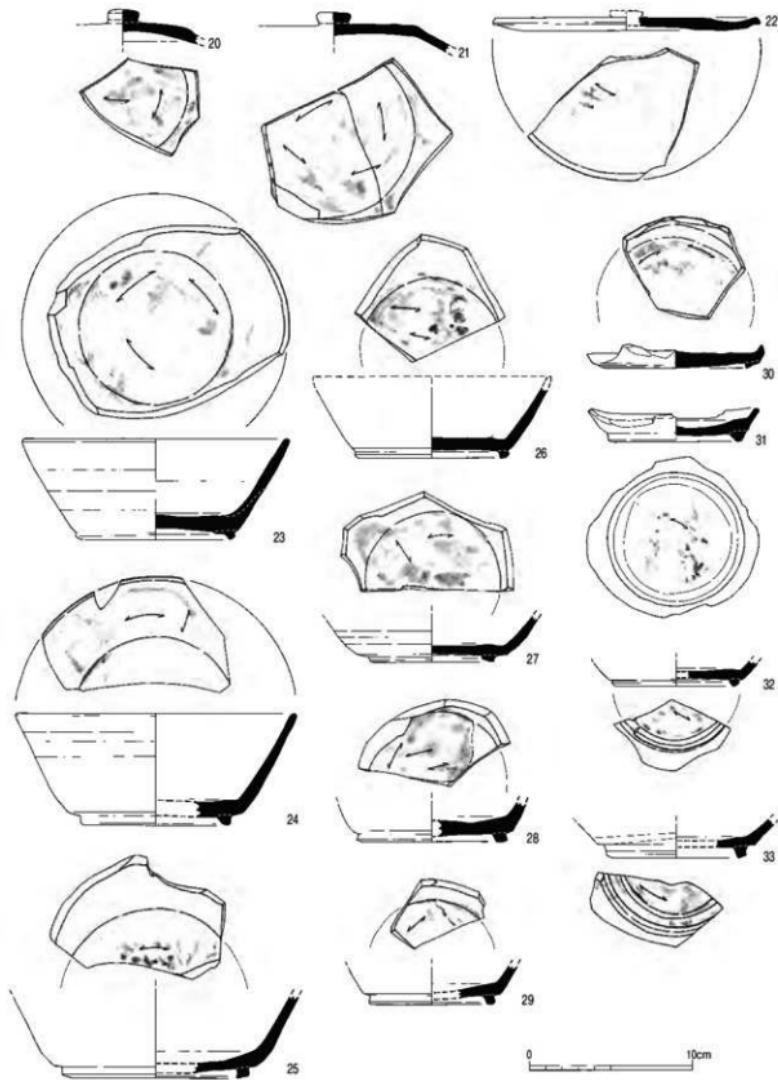


Fig.151 転用観測図③ (1/3)

内面の墨痕は明瞭で、よく擦れている。器高 1.8cm、復元口径 14.8cm を測る。54 次調査青褐粘土の出土。16 の口縁端部は垂直に立ち上がり、面を持つ。天井部は低平で、撮みは欠損する。内面の墨痕は明瞭であるが、硯面は余り擦れていない。60 次調査 SD1505 の出土。

17・18 は口縁端部内面にヘラ先による沈線を施した蓋で、口径は 17 が 19.3cm、18 は 16.7cm に復元した。17 の天井部は高く、18 は平坦なもの。共に撮みは欠く。内面の墨痕は明瞭で、硯面も擦れている。両者とも 60 次調査瓦溜 SK1510 から出土した。19 の口縁端部は外方に突き出る。天井部は平坦で、低い鉢形の撮みを貼付する。墨痕は不明瞭で、硯面は余り

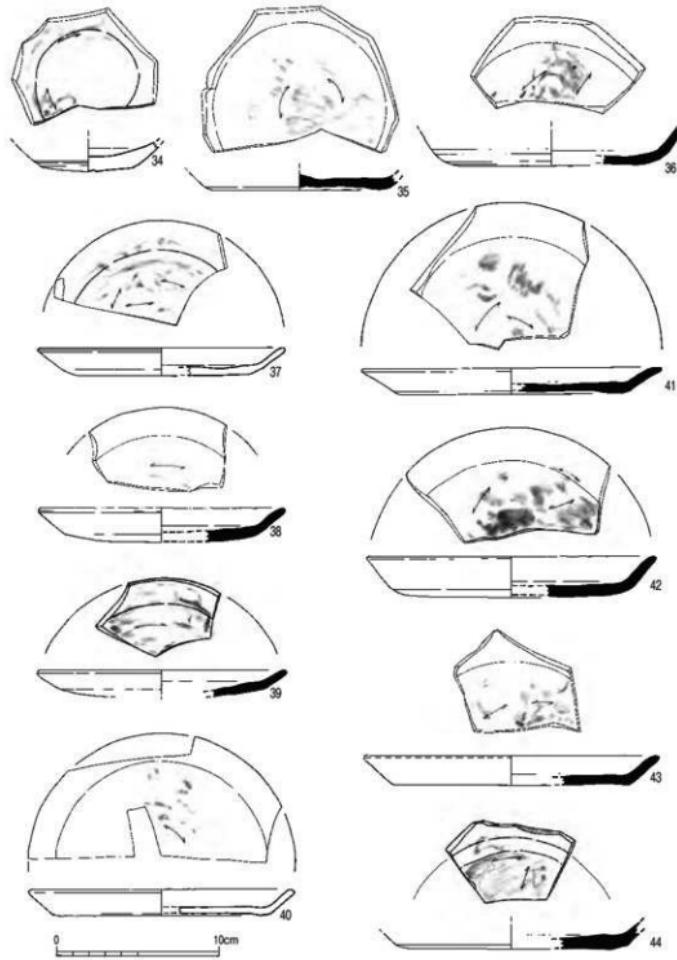


Fig.152 転用硯実測図④ (1/3)

擦れていない。65-1 次調査炭層の出土。

20・21は天井部の破片で、平坦面を持つ。ともに鉗形の撮みを貼付する。内面の墨痕は明瞭で、硯面はよく擦れている。また、21は破面にも墨痕が遺存している。共に54次調査青褐粘土の出土。22は焼き歪みにより、口縁部が外反しているが、本来より天井が低平なものであったとみられる。墨痕は不明瞭で、硯面は余り擦れていない。6は口径16.4cmに復元した。65-2 次調査SX1561（瓦層）下層の出土。

22～33は有高台環である。高台の断面形状は23・24・26が台形、25・27～29・33が方形、30・31が三角形、32が五角形をなし、23・26・31・32は底部端に貼付する。調整は何れ

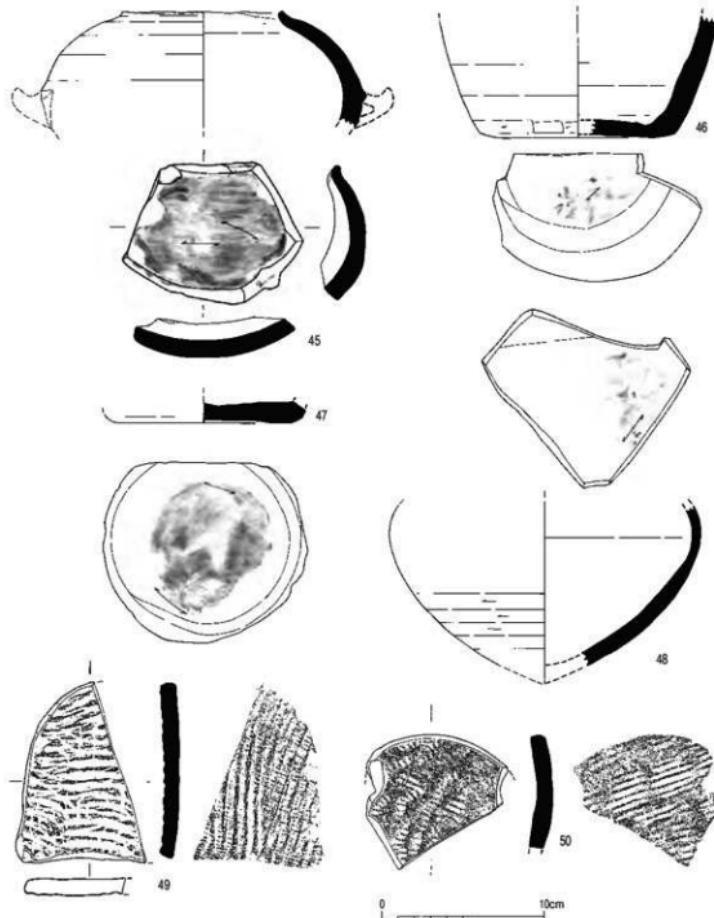


Fig. 153 标用硯実測図⑤ (1/3)

も内外面ともナデによる。23～30は内底面を硯面とするが、31～33は高台内を硯面としており、33は破面にも墨痕が遺存する。26～29・32・33の墨痕は明瞭で、硯面もよく擦れている。また、30・31は坏部を打ち欠いており、31は接地面を研磨している。23は器高6.2cm、復元口径16.4cm、高台径9.8cmで、24は器高6.9cm、口径17.4cm、高台径9.2cmを測る。23・26・29・32は60次調査瓦溜SK1510、24・28・30・33は54次調査青褐色粘土。



Fig.154 転用硯実測図⑥ (1/3)

25は65-2次調査灰褐色下層、27は60次調査暗灰粘土、31は60次調査灰色粘土から出土した。

34～36は無高台の壺で、何れも口縁部を欠く。35・36は平底で、34の底部は丸みを帯びる。何れも内底面を覗面としているが、墨痕は不明瞭。34は60次調査下層の炭層、35は65-2次調査SX1561（瓦層）、36は60次調査瓦窯SK1510から出土した。

37～44は皿で、44は口縁部を欠く。37・39・40の口縁部は直線的に開き、38・41～43の口縁部は外湾氣味に開く。37・40～44の底部は平底であるが、38・39の底部は丸みを帯びる。何れも内面を覗面としており、39・42～44の墨痕は明瞭で、覗面はよく擦れている。

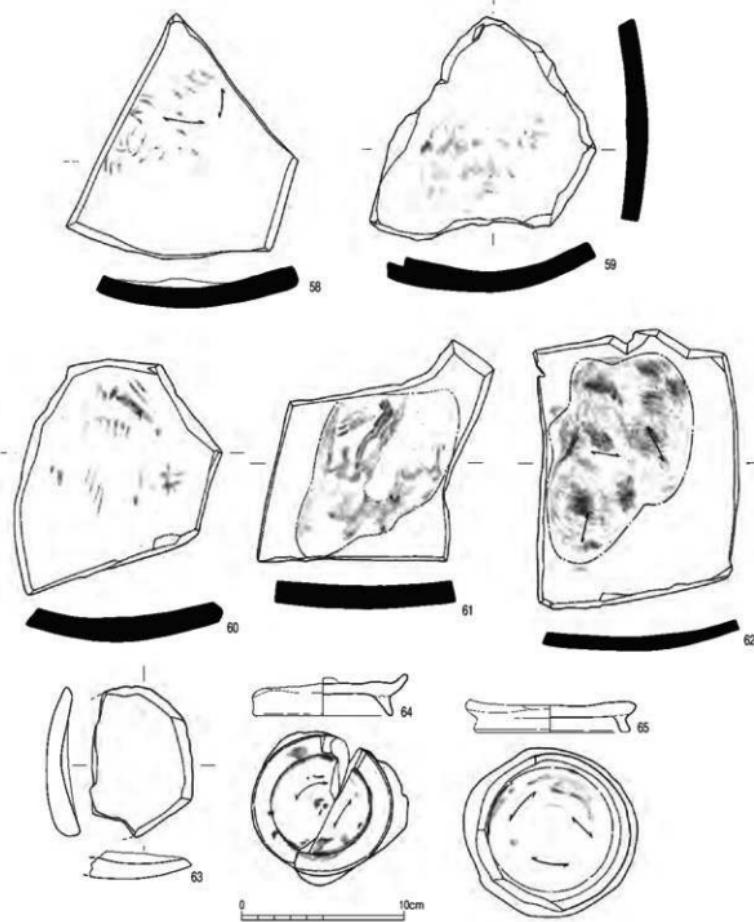


Fig.155 転用覗窓測図⑦ (1/3)

また、44は破面にも墨痕が遺存する。37は器高1.7cmで、口径は15.2cm、底径は10.8cmに復元した。42は器高2.5cmで、口径は17.8cm、底径は13.2cmに復元した。37・40は65-2次調査SX1561(瓦層)下層、38はSX1561(瓦層)、39・44は54次調査青褐色粘土、41は65-2次調査茶色土、43は60次調査黄色粘土の出土で、42は60次調査出土であるが詳細な出土地は不詳。

45～47は壺で、45は体部、46・47は底部破片。45は体部中位に取手を付した双耳壺で、薬壺形をなす。口縁部は短く直立するが、端部を打ち欠いた後研磨している。また、取手も使用の際に邪魔になることから打ち欠いている。内面を硯面とするが、墨痕は顯著で、破面にも墨痕が遺存し、硯面はよく擦れている。なお、外面の接地箇所もこすれており、使用頻度が高かったことが窺われる。54次調査青褐色粘土の出土。

46は体部下半から底部にかけての破片で、外面はケズリ後ナデ調整による。内面及び底部外面の二面を硯面とした珍しい転用硯。墨痕は不明瞭。65-1次調査SD1555の出土。47は体部を打ち欠き、底部のみとしている。底部外面はヘラケズリによるが、一部に板状圧痕を留める。底部外面を硯面としており、墨痕は明瞭であるが、余り擦れていない。

48は鉄鉢形土器で、口縁部と底部を欠く。底部は尖底を呈しよう。外面の下半部は回転ヘラケズリ、上半部はケズリ後ナデによる。内面を硯面とするが、墨痕は不明瞭で、余り擦れていない。60次調査SD1505の出土。

49～62は甕の胴部破片を利用して硯としたもので、①破片の側縁を丁寧に研磨し、隅丸方形ないしは楕円形を呈するもの(49～52)、②破片の側縁を打ち欠き、方形・台形・長方形ないしは楕円形を呈するもの(53～56・62)、③破片を打ち割っただけのもの(57～61)の三者がある。①が所謂猿面硯に該当する。調整は外面が平行・格子・擬格子タタキ目、内面が同心円・円弧・平行当具による。

49～52は胴部小片で、側縁の一部を丸く研磨しているが、墨痕が付着しておらず、未使用品と考えられる。49は60次調査SK1510、50は65-2次調査床土、51は65-2次調査灰褐土、52は54次1395Aの出土。53～56・62は破片の側縁を打ち欠いたもので、53は楕円形、54・55が台形、56は方形、62は長方形を呈する。55・62は内面の当具痕が消えるほどによく擦っている。53・54・56には墨痕は付着しておらず、未使用品。56は長さ10.4cm、幅9.5cmで、62は長さ11.5cm、幅12.3cmの大きさ。53は54次調査SD1395A、54は60次調査築地SA1410基壇中、55は54次調査灰色土、56は60次調査炭層Iの出土。62は54次調査青灰粘土の出土。57～61は破片を打ち割っただけのもので、多角形をなす。57～61の内面には墨痕が顯著にみられ、よく擦れている。57は54次調査側溝、58は65-2次SE1558、59は60次調査暗灰粘土、60は54次調査SD1505、61は54次調査暗褐粘土の出土。

63～65は土師器を硯に転用した珍しいもの。63は甕の胴部破片で、側縁を丸く打ち欠き、若干研磨している。墨痕はルーペによる観察で、僅かに遺存していることを確認した。64・65は楕の底部破片で、64は三角形、65は方形の高台を貼付する。64・65共に体部を打ち欠いた後研磨している。両者とも高台内を硯面としており、墨痕は明瞭に遺存し、よく擦れている。高台が円面硯の外堤の役割をなす。63は60次調査SD1513、64・65は54次調査青褐粘土の出土。

(8) 生産関連遺物

本項では、製塙・漆製品・鍛冶・鋳造等の生産に関わる特殊遺物を報告する。

1) 製塙土器 (Fig.157, PL.71)

形態分類

製塙土器は形態により大きく3類に大別し、内面の調整等により細分した。

I 類：鹹水煎熬用の斐形土器で、タタキ成形による。所謂、玄界灘式製塙土器と呼ばれるもので、口径23cm前後の大型品をA類、口径20cm以下のものをB類とした。

II 類：円筒形を呈する丸底の型作りによる焼塙土器で、「六連式土器」と称されるもの。

器面調整は外側が指オサエで、内面調整の違いによりA～F・Z類に細分した。

A：内面調整がナデ、工具によるナデ・ケズリによるもの。

B：内面に布目を留めるが、縦15本×横14本／5mmと非常に細かいもの（極細布目）。

C：布目が縦6～8本×横8本／5mmと割合細かいもの（細布目）。

D：布目が縦4本×横5本／5mmと粗いもの（粗布目）。

E：貝殻腹縫による条痕を留めるもの。

F：口縁部内面の下位に粘土の隆起帶を有するもの。

Z：布目を留めるものの、磨滅によりB～D類に分類できないもの。

III 類：逆円錐形を呈する型作りによる焼塙土器で、底部から直線的に開く形態のものをA類とし、頸部で一端屈曲した後、口縁部が内湾するものをB類とした。

A～E・Z：上記に同じ。

概要

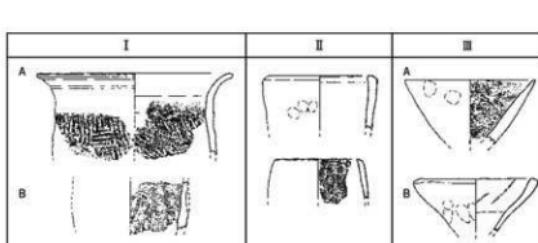


Fig.156 製塙土器分類図 (1/6)

藏司地区平地部での製塙土器の出土点数は僅かで、総数12点を数えるにすぎない。その内訳は、鹹水煎熬用の斐形土器（I類）5点、型作りによる円筒形の土器（II類）3点、逆円錐形の土器（III類）4点であった。遺構的には54次溝SD1401・落込SX1396、60次瓦窯SK1510で、他は包含層からの出土である。

I A類(1～4) 1は口縁端部を欠損する。胴部径は21.0cmに復元した。頸部の縮まりは悪く、口縁部は「く」字形に外反する。体部外面は擬格子目タタキで、内面には当て具痕がみられる。外面には煤が遺存する。60次調査灰色砂質土の出土。2は頸部の小破片で、口縁部は大きく外反する。外面擬格子目タタキによる。54次調査灰色土の出土。3・4は胴部小片で、3の外面は擬格子目タタキ、内面平行当て具、4は外面平行タタキ、内面当て具後ナデによる。ま

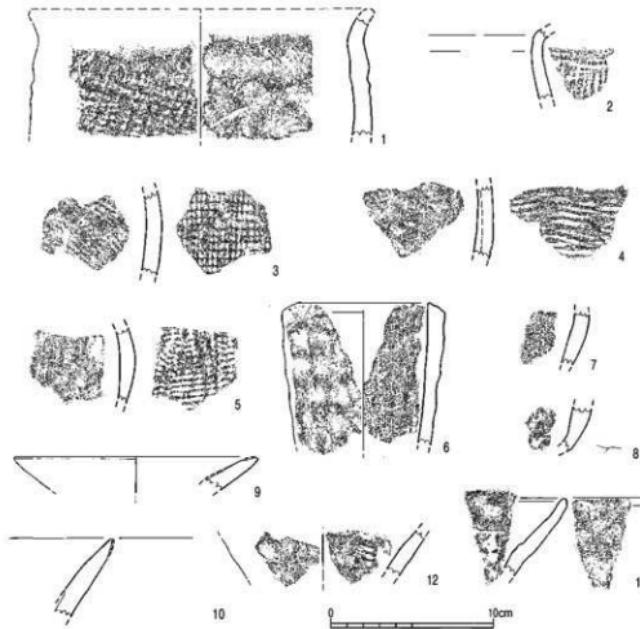


Fig.157 製塙土器実測図 (1/3)

た。3の外面には煤が遺存する。4は54次調査SX1396最下層の出土。3は出土次数不詳。

I B類(5) 胸部小片であるが、器壁が薄いことからB類とした。外面擬格子目タタキ、内面円盤状の當て具による。外面は火熱により赤化している。60次調査灰色土の出土。

II類(6~8) 6が口縁部、7・8が底部付近の破片。6は布目痕が5mm中に縦5本・横3本と粗いD類で、口縁部は斜めに切り落としている。7は内面に縦3本・横3本の粗い布目を留める。8の布目は燃れており、本数が定かではない。外面は何れもユビオサエによる。6は60次調査SK1510、7は54次調査SD1401、8は茶灰粘土の出土。

III A類(9・10・12) 9・10はA類の口縁部破片で、端部はシャープ。9の口径は15.0cmに復元した。内外面ともナデ調整による。12は貝殻条痕を留めるE類で、外面は二次火熱により黒化する。9は60次調査SK1510、10は同じく灰色土の出土。

III B類(11) 口縁部小片で、端部は丸く納める。外面ユビオサエ、内面ナデによる。外面は二次火熱により黒化する。60次調査灰色土から出土した。

2) 漆付着土器 (Fig.159 ~ 162, PL.71)

分類

漆付着土器とは、器の内外面及び破断面に漆膜が付着している土器のこととし、器種・器形及び漆膜の付着状況により分類することが可能である。先ず用途により I ~ IV 類に大別し、須恵器・土師器等の種別で A ~ H 類に細分している。

I 類：漆器及び漆塗り製品を製作する際のパレットとして用いたもの。

A : 須恵器…A : 蓋, B : 环 (無高台), C : 环 (有高台)・椀, D : 盘, E : 盤,

F : 鉢, G : 高环

B : 土師器…A : 蓋, B : 环, C : 楚, D : 盘

C : 黒色土器…A : A 類椀, B : B 類椀

D : 灰釉陶器…A : 壺, B : 盘

E : 緑釉陶器

F : 青 磁…A : 碗

G : 白 磁

II 類：漆の運搬容器として用いたもの。種別は I 類に同じ。

A : 須恵器…A : 長頸壺, B : 平瓶, C : 壺, D : 壺 (短頸壺・広口壺)

B : 土師器…C : 壺

D : 灰釉陶器…A : 壺, B : 盘

III 類：土器の表面に漆を厚く塗布したもので、漆器模倣品とみられる。塗布の状況により

1 ~ 3 類に細分している。種別は I 類に同じ。

1 - 内外面とも塗布したもの。

2 - 内面のみ塗布したもの。

3 - 外面のみ塗布したもの。

IV 類：所謂漆継ぎ土器で、接着剤としての漆膜が器面或いは断面にみられるもの。

A : 須恵器…A : 長頸壺

F : 青 磁…A : 碗

今回報告分としては、IV 類の漆継ぎ土器は出土していないので、分類図では I ・ II ・ III 類を示した。なお、将来的に器種の増加に伴い細分される可能性を有する。

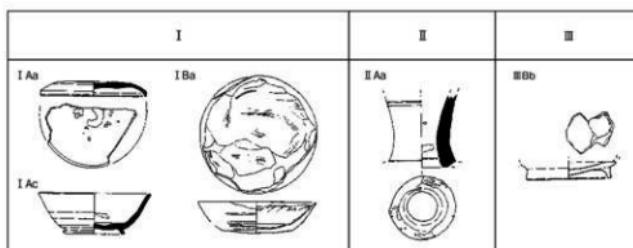


Fig.158 漆付着土器分類図 (1/6)

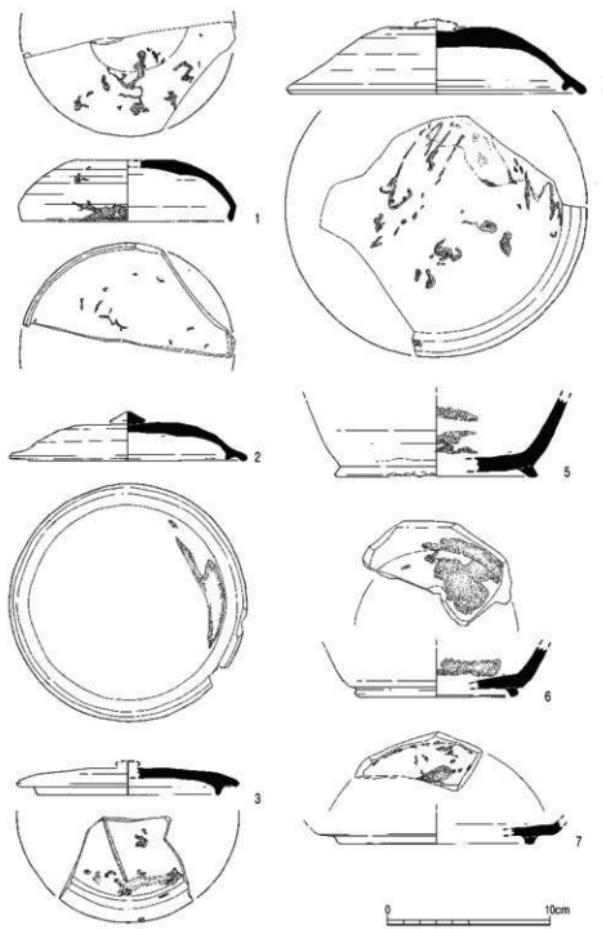


Fig.159 漆付着土器実測図① (1/3)

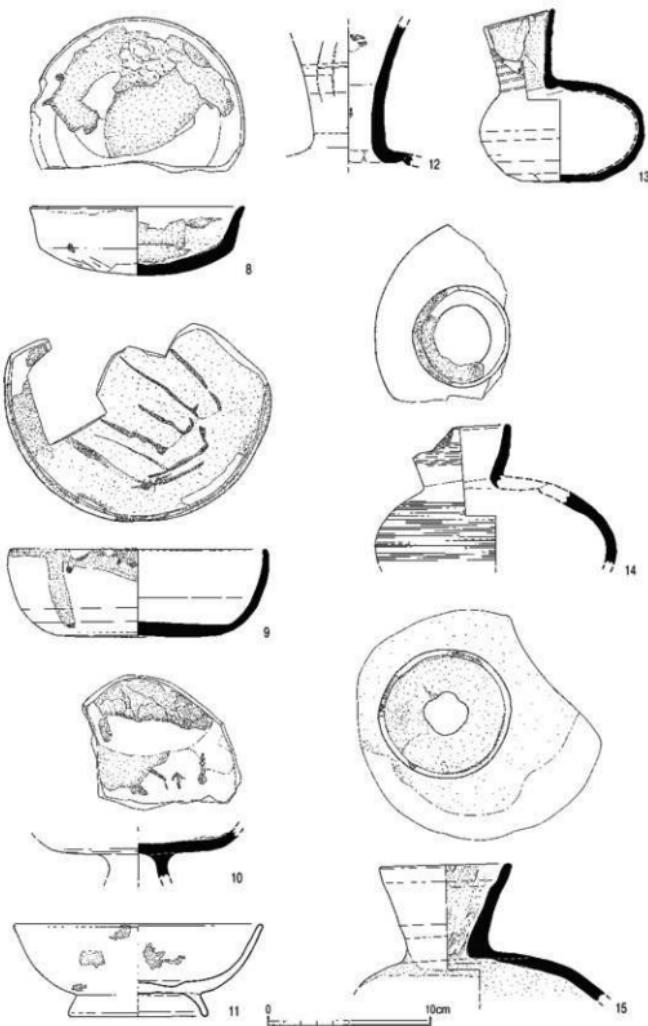


Fig.160 漆付着土器実測図② (1/3)

概要

歲司地区平坦部においては、総数 72 点の漆付着土器が出土している。遺構的には、60 次調査瓦溜 SK1510 から 4 点、65-1 次調査 SD1555 から 3 点、65-2 次調査 SX1560（瓦層）から 4 点出土している。また、60 次調査廐植土層から 8 点、同炭屑層から 3 点、54 次調査青褐粘土から 4 点が多い部類である。

1 類 (1 ~ 11)

パレット パレットとしては、I Aa 類の須恵器坏蓋が 11 点 (15.3%)、I Ac 類の須恵器有高台坏が 3 点 (4.2%)、I Ab 類の須恵器坏が 6 点 (8.3%) で、I Ag 類の須恵器高坏と I Bc 類の土師碗も 1 点みられた。特徴としては、掌に収まる大きさの土器という点にある。

1 ~ 4 は須恵器坏蓋で、I Aa 類。1 は天井部がドーム形をなす 6 世紀末のもの。口縁部は内側に屈曲する。器高 4.8cm、復元口径 13.0cm を測る。漆膜は表面及び内面に部分的に遺存し、焦げ茶色を呈する。4 次調査の谷部に当たる北 Tr 西側の出土。2 ~ 4 は口縁部内面にかえりを持つ蓋。2 のかえりはシャープで、天井部に擬宝珠形の攝みを貼付する。器高 2.8cm、口径 14.5cm を測る。天井部外面はヘラケズリ後ナデ調整による。漆膜は口縁部内面にあり、焦げ茶色を呈する。54 次調査廐植土下層の出土。3 は口縁部の小片。天井部は低平で、攝みを欠失する。かえりは断面三角形を呈し、直立する。天井部外面は回転ヘラケズリにより、内天井部にヘラ先による線を施す。漆膜は内面にあり、焦げ茶色を呈する。54 次調査 SX1386 の出土。4 は大振りの蓋で、天井部も高い。かえりは小さめのもので、攝みは欠損する。残存器高 3.9cm、復元口径 18.2cm を測る。天井部外面回転ヘラケズリによる。漆膜は内面及び外面上に部分的にあり、焦げ茶色を呈する。60 次調査整地層下層の炭屑から出土した。

5 ~ 7 須恵器有高台坏で、I Ac 類。5 は体部から底部にかけての破片。高台は底部端に貼付しており、高台端は突出する。高台径は 11.0cm に復元した。漆膜は内面にあり、焦げ茶色を呈する。60 次調査 SD1506 の出土。6 も体部から底部にかけての破片で、高台は断面方形をなし、高台径は 10.0cm に復元した。底部と体部の境にシャープな稜を有する。焼成不良で、色調は灰白色を呈する。赤褐色の漆膜が内面に遺存する。60 次調査 SD1514 から出土した。7 は底部の小破片で、断面方形の高台を貼付する。漆膜は内底面にあり、黒色を呈する。60 次調査黄灰土の出土。

8・9 は須恵器坏で、I Ab 類。8 の口縁部は、丸底の底部から緩やかに外反する。外底面は手持ちヘラケズリによる。器高 4.2cm、口径 13.0cm を測る。漆膜は内底面から口縁部外面にかけて遺存し、黒色を呈する。54 次調査暗茶色粘土の出土。9 は深めの坏で、底部は平底をなす。口唇部はシャープで、つまみ出している。器高 5.2cm、口径 16.2cm、底径 10.0cm を測る。口縁部ヨコナデ、体部外面回転ヘラケズリによる。漆膜は内面から外面上にかけて遺存し、内底面には漆を搔き取った痕跡があり、外面上の漆は重ね下がっている。54 次調査 SD1402 の出土。

10 は須恵器高坏で、I Ag 類。坏部の破片で、脚柱部以下を欠くが、恐らく打ち欠いたものと思われる。漆膜は杯部内面にあり、皺状に固着している。色調は焦げ茶色を呈する。4 次調査 E3Tr 排土中の出土。

11 は土師器碗で、I Bc 類。口縁端部を欠損する。高台は高めで、ハ字形を呈する。残存器高 5.8cm、復元口径 15.0cm、高台径 8.4cm を測る。焼成不良で、黄橙色を呈する。焦げ茶色の漆膜が

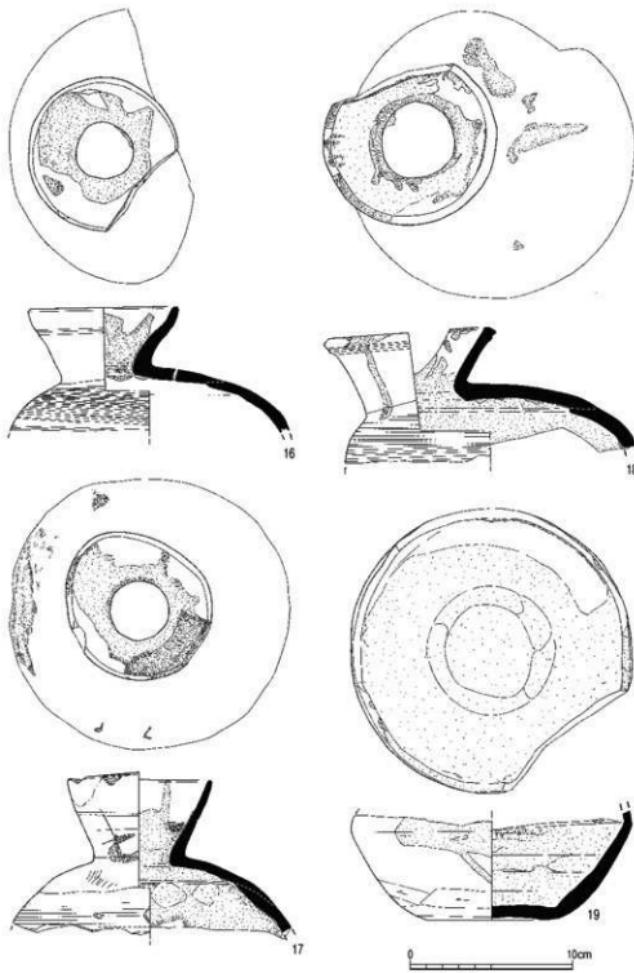


Fig.161 漆付着土器実測図③ (1/3)

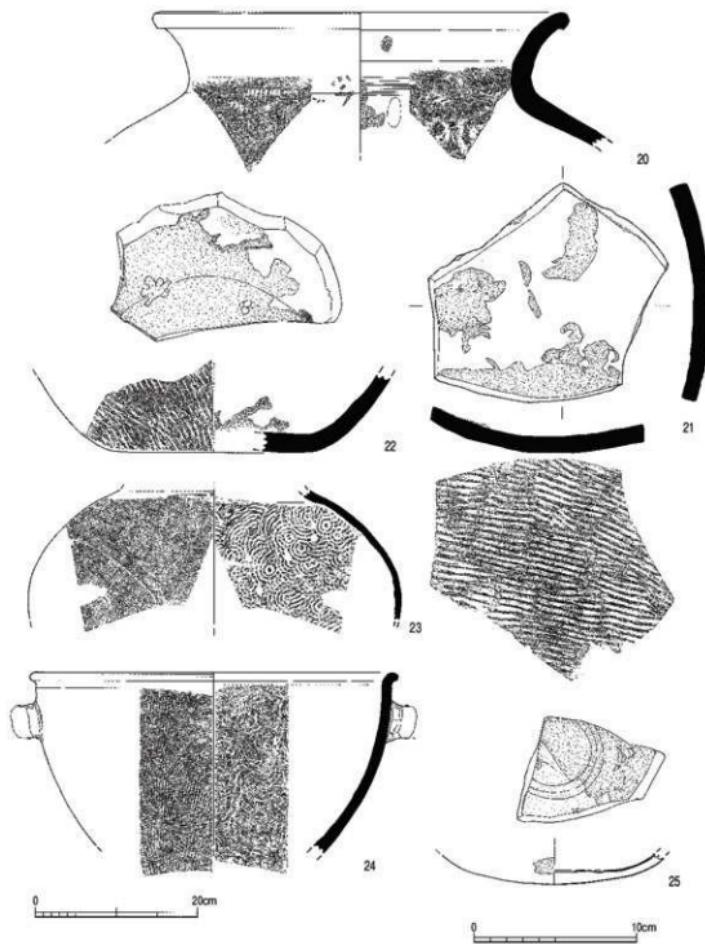


Fig.162 漆付着土器尖測図④ (23・24:1/6, 他:1/3)

内面と外面に一部に遺存する。65-2 次調査床土の出土。

II 類 (12 ~ 24)

漆波運搬具としては、II Aa 類の須恵器平瓶が 26 点 (36.1%) と最も多く、次いで II Ac 類 漆運搬容器 の須恵器甕が 18 点 (25.0%) の出土で、須恵器長頸甕及び鉢が 1 点ずつ出土している。

12 は長頸甕で、II Aa 類。頸部から肩部にかけての破片で、口縁部は打ち欠いている。内外面ともナデ調整による。頸部外面には「升」のヘラ記号を付している。漆膜は僅かながら内面及び破面に遺存し、焦げ茶色を呈する。60 次調査 SD1513 の出土。

13 ~ 19 は平瓶で、II Ab 類。13 は小型の平瓶で、口縁部の一部を欠損する。胴部は球体をなす。口縁部外面はケズリによる段を持つ。底部外面は手持ちヘラケズリによる。器高 10.6cm、口径 4.4cm を測る。漆膜は内面にあり、皺状に固着している。破面にも遺存していることから、漆液を取り出す際に打ち欠いたものとみられる。60 次調査腐植土の出土。14 ~ 18 は口縁部から体部上位の破片で、14 ~ 17 の口縁部は直線的に開き、14・15・17 は外面に沈線を巡らせている。18 は口縁部直下に三角形の突帯を削り出す。14・16 ~ 18 の体部外面はカキメ調整による。漆膜は口縁部内面から体部内面にかけて遺存するが、口縁部外面から肩部にかけて付着しているものもみられる。漆膜の色調は 14・16・17 が焦げ茶色、15 は黒色を呈し、14 は 60 次調査ピット、15 は 54 次調査濁灰色土、16 ~ 18 は 60 次調査腐植土から出土した。19 は体部中位から底部にかけての破片で、底部は平底をなす。外面はナデ調整による。漆膜は内面から外面にかけて遺存するが、破面にも付着していることから上半部を打ち欠いていることが窺われる。内面には焦げ茶色の漆膜が良好に遺存し、一部は皺状をなしている。60 次調査腐植土の出土。

20 ~ 23 は甕で、II Ac 類。20 は口縁～肩部破片で、口縁部は外反する。口径は 24.5cm に復元した。口縁部外面カキメ、体部外面平行タタキ、内面同心円當て具による。内面及び肩部に焦げ茶色の漆膜が遺存する。60 次調査瓦溜 SK1510 の出土。21 は肩部から体部中位の破片で、外面格子目タタキ、内面同心円當て具による。22 は外面平行タタキ、内面同心円當て具による。漆膜は内面から破面にかけて遺存し、焦げ茶色を呈する。21 は 60 次調査茶褐色粘土、22 は 4 次調査の築地 SA100 南側溝 SD102 から出土した。23 は底部破片で、底面は平底を残す。外面平行タタキ、内面ナデ調整による。漆膜は内面から破面にかけて遺存し、黒色を呈する。4 次調査 E3Tr 出土。24 は大型の鉢で、口縁部から体部上位にかけての破片。口縁部は小さく突出し、そのすぐ下に横位の取手を貼付する。復元口径 45.4cm を測る。外面擬格子タタキ、内面同心円當て具による。内面に黒色～焦げ茶色を呈する漆膜が遺存し、一部は皺状をなす。60 次調査腐植土から出土している。

III 類 (25)

25 は土師器環の底部破片で、底部は丸みを帯びる。外面はヘラケズリ後にミガキを施している。内面及び外面に焦げ茶色の漆を塗布しており、漆器模倣品の可能性がある。65-1 次調査 SD1555 の出土。

漆器模倣品
か

3) 鍛治・鋳造関連遺物 (Fig.163 ~ 168, PL.72 ~ 74)

今回報告する藏司地区官衙跡の平地部からは、54 次、60 次、65-1・2 次調査区を中心にパ

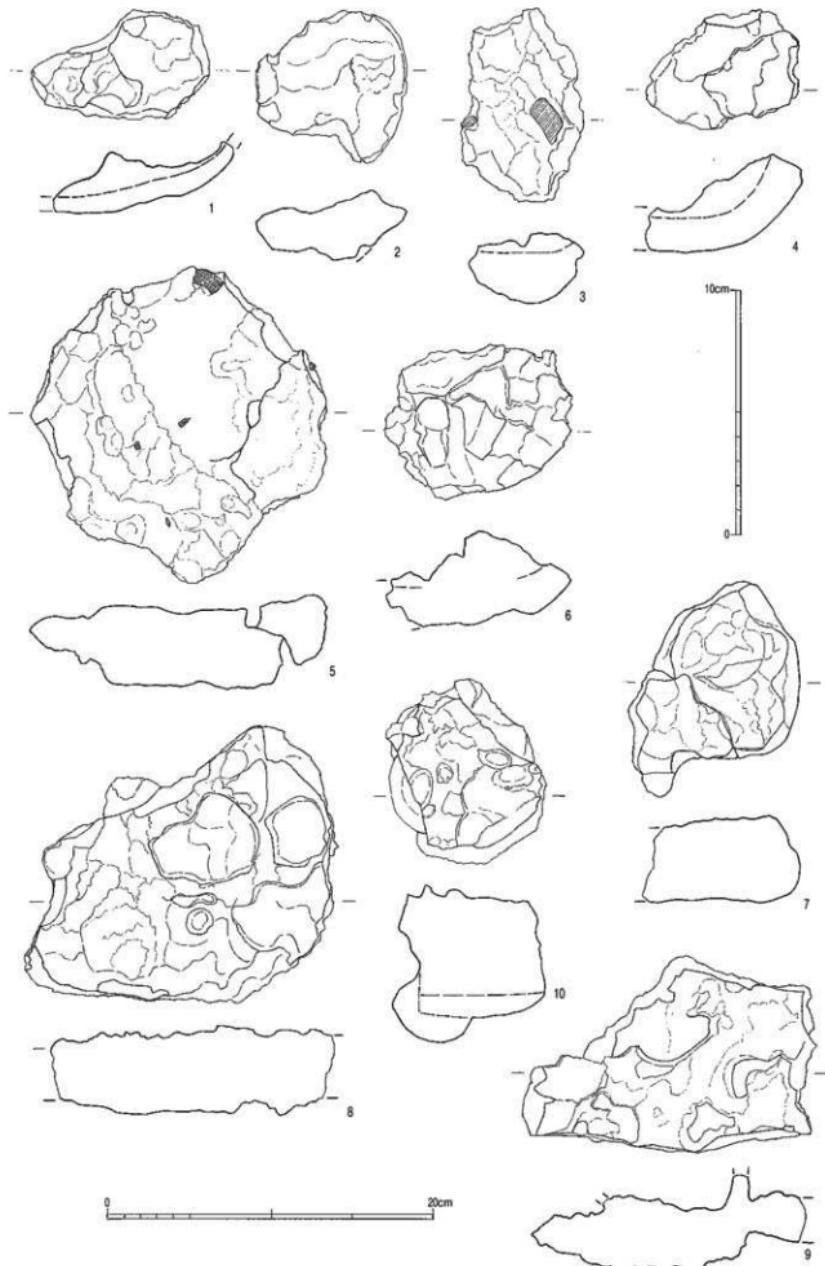


Fig.163 鎌治・鎌造関連遺物実測図① (1~6:1/2, 他:1/3)

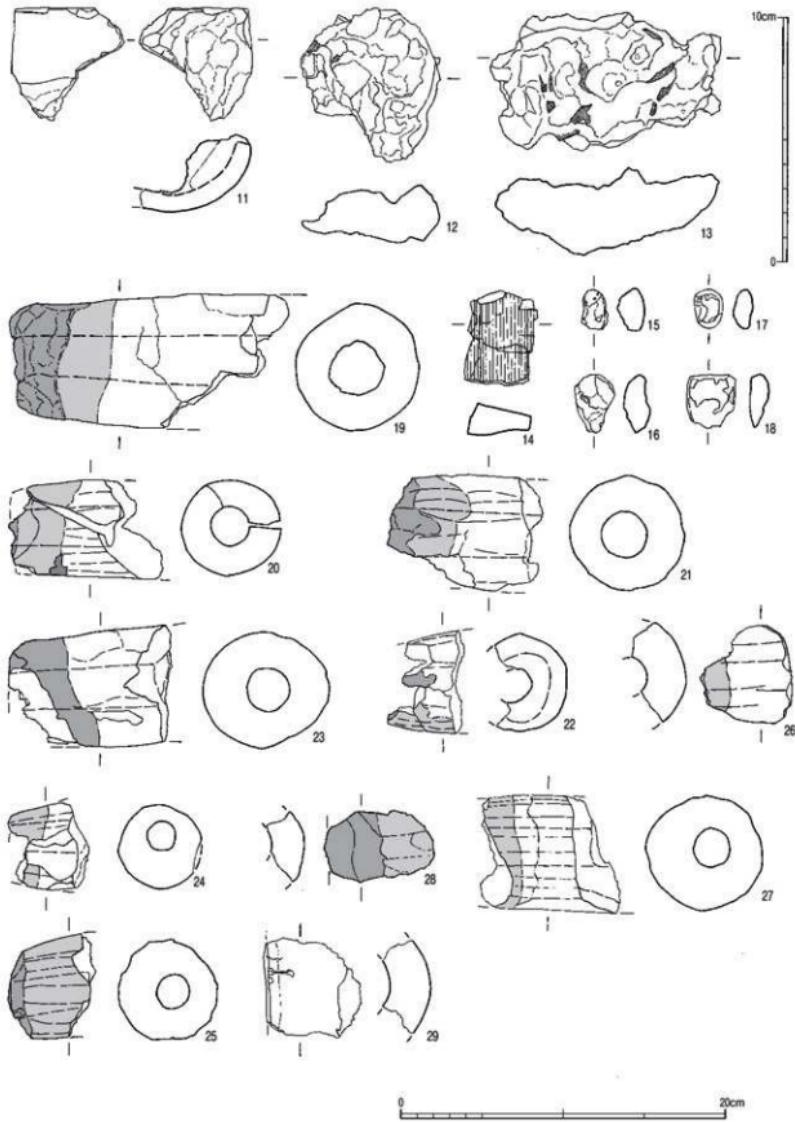


Fig.164 銀治・鋳造関連遺物実測図② (12 ~ 18 : 1/2, 他 : 1/3)

ンケース 10 箱にも及ぶ鍛冶・鋳造に関連する遺物が出土した。製品については、金属製品の項で報告しているが、それ以外の遺物はここで報告する。

出土した鍛治・鑄造関連遺物の種類は、鉄滓・銅滓等の鉱滓、鞆羽口、鋳造の際の坩堝・取瓶、炉壁、鉱滓が付着した被熱瓦、木炭、銅滓等がある。報告にあたっては、出土遺構が明らかな資料を重点的に掲載し、遺構上面に堆積した各包含層から出土した資料のうち、資料的価値が高いものを抽出して報告する。

鉛澤 (Fig.163・164, PL.72)

椀状鉱滓（1～6） 1～6は鍛冶炉の炉底に形成された椀状鉱滓である。鍛冶工程だけでなく、銅精錬の際に生じた滓である可能性もある。平地部各地区から少量出土するが、鍛冶・鑄造関連遺物の出土量が少ない4次調査区では、鍛治滓が目立つ。

1は65-2次SB1570内出土で、鉱滓底に薄く炉床の粘土が付着する。単位は上下2層に分かれ、上層は発泡が顕著である。出土したSB1570内では保土穴SX1571(銅精錬炉または鋳銅炉か)が7基検出されていることから、銅滓の可能性もある。2は4次NTr SD099 4層粘土層(木簡出土層上層)出土で、表面には粒状滓がみられるため、鐵治滓である。鉱滓底に薄く炉床の粘土が付着する。3は木簡が出土した層位となる4次NTr SD099 5層粘土層出土の楢形鐵治滓で、上下2層となる上層はわずかに磁性を帯び、下層は炉床の粘土と多くの木炭を噛み込む。4は54次灰白砂出土で、鉱滓底は炉床の形状をよく残す。5は60次表土出土の残りの良い楢形鐵治滓で、鉱滓底は炉床の粘土と炭を噛み込む。上面は磁性を帯び、重さ389gを測る。6は65-1次茶灰色土出土の楢形鐵治滓で、上面は磁性を帯びる。鉱滓底はカーブを描くが、炉床の痕跡はみえず、不定形鐵治滓の可能性がある。

鉄塊系遺物（7～10） 7～10は鉄塊系遺物であるが、表面の鉄は流動性がまったくなく、淀んで固まつた様な状況である。また裏面は土は付着するものの、明確な炉床の粘土は認められない、生成過程が不明なものである。このような鉄塊系遺物は、65-1次を中心にパンケース5箱分出土しており、今回掲載したのは残りの良い代表的なもの4点である。7は54次灰褐色土出土で、表裏面及び側面も面をなし、磁性もほとんど帯びないことから、磁性を帯びた8～10とは生成要因が異なる可能性がある。重さ946gを測る。

8は54次茶灰色土出土の最も大きな鉄塊状遺物片で、重さ4739gを測る。現状で長さ18cm、幅16.7cm、厚さ5.4cmを測るが、両側面が欠損しているため、本来はさらに大きな滓であったと考えられる。表面には大きな発泡がみられ、裏面は鋳造が顕著である。9は60次茶灰土出土で、裏面の一部のみ石英・土が付着するが、全体的にメタル度も高い。鉄分が多く光沢がある状況で、鉄滓であるとすれば、この炉からほとんど鉄は生成されなかった可能性が考えられる。全体的に凹凸が顕著である。重さ1545gを測る。10は65-1次茶灰色土出土の表裏及び側面が面をなした四角形状の滓で、重さ1578gを測る。表面には発泡痕が残り、裏面は土を多く喰むが、炉床のような粘土はみられない。磁性を帯びる。

被熱瓦(11) 丸瓦の玉縁四面に鉄塊系付着物が厚く付着したものである。凸面も強く被熱していること、破損面には鉄塊系付着物の付着はないことから、丸瓦の状態で鉄製品とともに二次的に被熱したことがわかる。付着物は鉄分が多く光沢がある下面と土部分が多い上面の2層にわかれれる。65次表土出土。

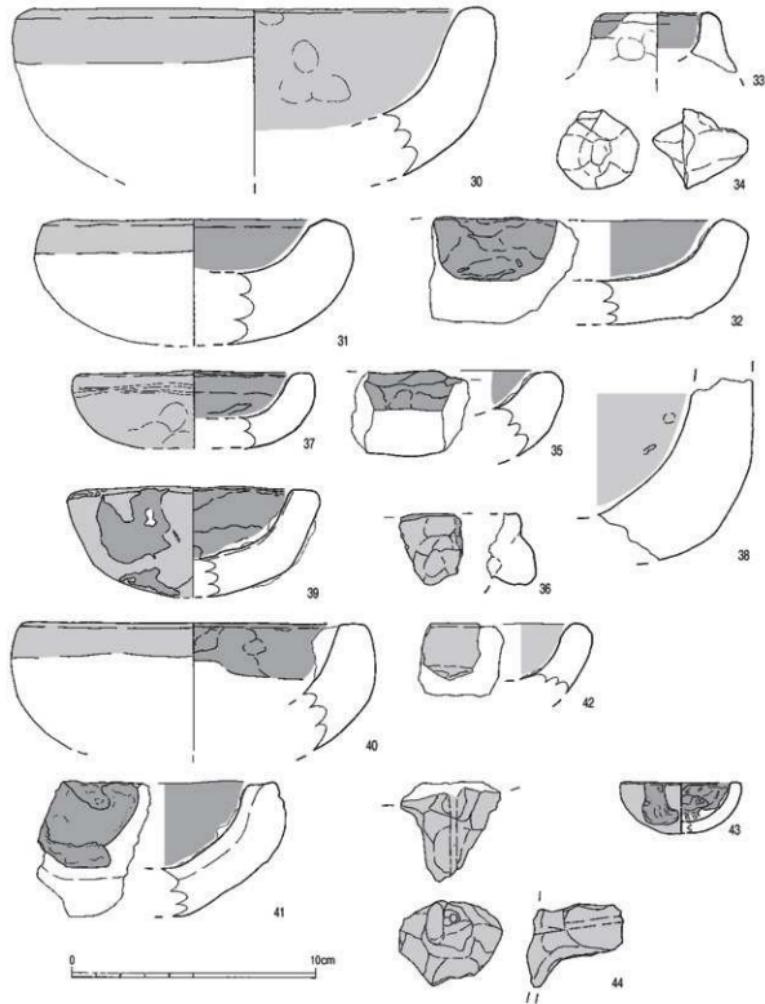


Fig.165 鋳治・鋳造関連遺物実測図③ (1/2)

銅滓（12・13） 12・13は緑青が一部吹くため銅滓と判断したものである。いずれも65次表土出土である。12は表面に炭ではなく木目がみられ、裏面には小さな発泡痕が多数みられる。13は表面に炭が多く付着するが、裏面には炭の付着は少ない。

木炭（14） 65-2次SB1575A出土の針葉樹の木炭である。黒鉛化が進み、硬質となる。

銅塊（15～18） 15～17は流動的で、全体的に緑青を吹き、発泡により中身がスカスカ状態であること、また鋳造関連遺物が多く出土した遺構からの出土であることから、銅を溶解した際に生じた滓と考えられる。15・16は65-2次SK1567出土。17は65-2次SX1571出土。18は全体を緑青で覆われたもので、垂れ流れた形状である。65次表土出土。

羽口・送風管（Fig.164, PL.72）

羽口・送風管（19～29） 炉に送風するためのもので、鍛冶工程の他、緑青が付着する20のように銅の鋳造工程においても使用した可能性がある。また60次出土のものが多いが、隣接する北側の65-2次のSB1570を中心とする工房域に由来するものも含まれると予想される。

19は長さ17.1cm以上、直徑8cm程度に復元できる、65-2次SK1567出土の最も残り通い

羽口で、孔内部には緑青がみられるため、鋳造の溶解炉に使用されたものである。SK1567内からは鋳型・坩堝・取瓶等鋳造関連遺物が出土しており、整合的である。中央には粘土継ぎ目痕が明瞭に残ることから、縦方向に粘土を継いで成形したと考えられる。孔は先端部が2.4cm、基部が3.0cmと基部がやや太くなる。孔内部には横骨状の幅1cmの浅い段が縦方向にみられる。先端部は二次的な被熱により溶解が進む。20は径6cm、孔径2.4cmを測る小型の羽口先端部で、先端部は二次的な被熱により少し溶解し、被熱のための大きな亀裂が入る。外面に鉄滓が付着することから、鍛冶で使用された可能性がある。外面調整の縦ナデが残り、孔内部には軸棒を抜き取る際の痕跡である縦方向の直線擦痕がみられる。20と21は65-2次SX1556出土。21は径7cm、孔径2.8cmの羽口先端部で、先端部は二次的な被熱により溶解が進む。外面には縦ナデ調整が残る。孔内部には軸棒を抜き取る際の痕跡である横方向の回転擦痕と縦方向の直線擦痕がみられる。

22は径6cm程度を測る小型羽口先端部で、胎土は砂粒を含まず、精良なもの。先端部は二次的な被熱により溶解するが、上端部は段差を持ったままで溶解することから、羽口先端部が段差を持ち使用された特異なものである。成形は芯棒内側に粘土を巻き、その上にさらに粘土を巻いた二重構造で、19とは成形・胎土とも異なることは、使用用途が異なっていた可能性がある。外面には縦ナデ調整を施しており、孔径2.0cmの孔内部にも丁寧なナデを施す。4次NTr SD099 4層出土。23は60次灰色砂質土の羽口先端部で、径7.7cm、孔径2.6cmを測る。先端部は二次的な被熱により溶解が進んでおり、図下部は被熱度が強い。孔内部には直線擦痕が認められる。24は径5.1cmの小型羽口先端部で、成形時の芯棒が偏る。先端部は二次的な被熱により溶解し、外面には縦ナデ調整を施す。孔内部には縦方向の擦痕がわざかに残る。60次灰層下層出土。25の外面は全体的に溶解が進んだ羽口先端部で、外面には縦ナデ痕が明瞭に残る。図下方には平坦部が存在し、孔径2.1cmの孔内部には縦方向の擦痕がみえる。60次炭層出土。26は先端部が灰色に変色した径6cm程度に復元される羽口先端部付近の体部片で、孔径は2.5cmである。横方向と縦方向の擦痕がみられる。60次炭層下層出土。27は径7cmの外面縦ナデ痕が明瞭な羽口先端部付近の体部片で、先端部は灰色に変色する。孔径は2.2

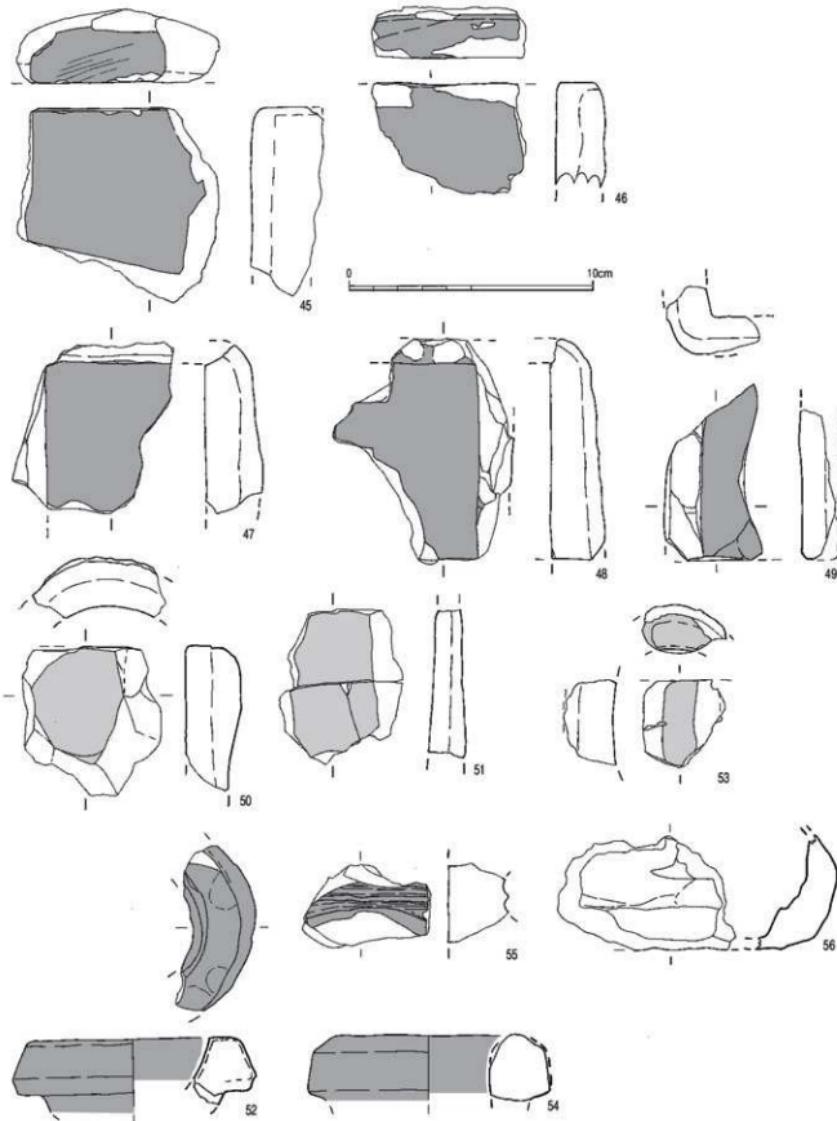


Fig.166 錫治・鋳造関連遺物実測図④ (1/2)

cmと大きさの割に孔が小さく、成形時の芯棒は偏る。孔内部には縱方向の擦痕が残る。胎土には石英等の細粒が大量に含む。60 次黄色粘土出土。28は65-1次灰茶色土出土の羽口先端部で、先端部は溶解が進む。

送風管か 29は径9cm、孔径4cm程度に復元されるもので、先端部は平坦で、全く被熱していないことから、送風管と判断した。54次腐植土出土。

坩堝・取瓶 (Fig.165, PL.73)

坩堝・取瓶 (30 ~ 44) 金属を溶かすための坩堝と溶解した金属をすくい取る取瓶の区別は外面の被熱状況と寸法の違いに依ったが、その差は微妙で、両者は明瞭には峻別できない。

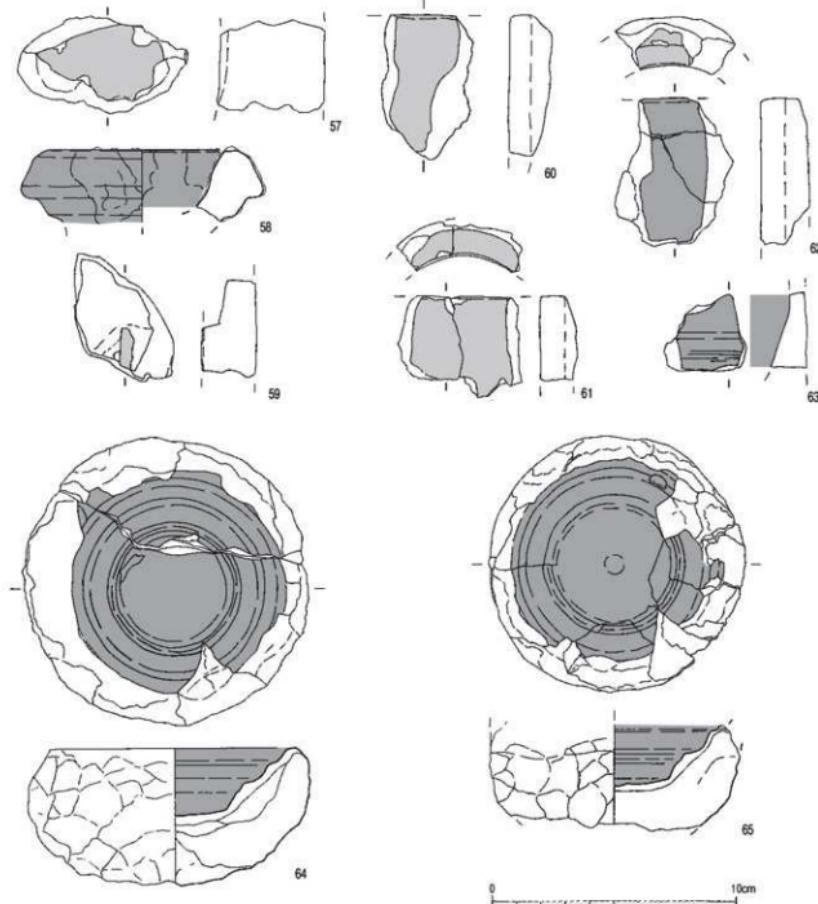


Fig.167 鋳治・鋳造関連遺物実測図⑤ (1/2)

また出土した坩堝・取瓶は、鋳造関連遺物が多く出土している 65-2 次 SK1567 及び SD1569 出土のものが多く、隣接する SB1570 を中心とする工房域で青銅・銅関連の鋳造が行われていたと考えられる。なお、現状では確実に鋳鉄関係のものは見いだせない。

30 ~ 34 は 65-2 次 SK1567 出土のものである。30 は復元径 18cm であることから、坩堝と考えられるが、内外面の被熱は弱いことから、あまり使用されずに廃棄されたものか。胎土にはスサ・細粒を多く含む。31 は器壁は厚いが、復元径 10.8cm、器高 5.2cm と中型の坩堝である。外面は強く被熱し、炭も付着する。32 は平底状の底部を持つもので、外面は被熱により剥離が顕著である。内面に紫紅色付着物と緑青が付着することから、銅の鋳造に用いられた坩堝である。破損面にも付着物があることから、操業時の被熱により亀裂が生じたものと判断できる。33 は内外面には黒色付着物が薄く付着すること、またつまみ状を呈する器形から、坩堝の蓋になる可能性がある。破損面は擬口縁となる。外面は粗いナデを施す。34 は小さな突起状の把手で、内側には本体内部に取り付けるための突起がみられる。外面は被熱するため、坩堝の把手になる可能性がある。

35 ~ 36 は 65-2 次 SD1569 出土。35 は外面は強く被熱することから、小型の坩堝で、口縁部付近は溶解する。内面には紫紅色溶解物が厚く付着する。36 は 34 よりも小さな突起を口縁部下に取り付けたもの。これらの把手は炉から坩堝を出し入れする際につまみやすいようにしたものか。口縁端部には黒色付着物が薄く付着し、外面は強く被熱する。胎土にはスサを含む。37 は 4 次 NTr 出土で、内面には紫紅色付着物及び緑青が付着する。外面は亀裂が顕著であるが、被熱痕がないため、取瓶の可能性がある。外面には工具痕がみられる。復元口径 8.2cm。

38 は器壁が厚さ 3.3cm と厚いもので、溶解炉の一部の可能性があるが、内外面とも丁寧なナデを施し、のちに報告する炉壁とは胎土・色調・成形・調整方法ともに大きく異なる。内面下部には黒色付着物が薄く付着する。胎土には細粒を多く含む。54 次腐植土出土。

39 は復元口径 8.0cm の取瓶で、口縁端部は平坦に成形し、外面には指おさえ痕がよく残るが、内外面とも操業時の被熱のため、亀裂が顕著である。内面全面及び外面一部に紫紅色付着物及び緑青が付着するが、破損面にも紫紅色付着物及び緑青が付着する。60 次腐植土出土。40 は復元口径 13cm の大型の坩堝で、外面は強く被熱し、口縁部は溶解及び灰色に変色、内面には黒色付着物及び銅由来とみられる灰緑色付着物が厚く付着する。口縁部は平坦である。60 次灰色土出土。41 は外面に成形時の段及び工具痕が残り、平たい板状工具で押さえて成形したとみられる大型の坩堝である。外面は強く被熱し、内面には紫紅色溶解物が厚く付着する。60 次灰色砂質土出土。42 は 60 次腐植土出土の小型取瓶で、口縁部外面と内面は灰色に変色し、内面下部には紫紅色溶解物が付着する。43 は復元径 5.0cm、器高 2.1cm、口縁端部が平坦の小型取瓶で、被熱のため全体的に灰色に変色する。内外面の一部には黒色付着物が付着する。胎土は精良。60 次砂層出土。

44 は小型坩堝の把手と考えられるもので、35 ~ 37 とは異なり、把手中央に径 3mm の小さなガス抜き孔を施す。外面は指おさえ痕が顕著に残る。65-2 次表土出土。

鋳型 (Fig.166 ~ 167, PL.73 ~ 74)

鋳型 (45 ~ 65) ササや細粒を含む粗めの土の内側に肌理の細かい真土を貼り、その真土は黒化しているため、実際に鋳造に使用されたものである。大半が 65-2 次 SB1570 周辺から

坩堝の蓋か

坩堝の把手

出土した。

箱型容器の鋳型

45～54は、65-2次SK1567から出土した鋳型外型である。45～49は箱型容器の鋳型と考えられる。45・46及び47・48は真土の厚さ、形状からそれぞれ一連の鋳型となる可能性があるが、接合はしない。45・46は上面が平坦で、連結する合わせ型になるとみられるが、46の上面は被熱範囲が一部であること、45は横断面がゆるやかな弧を描くことなど、別個体になる可能性もある。いずれも真土は厚さ1cm程度の肌理の細かい真土で、外側には細粒やスサを少量含む土を用いる。47・48は上方を覆うような形状の箱型容器の鋳型で、48の下面には平坦面があることから、合わせ型になるとみられる。いずれも、肌理の細かい幅1.5cm程度の真土、外側には細粒を少量含む土を用い、外面には炭が若干付着する。なお、47の方が黒化するほど被熱するなど、被熱状況に差があるため、別個体になる可能性もある。49はL字状に屈折する鋳型で、下面是ほぼ平坦であることから、鋳型下面にあたるとみられるが、下面はやや凹凸があるため上下合わせ型にはならないと考えられる。厚さ1cmほどの真土は細粒を若干含むやや粗いもので、外側は細粒をより含む土を用いる。内面は黒化する。

筒型容器の鋳型

50・51は筒状容器の鋳型外型である。50は径6cm程度に復元されるもので、厚さ1.1cm程度の肌理のやや細かい真土上端は平坦であるため、この部分が内面上端で、これを覆うようにスサと細粒を含む外側の土を被せ、鋳込んだと考えられる。51は50とは別個体の筒型容器鋳型の外型である。真土は厚さ6mmの肌理の細かい真土で、外側には5mm前後の細粒をやや含む土を用いる。外面には炭が付着する。52は外側に厚さ2mm程度の薄い真土を貼っていることから、口縁部が玉縁状になる容器の内型と考えられる。真土を貼った部分は黒化する。上面及び内面は指オサエによる凹凸が若干残る。内面は下部のみ黒化する。

53は65-2次SK1570出土の鋳型外型で、先述した50と同じく厚さ1.3cm程度の肌理のやや細かい真土上端は平坦であるため、この部分が内面上端で、これを覆うように細粒を含む外側の土を被せ、鋳込んだと考えられる。内面は緩やかにカーブを描くことから、50のように単純な筒形にはならないと考えられる。

54～56は65-2次SD1569出土の鋳型である。54は先ほどの52と同様の容器鋳型の内型になる。真土はほとんど剥離する。55は内側に厚さ1cmの肌理の細かい土、外側もほぼ同様の土を用いた鋳型外型と考えられる。内側が直線的であることから、箱型の容器の鋳型の可能性がある。外側には溝を2条確認できるが、合わせ型の繫縛用の溝と考えられる。56は真土ではなく、内面も凹凸があることから、容器鋳型の外枠と考えられる。内面には鋳型本体との固定用ないしは体部下半に段を持つ製品であったことを示す段があり、外面は粗いナデ調整のまで、強く被熱する。胎土は細粒を含む。

57は厚さ4cmの細粒を少量含む土の内側に厚さ3mm前後の肌理の細かい真土を貼ったもので、鍋の鋳型か。60次灰色砂質土出土。58は52・54と同形態の玉縁状容器鋳型の内型で、外面には黒色付着物が付着する。65-1次炭層出土。59は筒形容器の鋳型外型で幅1mmの薄い真土を貼りつける。65-1次炭層出土。60～63は65-2次表土出土で、60～62は筒形容器の鋳型外型であるが、いずれもほぼ同様の製品を鋳造したことが推測されるが、外側の土の状況や色が異なるため、別個体と推測される。60は厚さ9mmのやや粗めの真土で、外側は細粒を含む土を用いる。61は径6cm程度に復元される筒形容器で、厚さ1cmの真土とその外側

に細粒とスサを含む土を用いる。62も厚さ1cmの真土とその外側に細粒とスサを含む土を用いる。63はほぼ全体肌理の細かい真土状の土を用いた小型容器の鋳型外型で、内面は黒化し、外面には炭が若干付着する。

64・65はほぼ同じ法量、形状の鋳型外型である。64は上面まで残るほぼ完形品であるが、65は最上面が欠損する。内面には4段の円形のやや丸味を帯びた段を有する。段の径は下か

長押の釘
隠しが

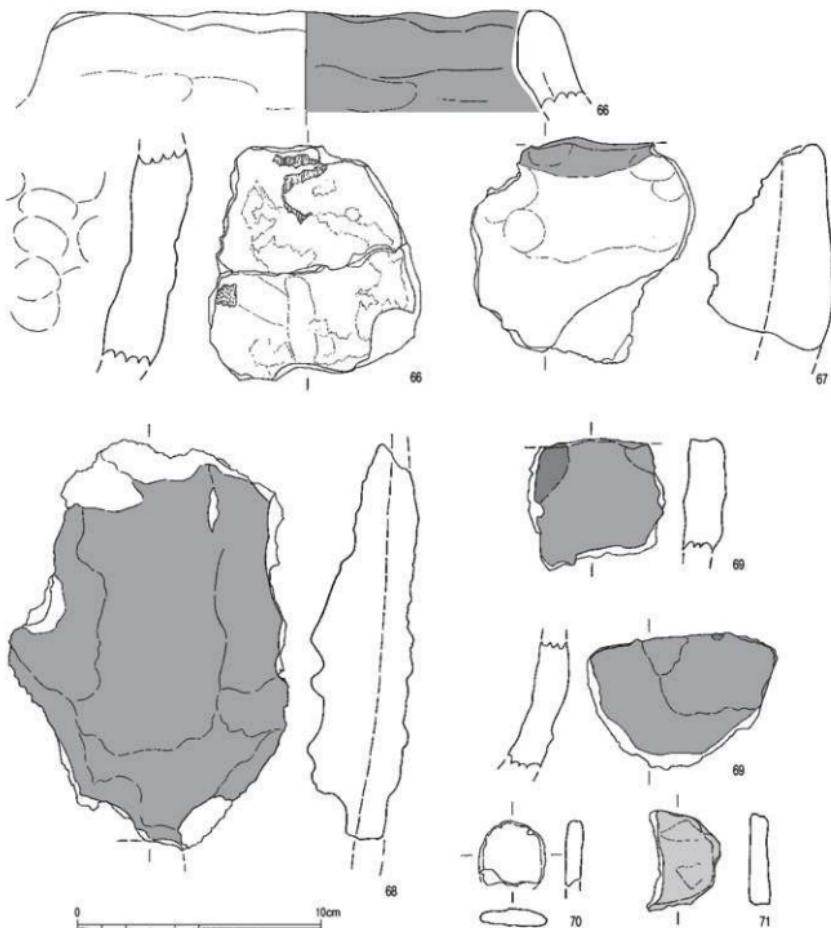


Fig.168 銅冶・鋳造関連遺物実測図⑥ (1/2)

ら 4.6cm, 5.4cm, 7.2cm, 8.4cmを測り、65 の底部中央には径 8mmの浅いくぼみが認められる。またいずれも外面は強い被熱のため、剥離が顕著である。真土は平均3~4mm前後で、肌理の細かな土である。外側の土はスサ・細粒を含む土を用いる。いずれも長押の釘隠しの鋳型である可能性がある。64 は 65-2 次 SB1570 遺構面上面、65 は 65-2 次表土出土。

炉壁 (Fig.168, PL.74)

炉壁 (66 ~ 71) 66 は 65-2 次 SK1567 出土の炉壁上端部及び体部で、スサ及び細粒を含む胎土及び茶褐色を呈する色調、外面には炭が付着し、内面は被熱することなど同一個体である。上端部は復元径 19.2cmを測るが、破片の大きさ及びきちんと円形に成形されていないため、復元径の大きさには不安が残る。体部片の内面には鉛滓が付着していないことから、この破片は体部でも上位の部位と考えられる。67 は 60 次灰色粗砂上部出土の炉壁上端部片で、上端部は直立するが、下半部は緩やかにカーブを描く。厚さ 2.3cmの厚い器壁内面には一部に緑青が吹いた鉛滓が厚く付着する。上端部は被熱のため、灰色に変色する。68 は 65-1 次 SD1555 出土の大型の炉壁で、細粒を非常に多く含むが壁内側には、スサも混じる厚い紫紅色付着物及び緑青が付着する。また下部には幅 3cm程度の小さな送風孔が存在した可能性がある。69 は SX1571 の保土穴を構成していたが壁で、細粒を多量に含む胎土・灰褐色を呈する色調から同一場所から出土したものと考えられる。図上の上面が平坦なもの内面には、緑青が一部認められる。カーブを描く下半部と考えられる部位の内面には紫紅色付着物が付着する。

その他 (Fig.168, PL.74)

70・71 は鋳造・鍛治と直接関連するかどうかは不明である 65-1 次炭層出土の円形を呈する土製品である。70 は径 2.7cm前後、厚さ 0.7cmのメンコ状のものである。被熱はない。71 は内外面強く被熱し、剥離も進んだもので、土器片を円形に再加工した可能性がある。

4) 白色物付着土器 (Fig.169, PL.74)

ここでは土器の内面に白色の物質が固着している資料を報告する。過去に報告した同種の資料の蛍光 X 線分析結果では、鉄 (Fe) とアルミニウム (Al) を検出し、小便に由来する固着物である可能性が指摘されている。

歳司地区平地部の調査では 10 個体分の白色物付着土器が出土している。全て須恵器である。須恵器壺 (1 ~ 4) 1 ~ 4 は平底となる壺の底部片である。1 は若干上げ底気味となり、体部はあまり開かずに立ち上がる。底部と体部の境には明瞭な稜を有している。調整は内外面ナデ調整を行う。白色物は内底部付近に小規模に固着する。60 次調査区茶色土層出土。2 も 1 と同様の器形となる。内面はナデ、体部外面の底部近くには横方向のヘラケズリが見られ、その上方にはナデに先行するタタキが確認される。白色物は体部内面に小さく残るだけである。54 次調査区青褐色粘土層出土。3 は底部付近の小片だが 1・2 と同様の器形となるだろう。調整は内外面ナデによる。白色物は内底面に小さく固着する。54 次調査区 S-16 ピット出土。4 も 1 ~ 3 とあまり変わらない器形となる。体部外面の下方は横方向のヘラナデ、上方は平行タタキが確認できる。底面は雑なナデ仕上げである。白色物は体部内面に固着する。54 次調査区 S-45 下層出土。

須恵器壺 (5 ~ 12) 体部の小片が多く、壺の可能性も残る。5 は外面に格子タタキ、内

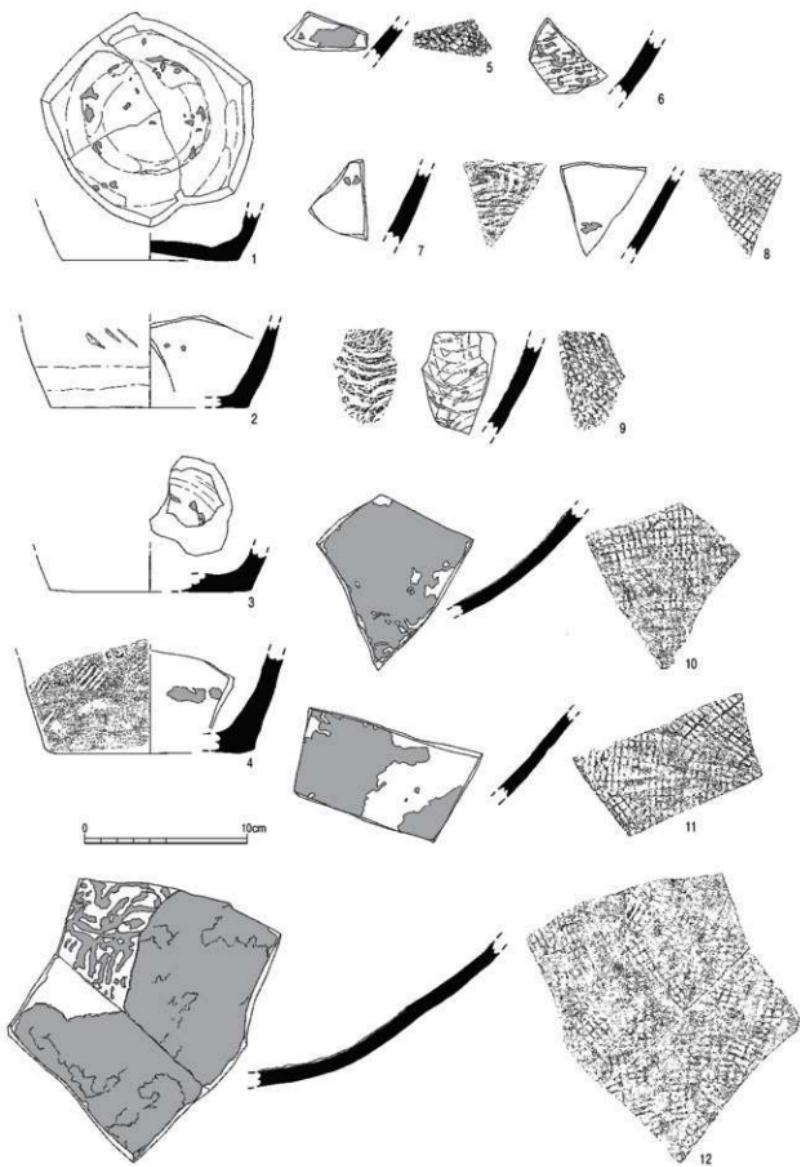


Fig.169 白色物付着土器実測図 (1/3)

面にナデ調整を行う。白色物は内面に広く固着している。54次調査区黄褐色土層出土。6は外面ナデ、内面同心円當て具痕。白色物は内面の當て具痕凹面に広く固着する。65-1次調査区S-6灰色砂層出土。7は内外面ナデ調整を行う。白色物は内面に小さく残る。54次調査区S-45下層出土。8は外面格子タタキ、内面同心円當て具痕が残る。白色物は内面に小さく残る。54次調査区灰白砂層出土。9は外面格子タタキ、内面同心円當て具痕。白色物は内面の同心円凹面にわずかに残る。60次調査区黄灰色土出土。10~12は同一個体となる須恵器壺の底部付近破片で、他にも複数片ある。内面は同心円當て具痕が確認され、外面は格子タタキを行っている。どの破片も白色物が内面に厚く固着している。10・11は54次調査区灰白色砂層出土、12は54次調査区灰色砂層出土。

5) 壁土状土製品 (Fig.170, PL.74)

壁土状土製品 (1~4) 1は粗いナデで面取りしたもので、胎土には炭を含むが、スサは含まない。65-2次SK1578より出土。2は厚さ7.3cmを測り、両面が面をなすもので、胎土には径2mm位の薙等の繊維痕が混じり、炉壁の胎土とは全く異なる。全体的に炭が少し付着する。65-2次SX1556より出土。

湾曲する壁土状土製品 3は湾曲する断面形で、下端部は丸く底部状になることから、下端部はさらに伸びない可能性が高い。胎土にはスサをほとんど含まず、外面には化粧土が認められるため、炉壁ではないことは確実で、壁土ではない可能性もある。内外面及び断面も被熱する。4も内外面及び断面も被熱し、外面に化粧土を施したものであることから、3と一連の部材を構成した可能性がある。3・4はいずれも65-2次茶褐土より出土した。

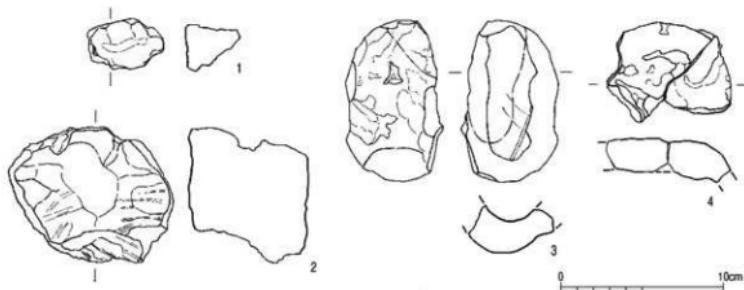


Fig.170 壁土状土製品実測図 (1/3)

Administrative structures surrounding Kyushu's government headquarters
in the *Dazaifu* (大宰府) complex XII
- the *Kuratsukasa* (藏司) Flatland area -

Contents

Chapter I Preface

- (1) A special historic site, the *Dazaifu* complex
- (2) Administrative structures surrounding Kyushu's government headquarters in the *Dazaifu*
- (3) Excavation progress
- (4) Excavation organisation

Chapter II Excavation outline

- (1) Excavation outline
- (2) Fundamental stratification

Chapter III Features discovered

- (1) Post-built structures
- (2) Earthwalls
- (3) Palisades
- (4) Ditches and gullies
- (5) Wells
- (6) Holes
- (7) Other remnants

Chapter IV Excavated Articles

- (1) Roof tiles and Bricks
- (2) Pottery and Porcelain
- (3) Wooden Objects
- (4) Metal Objects
- (5) Stone Objects
- (6) Clay Objects
- (7) Finds related to written characters
- (8) Finds related to production

報告書抄録

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2120261
登録年度 1	登録番号 5

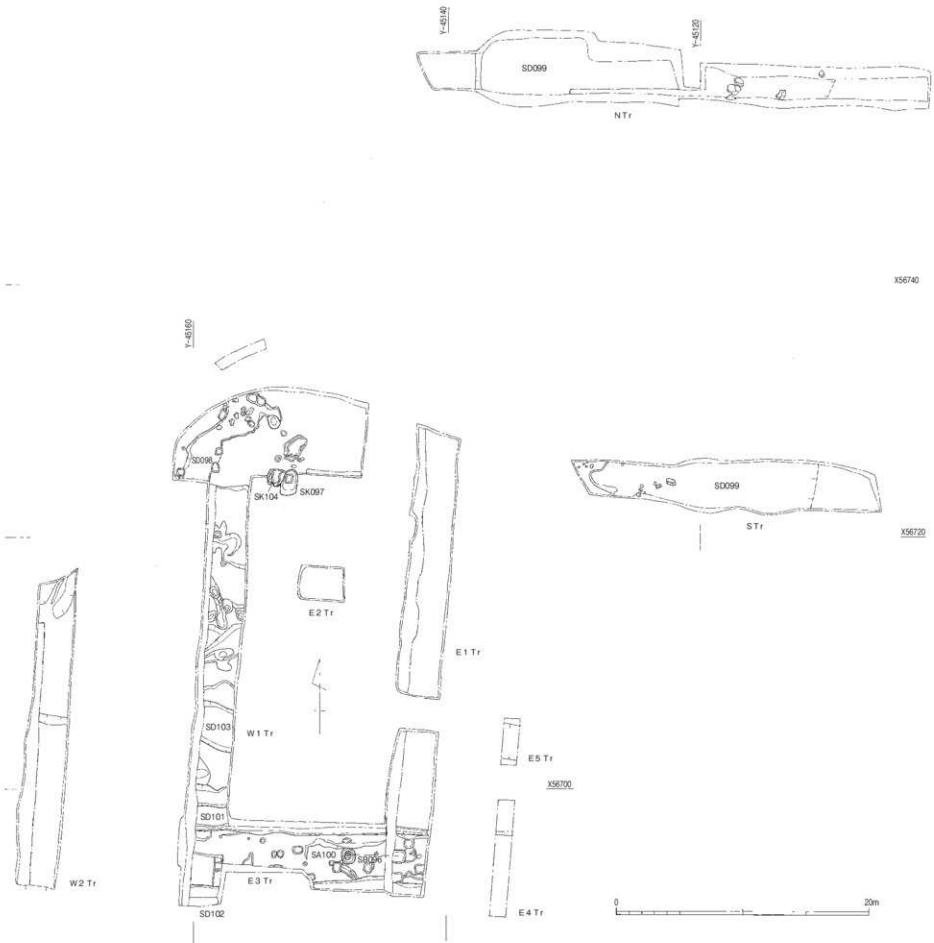
大宰府政庁周辺官衙跡XII
—藏司地区平地部編1—

令和2（2020）年3月31日

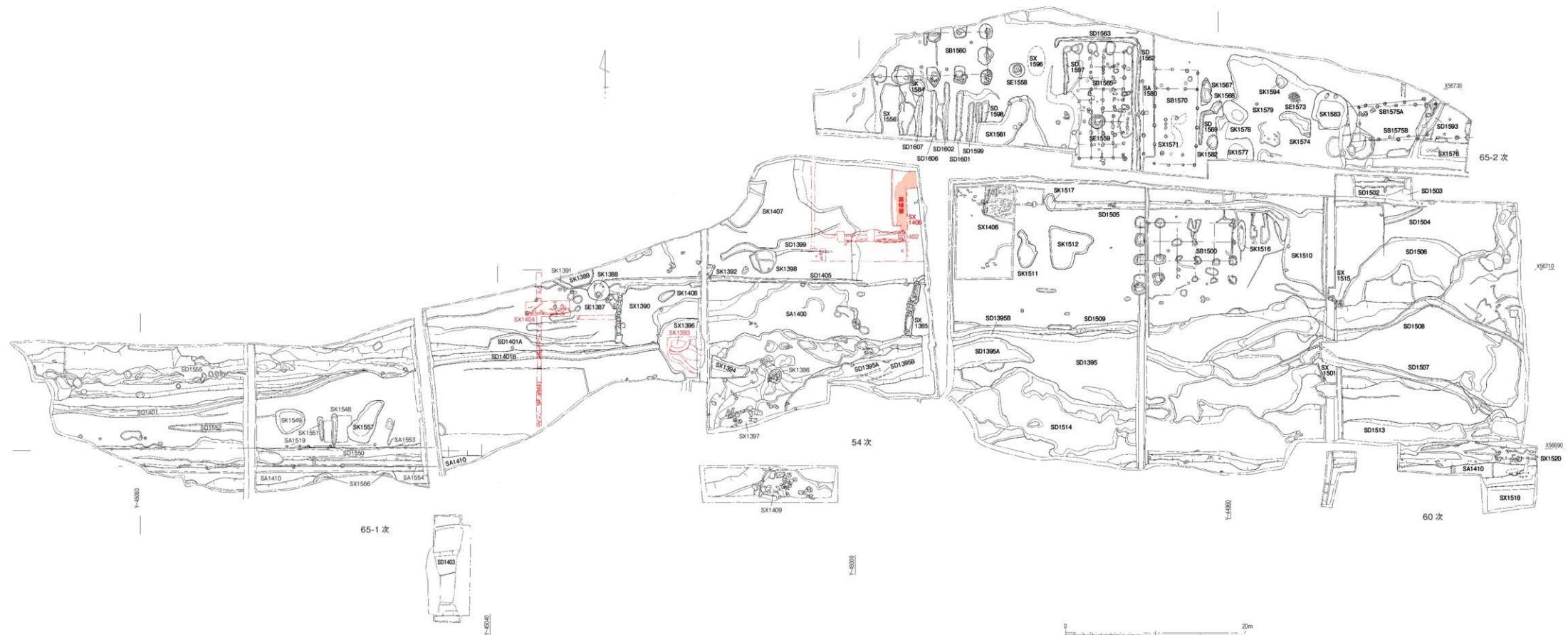
発 行 九州歴史資料館
福岡県小郡市三沢5208-3
印 刷 株式会社 プリンティングコガ
福岡県大川市大字一木736-5

大宰府政庁周辺官衙跡XII
— 蔵司地区 平地部編 1 —

付 図



付図1 蔴司地区平地部遺構配置図① (第4次調査区) (1/300)



付図2 蔵河地区平地部道構配図③ (第54次, 60次, 65-1次, 65-2次 調査区) (1/300)